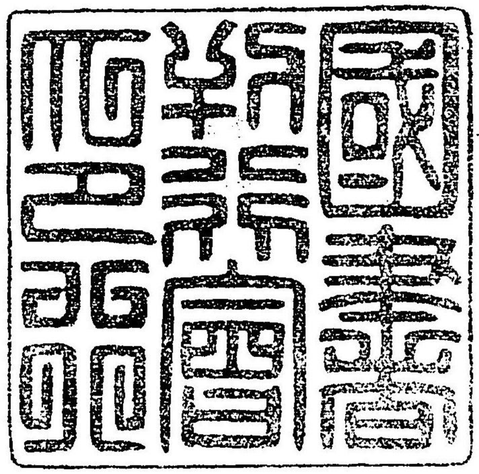
工18T70

前漢書

雜纂第二

41
119ヌ



史籍雜纂第二

緒言

一、本册には當代記、駿府記、有斐錄、松のさかへの四種を收めたり。

一、當代記　本書の記者は、伊勢龜山城主松平忠明なりとの說あれども、詳ならず。始めに天文弘治永祿年間の事を略記し、元龜元年より慶長二十年正月に至る四十六年間の事は、年序を逐ひて較詳細に記せり。書中當時の政治上に於ける裏面の事情を記述したる處多きが故に、駿府記と相待ちて、江戸初代史の表裏兩方面を研究すべき唯一の根本史料なり。今史料編纂掛所藏の原本に據りて謄寫採收したり。

一、駿府記　本書の記者も亦詳ならず。世に後藤庄三郎とも林道春

一ども傳ふれど、確證なし。德川家康が將軍職を秀忠に讓り駿河國府中に隱居したる間の日記にして、慶長十六年八月に起り、元和元年十二月に止まる。當時の政治外交に關する重要の事件は勿論、其他宗教文學醫術等の事に至るまで、精細に之を記述せるを以て、江戸時代史研究に關くべからざる根本史料なり。今史料編纂掛所藏の原本影寫本に據りて謄寫採收したり。

一、有斐錄　寛延の頃、池田侯の家人三村永忠の編纂に係る。藩主少將新太郎光政の嘉言善行、領内に關する法令等を蒐集したる者にして、備前藩史の研究には缺くべからざる書なり。今史料編纂掛所藏の寫本に據りて茲に收めたり。

一、松のさかへ　編者詳ならず。德川家康を始め本多忠勝、黒田長政、井伊直孝、水戸光圀、白川樂翁、松平慶永等の嘉言善行法令訓誡を集めたるものにして、以て古名將古名君の事蹟の一班を知るに足るべし。今内閣藏本により謄寫採收したり。

明治四十四年十一月　校訂者識

史籍雜纂第二

目次

當代記……一
駿府記……二一五
有斐錄……三一九
松のさかへ……四四一

當代記卷一

三好修理大夫息男孫四郎、後筑前守と改名、廿三歳にして病死、〔傍注〕天文年中より二十年天下主、

舍弟豐前守、後日休、阿波國主、

二男左京大夫、

同十川　修理大夫内、悉皆出頭、後天下所司代、元來は和州五百住一僕者也、

同安宅　松永彈正忠久秀、

三好修理大夫元來細川家侍頭、住國は四國也、天文年中より頻に武運に成り大身、保に天下一事二十年餘、〔頭注〕大永年中より永祿十一戊辰迄保に天下一本四十餘年、常歌道被レ好、連歌專數奇也、此兄弟兼何も連歌好士、修大を始當世之器用也、畿内丹波播磨但馬淡路四國、都合十三ヶ國之主也、

筑前守〔傍注〕修理大夫嫡男　萬端器用者也、然とも若氣の間行跡荒々としたり、松永彈正此比修理大夫家を、任二我意一振舞間、存二後日難一歟、永祿五壬戌年、以二鴆毒一令レ害レ之、修理大夫弟十川與二松永一間柄常に不レ快、此十川唐瘡令レ煩、爲二養生一攝州有馬に、永祿九丙寅年被二湯治一、温泉神葦毛馬登山を令レ嫌給、人皆此旨を十川に告けれ共、押て葦毛馬に乘て登山也、驚而蒙二神罰一、飯國後無二幾程一令二病死一、其比修理大夫河内國飯盛に被二在城一、松永讒言安宅事して云、左京大夫を家督に守間敷由、安宅所存由言上、修大可レ爲二虚言一由曰、松永重曰く、方々に觸狀爲二歷然一、さらは可レ見之由修大曰處、致二謀書一差上、修大是を眞實の狀と思、此上は不レ及是非一由曰條、安宅を召寄、松永以二計略一令二生害一、かゝる得レ折、河内國古主畠山高政拜紀州湯川根來衆を相語、飯盛に押寄る、日休聞二此事一、阿波國帥二人數一打出處、於二陣中一根來衆忍寄、鐵炮にて討レ之、暫時に滅亡、彼國士卒悉敗北也、さて飯盛城を緊く相攻、事躰甚急也、松永對二修理大夫一曰く、城中を相廻、士卒に被レ付レ力尤之由言上、修大曰、近年萬事汝に任置間、兎も角も可二走廻一とて歌書披見していと務ぬ體也、一兩日相過、又松永曰く、我に暇を可レ給、城を去て可レ及二後詰一行、修大尤と同心也、扨松永城中を

出、之より工夫才覺第一者たる間、方々の一揆を相語、令二後詰一及二合戰一、寄手則敗北、畠山高政は希有にして堺へ被二引入一、紀州湯川は河内國譽田迄退しを、追詰討レ之、根來衆武將岩本坊をば、大和の信貴にて討二捕之一、其外六千餘討レ之令二開運一畢、近江國六角佐佐木義治、去比より打出、飯盛寄衆と合二一味一、三井寺上勝軍地藏山構二陣城一被レ居、此時江州衆四萬有レ之、先勢日野蒲生一萬人數にて、攝津表へ打出令二居陣一、八幡には義輝將軍御動座、是は三好御一味也、京中には松永人數少相殘置、江州衆洛中を奪取事最可レ安を、素武篇ぬるかりけれは、徒に勝軍地藏山に陣所守居たり、かゝりける處に、飯盛寄手敗軍し、周章不レ斜して、江州へ引入間、天下無レ事して三好被レ任二我意一、其後松永所存に、先手筒前守幷安宅、或は鴆毒或は以二謀計一令二生害一事、修理大夫於レ及二後聞一難レ遁二罪科一とや思ㇾ、修大をも以二鴆毒一令レ害と云々、又其後修理大夫家中三好日向守、同下野守、岩成主稅介、四國人數相語打出る、其比松永奈良の多門在城、天下は右三好三人衆有二調談一、萬事令二異見一保二天下一、さて多門に相勤對陣す、此時奈良大佛堂不慮燒失、敵味方入亂火を滅んとしけれども不レ叶と云々、其以後一兩年中に、松永美濃國岐阜へ相下、信長公へ可レ屬條、早速可レ有二動搖一由申、終に信長成二天下一、其後三好日向守同下野は、堺に令二隱居一、老病にて相果、左京大夫は始は松永同心間、信長へも出仕し、爲二一味一しか、終に佐久間右衞門信長家老以二計略一被レ誅、松永も後は信長へ令二謀反一、被二攻害一畢、此末に委レ注レ之、岩成は淀の城にて、爲二信長一被二攻害一、後代爲二物語一注レ之、

永祿十一戊辰　信長公京入、家康公遠州入、武田信玄駿河入、

十二己巳　六條崩、懸川落、

十三庚午〔傍注〕元龜元年也　江州小谷合戰、金崎崩、淺井敵之事、信玄小田原動、

元龜二辛未　叙山對治、

三壬申　信玄遠江出張、濱松合戰、

天正元癸酉　武田信玄死去、朝倉義景討死、義秋將軍京落、長篠家康公被二攻一こと、作手屬二家康一こと、

二甲戌　武田四郎東美濃出張、高天神屬二武田一こと、尾州長島落去のこと、但志摩國か、

三乙亥　長篠後詰合戰のこと、小山表へ武田四郎出張

四丙子　のこと、信長安土へ御移のこと、天王寺へ信長後詰のこと、信長居鷹爲二叡覽一禁中御庭まて參給こと、義元三川表へ發向之時、奇特の夢想在レ之、夢中に花倉對二義元一云、此度の出張可レ被二相止一と也、義元曰、貴邊は爲二我敵心一也、不レ可レ用レ之と答、花倉又云、今川の家可レ亡ことを爭か不レ愁乎と云、夢覺了、其後駿河の國藤枝を被レ通ける時、花倉町中に被レ立ける、義元見て、刀に手を懸らるゝ、前後の者一圓不レ見之、奇特云々、

應仁文明比、今川とて足利尊氏家來、駿河遠江國主有レ之、號氏親用山當二此時一三河國相從と云々、此先祖雖レ有レ之、分明不レ知之間、不レ書二載之一、彼用山被レ薨て後、其弟花倉善德寺兩所に出家にて被レ有ける、互に用山之遺跡を心に懸及二干戈一、然而善德寺に居住之仁、後號治部大夫義元、終討二花倉一、續二用山之跡一、此義元駿遠三之三國の以二人數一尾州へ打越、後は天下を可レ取との依レ有レ企、永祿三庚申年、三州岡崎を打過、向二清須一發向之處、織田上總介平信長後任右大將天下主、守時尾州國主清須在城、とて有二勇將一聞二此事一、尾三之境へ出向、桶はさまと云處にて及二合戰一、討二義元一、年四十四、依レ之士卒敗趨畢、彼義元男上總介氏眞繼二其塵一、駿遠三之主とす、彼信長永祿七甲寅八月朔、取二濃州井口一、爲二尾濃之大守と一、さて井口に居住之を改二岐阜山一、此國爭に此比、源尊氏より十二代之後大小合戰及二數度一云々、亂義輝將軍、號光源院、此時天下之執權松永、是は三好修理大夫代官三好山城守、同下野守、同日向守、岩成主稅介等相談して、永祿八乙丑年五月十九日、奉レ討二義輝一、爾來彼等爲二天下執事一、是は先年越後景虎令二上洛一、三好幷松永於レ奉レ輕二義輝一者、御迎に相上、越後へ令二供奉一、重而以二義兵一可レ奉レ入二天下一之由言上す、松永素工夫第一之者たる間、存二後日難一、遁而及二此儀一、此松永は奈良之大佛を燒失する者也、其比松永多聞に在城之處、敵對陣して籠二彼堂一、每度闘諍之比、下臈の者放レ火如レ斯云云、此大佛は治承四年十二月廿八日、平相國清盛被二燒失一しを、後白河法皇仰二賴朝一、被二建立一し佛堂也、依レ之其舍弟義昭于時奈良之一乘院也憑二江州佐々木一入御之處、無レ情奉二追出一之間、越前へ有二御下降一、朝倉亦不レ申二御請一、然間岐阜へ有二御下一、賴二信長一可レ有二御入洛一との儀也、信長奉レ之、永祿十一戊辰九月有二出馬一、先近江國主攻二破佐々木一、則令二上洛一給、自レ是天正十年壬

午年まで、信長天下之主也、其間纔十五年也、彼源義昭將軍者、五六年中に牢籠給、其故は忘二信長勳功一、武田信玄と有二内通一、信長を可レ討之由、隱謀露顯して退二天下一、中國下國給、然處天正十年壬午六月二日、明智と云逆臣信長年四十九并一男信忠年廿六を奉レ討、此信長一代中擊二取敵國一、則施レ人給ふ、羽柴筑前守秀吉、後改太政大臣關白、是は信長取立之人也、成孤小身一創代未聞と云々、業依二器用一大身としたまふ、并堀久太郎自二中國一上り、於二攝州一及二合戰一、同月十三日討二明智一、自レ是秀吉天下主也、信長二男信雄于時勢州主、後尾州主、暫雖レ奉レ仰、天正十八庚寅年、下野國那須が牢籠也、其後秀吉公處長三戊戌八月十八日被レ薨了、年六十二、天下を持こと十七年也、其間秀吉息三歲にして早世之間、甥之孫七郎秀次後右大臣爲關白、を、天正十九年辛卯京都の聚樂を相讓、我身は號大閤坂に居住也、其以後秀吉に又息出來之間、秀次を內々不二長久一樣にとの心中有けるに、秀次行跡常篇に絕たる際、有二逆心一之由披露し、文祿四乙未七月八日に、京都を令二退散一、於二高野山一令二生害一給、彼秀次息一二歲之孩兒、同近習之女房三十餘輩、渡洛中一被二切棄一、哀也し事とも也、秀次家中之侍、或は生害或は改易也、元來大閤秀吉公心操勝レ人、金銀に不レ限、諸資物施レ人給こと不レ可二勝計一、只人の嫌事とては、餘好二普請一給間、上下爲レ之迷惑す、雖レ然此普請に付、日本國中上下の人、伏見大坂に居住之間、京堺井之町人賣買に得レ利事、超二過近代一せりと云々、

甲斐國之主武田大膳大夫晴信と云人有、入道之後號二信玄一、是は源新羅三郎義光伊豫守賴義三男之後胤也、此人若輩之時、父信虎不快而、晴信弟左馬頭に、信虎可レ讓二遺跡一之由、內々思立之間、晴信遮而信虎を被二追出一、信玄廿一歲、此時晴信信州西上州を取て、其後爲二大勢一之間、可レ取二天下一有二內心一、先永祿十一年戊辰十二月十三日に、駿州が發向、于レ時當國之主氏眞不レ及二一戰一、遠州懸川が退去了、彼氏眞は信玄甥也、此比間柄當不レ快、自二氏眞一被レ企二虛外一之間、稱二無レ據出馬一、此時氏眞舅之主氏康、同息氏政爲二加勢一、駿州雖レ被レ進二陣を一、終以信玄駿河を被二靜謐一、以二此意趣一、元龜元年庚午、信玄關東が相動、氏康氏政居城小田原惣門迄押詰放火し、臨二退散之期一、敵相慕之間、築井之近所みませ峠にて、信玄人數返し合及二一戰一、小田原衆敗軍、數百人討捕、甲州が皈陣、然而氏康逝去之後、氏政與二信玄一令二和睦一、此氏政は信玄雖レ爲レ聟、父氏康

の命に從、近年は鉾楯、其後元龜三壬申、信玄遠州が發向之砌及二加勢一、十二月廿二日、於二濱松野一德河家康合戰、信甲衆乘レ勝、又先年信玄の嫡男武田太郎幸信をも生害し給き、其故は幸信討レ父可レ取二家督一之由隱謀之處、信玄聞レ之、遮而幸信を行二籠者一、終以二鴆毒一被二相果一、然は父を追出し子を殺、甥の氏眞國を奪取之條、爲二大惡行一之由思レ之歟、何者の支態にや、落書有、

子を殺し親に添てそ追出すかゝる心を武田とや云

又信玄後は及二十年一、精進潔齋し、自二叡山一申二下袈裟衣一、號二法性院阿闍梨一、常に看經三昧也、其故にや、其比所々於二陣中一不思議瑞も有とかや、

三川國有二松平家康公と云人一、新田德川三郎後胤也、後天下之主、改征夷大將軍右大臣、此祖父松平二郎三郎清康に三河國漸隨順と云々、天文四乙未冬、尾州森山が相動、同十二月四日、於二彼陣中一不慮に爲二臣下一被二橫死一、年卅三清康一男相繼爲二岡崎主一、廿五而逝去、是を號二道閑一、去々年一男家康公于時四歲、號竹千代、信州が爲二人質一被二差越一、一腹舍弟有けれども、二歲にして何も早世、處、田原の主戶田彈正少弼、一男孫四郎竹千代主を押置、尾州熱田の神主岡書に百貫文に被レ賣、其比清須に竹千代主御座す、竹主六歲之時、父道閑卒去し給、其後自二駿河氏親一西三川が有二出張一、安倍の城を取詰被レ攻レ之、城主は彈正忠二男、信長弟也、是に竹千代主を替取て、駿河へ令二同道一、駿府に令二居住一給、漸成人之間、義元氏親遺跡之一族關口刑部少輔以レ女嫁レ之給、此腹に男女の息有レ之、義元於二尾三境一討死之後、家康公岡崎が令レ移給、時妻女息女は三川岡崎が被レ移、一男是を竹千代主と云、後號三三郎信康一、は駿府に爲二人質一居住也、扨尾州信長と有二入魂一、駿府が敵對し給、其後三川西の郡鵜殿城を攻落、城主子共に竹千代主を被レ替、岡崎が引取給、其比西三川に本願寺門徒一揆蜂起して、片時も安事なし、家康公近習之輩、昨日も五人、今日も十人一揆令二同意一、如レ此之間、岡崎之體安否不レ定、此時苅屋水野下野守是は御袋之弟、家康公之伯父也、岡崎如二手乘一被二相拵一、家康公素勇將也、竟に被レ平二一揆一、又永祿七甲子、吉田の城を取詰、所々付城有レ之、翌年三月落去、城主大原肥前守三浦右衛門大夫父、江州甲賀の者、依二懇望一東が被二送遣一、自レ是東三川も大概以隨順す、

昔年右田原之彈正少息女を道閑娶レ之給、家康公之御母堂被二離別一、此田原腹に道閑息女二人有レ之、又竹千

代御袋は西三川あくいへ被レ移、久松佐渡守と嫁し給、男子女子多有レ之、あくいは前腹の息ゐ譲、佐州も後は岡崎へ引越居住し給き、又先年田原と吉田の城主牧野古伯是は牛久保城主牧野しゆんこう第也、間柄甚不快、兩所共に駿州を頼、殊に古伯は駿州氏親と歌道之朋たり、古伯永正二年、駿河ゐ下之時、初時雨の發句にて、連歌有二興行一し、加様の間柄成けれども、田原は大身、古伯は小身成間、大に付小を捨る故か、田原之爲二荷擔一、翌年氏親三河ゐ令二出張一、吉田を取詰、緊く被レ攻之間、古伯終に腹を被レ切、城は田原ゐ被レ出、彈正二男金七是に令二在城一、彼籠城中、去年駿河に會の日時雨たりしに、今又時雨したりければ、古伯一首の歌を詠、氏親ゐ感、

あいにあいぬ去年も昨日の初時雨定のなきは人の世の中

古伯素無レ過受レ罪、城知行をこそ田原ゐ被レ出と云とも、感二此歌一命計被レ助たらんは、末代迄の物語たるべき物をと、時の人申けると也、

此古伯宗長とも別而被二相談一ける間、宗長此歌を後聞して、時雨は定有世成けりと被レ詠なは、猶以可レ然をと被レ判けると也、

永正三丙寅、古伯被二相果一砌、一男傳藏于時五歳富田と云臣下、桶に入川向下地ゐ伴、彼郷百姓を相頼、胤も百姓請取、尾州智多郡大埜ゐ送、其後田原の城を孫四郎代物に賣、馬少ゐ引入閉口、傳三又成人之條、吉田ゐ本意して、數ケ年吉田城主とす、然而岡崎と鉾楯之間、清康令二相働一給、傳藏可レ有二合戰一とて、川を越打出、此時益岡に在城の牧野傳兵衛、爲二傳藏親類一也、此已前より有二調略一、清康ゐ令二一味一之間、傳三人數敗北、傳三兄弟則討死、享祿二己丑五月廿八日の事也、自レ是吉田城には牧野傳兵衛在城、其後天文六丁酉田原より令二計略一、傳兵衛家中戸田新二郎、同宗兵衛屬二田原一、傳兵衛退城也、自レ是吉田城は、天文十五丙午迄、田原戸田金七在城也、此年、又自二駿州吉田城一責落、是より永祿八乙丑年迄、駿河より持レ之、

永祿十一戊辰、武田信玄駿府ゐ發向之刻、氏眞退、遠州懸川の城に被レ籠、于レ時家康公も遠州ゐ有二出張一、懸川城廻に陣取被レ攻之間、翌年之春落去し、今川氏眞をば相州小田原ゐ令レ送、自レ此遠州平均也、見付國府に有二普請一在城也、かゝる處に信長公令二異見一給

間、翌年春、濱松ゐ令レ移在城也、因レ之遠三之國人令レ在二濱松一、武田信玄駿河ゐ發軍之時分、人數自二信州一遠州ゐ秋山伯耆守爲二物主一雖二打入一、家康公於二當國一輝二權威一之間、秋山無二其詮一、駿州信玄旗本ゐ行、然處元龜三壬申、信玄遠州ゐ發向、此時信長公歷々之衆家康公ゐ有二加勢一、彼信玄女與二信長息一雖レ有二緣邊之契約一、年來家康別而信長と子弟同前之間、爲二最負一之沙汰如レ斯、信長眞實之心底者、家康被二滅亡一は、定而信玄討二信長一、可レ取二天下一企可レ有レ之の由、兼て令二推察一給之之間、猶以如レ斯、

永祿十一戊辰年、義昭任二征夷將軍一、

京都伊勢守一族之内早雲と云人、駿河國ゐ相下、今川用山氏親之父氏輝を賴望二關東一、先伊豆國ゐ打入、以二計略一取二小田原一、自レ是氏綱氏康氏政氏直五代相續、關東輝二權威一、于レ時是を號二北條家一、右五代之内、總及二九十六年一、小田原繁榮云々、然處天正十八年庚寅三月、關白秀吉有二動座一、同四月小田原ゐ打寄、七月城中落去了、此躰氏直背二父命一、秀吉陣中ゐ走入之間助二身命一、父氏政同弟陸奥守者、於二城中一生害也、此氏直之消息、專岩付之十郎依二仕立一如レ斯、此氏直幷十郎仕立、見者惡レ之、聞者彈二指之一、彼岩付十郎は氏直弟氏政之二男也、氏政弟阿房守、美濃守、左衛門助、右衛門介、氏直、岩付十郎以下令二上洛一、自二關白秀吉一國々之大名ゐ被二預置一、氏直幷十郎は翌年病死、氏政弟衆何も三ケ年中に無レ殘病死畢、先祖宗雲爲二子孫繁昌一、被レ撞二無間鐘一けると言傳へし、可レ謂二奇特一歟、此氏直は爲二家康公聟一、此女後嫁二池田三左衛門一、是池田庄入二男也、此氏政好レ酒事超レ人たり、常に長座して大酒也、酒の中に立レ座事は爲二法度一之間、大小便も不自由、每度見苦敷事多し、氏政是を見て快氣云々、

越後國主有二長尾景虎云人一、後號二上杉照虎謙信一、半俗之躰也、常病者他人對面不レ輒、然共于レ時爲二猛將一、信州村上を相拘、常武田信玄と對陣、永祿三庚午九月廿一日、於二信州川中島一合戰、双方さして無二勝劣一、退陣之時分故、謙信者越後ゐ皈國と也、其後景虎河中島ゐ不レ出、然とも彼表は爲二荒野一、此景虎於二關東一振レ威、小田原城門外迄、數度雖二相動一、終氏康父子不レ遂二合戰一、雖レ然景虎仕置不正之間、越後ゐ皈陣之後、小田原ゐ關東之諸士一味すること及二度々一、終氏康父子關東を平均し玉ふ、彼謙信始信長と入魂、天正三乙亥、於

三州長篠ニ武田四郎敗軍之後、往々は我身の上とや思
ㇾ、背ニ信長命ㇾ北國能登ヲ發向し、彼國平均せは、天
下ヲ可ㇾ上之由企之處に、天正六戊寅、俄に年四十九
而病死、其比氏康息雖ニ養子ㇾ、謙信甥爲ニ景勝ㇾ被ㇾ討、
越後國景勝平均し、後秀吉公に從ひ、近年在ニ伏見ㇾ、其
後慶長三戊戌春、奥州之會津ヲ國替也、

永祿十一戊辰、

去年より氏直躍を被ㇾ好、一門衆同家老衆、一手々々
に令ニ風流ㇾ躍の間に能有ㇾ之衆もあり、此費不ㇾ可ニ勝
計ㇾ、

永祿十一戊辰 源義昭一兩年越前在國、賴ニ信長ㇾ有ニ入
洛ㇾ度之由、以ニ使者ㇾ曰、細川兵部大輔、上野中務、則信長御請被
ㇾ申、御使に私の使不破河內守 相添進上、七月廿五日、義昭
着ニ御美濃國ㇾ間、岐阜近所西庄立政寺と云淨土寺に
御座す、廿七日義昭へ信長出仕、進上之物被ㇾ盡ㇾ美、
供奉之衆へも、取々に有ニ引出物ㇾ、八月八日、信長近江
國佐和山迄被ㇾ上、佐々木父子吾と有ニ一味ㇾ、義昭上洛
を可ㇾ有ニ馳走ㇾ之由被ㇾ盡ニ懇詞ㇾ、佐々木父子無ニ諾應ㇾ、
廿日信長自ニ江州ㇾ被ㇾ飯ニ美濃ㇾ、九月七日、信長立ニ美
濃ㇾ被ㇾ上、淺井備前守信長と同參陣、佐々木和田山に
構ニ要害ㇾ、究竟の兵其籠置、信長和田山之城へ不ㇾ被
ㇾ寄、箕作の城へ押寄、二百計討捕、城中より令ニ悃望ㇾ
間助ニ身命ㇾ、城被ニ請取ㇾ、其夜觀音寺山佐々木承祯父子居城、并和田
山之城打捨、敵退散之間、一日二日之中、江州之中十
八ケ所城屬ニ信長ㇾ、信長被ㇾ移ニ觀音寺城ㇾ、美濃ヲ爲ニ御
迎ㇾ、不破河內守を進上之間、義昭廿一日有ニ出御ㇾ、廿三
日義昭着ニ守山ㇾ玉ふ、諸勢乘船、廿五日信長着ニ三井
寺ㇾ給、同九月廿八日、信長東福寺移給、京中之者彼所
へ馳參、廿九日青龍寺岩成主稅助有ㇾ之間、森三左衛
門坂井右近相働、岩成令ニ降參ㇾ、攝州へ被ㇾ遣、則攝州
へ發向、芥川城細川六郎、三好日向守、十月朔日城を
捨退散、小清水流山兩城同退散、義昭公小清水移給、
芥川へは信長被ニ相移ㇾ、池田の城主筑後守屬ニ味方ㇾ、近
江山城攝津和泉河內五ヶ國、悉尾濃之衆へ被ㇾ下、大
津草津是兩所に被ㇾ置ニ代官ㇾ、諸軍奠ㇾ不ニ美談ㇾ、松永
彈正忠作物かみを奉、同十五日自ニ攝州ㇾ義昭公御上
洛、信長同入洛、

十二月、武田信玄駿州ヲ出張、當國之主氏眞近親葛山
并朝比奈右兵衛大夫信支ヲ屬す、氏眞不ㇾ及ニ一戰ㇾ、遠
州懸川へ被ㇾ退、懸川城主朝比奈備中守氏眞爲ニ臣下ㇾ、

遠江國爲ニ郡代ㇾ、氏眞を本城ヲ引入籠城、翌春迄、上下
の人數に酒肴以下迄、無ニ懈怠ㇾ、もてなしける、奇特と
云々、其後小田原ヲ氏眞被ㇾ退ける時相伴、氏康氏政
曰けるは、爲ニ臣下ㇾ主人の氏眞を相抱籠城、人臣の名
譽之由曰、懇志致されけると也、遠州へも自ニ信玄ㇾ、秋
山伯耆守に伊奈郡人數相添、遠州へ被ㇾ出、然處山家
三方衆屬信玄ㇾ、秋山に伴遠州ヲ出張也、引間の人數三
方原へ出合戰、三川の山家三方衆及ニ合戰ㇾ、引間衆敗
北、數多討捕、さて引間衆令ニ懇望ㇾ、秋山令ニ一味ㇾ、氏眞
懸川へ籠城し給、其勢三千餘、

家康此冬遠州へ出張し給、同月三浦右衛門大夫、是は
氏眞別て寵仁也、懸川へ可ㇾ籠處に、日來城主朝比奈
備中守と間柄不快之間、城へ不ㇾ入、馬伏塚を賴行、彼
地之主小笠原美作守日來之違ニ契盟ㇾ、右衛門大夫
首を切て家康公へ奉る、翌年之春、小笠原は令ニ病死ㇾ、
于ㇾ時人口專惡ㇾ之、又駿府氏眞居城をは、岡部二郎右
衛門相籠之間、殘黨從ㇾ之、

永祿十二己巳年正月、家康向ニ遠州懸河ㇾ出馬、寄衆少々
手負失ㇾ氣、廿日於ニ懸河天王山ㇾ少合戰、城衆隨分之
者數多討死、家康快氣し給、

三好山城守笑岩、同下野守釣閑、同日向守、同爲三、齋
藤右兵衛大夫龍興已下相談して、正月朔日、堺近所家
原の城責落、同五日京都へ押上、六條本國寺義昭公御
所取卷責ㇾ之、其勢一萬餘、本國寺に籠勢僅二千也、此
中に野村越中守專ニ戰功ㇾ、自ニ攝州高槻ㇾ赤座七郎右衛
門、同弟助六郎、木村彌五八郎、奥村平六左衛門、渡邊庄
左衛門、坂井與右衛門 是皆美濃の牢人、龍興衆也、夜中相籠、義昭被
ㇾ下ニ御土器ㇾ、彼等出ニ門外一度々及ニ防戰ㇾ、此時自ニ攝
州ㇾ三好左京大夫三千、池田八郎勝政、伊丹兵庫頭、
八年十荒木攝津守、和田伊賀守終夜相上致ニ後卷ㇾ、本國寺
籠衆得ㇾ力及ニ合戰ㇾ、敵敗北之間、追々討ㇾ之、首數二千
七百餘也、三好左京大夫義次者、昨日五日、三好日向
守、岩成主稅助と及ニ一戰ㇾ、打負て嵯峨へ引退、此時被
打高安權守道前養子與兵衛討死仕、信長聞ニ注進ㇾ給、
不ㇾ移ニ時日ㇾ出馬、九日に京着、合戰已爲ニ無事ㇾ、戰功
之衆被ニ行賞ㇾ、二月下旬より石を引、室町御所有ニ普
請ㇾ、此時細川左馬介屋敷有ㇾ之し藤戸の石を引給、石
を虎皮花にて飾、二月秋山伯耆守遠州に在陣、無ニ其
詮ㇾ之間、駿州へ通、三川三方衆は屬ニ家康公ㇾ遠州に
在陣す、同廿日比、懸河に付城有ㇾ之、かな丸山二藤山

青田山等也、三月縣川城令二落去一、氏眞爲レ迎自二相摸國一北條美濃守氏政弟參向之間、氏眞小田原ゟ被レ退、此比迄、駿府氏眞屋敷岡部二郎右衞門相拘處、爲二少身一如レ此儀神妙之由、信玄曰、知行を被レ出間、二郎右衞門屬二信玄一、四月遠州漸平均付て、家康公三河ゟ飯馬之處に、則遠州一揆蜂起して、通路不レ輙、家康公十七八騎にて、堀川を被レ通けるを、雜兵と心得一揆不レ出、是討留は、家康の被レ通間敷際朴に相通、家康公を爲レ可レ度の由と云々、然處に家康公早速被二相通一けるを、後聞して一揆後悔しける也、此時堀川にて近習隨分之者共被レ討、家康公則廻レ輿、堀川一揆を被二責崩一、不レ殘被二討果一、同所に一揆成敗也、

室町御所石垣家屋出來して、卯月六日、義昭徒移し給、五月十一日、信長被レ下二美濃一、

去年義秋御所の六條本國寺々中坊共、不レ殘近衞の御所ゟ被二運送一、義秋家屋幷近習之衆爲二私宅一、義秋暫此寺に令二居住一給間、可レ被レ加二懇詞一之旨、寺僧思を成之處、還て及二此儀一、爲二比興一之由、京師の上下歌レ之、

家康公、此秋より翌春中迄、遠州見付城普請在レ之、

八月廿日、伊勢國へ信長出馬あり、淺香城令二囲望一間、城を被二請取一、廿八日、大河內被二取詰一、此城に國司父子被レ籠、是も有二無事一、城を請取出、城之衆無二異儀一被二相送一、此時關役所被二停止一、往還者莫レ不レ悦レ之、大河內城に信雄信長二男被レ令二居城一、領二十萬石一、此比竿入、上野城に上野介信長弟被レ置レ城、領二五百石一、神戸の城に三七主信長三男被レ置、領二知五萬石一、十一月十日、千種を經、信長上洛、伊勢國早速平均之事、義昭感悦し給、此比信長馬廻之中、戰功之衆廿人、母衣衆被レ定、佐々內藏介、毛利新左衞門、河尻肥前守、與兵衞尉生駒勝介、水野帶刀左衞門、津田左馬介、蜂屋兵庫頭、中河八郎左衞門、中島主水、松岡九郎次郎、是黑縅之衆也、織田越前守、前田又左衞門、飯尾隱岐守、福富平左衞門、原田備中守、增九郎左衞門尉黑田次右衞門、毛利河內守、野々村三十郎、猪子內匠助、此九人赤縅也、廿人に一人不レ足、

元龜元庚午年二月廿五日、信長上洛し給、於二江州一相撲取を集有二見物一、其中鈴江の又一、靑地與右衞門上手たる間、のし付脇指被レ下、京都ゟ被二召具一、

四月、堺數奇者道具可レ有二御覽一之由曰間、南北の名

譽の道具共持參、其中に天王寺屋宗及か菓子の繪、藥師寺の小松島、油屋の常祐か柑子口、是等を被二留置一、則其價過分被レ報、右三人の者令二畏悅一、松永彈正忠鐘の繪令二進上一、十四日、於二義昭御所室町一能有レ之、觀世と今春とかはる〳〵に仕、脇の能觀世大夫也、然は終の祝言に、觀世大夫融を仕、信長甚不快、さて姬小松と云香爐を義昭ゟ自二信長一被二進上一、

卯月廿日、信長越前へ出馬、其日佐柿の栗屋越中守所に被二止宿一、去比家康も有二上洛一、同越前へ令二出張一給、信長美濃へ下降時、同遠州へ被レ下、廿五日、越前國手筒山城被二責崩一、敵千三百七十被二討捕一、廿六日、金崎城へ被レ爲レ寄、城主朝倉中務令二悃望一退散、城者則令二破却一給、近江國淺井備前守別心致之由、注進及二度々一、信長曰、先彼を可二退治一とて被二引返一、金崎に誰をか可レ被レ殘とての儀也、茲に木下藤吉郎吾を可レ被レ殘之由言上、信長快氣也、各莫レ不二美談一、然間一手一手より弓鐵炮、或は三十或は五十、爲二合力一被二付殘一、此時敵一圓不レ出、信長朽木越を經、同月卅日に京着し給、藤吉郎秀吉も無二異儀一令二京着一、近江國無二殘所一、一揆令二蜂起一之間、稻葉伊豫守を守山へ被二指置一處、一揆押寄す、稻葉素武篇の逢者及二合戰一、一揆の者共千二百餘討捕、信長感悅不レ斜、近國仕置堅固に仰付、義昭公へ暇を申、信長五月九日美濃へ被レ下、志賀宇佐山兩城に森三左衞門、永原に佐久間右衞門、長光寺に柴田修理亮、安土に中河八郎右衞門、長濱に木下藤吉郎被二指置一、佐々木承禎之殘黨愛智郡鈴江城楯籠、留二通路一間、信長經二千種越一下給處に、於二山路一鐵炮にて信長を十間之中にて奉レ打、運命や强かりけん、不レ中二貴體一、中小袖脇一、是は杉谷善住坊と云者を、自二承禎一深被レ賴如レ此也、同月廿一日、至二岐阜一信長被二飯城一、六月四日、佐々木承禎於二野洲郡一與二佐久間柴田一被レ及二合戰一、則佐々木敗北、七百八十餘、兩人の手へ討捕、信長喜悅し給、彼三人ゟ被レ下二知行一、堀二郎幷家子三郎兵衞屬二信長一、是かまのはの城主、武篇者也、堀二郎年十五、悉皆樋口取立、十九日、信長北近江へ進發、小谷町中悉放火、敵防戰及二度々一、淺井人數八千有レ之、此時退口を被レ掛二大事一、左右に土手を築、佐々內藏助築田出羽守中條將監に仰付、各大身の者可レ爲レ殿之由雖二言上一無二承引一、此小身之衆殿也、諸手より鐵炮五百挺、信長之弓之衆五十人被二相添一、敵

緊相慕之間、度々及二合戰一、無二異儀一被二引取一、簗田少手負、信長橫山城被二取卷一、越前より淺井爲二加勢一、朝倉孫三郎（後改名、又賀也、）爲二大將一一萬の人數指立る、淺井父子同六月廿六日、大寄山に陣取、信長龍鼻に陣取給、其間五十町也、家康依二信長仰一出馬し給、廿四日に、彼所に着給、信長快悅不レ斜、廿七日、北敵野村三田村迄移、終夜相催、未明に打出、於二姉川一及二合戰一、初合戰信長家康之方被二押立一、左は家康自二旗本一押直之間、越前衆敗北、右は信長幡本へ相合へきところに、稻葉伊豫守よこ鎚に懸、淺井敗北、敵數多被二討捕一、茲に越前の侍に眞柄十郎左衛門と云者、大力剛者、大太刀を以無類に働、家康家中勾坂式部、幷息六郎五郎得レ之、橫山城退散之間、被レ移二木下藤吉磔丹波一、自二合戰場一直に佐和山へ移相龍之間、丹羽五郎左衛門、百百か屋敷に被二指置一、彦根山に川尻與兵衛、北の山に市橋、南山に水野下野守被レ置、信長家康有二上洛一、義昭賀し被レ申、さて美濃へ被二相下一、此姉川合戰之悅として、信長より家康へ長光の刀被レ進、是を後三川長篠の城開運し時、家康より奥平九八郎信昌へ被レ下、此刀は元三好下野守刀、其後光源院殿の御物なりし

を、信長御手へ入、

八月廿日、信長攝州へ出馬、三好笑岩、同日向守、同備中、同爲三、同新右衛門、東條紀伊守、篠原玄番、奈良但馬、岩成主稅助、其勢三千餘、野田要害楯籠、福島に安宅甚太郎、細川六郎、同右馬頭、齋藤右兵衛龍興、同長非隼人佐、已上五千餘騎籠之間、可レ被二打果一ため如レ此、同廿九日、野田福島被二取詰一、義昭九月十二日、野田へ被二押寄一、根來雜賀衆一萬餘同參陣、此內鐵炮二千挺有レ之、

九月十三日、大坂門跡顯二敵對色一、櫻岸河口へ相働之由注進、然共信長敢て不二驚給一、十四日、大坂一揆打二出森口邊及苅田一、佐々內藏介自二河口一此旨言上、信長則打出給、佐々內藏助、林新三郎、井上才助、福富平左衛門、野々村三十郎、土肥助二郎打出、大坂衆と及二合戰一、各令二高名一、野村越中守懸付討死、金松又四郎は高名す、味方已失レ氣處、前田又左衛門返合鑓合、毛利河內已下綴之間、無二異儀一引付畢、

同九月十六日、朝倉の義景淺井備前守比叡辻八王子邊陣取、其勢二萬餘、十九日、宇佐山へ相働處、森三左衛門及二合戰一討死、織田九郎同討死、然共武藤五郎右

衛門、肥田玄番、同彦左衛門楯籠、城中堅固、廿日、敵大津を放火、廿一日、醍醐山、科放火、此旨信長へ注進、然間先野田福島を被二指置一、京都へ被二相上一、此時南敵雖二相慕一無二指儀一、廿四日、信長立二京都一給、北敵聞二此事一、攀二登鉢峯青山坪笠山一陣取、廿五日、信長叡山麓ゟ押寄、香取屋敷に人數被レ置、志賀宇佐兩城に馬廻衆陣取、此中夜々に遣二加勢一、端々寺社を燒、法師原の頸二三十充每夜取來、義昭公將軍塚に被レ居レ陣、佐久間右衛門、稻葉伊豫守相二招衆徒一、此度於レ被レ致二忠儀一者、諸國之叡山領、如レ本可レ奉レ附之由雖二言含一、敢無二領掌一、信長不レ及二了簡一、さあらは根本中堂山王至迄悉燒拂、僧俗兒儘已下不レ殘可二誅戮一之由及二諫言一と云とも、尙以無二承引一、剩義景淺井女人を山へ召上せ、魚鳥を食、大師の掟を破る、信長菅屋九右衛門、佐佐內藏介を爲レ使敵陣へ被二曰遣一、双方對陣、士卒疲勞無二其詮一、定二約日一及二合戰一、可レ決二勝負一と也、北敵不レ及二返答一、木下藤吉、丹羽五郎左衛門、小谷佐和山爲レ押有けるか、參幡本一、剩於二路次一、一揆數百討捕、殊照光坊（四十九院の僧）其外物主數多討捕、信長御感甚、佐々木承禎信長へ被二囘禀一、三雲豐左衛門、三上伊豫守を爲二使

り大原肥前ゐ内々依レ被二懇詞一、當年迄居城、今信玄駿州平均の條如レ此也、城塀一重之體にして懇望之條、大原助二身命一、遠州ゐ被レ送、此六月、從二見付一濱松ゐ家康公移給、先古飯尾豐前か古城に在城、本城有二普請一、惣廻石垣、其上何も長屋被レ立、見付普請被二相止一也、是信長依二異見一給レ如レ此、遠三之輩、何も在濱松す、九月十二日、本城ゐ家康公令レ移給、

武田信玄（信甲駿四上州主）、小田原惣門際荷池まて相動放火、先甲州より武州ゐ出、歸陣には築井より都留郡筋を可レ通之由の玉ふ處に、小田原衆相慕之間、信玄人數返合せ、みませ峠にて合戰、相州衆敗北、數多討取、無二異儀一甲州ゐ皈陣也、

元龜二辛未二月、磯丹波守屬二信長一、佐和山城を渡、高島へ相移、佐和山城丹羽五郎左衛門被レ置、（知行五萬石、但未二拳入一、）五月六日、淺井備前守箕浦城へ相働、横山に在城之木下藤吉郎聞二付之一、經二閑路一敵勢に先立て箕浦被レ移（人數五百計）及二合戰一、敵百五十討捕、城主堀二郎悦レ之、五月十日、信長長島へ出馬、多氣口より働衆、退口に柴田修理、安藤伊賀手負、其外手負不レ知レ數、其後尚以無二懈次一引二取大垣一、卜全討死、夜中之儀、家中之者不レ知レ之、柴田此働にさし物敵へ被レ取けるを、柴田小性水野次右衛門取返、柴田に上、此時小稻葉城に有レ之太田甚右衛門謀叛す、弓削修理と云者、卜全小性也、（年十八）於二其場一追腹を切、八月十六日、信長江州へ出張、小谷近邊放火、廿二日、着二佐和山一給、新村の城に相籠一揆共被二責落一、六百七十餘被二討捕一、小川城令二懇望一、奉レ渡二金か森城主一、則屬二幕下一令二參陣一、

此比、二頭の龜出、

信長九月十一日、勢田山岡玉林齋（後號二對馬守一）所に止宿し給、明日叡山を可二責崩一之由曰、佐久間右衛門幷夕庵入道、達て及二諫言一、信長曰、去年汝等を以雖レ盡二懇詞一、無二承引一上は不レ及レ力と、理を盡し曰間、不レ及二了簡一、各未明罷立、

同年九月十二日、信長叡山を退治、近年朝倉義景と有二内通一、特に去年越前衆彼山に屯二陣を一、信長ゐ敵對故如レ斯、其時之消息、衆徒兒童子に到まて、或刎首、或燒死、適遁去者、剝二取衣類一、堂舍佛閣一宇も不レ殘燒拂、哀なりし事共なり、是は偏に近年背二大師之掟一、衆徒亂行、殊には去年越前衆出二張陣一之比、於二伽藍佛前一、服二用魚鳥一、男女攀登亂二舞次一之間、自業得果の

道理歟、依レ爲二三王使者一、此亂之時迄は、猿無二際限一充滿したり、亂以後猿曾て無レ之、奇特云々、信長曰、後代に若當世之衆知二天下一と云共、叡山を建立有レ之間敷段、各捧二起請文一、

八月廿一日夜大風、六十年已來に無レ之と云々、同廿六日、於二遠州濱松一、觀世宗雪入道、同左近大夫能仕、家康公も同能し給、同廿八日、又能右同前、初日は九番、後日十五番有レ之、此時は岡崎三郎信康主能し給、是家康公一男也、（年十三）

此年、小田原北條の氏康病死、（年五十七、）父氏綱も（五十七にして）逝去、

此年、二頭の龜出、

元龜三壬申三月五日、信長北近江へ出馬、小谷近邊不レ殘放火、十一日、志賀郡へ出給、水戸田中兩城取出を被レ取、明智十兵衛光秀、中川八郎右衛門、丹羽五郎左衛門被レ置、十二日上洛し給、細川六郎、岩成主稅助も幕下令二伺候一、大坂門跡より萬里江山と云掛物、白天目信長へ進獻、爲二和睦一歟と云々、

三好左京大夫、松永彈正、河内國高屋城に人數を置、是を被レ責處、風雨の夜城主退散、其比左京大夫は若江の城、松永は信貴の城、男右衛門多門城に有レ之、信長五月十九日美濃下向、七月十九日、信長父子江北へ發向、（此時奇妙具足始也、）小谷城三九迄押入、二百餘被二討捕一、廿二日、山本山へ木下藤吉郎相働、阿閉淡路守出合遂二一戰一、敵五六十討捕、信長父子快氣、廿七日、虎後前山取出を被レ取、朝倉義景出張及二對陣一、八月十日、越前衆前波九郎兵衛、富田孫六郎、戸田與二郎、毛屋猪介屬信長一、此四人の者日比義景失二面目一候者也、虎後前山には木下藤吉郎を被レ置、宮部の城に宮部の善祥坊を被レ置、信長父子被レ移二横山一、十一月三日、敵宮部ゐ相働、木下懸合、二百餘討捕、

此冬、信長十七ヶ條之以二書付一、義昭へ被レ遂二諫言一、此諫言の書、信長記に有レ之、右何も忠言也、後武田信玄是を見て、信長をた〻人ならすと云れけると也、

八月十二日、於二遠州濱松一能有レ之、觀世太夫同駿河に先年居住のをち觀世十郎兩人行レ之、晩より十四日迄雨ふる、同十六日に又能有レ之、家康公能し給、此をち觀世十郎向二家康公一申けるは、駿河の亂之時、鉢の木の能を仕し、又只今仕之由申けるを、鈍なる者とて人笑ける、此時も初日九番、後日十五番在レ之、九月之

比、武田信玄遠州ゟ可レ有二發向一之沙汰無レ隱、依レ之信長公より使者を以、武田へ可レ有二無事一之由度々宣、十月、武田信玄遠州發向、高天神表を通、見付國府ゟ被二打出一、見付には自二濱松一人數雖レ被レ置、無勢之間引退、信甲衆見付之古城普請之躰を見て夥ことゝ云々、信玄二俣ゟ押寄被レ攻、

十月、山縣三郎兵衛、秋山伯耆三千餘、三川ゟ打出、三川之山家三方爲信玄長篠に陣取、野田ゟ相働放火、遠州之山家井平ゟ打出陣取、日々ほう田ゟ打出相備、是二俣へ敵人數出す間敗の計也、此時家康公井平の人數を被二打果一事可レ安處に、信玄と合戰可レ有レ之內存にて、不レ被レ及二此儀一歟、家康公已來後悔し給、十月、岩村城爲二信玄一之間、自二井平陣中一、信州衆下條伊豆守東美濃ゟ遣、岩村に在城す、信甲衆井平に在陣の儀は、十月山縣三郎兵衛秋山伯耆守自二信州一三川山中ゟ出、三方之主作手奥平道次人道、長篠伊豆守、同新九郎、田嶺新三郎爲二信玄一爲二案內者一令二先登一之間、長篠に在陣して、野田ゟ相働令二放火一、さて遠州井平ゟ相移在陣也、

十二月、二俣城落居之間、令二普請一入二番手一、同廿二日、信玄都田打越味方か原ゟ打上、濱松衆爲二物見一十騎廿騎つゝ、縣來取合之間、是を可二引取一之由曰、家康公出馬之處、不慮に及二合戰一、濱松衆敗北、千餘討死、信玄人數二萬、濱松衆八千計なり、濱松近邊放火、但町中へは不二押入一、則可二取詰一かの旨有二評議一、然共家康公居城也、無二左右一難二落居一由令二談合一、徒に及二十日一、彼野に在陣也、此時自二信長一加勢の衆佐久間右衛門、平手、水野下野守等也、平手は討死也、下野守は三河岡崎迄遁行、比興成躰也、大方信玄と可レ有二一味一企也と云々、經二兩年一、水野下野守は於二三川國岡崎一生害、是苅屋小川の主也、爲二家康母方之伯父一也、下野守在所苅屋をは、弟水野宗兵衛召寄被レ下、近年宗兵衛は家康へ奉公之人也、家康依レ爲二伯父一、家康ゟの懇志として、信長被レ及二此儀一、小川は佐久間右衛門介法也、

元龜四癸酉正月十日、松永降參、岐阜へ參上、不動國行刀、藥研藤四郎の脇指令二進上一、是何も天下無双之名物也、是佐久間右衛門取扱を以也、多門の城相渡間、山岡對馬守を被レ置、此比義昭將軍、信長を可レ亡旨思召立、是は去年之冬、諫言の書逆二御耳一故とそ聞し、二月廿日、信長人數被レ立、則山岡光浄院道阿彌事令二味方一

則參陣、堅田の城をは被二責落一、三百餘被二討捕一、坂本に明智十兵衛を被二指置一、三月二日に、各美濃ゟ被レ皈、三月廿五日、信長出馬、廿七日、着二大津一給、細川兵部大夫藤孝、荒木信濃守爲二御迎一參上、此間義昭御謀叛之次第、具被二相尋一、廿八日、義昭種々令二愁望一給間、公臣の禮として無事奏也、

四月七日、信長出レ京下給、丹羽五郎左衛門に舟を可レ造旨被二仰付一、〔頭注〕元龜四年四月於二信州駒場一武田信玄病死、七月朔、義昭重て御謀叛、二條の御所には日野大納言、藤宰相被二殘置一、義昭は眞木島楯籠給、信長同五日出馬、去四月、丹羽五郎左衛門に仰付、揃給十艘舟に乘て、湖を越給、翌日六日、洛中洛外邊土百八里、民屋堂社佛閣、一宇も不レ殘放火、此時上京を可レ有二放火一哉否と暫思案し給處、三井寺の鐘汚をかき申之由聞給、さては鐘さへ京の火事を存哉とて則燒給と云々、七日二條室町御所被二取卷一、色々令二愁望一らるゝ條、被レ助レ身命、十六日、信長眞木島發向、梶川彌三郎望二先陣一、一番に川を越、さて稻葉伊豫守越レ河、眞木島責入、義昭種々令二愁望一給間、河內國若江城退け申、此比迄相公なとを奉レ討事如何之由、信長思慮し給、後には不レ奉レ討事後悔し給けると云々、〔梶川一番に河を可レ越事、信長策て曰けるとなり、〕義昭は從二若江一紀州由良ゟ御退、それより中國ゟ移給、此時攝州の池田勝政、伊丹兵庫被二退治一、〔義昭は攝州に在國在しか、太閤秀吉の時有二出仕一入道し給、庶人の如窄人、其後天正十八庚寅の年三月、秀吉關東發向之時伴給、又在二大坂一二兩年已後令二病死一給、〕

上京炎上不便思給、可二還住一之旨曰、被レ下二條目一、

定

一京中地子錢、永代令二赦免一畢、若從二公家寺社方一地子錢之內收納有來る分者、相二計替地一以可レ致二沙汰一事、

一諸役免許之事、

一鰥寡孤獨の者見計、扶持方可レ令二下行一之事、

一天下一號を取者、何の道にても大切なる事也、但京中諸名人として、內評議有て可二相定一事、

一儒道之學に心を碎き、國家を正さんと深く志を勵す者、或忠孝烈之者、尤大切なる事候條、下行等他に異て可二相計一、又其器の廣狹能尋問可二告知一之事、

右條々相計可二申付一者也、

元龜四年七月吉日　　信長

村井長門守

下京者戞昭の不レ服ニ御下知一間不レ被ニ放火一、此年三好左京大夫於ニ河內國若江一、從ニ信長一被ニ生害一、是佐久間右衞門依ニ計策一也、

畿內盛目、百姓等撫育し給、七月廿六日、信長下給、江州田中木戶兩城被ニ取懸一處、城主令ニ囘望一、城を相渡間、明智十兵衞に被レ下、同廿七日、長岡兵部大夫藤孝淀を相働、岩成主稅助五百餘之人數にて相戰、番頭大炊助、諏訪飛驒守、岩成をたて出國ニ信長一、（是藤吉秀吉以ニ調略之儀一也、）兵部大夫內下津權內討ニ岩成一、則江州を首を持參、信長感悅し給、金子百兩相添感狀被レ下、八月八日、岐阜へ信長著給、此時江北の阿閉淡路守屬ニ味方一之由有ニ注進一、則出馬、各無ニ休足一出陣也、人ニ質於小谷一男生害、年十才、阿閉が實子也、八月十日夜、月か瀨の城（淺井人數）の敵退散、佐久間、柴田、大嶽の北山田山に相移て、越前へ留ニ通路一、朝倉の義景聞レ之、則出張して田邊山近邊に屯レ陣、高月里信長宗徒之衆陣取、淺見對馬守屬ニ味方一、大つくの城丁野山城令ニ降參一成ニ味方一、爲ニ案內者一令ニ先登一、高月に陣取、柴田、佐久間、織田市介、稻葉伊豫、瀧川、蜂屋、丹羽、氏家、伊賀、蒲生其外之衆へ、從ニ信長一有ニ使者一、敵大略夜中に可レ退、各不レ可レ有ニ油斷一之儀也、夜中に北敵陣に火の手見ゆ、信長すはやと思打出給、如レ案義景退散、從ニ信長一先に出る衆有レ之、夜中之事誰々と有ニ御尋一、前田又左衞門、佐々內藏助、戶田半右衞門、下方左近、岡田助右衞門、同子助三郎、赤座七郎右衞門、高木左吉、福富平左衞門、土肥助二郎と咎申、信長喜悅し給、右之衆諫言、夜中に御魁可レ有ニ如何一との儀也、無ニ承引一被ニ相進一、然處一里先の高月に陣取、歷々の衆不レ知レ之休居たり、北敵山崎七郎左衞門殿成間、刀根山峠にて暫及ニ防戰一けれとも追崩、敦賀迄討レ之間、首數三千餘有レ之、此內朝倉治部大夫、同掃部助、同權守、同土佐守、三田崎六郎、河合安藝守、青木隼人助、鳥井與七、窪田將監、佗美越後守、山崎新左衞門、同七郎左衞門、同肥後守、其弟朱本坊、細木治部少輔、伊藤九郎兵衞、中村五郎右衞門、同三郎兵衞、同新兵衞、長崎大乘坊、和田九郎右衞門、同清左衞門、引檀六郎三郎、小泉四郎左衞門、齋藤右兵衞大輔龍興、（美濃國牢人、）都合廿四人歟、是宗徒の者共也、（龍興ハ、氏家左京原加左衞門ト云者、不破河內守內內、印牧彌六左衞門ヲ生捕、此者右首能見知言上、是武篇

の覺有レ之間、可レ被ニ助命一之旨曰けれとも、申請て被レ誅、各美談、金松又四郎能首取て參上、生足に成て忽出、信長太刀に緒付給、是半を被レ下、忝次第也、信長敦賀に三日御座、十八日府中へ移給、義景大野山田庄六坊へ遁入、稻葉を被レ追處、朝倉式部大夫討ニ義景首一、稻葉手へ渡、義景の侍鳥井高橋追腹を切、越前國爲ニ守護一、前波播磨守を假に被レ置、同廿六日、江北虎後前山の城被ニ取卷一、廿八日、下野守（備前守が父）城被ニ責落一則切腹、鶴松大夫と云舞々、介錯して腹を切、廿九日、信長京極つふらの嵩へ上り給、淺井備前守腹を切、淺井石見守赤生美作を生捕、さて被ニ生害一、淺井か跡職添ニ感狀一、木下藤吉に被レ下、淺井備前守妻女は信長妹也、然間無ニ異儀一被ニ引取一、（後に柴田に嫁し給、十年餘以後、於ニ越前柴田滅亡之時一、同燒死給、此腹に淺井息女二人有レ之、於ニ越前一希有にして逃ニ此難一出玉、姉公は後秀吉公に嫁玉い、八幡殿幷秀賴御袋是也、妹は爲ニ秀吉御計一江戶秀忠に嫁玉い、男女の君達誕生し玉ふ、備前守嫡子萬福と云有レ之、越前にて爲ニ人質一指越、越前平均之後加賀國へ行て隱たりしか、盲人と成間、母又は祖母公（信長御袋）を賴て出たりしを、近江國木本にて從ニ信長一被レ誅、

淺井日來の存念は、越前平均せは、江北肝要の卷たる間、淺井も可レ被ニ追立一かの旨及ニ嫌疑一、先年敵對しけるとかや、惣別信長公大心第一之將たる間、左樣之儀有レ之間敷處、如レ此疑、淺井運の所レ窮乎、

九月四日、飽江城主佐々木右衞門督種々被ニ懇望一間、被ニ助命一則退散、

同六日、信長岐阜へ被レ下、先年千種峠にて信長を鐵炮にて奉レ打し杉谷善住坊、高島に深隱て居たりしを、磯野丹波守搜出搦取、同十日岐阜へ進上、信長不レ斜悅給、竹鋸を以首を被レ引、四五日之程に命絕たり、伊勢國西別所と云所に、長島門徒構あり、人數を被レ遣悉被ニ切捨一、同片岡籠一揆、同被ニ切捨一、廿五日御皈之砌、從ニ長島一相募、手負數多出來、林新三郎討死、新三郎內加茂二郎左衞門兄弟追腹切、

天正元癸酉（同年）正月、武田信玄於ニ濱松野一越年、同三日井平を通、三川野田に押寄被ニ相攻一、彼城三月十八日落居、城主同人數引連長篠に被ニ引入一、其後三方人質相替、城主同何涼吉田に被ニ送遣一、

以二使者一信玄陣相尋、朝倉喜悦と云々、

三月、信玄長篠に在陣、彼城普請有レ之、

四月、信州通路陣、長篠在陣中、作平へも人數を遣有二普請一、被レ入二番手一、

同四月、信州於二駒庭一武田信玄卒、年五十三、及二十ヶ年一精進潔齋たりと云共、自二去二月一依レ煩魚鳥被二服用一、信玄病死を相隱し、三ヶ年不二露顯一、信玄三男四郎勝頼繼二其跡一、信甲駿西上州の主たり、信玄嫡子は先年依二謀反一被二生害一二男は盲目なり、

此夏中、如二鐵炮一天鳴、

七月廿日、三川長篠を家康公御働、火矢を被レ爲レ射之處、城中同丸共悉燒失間、則取詰被レ攻レ之、

同八月中旬、爲二長篠後詰一信甲駿西上野人數、三川遠江南方の出武田勝頼は、此度自身は不レ出、

先鳳來寺筋へ馬場美濃守伴五千餘人の人數を、長篠近所内か野邊まで足輕を出、二つ山に陣取、黒瀬に陣取衆武田左馬介、信玄舅、土屋右衛門已下八千餘也、彼衆作手へ相移、さて設樂へ出、節所を前に當、東西より留二通路一は、定て家康公吉河筋を可レ有二退散一間、可二打果一之旨相議する處、作手主奥平美作守貞能男九八郎信昌、屬二家康公一、合二忠節一間、信甲衆迷二十方一、空レ手、此度奥平忠節、須彌山は九牛一毛の由、時人云之、奥平忠節の時、作手城には信州衆合二在番一、美作父道汲、同二男を始數多武田一味して、城中に楯籠、未家中の者共へも合二隱密一間、奥平人數甚少也、事難儀なりけれとも、竟に遂二本意一、翌朝家中の者漸集るなり、翌日及二午刻一、自二家康公一加勢衆本多豐後守、同男遠二郎、松平主殿介作手へ參着也、此衆長篠を夜前被レ出けれとも、節所と云、無案内と云、旁以如レ此、又翌日平岩七之介、佐藤金一郎作手へ被レ着、

廿六日、黒瀬に陣取甲信人數、作手城を爲二後詰一土屋右衛門を始三千餘相移、于レ時相談て云、敵は多勢と云、城廓と云、旁以堅固也、味方者無人數にして野原に在陣、可レ有二如何一とて宮崎を引退、

八月廿八日、大風、

作手忠節之後、甲信衆失レ氣懈を見及、家康公陣中に松葉を積み付レ火、陣拂之まねをし、路次に置二人數一、自二風來寺筋一、敵於二馳來一者可二討捕一之由、被二相構一之處、如レ案見二此烟一、陣拂と心得、五騎三騎つゝ、騒來入二依坪一、然處被レ置伏兵人數、少し早く立出之際、敵

懸拔不レ得レ討、頗可レ謂二無念一、此謀昔年有し事也、後張爲レ令レ知レ之、但馬場美濃守甲州衆云、烟白く見る間非二陣拂一乎、壯年之士不レ可二聊爾一由令二下知一云々、彼美濃歳此時六十一、

九月八日、長篠城落去、城主宝賀一葉軒信州衆、井長篠主菅沼伊豆守、同新九郎令二懇望一之間、助二身命一鳳來寺筋へ被レ送、長篠城には三川衆を被レ置、家康公遠州へ早速に有二歸馬一、是は遠州表へ在陣之敵を爲レ可二討果一也、遠州うかり山梨に陣取、穴山左衛門大夫、山縣三郎兵衛、家康公濱松へ聞二歸馬の儀一、周章不レ斜、仍陣屋に紙小幡を張、成二居陣の粧一、夜中に令二退散一、

此時長篠城落去して、家康公歸馬之由を無二注進事一、穴山山縣爲二遺恨一之由、左馬介馬場美濃守へ述懐也、此長篠主新九郎は、籠城中より屬二家康公一可レ申之由也、然共先山中より退城之處に、此儀露顯して、信州小室へ遣令二籠者一こと十ヶ年、武田滅亡之後、遠州へ參けれ共無二合力一、徒に牧野右衛門丞に被二預置一、同九月廿一日、信甲人數五千餘、作手より宮崎を相働、奥平父子人數、折節所々知行を令二入部一、纔に二百餘相殘、右の加勢の衆、何も歸宅して、咏方小勢たる間、所々

令二放火一、奥平父子濫山に令レ居、未塀も無レ之、櫓討の體なり、敵山の麓迄雖二攻上一、緊令二防戰一之間引退處、奥平頻相嘉の間、田原坂に於て敵數度返合、再三鑓合、于レ時助次郎を始、甲信衆隨一の者數多討捕、敵衆二諸道具一敗軍也、天正二甲戌正月、武田四郎岩村表を發向、かう野串原以下小城共攻落す、信長則大井中津河まて有二出馬一けれ共、人數未二相揃一、殊に爲二節所一之間、不レ被レ罫二合戰一、三川の人數移二足助小原一、此時越後謙信與二信長一一味之間、至二于上州沼田一出張之條、武田則引入、信州特に深雪之事也、此後詰を信長は爲二忠節一之由、謙信存念之處に、自二信長一無二禮謝事一、謙信爲二遺恨一之由、以レ狀啓レ之、

此度武田東美濃へ出しより、不レ亡二武田一可レ爲二天下大事一之由、信長彌思玉ふ、

正月元日、於二岐阜一信長公は各々出仕、其時酒宴有て、肴とてはヶ物一つ被レ出、各開て見レ之、古き頸を三つ被レ入たり、薄にて濃たりけり、各箇を被レ付、越前の左京大夫義景、幷近州の淺井下野守と備前守頸也、臣以二戰功一如レ此、敵令二退辭一之間、被レ出レ之由曰、さて各へ有二引出物一、

二月八日辰刻、家康公若君誕生、後號二三河守秀康一、遠江國今切る兵粮船寄、是を可レ被二押取一とて、濱松より人數を被レ遣、小船にて取まき被レ攻レ之しが、彼は大船にして鐵放多かりければ、敢て難二近付一、令レ下二知之一とて、物主寺島弥丞當二鐵炮一討死す、さて船は漕出走ける、

同五月、高天神ゟ四郎出張、信長爲二後詰一御出馬、吉田ゟ御着之處、高天神落去之由告レ之間、信長自二吉田一御歸馬、家康自二濱松一有二參向一、被レ遂二面上一、此時種種信長公對二家康一諫言し給、遠州所々不レ農之間、家康ゟ爲二御合力一黄金一駄被レ進、此比如レ斯之金子無二其類一、時人夥事に念レ之、御立の期に漏て、信長より亭主酒井左衞門尉に上作之脇指被レ下、作鎌倉の貞宗也、此高天神落居之模樣、城主小笠原與八郎武田ゟ一味、家老之者共同心中は屬レ之歟云々、雖レ然家康公へ人質を進置之間、無二疎略一之由披二露之一濱松へ參上、歷二日數一後、彼隱謀之旨漏聞之間、終に令二生害一玉ふ、彼小笠原與八郎は、天正十年壬午の春、武田滅亡の時、小田原へ打越隱居之處、家康公より信長公ゟ言上し給之間、其旨小田原へ有二信長之命一生害し、首を濱松へ自二小田原一被二指越一、

此秋、三川恩馬の浦の磯際ゟ蛸多よる、人取レ之、常此浦に無レ蛸、

此七月十四日信長尾州の河内へ後號二長島一被二取懸一、是一向宗之寺內也、大河四方に有レ之、人馬行歩不レ安之處也、此夏秋旱天之間、如二貴意一被二相攻一、九月晦日落居、其模樣寺內家依二悃望一、人質を被レ遣、舟にて相退處を、無理に悉打果玉ふ、是近年敵對遺恨、殊には信長舍弟其外歷々の衆、於二彼處一打死するの間、猶以如レ斯、三月信長上洛、廿七日南都ゟ出御、翌廿八日蘭奢待を被レ爲レ切、日野大納言、飛鳥井大納言爲二勅使一被レ參、自二信長一佐久間右衞門、菅屋九右衞門、塙九郎左衞門、蜂屋伯耆、武井夕庵、松井友閑爲二奉行一、一寸八分截レ之、三分にして其一分を被二召置一、殘所各へ被レ下、五月岐阜へ下給、此夏、武田四郎向二濱松一相働、まこめ川向迄相働、所々放火、然共天龍川東の麥を令レ苅、高天神ゟ兵粮過分に入置、さて歸陣の砌、諏訪原之城を取立、普請令二丈夫一歸國也、

九月廿九日、尾州長島落去、一揆舟にて退處を、堤に弓鐵炮數千挺置たまい被レ爲レ打レ之、迚不レ可レ遁と思

切、すはたに成隨一之衆へ切て懸、其時討死之衆、信長公御一族十餘人也、津田大隅、同弟半左衞門、同市令介、同弟仙、同又六、同孫十郎、赤見左衞門、大野佐渡、佐渡民部、坂井七郎左衞門等也、市令介信成乳母八津田九右衞門尉兄小瀨三郎二郎長清、無二比類一儀仕死す、長島には被レ置二瀧川左近、十月五日、岐阜ゟ令二歸馬一給、

此年、近江國かまのはの城主堀二郎、同樋口御改易、其子細木下筑前守秀吉同心たりしか、小谷落去以前は、秀吉は五萬石、堀二郎は十萬石の領主たるに依て、不レ服二秀吉異見一條、間柄不快、近年淺井へ內通仕候由、秀吉依二言上一如レ此、

天正三乙亥正月、

三月、信長上洛し玉ふ、此比、駿河國古主今川氏眞從二遠州濱松一有二上洛一、千鳥香爐宗祇香爐を被レ奉二信長一、此氏眞は去巳の年春より、小田原被レ居しか、氏康死去の後、氏政以外の相白たるに依て、去年濱松へ忍て參向、

三月、近州鎌の羽の八木二千俵、家康へ自二信長一被レ進、境目城々へ可レ被二入置一之由曰問、三百俵長篠へ來、此度用二諏城一、二月廿八日、奥平九八郎信昌三川國長篠ゟ相移、宮崎には日下與の依レ無レ城也、去々年の九月より至二于今一番持之間、城破損見苦敷體也、今九八郎相移、普請相拵無二油斷一之間、家康公快氣也、

此春、諸國道路を作、是信長公依レ仰也、同公家衆知行如二前代一被二返付一、近年買取、主ゟ其價自二信長一被二返辨一、各莫レ不二美談一、

四月、武田勝頼三川國足助表ゟ出張、所々令二放火一、自レ其作手筋ゟ相移、野田へ押寄可二相果一之旨相議す、彼地は去々年信甲衆令二破却一之後、普請無レ之、只任二古鄉立歸居住一之間、則河向ゟ退散之處、信甲衆追詰、野田衆數多討死、自レ其吉田ゟ相働、二連木を始、所々放火、吉田には家康公御移令レ居玉ふ、町中へは敵不二押入一引退、

五月朔日、武田四郎長篠を取詰、竹たはを以仕寄、所所より金鑿を入、不レ舍二晝夜一責レ之、

六日、從二長篠陣中一敵惣人數押出、牛久保表ゟ相働、所々放火、及二歸陣の期一、橋尾の井を切、是は東二三河へ周せきかくる田地用水也、依レ之此年彼表令二旱損一云々、城を賣之時、如レ此の働無レ之物之由云々、

十一日、長篠城寄手、渡合の南の門際に、竹たはを付しよりきふく責之間、自二城中一切て出、敵道具を捨、谷河下に敗北の條、竹たはを燒棄了、然處に翌日より又竹たはにて仕寄、

十三日の夜子尅、ふくへ丸を敵無理に乘んとす、其夜空曇て月不レ明、此丸は澤の岸の上に、たゝ塀計構、土居は無レ之、然共堅固に相拘之間、數度塀へ鹿の角を掛引と云へとも、內に繩を付、引へ柱を堅構之間、敵不レ得レ乘、殊横矢を以射レ之間、敵手負不レ知レ數、此丸へ行道の狹所、誠にふくへのことし、塀岩の上に立間、鹿の角にて引落之條、夜明なは通路不レ可レ輙とて、九八郎令二下知一、ふくへの丸の人數を升方の丸へ引入る、此時敵わくを持來、それに竹たはを早速に付、せいろを可レ上之企にて柱を立る、茲にせいろ上なは、大手の門の通路可レ及二難儀一とて、鐵炮數箇丁を以打レ之、自二本丸一大鐵炮を以、右の竹たはを擊之間、せいろ上んことを不レ得、徒に夜明畢、此時信甲衆手負死人七八百在レ之と云々、又本丸の西の角へ敵仕寄、士居ゐ金鑿を入、大石を掘崩谷へ落す、然處士居の角の內に掘崩さは、又是にて相抱經レ日、後詰を可レ奉レ待とて普請す、此時城中に手負死人多出來す、後運を開、此處を見るに、元來岩にて掘ん事を不レ得、城中へ氣を可レ失とて、大石を夜中に外より持來、掘崩まねをして、下の谷ゐ落しける也、于レ時九八郎父美作、又自二家康公一石河伯耆守を相添、岐阜ゐ被レ遣、此趣信長公ゐ被二告申一、後詰被二相催一、信長公貴意之趣、三川滅亡せは、手前難儀可レ近之旨、兼て思設給間、早速に相催、中旬有二出馬一、十九廿日に被二押寄一、陣の面に緊く柵を振、堅固相備、家康公の臣下酒井左衞門尉、本多豊後守、奥平美作定能、其外五千餘、夜中に河を越し吉河へ相移、終夜越二深山一、廿一日未明に、城の向鴫の巢久間兩地、敵の付城へ押懸打二破之一、而城と一手になる、敵見レ之無理に信長家康之陣所へ押かゝるへき體にて寄來處に、素兩將の陣所の前にさくをふり、向の原へ鐵炮の者數千丁指遣、敵の備へ打入の間、每度中レ之、敵手負不レ知レ數之間引退、加樣にする事及二度々一、勝頼の內馬場美濃守、山縣、土屋、內藤修理、眞田安房守、仁科信玄末子、海野、望月、那輪無理助以下、宗との者悉保死畢、因レ茲勝頼敗軍の間、信州境まて追々擊レ之、幾千と云數を不レ知、作手田嶺鳳來寺岩

小屋何も、信甲衆番手令二悃望一之間、信濃迄相送、城城無二異儀一、與平九八郎信昌手ゐ請取也、此時直に信甲ゐ被二打入一には、誠に少の手間も入間敷處に、信長は濃州へ歸馬、家康公は遠州ゐ歸馬し給間、信甲敗軍の者共、暫氣を休けると也、是も甲州を强敵と思給故歟、

此七月、城介信忠信長一男岩村ゐ發向し被レ責レ之、十月爲二後詰一、勝頼人數夜打の行あり、寄手の陣城堅固之間、信甲衆夜中に又敗北す、此比、佐久間右衞門尉信長公依レ仰、三川國武節へ取懸、與平父子一手になつて攻之間、聽て落城、右衞門は岩村へ參陣、城は與平手ゐ請取置二人數一、

此度長篠合戰之事、是非共遂二一戰一、可二討死一と思定之由、勝頼曰、馬場美濃守、內藤修理、山縣三郎兵衞、武田左衞門大夫、同左馬頭申云、敵軍は四萬、吾軍は一萬也、此度は被二引入一、信長歸陣之上、來秋令二出張一、所々不レ殘放火し、其上苅田已下於レ被二申付一は、三州可レ成二亡國一間、一兩年中に可レ爲二存分一旨、達而雖レ令二諫言一、勝頼無二承引一、殊長坂釣閑被レ遂二合戰一尤之由言上之間、彌々此儀に相定けると云々、此釣閑は依

二十五

廿八日、小山城を被二取詰一、家老の衆諫云、重て自二信長一請二加勢一被レ攻レ之尤之由、異見雖二區々一、無二承引一被レ進レ陣、

自二信長公一九八郎拜領の刀、目貫かうかいは、去々年後藤光乘仰付、於二京都一被レ爲レ彫、昔弘法大師の玉造と云双紙を繪に被二書置一、女は玻レ色者なれども、老年になれは、面は猿に似て手にあしかを持、其中にくはゑ厳なと入、肘にかけ後に袋を負、まろ打ひろけて腰をかけて居たる躰被レ書、信長見レ之給、如レ此圖を可レ寫と依二御諚一、ほりたる目貫かうかい也、さて諺に今の世に周く用間、三方論議の僧、數珠を持たる所を學たり、其比此圖を明智日向守狩野繪像にうつさせしに、悉出來して、眼に點入までにて有しに、一夜の内に此繪くさりたり、此由明智にかの申ければ、權者の筆跡を凡夫として寫しけるに依て如レ此歟奇特と云云、

弘法御作十住心論に、念佛無間禪天魔、無間地獄へ落るをは、念佛てならては難レ救、天魔の荒るをは、禪てならては不二治ら一、

九月七日、武田四郎小山城爲二後詰一、大井河邊ら押出す、其勢一萬三千餘也、去五月、於二長篠一敗軍の後、無二幾程一如レ此之出張、武道所レ感也、素信玄名將也、名下不レ虛謂乎、同日、家康公諏方原へ被二引入一、八日、武田鎌束原へ出張、自二諏方原陣一中谷の向迄物見を被レ出、惣人數は諏方原陣中柵の中に有レ之、及レ晚武田人數小山へ相移、敵小山城令二普請一、高天神城へ兵粮を入、九月下旬に引入、家康公も諏方原有二普請一歸馬し玉ふ、

八月十二日、信長信忠越前國進發、當國之一揆、所々城を構楯籠、河野龍門寺兩城攻落、悉討捕、自餘之城見レ之何も退散、朝倉孫三郎去姉川合戰之時の大將也、隱二山林一處、下間筑後守、同和泉守、伐二孫三郎首を一持參、信長無二御用一、比興者也とて則令二成敗一給、越前國知行配當之事、大野郡金森五郎八、一原彥二郎兩人に被レ下、敦賀は武藤宗右衞門、府中郡は前田又左衞門、佐々内藏介不破彥三被レ下、其外は柴田修理亮に破レ下、加賀國へ人數被レ遣、大方屬二當手一、然共一揆未レ服、彼國溝口大炊介、小黒西光寺蒙二赦免一、加賀國より引口に一揆相募處、羽柴筑前守返合及二合戰一、數百人被二討害一、大正寺檜屋兩城有二普請一、刑喜右近被レ置、此時信長對二右近一種々令二誂言一給、

九月下旬、信長被レ令二歸馬一、此比丹後國一色左京大夫に被レ下、丹波國桑田舟井兩郡長岡兵部大夫被レ下、十二月十五日、信長美濃に御下、山岡美作守、森二郎左衞門に、勢田の橋破損の間、可二再興一之旨被二仰付一、此冬、木下藤吉郎號二羽柴筑前守一、丹羽五郎左衞門惟住、築田左衞門太郎は別喜右近、友閑は宮内卿、夕庵は二位の法印、塙九郎左衞門は原田備中、河尻與兵衞は肥前守、明智は惟任日向守、各如レ此號、十二月、岩村城落去、城代秋山伯耆守信州岐阜ら引連張付に被レ掛、是は信長與二信玄一入魂の時、爲レ使年來令二言上一し儀、悉爲二謀計一間、惡レ之給故如レ此、城主者女姓、信長の姨母也、自二去申歳一敵對し玉ふ間、爲レ散二近年鬱憤一、岐阜引連、信長自身切レ之給處に、刀不レ切死かねられけるとかや、此刀もとよりわざものなり、今如レ此不レ切事者、ふちし(鍛)みと云物かの由人皆云、

天正四丙子正月上旬より、安土普請始、丹羽五郎左衞門爲二奉行一、二月廿三日、信長安土移給、普請精入之由曰、周光茶碗五郎左衞門に被レ下、四月朔日より、各石を被レ引、四月十四日、大坂へ遣二人數一被二相動一處、三好笑岩根比衆已下、自二難波三家一取出、鐵放に被二打立一引退、後陣原田備中守無理に押立けるか、節所成間進退不レ任二存分一、備中討死畢、最前備中を天王寺に可レ被レ置と曰處、何やらん備中守信長の御前惡して相止、然は備中此度可二討死一旨存定けると也、一揆共乘レ勝、天王寺之付城相責、城中に佐久間甚九郎、筒井順慶、惟任日向守、猪子兵介、大津傳十郎相籠、梶川彌三郎、佐久間久右衞門、奈良清六等、於二城中一走廻、一日之中に二三度鑓を合こと也、塀も未レ懸之間、古疊なと塀に用、牛馬を楯にして答、信長在京也、此旨聞給、則出馬五月五日也、同六日、信長旗幷先勢を天王寺へは不レ懸、直に大坂へ懸間、天王寺を責ける一揆、あはや大坂を被レ棄とて、則引取處を、横懸に懸付る、又天王寺に籠城之衆則懸出、兩口より押合、追討に討間、數千討二留之一、信長御身にも中二鐵炮一けれとも、裏を不レ懸、大坂一揆鐵炮數千丁にて相支間、天王寺へ懸給は丶可レ有二如何一處、名將之擬各感レ之、殊此度は諸勢不二相調一、俄事たる間、以二少勢之儀一也、奇特と云々、六月七日、安土へ令二歸城一給、於二天王寺一戰功之衆へ、不レ殘褒美被レ行、七月朔日より、安土普請有レ之、此比、自二中國一大坂へ入二兵粮一、兵庫尼崎より舟にて

斃ㇾ之と云とも、敵船は七八百艘の大船なれは、遥て兵庫尼崎之者共多令ニ討死一、其後住吉濱に構ニ要害一、佐久間右衛門を被ㇾ置、安土殿守は二重石垣也、高さ十二間、上の廣さ南北ゟ二十間、東西ゟ十七間有ㇾ之、石垣の中を被ㇾ用ㇾ藏、七重の殿守也、同年丙子十一月四日、信長上洛、妙覺寺宿し給、廿日に被ㇾ任ニ內大臣一、去年十二月、可ㇾ被ㇾ任ニ右大臣一旨有ニ宣下一けれとも辭し被ㇾ申、此度は被ㇾ任ニ勅定一、廿三日參內也、進上物夥、公家中へも知行被ニ充行一、廿六日安土へ歸城也、十二月十日、信長安土を出御、三川國吉良にて鷹被ㇾ遣、同晦日岐阜迄御歸、於ニ彼地一有ニ越年一、

越前加賀兩國一揆數多致ニ誅伐一之由、自ニ柴田修理方一令ニ言上一、信長快氣也、

加賀國は、去年別喜右近に被ㇾ下、大正寺に令ニ居城一、然處に國不ㇾ服別喜ニ不ニ靜謐之間致ニ上表一、信長內々不ㇾ可ㇾ然之由思給、依ㇾ之尾張國の九坪へ古郷引籠、無ㇾ程令ニ病死一畢、其後より加州をも被ㇾ下ニ柴田一、

八月、家康公到ニ駿州山西一御動、人足共如ㇾ思令ニ苅田一、武田聞ㇾ之、彼表ゟ出張之間、遠州中郡ゟ令ニ歸馬一給、さて武田は小山陣取、

三川國岡崎、此一兩年郷村々より躍有ㇾ之、三郎信康依ニ數奇一也、若不快のをとりをは、弓を以射ㇾ之給、九月、さはせ甚五郎と云者有ㇾ之、是は元來三川岡崎三郎信康小姓也、傍輩の金作の刀大小を盜捕事露顯之間欠落し、此二三年中在ニ甲州一、彼國の住甘利三郎次郎を於ニ小山陣中一令ニ生害一、家康公陣中へ來、彼甘利と日來令ニ知音一、別て懇志之間、聊無ニ隔心一之儀、甘利寢入たる處を刺殺す、我刀を棄て、甘利か大小を取て指來、年來彼さば瀨甘利に令ニ戀慕芳契一、前代未聞、無ニ物取ㇾ喩一、家康公へは令ニ出仕一、乍ㇾ去さして擧用はなし、三郎信康主惡ㇾ之給間、一兩年の中に他國へ又欠落す、此甘利年十七歲、武田家老也、人數三百餘備也、

此年十一月、信長公爲ニ叙覽一內裏ゟ鷹を居、庭上迄參內し給、各供奉之衆裝束竭ニ結構一、退出之以後、常の狩出立にて、東山鷹野有ㇾ之處、雪甚、秘藏之鷹被ニ見失一、信長是を無ニ本意一事に思玉ふ、是を居來ん者、急度可ㇾ有ニ褒美一との札を被ㇾ立ける程に、有ニ一兩日一自ニ大和國一居來、信長甚悅給、

天正五丁丑　信長岡崎にて越年し玉ふ事、松永滅亡のこと、荒木敵のこと、

六戊寅　有岡城落去のこと、

七己卯　於ニ安土一淨土宗法華宗論のこと、三郎信康滅亡のこと、

八庚辰　馬揃のこと、大坂本願寺退散のこと、

九辛巳　高天神落去のこと、

十壬午　信濃入のこと、信長滅亡のこと、同武田滅亡のこと、明知滅、於ニ甲州一家康公氏直對陣の事、

十一癸未　柴田崩、越前平均のこと、三七主滅亡のこと、

十二甲申　家康與ニ秀吉一於ニ尾州一合戰、同無事のこと、佐々木陸奥守こと、

十三乙酉　聚樂普請始のこと、根比滅亡のこと、秀吉公關白成喜申のこと、四國入のこと、越中入のこと、多武峯滅亡、大地震の事、石河伯耆尾州へ退のこと、

十四丙戌　家康公御祝言、秀吉公御妹嫁給事、家康公上洛し玉ふ事、

十五丁亥　駿河普請の事、秀吉公九州御動座事、

十六戊子　聚樂行幸事、金賦こと、大佛普請始事、

十七己丑　秀吉若君八幡殿誕生事、

十八庚寅　小田原御動座、北條滅亡こと、家康公關東國替事、尾州主織田信雄下野那須ゟ被ㇾ移こと、

十九辛卯　奥州一揆依ニ蜂起一、秀次出張の事、秀吉公若君八幡殿被ㇾ薨事、歲三才、秀吉ニ川國爲ニ鷹野一御下こと、大和美濃守秀吉舍弟死去のこと、

文祿元壬辰　高麗入事、武州江戶普請事、

二癸巳　秀吉御袋薨給事、各自ニ九州一歸陣事、

三甲午　伏見普請始事、同諸國知行高幷普請役事、

天正五丁丑　正月二日、正二位內大臣兼右大將信長卿自ニ岐阜一安土ゟ歸城、同十四日上洛し給、庶人出仕被ニ停止一、深慮智化之老臣召集、未ㇾ服國々可ㇾ屬ニ當手一旨可ニ言上一之由曰、夕庵被ニ殘置一、廿五日安土へ令ㇾ歸給、

此春の比、觀世左近太夫（當時能の上手、於ニ三川吉田一病死す、此大夫は義昭將軍御牢籠之後遠州ゟ下、家康公令ニ扶助一給、專酒井左衛門尉介法也、彼大夫女房於ニ京都一一兩年已前死去しけるか、吉田之大夫屋敷ゟ蓋毛の

馬に乘來、馬取荷物を庭へをろし置と人の目に見へける、無レ程大夫伏二病床一相果畢、奇特成し事共也、此女房此以前大夫間柄依レ不レ淺、遺恨千萬云々、此女者觀世小二郎と云諸弁脇の上手女、鬼若か母是也、二月二日、信忠雜賀出馬、是根來杉坊雜賀の三緘上洛して、可レ致二忠節一由依二言上一也、信長出張給、小雜賀口にて端久太郎人數百餘討死、谷輪口にて敵敗北、長岡兵部大夫手百五十討捕、三月朔日、鈴木孫一居城を被レ責、竹たは樓を以緊攻レ之間、孫一令二降參一、所々不レ殘放火、男女切捨、鈴木孫一岡崎三郎大夫大坂をかつき可レ進間、可レ被レ助二身命一之旨言上、信長令二承引一給、佐野城に津田太郎左衞門杉坊相添被レ置、紀州仕置仰付、廿七日到二安土一令二歸城一給、八月上旬、雜賀之中、又は紀州未レ屬二當家一所々、秋毛爲レ可二苅捨一、佐久間右衞門父子被レ遣、彼歸陣迄天王寺に羽柴筑前守爲二在番一、松永彈正忠父子大坂取出に被レ置けるか、八月十七日夜、大和國信貴城へ楯籠、信長より宮内法印被レ遣、被レ宥けれとも不レ能二參答一、九月廿七日、信忠發向し給、十月被二攻落一（是城中に有二調略一故也）、松永家に火を掛燒死、去永祿十年十月十日、南都大佛殿燒たりし日に相あたると云々、松永從類森海老名、河內國片岡城に籠、長岡惟任筒井を被レ遣被二責崩一、此時長岡嫡子越中守（年十五）弟五郎（年十四）能動して、自二信長一被レ下二感狀一、子右衞門者松永依二下知一、庶人に相紛城を出たりしか、或者見付て討捕、此時信忠被レ任二三位中將一、廿三日、羽柴筑前守播州入、此次に中國一州望之由言上、楠長庵令二披露一、其時は信長不快の氣色也、暫思案し給、任二申旨一、朱印可レ被レ遣由曰、長庵如何思けん不レ認二朱印一、其後筑前守但馬國へ相動、敵城數多責落之由有二注進一、信長御感甚也、此時楠中國一州可二拜領一朱印を認遣、信長快然也、十一月廿七日、秀吉福岡城被二取詰一、攻口には小寺官兵衞、竹中半兵衞指置、我身は可レ有二後詰一方へ打出被二陣取一、如レ案宇喜多和泉寺襲來及二合戰一、和泉守敗北之間、二百餘討捕、則上月城被レ責處、城中有二調略一、上月十郎か首を切て奉二秀吉一、然共自餘之者をも皆被二打果一、山中鹿助被二籠置一、敵の頸五百餘安土へ進上、信長悦給、十二月十日、信長爲二鷹野一三川出御、廿一日安土御歸城、下旬に信忠爲二越年一安土へ御參、自二信長一數奇道具十一種被レ進、初花、松花、鷹繪、竹の花入、鎭、藤流繪、道三茶碗、内赤

盆、周德か茶杓、肩衝、古市播磨守か高麗火箸等也、信忠令二長悦一給、

此年多門城の家屋をこほち、信長より京都二條に有二造作一、親王ゐ被レ奉、此秋客星未申に在レ之、是を時人號二松永星一、同春越後景虎能登國ゐ出張、七尾の城相攻、自二信長公一人數被レ出けれとも、七尾已令二落去一之間、頓て右の衆歸陣也、

此年三川國侍衆ゐ躍風流して可レ褒之由、岡崎信康曰間、各一手々々に被レ躍、家康公不レ可レ然之由雖二思給一、迎不レ被レ任二異見一間、達て無二諫言之儀一、

天正六戊寅正月朔早旦に、御茶の會也、已上十一人、信忠公、羽柴筑前守、二位法印、長岡兵部大輔、林佐渡守、長谷川丹波、惟任五郎左衞門、瀧川左近、荒木攝津守、市橋九郎左衞門、長谷川宗仁等也、御座敷構六疊敷に、四尺緣、床波岸繪、中に萬歲大海、右に松島、左に三ヶ月、かへり花之水さし、周光茶碗、嫗口釜、竹筒の花入也、信長迎に出給、膳を自身すへ給、日來各依レ勵二戰功一、今靜謐之由曰、甚御感也、其後各有二出仕一、同四日、信忠舊冬令二拜領一給數奇道具被レ開、萬見仙千代宿所也、右之衆參上、夕庵此比信長被レ申二諫言一、節會幷禮樂之事也、同月廿日、安土へ妻子未二引越一者被レ付レ着到一、凡百八十人也、爲二過怠一道路を被レ爲レ作、四月十日、丹波國荒木山城守爲二成敗一、惟任惟住瀧川被レ遣、中旬之比、毛利輝元播州上月城を圍、羽柴筑前守荒木攝津守爲二後詰一被レ遣、此春越後景虎卒去（年十四、十九、大虫と云々、及二死後一辭世頌云、一期榮華有二一盃一、四十九年一炊夢、三四句は不レ繼して相果、北條三郎（景虎養子）相州氏政弟也、喜平二景勝（景虎幼名）餘楯數度及二合戰一、竟に討二三郎を一、景勝爲二越後國主一、上月爲二後詰一、信長五月朔日可レ有二發向一之由曰、各諫言して云、彼地殊外の節所、殊敵陣隔二深谷一熊見川あり、其上陣城を構二丈夫一、兵粮已下三箇年致二支宅一之由也、先我罷向見計可二言上一之間、其中延引可レ然之由也、さて各四月廿八日より出陣、五月七日信忠公出馬し玉ふ、六月三日、自二播磨一飛脚到來、信長發向之儀必可二延引一旨也、同十日、筑前守參上、尙以右之通言上、則播州へ被レ歸、十二日、信忠神吉志方兩城被二取詰一、始神吉にて味方手負死人多、後竹たはを付せいろを被レ揚、兩城終に被二責落一、三木城へ被二取懸一、附城餘多有二普請一、是も筑前守へ被二相渡一、八月六日、信忠令二歸馬一給、蟄

州之毛利は昔鎌倉の因幡守廣元末孫と也、代々の名信長記十一卷有レ之、九鬼右馬允依レ仰、去六月廿六日、於二伊勢雜賀一浦々より賊船共多出、度々及二合戰一、每度討捕、七月下旬に、大船數十艘にて着二堺浦一、九月廿三日信長御上洛、越中國一揆令二蜂起一之由注進也、齋藤新五被二立道一、廿七日、九鬼船を可レ有二御覽一とて、住吉ゟ信長御出、廿九日、於二阿部一應道給、此夜彗星出二坤方一、逾レ月不レ消、十月朔日快晴、九鬼船共幷近邊浦々舟指物旗巳下飾立、舟軍樣子可二學申一由信長曰、幸汝此度雜賀浦にて得二勝利一たる體を學へきと也、九鬼畏旨言上、信長見レ之給有二御感一、黃金三百兩小袖十重被レ下、其上酒肴數多被レ下、舟祝可レ申旨仰也、さて堺宗久御茶上可レ申旨曰、御成有、其次而に宗易宗汲道叱座數有二御覽一、翌日佐久間甚九郎御茶上被レ申、三日御歸洛、信長曰、甚九郎數奇殊外上手也、乍レ去武士たる者不レ可レ羨、夕庵申云、爲レ士者强好二此道一には武道は可レ廢、果町人職人之業也、信長令二承諾一、於二越中國齋藤新五所々放火、其上河田豐前椎名小四郎給相龍今泉城へ相勵及二合戰一、敵五百六十討捕、國中人質取、固神保安藝守渡置候由有二注進一、信長喜悅し給、十月十日、安土へ令二歸城一給、荒木攝津守反逆之由從二方々一注進あり、信長聞給、是如何樣人の可レ爲二申妨一、然は可レ被レ宥旨思召、友閑惟任萬見仙千代を十月下旬に被レ遣、荒木對面仕、聽而出仕可レ申旨也、家老者諫言、此度之儀、往々不レ可レ遁二其科一間、此儀被レ止二出仕一尤之由也、荒木も內々存二其旨一同二此儀一、右之三使に申切、露二敵對之色一、信長以二厚恩一成人者也、殊攝州被二一國一之間、逆心之儀有レ之間敷所、信長自愛之小性谷河藤五郎頻に企二慮外一、去年三川國岡崎へ御出之時、荒木門に立居たりしに、二階より長谷川尿をしかけたり、傍の人是を荒木に告申、荒木不レ苦とて不二立去一、如レ此故に逆心と云々、十一月三日、爲二荒木退治一、信長出馬し玉ふ、十一日高山右近屬二味方一、黃金三百兩小袖三重被レ下、茨木へ有二付城一、前田又左衞門、不破河內、佐々內藏助、原彥二郎、金森五郎八、日根野被二入置一、十四日伊丹へ被二相動一、貝野江附城に蒲生忠三郎、惟任五郎左衞門、蜂屋兵庫被レ置、信長信雄小野に被二陣取一、十五日、信長郡山へ被二移陣一、高山此所へ出仕、早鹿毛の逸馬、吉則の刀被レ下、當國芥川郡令二拜領一、信忠信雄より右近に有二送物一、十八日惣持寺付城普請之間、茨木に被レ置衆を被レ移、茨木へは被レ移二伊勢衆一、廿四日、中川瀨兵衞屬二當手一、翌朝出仕、自二信長一金子三百兩、重郷脇指、鹿毛の駿馬被レ下、從二信忠一銀子千兩、小袖十重被レ下、廿八日、昆陽野へ信長信忠被レ移レ陣、花熊兵庫放火、下民數百人被二切捨一、十二月八日、伊丹城中有二調略一、人數を被レ寄所、露顯して相違、此時萬見仙千代討死、伊丹へ之取出堀口、原田、池田、一屋、大矢田、已上五箇所普請令二出來一、廿二日信長信忠令二歸馬一給、

天正七己卯 九鬼安土へ參上、長々堺浦に有て、苦勞之由曰、金二百兩、小袖三重被レ下、歸二勢州一暫可二休息一之旨曰、二月十八日、信長上洛し玉ふ、此春信長公在京之砌、從二若狹國丹羽五郎左衞門一獻二人魚を一、面手足人に不レ違、長五尺計在レ之、彼魚岩の上へ登り寢ることと良久、其所を見付取レ之と云々、此在京中に三條の宗運と云町人、老父に至孝の由を信長聞給、諸役を免許し、米百石被レ下、三月二日、信忠信雄信孝三七の上洛、五日信長攝州へ發向、伊丹取出在番衆ゟ被レ註二懇詞一、廿日筥尾淵有二一見一、四月七日申刻、家康公若君誕生、後征夷將軍秀忠公是也、四月七日、常陸國多賀屋修理亮より星

河原の四き七分の逸馬令二進上一、二日に五十里充通候旨言上、信長悅善し玉ふ、則金子五十兩、小袖三重、縮三十端被レ遣、使者銀子百兩被レ下、廿日多田、鹽川、森の亂を爲二使者一、銀子千兩被レ遣、政道淳路之由民言上之儀付而如レ此、五月中旬、靈譽と云淨土の上人、於二安土一有二法談一、建部紹知、大脇傳介日蓮宗也出二其場一、問二不審一、靈譽の云、對二大俗一法論無益之儀也、日蓮の僧を令二同道一可レ來、依レ之京都法花上人堺の不便、其外多集、信長曰、是無レ詮儀也、各令二異見一可二相止一者、然共日蓮宗曾て不レ承二引之一、たゝ天魔波旬の業成とて、信長甚不快、然共定日限南禪寺秀長老爲二判者一、因果居士已下有レ傍、若及二喧嘩一なは如何とて、織田七兵衞、菅屋、長谷川、堀久太郎等令二警固一、日蓮宗の構夥、出世の僧百人餘被レ出、淨土宗者靈譽、貞安兩上人迄也、貞安問曰、法花八軸の中に念佛有哉、法花答云、念佛有、貞安云、有二念佛一は何そ無間に落る念佛を法華に說哉、法花云、法花の彌陀と淨土の彌陀は一體歟、別體歟、貞安云、彌陀は何くに有も一體よ、法花云、何そ淨土門に法花彌陀を捨閉閣拋と捨哉、貞安云、念佛を捨よと云には非す、念佛を修する機の前に、念佛の

外を、捨閉閣抛と云也、法花云、念佛を修する機の前に、法花を捨よと云經文有哉、貞安云、法花を捨よと云證文こそあれ、淨土經に云、善立方便、顯爾三乘と云々、亦一向專念、無量壽佛と云々、法花云、以前の無量義經に、以方便力、四十餘年、未顯眞實と云り、貞安云、四十餘年の以二法門一彌前を捨は、方座第四の妙の一字は捨る乎不レ捨乎、法花云、四十餘年四妙中には何の妙そや、貞安云、法花の妙よ、汝不レ知哉、日蓮宗此返答に不レ能閉口、貞安亦云、捨る乎不レ捨乎、扇を以扣と云へとも、猶擬議す、其時判者を始滿座一同に噇と笑、袈裟を剝取しかは、經箱已下取捨退散す、不傳不レ限此度俟僧成とて引張切にそせられける、紹知傳介則被レ刎レ首、　丹波國八上城、去年三月より惟任取詰間粮絕、城中之者共波多野兄弟三人搦て出間、六月四日安土へ具進上、則被レ刎レ首、　此比伊丹取出に在陣之衆へ、鶴三聯帷廿充被二送遣一、七月三日武藤彌平兵衛越前敦賀の主於二攝州陣中一病死、信長甚惜給、遣領男令二拜領一、十八日出羽の國從二大寶寺一逸馬五疋、逸鷹十一聯上り、其中白の鷹一足有レ之、信長大に悦玉ふ、則黃金二百兩、純子廿端、虎皮五枚被レ下、使者に銀二百兩被レ下、　奥州の遠野白鷹進上、千福の前田令二上洛一、大鷹三進上、　去五月宗論に勝たるとて、靈譽貞安に銀子被レ下、　八月二日信忠攝州出馬、　八月五日岡崎三郎信康主家康公令二牢人一給ふ、是信長之雖レ爲レ聟、父家康公の命を常違背し、信長公をも被レ奉レ輕、被官以下に無レ情被レ行非道間如レ此、此旨を去月酒井左衛門尉を以信長へ被レ得二內證一所、左樣に父臣下に被二見限一ぬる上は不レ及二是非一、家康存分次第之由有二返答一、家康岡崎へ御越、三郎主を大濱ゟ退被レ下、岡崎城へは本多作左衛門を被レ移、三郎主當座の事と心へ玉ふ、家康公は西尾の城へ被レ移、三郎主遠州堀江へ移、又二股ゟ移給ふ、九月十五日、於二彼地一生害し給、三郎主母公も於二濱松一被二生害一、　九月廿二日、荒木攝津守伊丹城を忍出女房一人侍一人召具、童を持、尼か崎落行、　兵庫の町人常見檢校中へ千貫文出、其身成二檢校一てをり物を取、座頭共信長へ令二直訴一之間、爲二過怠一金子二千兩出、是を以被レ掛二宇治橋一、村井長春は此金被二召上一事不レ可レ然と內々存と云々、菅屋九右衛門、長谷川竹も二百兩出、是は座頭を檢校にせられけると也、　廿一日攝州へ信長出馬し玉ふ、去十七日信長伊賀國被二

相勤一失レ利、柘植三郎左衛門尉討死之由有二注進一、是悉出頭人信長大に令二腹立一玉ふ、廿七日信長伊丹の取出也、共有二御覽一、各引出物被レ下、　十一月十六日、中西新八郎と云者、瀧川人數を伊丹城の上臈塚へ引入る、鵜塚の丸に雜賀の者共籠けるを、過半討捕、本丸に籠者共荒木久左衛門を始申けるは、尼崎へ參荒木に令二異見一、花熊尼崎同時に渡可レ奉間、妻子を其間被二助置一よかしと申各承引、さて籠城之者共三百人、尼崎へ參へきとすれは、荒木鐵放を以防レ之、近邊へ不二寄付一、伊丹城へは織田七兵衛被レ移、無二詮方一散々に成行、さて荒木一類の妻子三十餘、京都へ被二引上一、相殘池田久左衛門其外宗徒の妻子二百人共、尼崎七本松にして皆張付被レ掛、尼か崎に籠者共の心中可レ察レ之、十二月十六日、荒木一類者共妻子、一條より車一兩に二人充乘て引せらるゝ、佐々內藏助、前田又左衛門、金森五郎八、不破河內已下兵具して令二警固一、一番荒木弟吹田、廿歳、野村丹後守妻、是は荒木妹、十七歳、荒木姨、十五歳、荒木妾出し、廿一歳、三番荒木娘、十三歳、吹田妻、十六歳、四番渡邊遠四郎、廿一歳、是は荒木志摩守嫡子也、同弟新丞、五番伊丹安太夫、年十五、同子松千代、八歳、北河原與作妻、十七歳、六番荒木與兵衛妻、十八歳、池田和泉守、廿八歳、此二人は出しか妹也、八番伯々部、五十六歳、其外は不レ及レ記、此者共最後何も神妙也、　丹後國へ長岡兵部大輔、丹波國へは惟任を去年被レ遣、兩國已平均、安土へ參上、進物不レ知二其數一、　北條氏政豆州砥籠へ出張、甲州と及二牟楯一、是信長家康へ爲二入魂一也、武田勝頼駿州沼津に在陣、然所に家康駿河へ被二相動一、氏政被二押出一者、武田定而可二引入一間、此度可レ遂二會面一との內々支宅也、武田少も不二引入一、剩氏政陣中へ以二使者一申けるは、家康駿河山西へ被二相動一之間、彼面へ可レ向、合戰於レ望者、明日歟明後日、何之所へ成共返答次第可レ出之旨也、北條不レ能二返答一、さて武田山西へ急罷向之條、家康早速に被二引入一、十一月三日、二條の新造出來、則親王御移徙、其後信長參內、進上物夥、其比近習之輩に卷物二千端被レ下、八幡宮へ去月信長御參詣之砌、樋をからかねにて鎖可レ申旨被二仰付一、鵜左衛門か所持の周光香爐被二召上一、則銀子五百兩被レ下、十七日能有二興行一、近年より長陣仕、大名共各棧敷ゐ折廿合充、柳五十充、四日之間賄可レ申旨、京中へ充課、京中へは黃金二百兩被レ下、其外見物之上下有二送物一、京中町へ

八木千石、安土の町へ三百石被レ下、是何も荒木成敗し給悦の心也、爰に安土山の記を策彦ゐ被二仰付一しを、南化幸岐阜に被二居申一之間仰付尤之由策彦曰、依て南化是を被レ書、信長記に具有レ之、此比大名小名暇給て於二在所一令二越年一、

天正八庚辰年正月、安土には近習の輩迄令二伺候一、六日播州三木城落去、別所兄弟腹切て、士卒皆被レ助レ命、此比無邊と云僧有レ之、吾は生所も無父母もなし、吾得二秘法一たり、之を得受する人は、現世來世如レ願と曰、依レ之貴賤信仰不レ斜、丑の刻の受法と也、米錢持來れとも曾て不レ納、安土へ參或寺に宿す、三月廿日、信長聞レ之玉い、其僧可二對面一曰間、楠長庵以レ使稱レ之、信長厩へ出給有二御覽一、無邊と云は汝か、生國は何そ、無邊と答、信長曰、無邊と云は天竺か唐土か、答云、天にも非す地にも非す、信長曰、天地を離ては何の所に安レ身、此時無邊赤面す、さては汝は變化の物か、いて試んとて、馬に灸をする錢を燒て面にあてんとし給へは、是は出羽國羽黒山之者成と、ふるひ〳〵申、汝此程弘法大師の再誕とて奇特を人に見せけると也、吾にも見せよと曰は、いらへをも不二申得一、か樣の寶子國の寶也とて、引はらせ引刀にし玉ふ、五月攝州花熊城へ池田勝三郎相動所、自二城中一ふた〳〵と出間空引しけれは、敵尚以追來間、わきより城へ乘入て、則勝三郎城へ移、信長悦給、攝州一國勝三郎令二拜領一、剩正宗の脇指被レ下、男勝九郎十七歲、弟幸新三左衛門と十五歲、に名馬被レ下、

大坂を信長へ渡可レ遂二無事一之由有二勅使一、門跡被レ應二勅定一、信長へも被レ立二勅使一、畏奉レ之、十二月從二大坂一下間刑部卿幷少進安土へ參上、御赦面忝之由言上、從二下野國宇都宮異(カ)貞林方一駿馬壹疋進上、自二信長一色々被レ遣、江州之住人布施藤九郎度々有武功、才藝兼備間、信長近習に被レ成、六月廿六日、土佐國長曾我部方より青蹊十六疋、砂糖三千斤進上、砂糖は則被レ施レ人、七月廿日、大坂城被二請取一、矢部善七郎奉行とす、門跡へ從二信長一金五百兩、其外色々被レ遣、北の方へも金百兩其外被レ遣、按察法橋ゐ金二百兩、刑部卿へも二百兩、少進へも同二百兩充被レ遣、門跡は去月雜賀へ移玉ふ、自餘の衆今日退散、自二門跡一安土へ以二使者一被レ遂レ禮、八月十日、近衛殿勸修寺殿庭田殿有二同道一、信忠へ可レ遂レ禮之由信長曰間、任二貴意一、

盛國太刀一腰、馬代銀千兩、卷物百端也、八月十二日、信長爲二見物一大坂ゐ御越、自二宇治一舟にて下給、」近年大坂ゐ佐久間右衛門父子被二指向一、天王寺に在城之所、か程の小敵長袖を、長々敵相守こと不レ及二是非一とて被二勘發一、十三箇條の以二書付一叱給、別なる儀無レ之、徒に無二調略一長々敵との事也、則天王寺を被レ出ける、侍小姓皆退散、たゝ三人高野山迄したかい行、此內も二人は鰭而退散と聞ゆ、高野の辰巳之方に當て相江とて、總にして所有、此所に被レ居、金子も十枚ほと希有にして持參せられけると也、或時山岡八郎左衛門(道阿彌事)思立ち被レ尋、平井阿波入道安齋を被二同道一、佐久間對面して、涙を流感悦不レ斜、右の兩人尋けるを、其比各感しけると也、十七日信長自二大坂一歸洛し玉ふ、林佐渡守を被レ所二遠流一、是昔年三十年以前、於二尾州名護屋一企二謀叛一、依二其科一也、又安藤伊賀守父子被レ所二遠流一、是は先年武田信玄ゐ致二內通一ける事有とて如レ此、兩人終に無二赦免一、十一月十七日、備前國宇喜多屬二味方之由一、從二秀吉一有二注進一、廿日柴田修理亮於二加賀國一一揆の大將十九人、其外數多誅戮由注進、彼首共安土へ進上之間、被レ掛二松原町に一、

加賀國は別喜右近上表後柴田拜領也、

天正九辛巳年正月元日、御馬廻之衆出仕、從二西門一東門へ可レ通、可レ有二御覽一と也、諸大名は近年致二長陣一之間、於二其所一可レ令二越年一由、信長依二下知一也、然而未明より申刻迄不二引切一、罷通、二日御鷹の鶴雁安土町人ゐ被レ下、町人致二畏悦一、於二佐々木宮一能を令二興行一、さて彼鶴雁を致二調味一、二月十八日、信長信忠信雄上洛し給、同廿四日自二越前國一柴田修理上洛(伊賀守召具三左衛門)、遂二御禮一、柴田進物太刀國光、馬代銀千兩、金三百兩、蠟燭千挺、奉書の紙千束、綿千把、絹五百疋翌朝御茶被レ下時、柴田直訴に嘔口の釜奉レ望、則直に取出玉い被レ下、柴田畏て拜領、信長歌を讀玉ふ、馴あかぬなしみの中の嘔口を人に吸せん事をしそ思ふ、此釜は古備後主より相傳の釜也、

去正月廿三日被二相觸一ける馬揃、二月廿八日有レ之、各靈レ美色々の出立也、馬上已及二百騎一、一番に明知日向守岩紅の出立也、其次々不レ及二書載一、甚結構の體也、信長は右之馬上の跡に乘給、先馬の前に夕菴法印を被レ通、其體小袖をつほをり、白髮をかつきの出立也、鞍にとり付、誠の老女の馬に乘たるか、危き樣に見へたり、此夕菴は信長右筆、年七十餘之入道也、信

長公出立は、ほゝ眉にほうこうをし給、牡丹作花を腰に指し、冠物にも作花をさし給たり、馬先に乘替十疋、種々無量之仕立、或は唐織、或は染縫薄猩々皮已下にて泥障をし、縦へき様もなき結構也、信長の馬の廻に小人衆紅梅の袷、上に黄衣、立烏帽子、のし付脇指、金の鼻ねち、紅のうてはしりにて、思々にのる、池田庄九郎は惣金之出立、其身の事は不レ及レ申、馬の毛爪等迄何も金也、馬の毛には、ふのりを以薄を置けると也、主上御桟敷にて御見物、馬場は内裏の東に竪三町横二町計に構たり、廻に柳を植る、裸はなし、又昨日の馬揃殊多とて、翌日はをり頭巾にて馬を被レ乘、此時猩々皮はをり、袴右之馬上乘一夜中にしたてけると也、何者のしわさにや落書有レ之、　金銀を遣捨たる馬揃、象棊に似たる王の見物、

此馬揃に越前越中加賀國之衆は不二相上一、其故は長尾景勝彼表へ出張、加賀越中之一揆爲二手合一ふとふけの城を取巻、賀州尾山に在城之佐久間玄蕃令二後詰一所、一揆早速に乘崩、城中之者皆以討死、玄蕃於二途中一聞レ之急懸付、即時に乘返、右之一揆共一人も不レ殘切捨る、

三月九日安土へ飛脚到來、信長甚快氣也、同十二日佐佐内藏助神保越中守安土へ參上、翌日出仕進物夥、然所長尾喜平次景勝出張して、越中國小井平の城を圍之由注進到來、信長曰、久々に而相上門◎（カ）問於二京都一一興可二仰付一旨思設玉ふと云とも、急罷下後詰可レ仕由也、佐々神保夜を日次て下る、廿四日に越中の中郡ゟ打出、長尾聞二此事一未明に引退、四五里か程追レ之、敵曾て不レ見、此間籠城之者對談して感悦す、此比長尾兵部大夫に丹波國被レ下、

此比城介信忠能を被レ好、自身行レ之給、手前見事之由、上下云々、信長聞レ之給、武將たる者強不レ可レ好之由曰、甚無レ興、則城介能道具悉召二寄之一、丹波猿樂梅若大夫に被レ下、舍弟伊勢國主信雄同北伊勢かんへの三七主も此道雖レ被レ好レ之、信長不二知レ之給一、

三月廿二日、高天神落去、兵粮斷絶之間、不レ及二了簡一、城中より出たり、然間所々の塀柵きわにて討レ之、但隨分の者共少々切拔けると也、

六月若州逸見駿河守病死、實子無し、遺領八千石有レ之、此内三千石武田孫八郎、五千石溝口伯耆に被レ下、廿四日高麗鷹六連竹進上、此日相州氏政ゟ駿馬三疋進上、廿五日羽柴筑前守秀吉因幡國取鳥城取巻、七月十日柴田修理亮方ゟ青鷹六連、切石、其外色々進上、廿日秋田ゟ青鷹五連、生白鳥十進上、廿一日信忠信雄信孝（三七）安土へ着給ふ、信忠へ正宗脇指被レ進、八月六日奥州會津の蘆高ゟ馬三疋、蠟燭千廷進上、十四日馬三疋、黄金千兩、羽柴秀吉の方ゟ被レ遣、今因州在陣也、

八月十七日、高野聖方々にて搦捕上け可レ申旨被二仰出一、其子細は攝州伊丹牢人内一兩人彼山に在と聞召て、急き出し可レ申旨使者を以被二仰遣一ける所、返事さへ不レ申、剩使者上下共廿餘人討果之條、不二相届一旨御腹立有て、方々被二仰觸一けれは、高野聖を數千人搦捕引來る、其誅罰の有さま哀也、自レ昔高野山聖諸國へ下時、我と宿取ることなし、於二路巻一宿かや〳〵と呼る、心ある人は不レ寄二上下一宿をかす、若宿なけれは、其まゝ路頭に明す、信長今年聖殺害し給より此事なし、信長果給て後も、是より已來如レ元呼る事なし、たゝ如二旅人一宿をとる、（殊に今は如二商人一衣類已下色々之物を持來て令二沽却一少の坊をもたる聖は、笈をも不レ持馬上にて國を令二上下一何も邊土師の掟乎、九月八日小袖被レ下、十人、近習六）」

十月十日、取鳥城落去之由自二因州一注進、十一月朔、皆川山城守方ゟ名馬三疋進上、則純子十巻、綿百段、虎皮五枚被レ遣、使者にも引出物、　十月廿日、家康公高天神ゟ出馬、是於二遠江一も肝要之地也、即構二陣城一、其間々々堀塀柵三重付緊被レ留二通路一、家康は依二信長異見一給、馬伏塚の城令レ居玉ふ、　自二甲斐國御坊（信長息）一奉レ返、是無事之儀雖二言上一、信長曾て用不レ給、先是を奉レ返、彼以二助言一可二相調策一也、此御坊は信長末子、去永祿三年に、東美濃岩村ゟ養子、然を元龜三年に、城主女性（信長の伯母也）、武田信玄へ一味、其時御坊を甲州へ連申、御坊暫大山に置被レ申、其後安土ゟ依レ召被二參上一、則有二元服一、號二源三郎一、其時大名小名色々奉二送物一、其中に殊に勝たるは自二羽柴筑前守一銀子三千兩、小袖二百進上、

此年春夏、大疫人多死、　去六月十五日夜、星貫レ月、

天正十壬午年正月元日、信長裝束し給、各可レ被レ見二せ殿守一間可二罷通一由御諚、其後於二臺所一大名小名に不レ限、樽代拾疋充直に奉レ捧、式法は重く禮儀は輕し、十六日佐久間右衛門紀州熊野之奥にて令二病死一、信長不便之由曰、則男甚九郎を被二召直一、信忠ゟ奉公可レ仕由曰、廿七日備前宇喜多和泉守死去、吉光の脇指、金

三千兩進上、是遺言之羽柴筑前守被ニ取持一間、跡目無ニ由也一別條一幼息に被レ下、廿五日伊勢大神宮遷宮三百年の召具せられし女性四十四人、皆士屋さし殺、相從侍は五十餘人遂ニ討死一、勝頼討し侍に、自ニ信忠一吉光の無レ之旨言上、信長其賄を有ニ御尋一、千貫文被ニ下行一は、其外は以ニ神力一可ニ成就一之由神主申上、是は餘に輕き申樣とて三千貫被レ下、信濃國木曾の主伊豫守義わきさし、馬一疋、金五百兩被レ下、三月七日、信忠甲政昌可レ致ニ忠節一之由、東美濃の苗木久兵衛を以信忠州着給、古府に御在陣、家康甲州市川へ被ニ打入一、彼地へ言上、此旨信長へ被レ得ニ內儀一、則信忠合ニ出張一給、又に在陣之間、同九日に古府へ參給、信忠わ有ニ對面一、又下條に伊豆守か一族下條九兵衛と云者、川尻與兵衛市川わ被レ歸、三月五日、信長安土を立給、翌日濃州岩村に在城一家中有レ好關ニ味方一、依レ之二月二日、武田諏訪上六の渡へ飛脚來、甲信駿三箇國無ニ異儀一被ニ打果一之原わ出張、其後鹽尻迄打出防ニ鳥井峠一、又駿河國江尻由也、仁科勝頼弟首此所へ持參、信長大に悦給、十三日信に合ニ在城一、武田陸奥守穴山屬ニ家康一、可レ服ニ信長幕下一長着ニ根羽一給、此所へ勝頼幷太郎首來、信長甚喜悦、由言上之間、則家康駿河に合ニ出馬一給、陸奥守妻信玄女、時狂歌を讀給、かつよりとなのる武田之かいもなくいく姉、幷息勝千代を自ニ甲斐一忍出、江尻に引取、就レ其甲さにまけてしなのなければ、此兩使信忠小性御馬一疋州上下周章不レ斜、勝頼陣中無ニ正體一之間、則自ニ鹽充、金百兩充被レ下、信忠あら波と云刀、いたや鹿毛の尻一甲州へ引退、此間信忠伊奈郡へ打入給、飯田大島馬、帷百相添被レ進、勝頼の首飯田に二三日被レ掛、其兩城明て退、則高遠城へ取懸、無理乘給、城主保科彈後被レ掛ニ獄門一、武田左馬助は信州へ打越、關東へ可正自ニ裏口一退間、則責入落去、諏訪祝ニ降參一、信忠少も レ通と內存所、於ニ小室一生害、此首同被レ掛ニ獄無ニ用捨一甲州へ打入給、武田四郎同太郎大か原を退門一年三十四、十九日、信て都留郡天目山邊田子里へ楯籠、此時甲州男女之有樣可レ糺レ之、長上の諏訪へ御着陣、廿日、木曾義政此所へ始而出三月十一日、先勢瀧川左近人數押入、勝頼同太郎切て出相圍仕、太刀一腰、馬二疋、金二百兩進上、自ニ信長一金千兩、筑摩安曇兩郡を被レ下、家康昨日市川を出、今日廿

日出仕、信長曰、此度早速被レ達ニ本意一事、先年於ニ長て討死、年三十九、士屋宗三郎無ニ比類一打死す、年廿七也、此は勝頼自愛の小性士屋右衞門弟也、此時勝頼篠一、此度甲信隨分之者共、被ニ打果一故との御諚也、與平九の召具せられし女性四十四人、皆士屋さし殺、相從侍八郎信長致ニ出仕一、信長此事思召出歟、殊外御悦也、廿は五十餘人遂ニ討死一、勝頼討し侍に、自ニ信忠一吉光の一日、武田穴山陸奥守入道梅雪出仕、家康取持給、太刀一腰國わきさし、馬一疋、金五百兩被レ下、三月七日、信忠甲久、金三百兩進上、自ニ信長一半俗の脇指の三つ刀を被州着給、古府に御在陣、家康甲州市川へ被ニ打入一、彼地レ下、彼仕合を信長被レ爲レ譽、甲斐駿河の本領致ニ安に在陣之間、同九日に古府へ參給、信忠わ有ニ對面一、又堵一、信州松尾小笠原掃部大夫同出仕、太刀馬進上、合ニ市川わ被レ歸、三月五日、信長安土を立給、翌日濃州本領安堵一、相州の北條氏政より太刀馬金千兩、江河の六の渡へ飛脚來、甲信駿三箇國無ニ異儀一被ニ打果一之酒十柳、白鳥十、漆桶二千進上、廿三日、瀧川左近に上由也、仁科勝頼弟首此所へ持參、信長大に悦給、十三日信野國幷信州之內二郡相添被レ下、上州厩橋へ移、又御長着ニ根羽一給、此所へ勝頼幷太郎首來、信長甚喜悦、腰物被レ下、深志之城に有レ之兵粮、陣中之衆へ被レ下、狂歌を讀給、かつよりとなのる武田之かいもなくいく上野國の小幡上總介、信忠え出仕、貞宗の脇指、金五さにまけてしなのなければ、此兩使信忠小性御馬一疋百兩進上、自ニ信忠一左文字脇指被レ下、自ニ北條氏政充、金百兩充被レ下、信忠あら波と云刀、いたや鹿毛の白米二千石進上、家康よりも兵粮有ニ進上一、是は陣中尻一甲州へ引退、此間信忠伊奈郡へ打入給、飯田大島にて諸士へ充課らる、、諸士及ニ難儀一と云共、色々に馬、帷百相添被レ進、勝頼の首飯田に二三日被レ掛、其相調上る、信忠此度不レ經ニ數日一、早速に甲信被レ納事、後被レ獄門一、武田左馬助は信州へ打越、關東へ可信長感給、此冬可レ被レ讓ニ天下一之由、其驗とて秘藏レ通と內存所、於ニ小室一生害、此首同被レ掛ニ獄の脇指被レ進、信忠畏悦不レ斜、但天下御讓之儀は、未門一年三十四、十九日、信若輩之間、不レ寄レ存之旨被レ奉ニ返答一、廿八日、信忠諏長上の諏訪へ御着陣、廿日、木曾義政此所へ始而出訪へ參向し給、有ニ國割一、此日寒氣甚、信忠の中間かる仕、太刀一腰、馬二疋、金二百兩進上、自ニ信長一金千き出立仕間、廿八人寒死、駿河國家康へ被レ下、甲斐國兩、筑摩安曇兩郡を被レ下、家康昨日市川を出、今日廿に諏訪一郎相添河尻肥前守、與兵衛上野國佐久郡小縣相添瀧川左近に被レ下、瀧川厩橋へ移、此時壁書を被レ遣、高井水內埴科更級四郡森勝藏後武藏守と改拜領、則海津に在城、河中島一揆起て大厩城に相籠、勝藏則責落、悉切捨る、惣別此度於ニ信州一先陣仕、度々之戰功感思召、伊奈郡毛利河內守、濃州岩村城に五萬石相添森亂丸に被レ下、此度自ニ相州小田原一、北條陸奥守爲ニ氏政代官出仕有けれ共、信長無ニ對面一、信忠へ遂レ禮被レ歸、甲州之國侍、又は武田家之家老共、駿河信州の侍小山田山縣を始、悉被ニ誅戮一、三川國菅沼伊豆守父子、同菅沼新三郎、去元龜三年より屬ニ信玄一、天正三長篠合戰より信州に在國、此度降參し、賴河尻肥前守被陣中に居たりしを、自ニ家康一信長へ有ニ言上一、則生害せらる、諏訪の祝女は新三郎妻たりしか、聞ニ此事一則子共指殺し、其身も令ニ自害一、素此女房大力也、此伯母も去比高遠にをいて無ニ比類一相動死したりしか、相似たる女也と皆人誦レ之、卯月二日、信長諏訪御立、翌三日、甲州の新府を被レ爲ニ御覽一、其より古府へ御移、暫く御座す、翌三日、江州佐々木二郎甲州惠林寺に隱て居た

る由風聞、信長聞給、早速に出可ㇾ申旨、以ニ檢使一再三
曰けれ共、全不實の由及ニ返答一、忍て令ニ他出一、信長甚
腹立し給、津田九郎二郎、長谷川丹波、關小十郎右衞
門、赤座七郎右門仰付、惠林寺に火を掛、澤川國師長
禪寺の高山和尙を始、大綱睦庵兩人單寮也、悉被ニ燒
害一、其中に未宗と云單寮自ニ山門一飛落遁出らる、下法
師若僧なとは躍上り飛上り死たる有樣絕ニ言語一哀
也、東光寺藍田和尙は、其場をは遁出られけるか、於ニ
途中一尾州の者行合及ニ強問一、被ㇾ持ける金を有のまゝ
奪取て、後令ニ生害一也、十一日、信長甲府を立、元巢に
着給、此間山路の茂りを伐拂間々に、家康より物主を
被ㇾ置、奥平九八郎信昌御迎に出けるに、信長殊外の
御懇、中々申も愚也、先年於ニ長篠一甲信隨分之者依ニ
討果一、此度早速相治之由曰、甚御快氣也、十二日、駿州
大宮へ着給、路次中富士山見物し玉ふ、於ニ此所一家康
へ吉光脇指、一文字刀、馬三疋被ㇾ進、十三日江尻に着
給、翌日駿河府中、今川の代々の舊跡心閑に有ニ一見一、
藤枝田中城に御泊、さて遠州懸川御泊也、家康より天
龍川舟橋かけ給、一日先立て上給、十七日三川國吉田
に御泊、於ニ河方一も無ニ御逗留一、夜を籠て出御也、十八
日岡崎、何の於ニ御泊一も、惟任は老人成とて、御座所の續而御近所に宿を被ニ仰付一、廿一日に至ニ安
土一歸城し玉ふ、信忠は信長甲府へ移給し時、信州上
諏訪へ被ㇾ移、信州より東美濃筋を上給、安土へ自ニ諸
國一、東國平均賀し申事夥、三七主四國拜領し給、一萬
五千餘集ニ人數一、五月十一日、至ニ佐吉一下着し給、五月
十五日、家康安土へ着給、巡而可ㇾ被ニ相上一旨、於ニ東
に一信長依ㇾ被ㇾ命也、宿所は大寶坊也、金三千兩並馬
鎧三百走進上、見ㇾ之給、馬鎧者納給、金千兩をは被ニ返
進一、在京中可ㇾ被ㇾ用ㇾ之と仰也、路次中泊々從ニ信長一
可ニ馳走一旨依ニ仰付一專ㇾ之、惟任日向守於ニ安土一馳走
被ニ仰付一、筑前守秀吉三月下旬に、備中國へ打入、すく
も塚城責落、數多被ニ討捕一、則ゑつたか城へ被ニ押寄一、
茲に自ニ藝州一爲ニ後詰一輝元出張、同吉河駿河守元春、
小早川左衞門尉隆景、數多以ニ人數一及ニ對陣一、信長聞
ㇾ之給、頤所の幸、毛利を可ニ打果一旨曰、十九日、於ニ安
土に一幸若八郎九郎舞仕、丹波の梅若太夫能仕、是家康
爲ニ御懇詞一也、梅若大夫目暗沙汰と云能仕、信長甚不
快、重而か樣に無ニ心得一にをいては、可ㇾ有ニ誅戮一との
儀也、八郎九郎今一番可ニ申上一旨曰、此舞尙以聞事
也、信長快氣、金子百兩、帷廿被ㇾ下、梅若太夫にも金

子同前に被ㇾ下、廿日家康を高雲寺の御殿へ被ㇾ稱、酒
井左衞門尉を始家老之衆、幷武田陸奥守穴山被ニ召寄一、
殿守見物仕、さて元の殿へ歸膳を被ㇾ下、夜半迄色々
被ㇾ翫美、廿一日、家康上洛し給、從ニ信長一長谷川
竹を被ニ付遣一、在京中令ニ馳走一給、惟任日向守備中國
可ㇾ致ニ出陣一之由被ニ仰付一間、爲ニ用意一丹波國龜山へ
打越、愛宕山へ令ニ登山一、於ニ社頭一二三度圍を取、廿八
日、於ニ西坊一連歌興行、其發句に云、

時も今天下知る五月哉　光秀、水上まさる庭の松山

西坊、花をつる流の末を關留て　紹巴、百韵終て
歸ニ龜山一、信長上洛し給、御供之衆纔に小性衆百五六
十騎被ニ召具一、自餘之衆致ニ陣用意一、一左右次第中國
へ可ニ罷立一之旨曰、安土本丸御番津田源十郎、遠山新
九郎已上七八人、二の丸御番蒲生右兵衞太夫、森二郎
左衞門、山岡對馬守已下以上十一人也、六月朔日、惟
任日向守召ニ寄明知左馬介、同次右門、藤田傳五、齋藤
內藏助、溝尾勝兵衞一、行之樣子令ニ調談一、彼五人之者
起請文をかゝせ人質を取、明日中國へ可ニ打立一人數
を信長に可ㇾ懸ニ御目一と披露、戌刻立ニ龜山一、大江山を
越、京へ急速に着、二日の曙、信長の宿所本能寺取卷、
弓鐵炮打込、信長聞ㇾ之給、謀叛か何者そと問給、森の
亂走出、惟任反逆由言上、不ㇾ及ニ是非一儀と曰、弓を取
矢數射させ給、屋代勝助已下屈より出、相戰て討死
す、此勝助馬の段の目聞、奥州の者也、近習の輩、同小性衆無ニ比類一相動
間、暫支けれ共、寄手大勢故、皆以令ニ討死一、信長御弓
の弦切けれは、鎗を以戰はせ玉ふ時に、右の肘を被
ㇾ突れさせ給、內へ入給、向ニ女房達一曰けるは、女は不
ㇾ苦、急退き出よと三度まで曰、角て奥の間へ入給て
後燒死玉ふか、終に御死骸見へ不ㇾ給、惟任も不審存、
色々相尋けれとも無ニ其甲斐一、年四十九、信忠此旨聞給、本
能寺へ可ㇾ有ニ御籠一とて出給所、村井春長親子三人參
上して、本能寺ははや火懸て事終て候、妙覺寺へは御
歸不ㇾ可ㇾ有、二條の新御所へ被ㇾ爲ㇾ籠尤と言上、則二
條へ御移、親王若宮をは內裏へ移し奉、然共寄手も未
ㇾ襲間、安土へ移給、惟任有ニ御退辭一可ㇾ然由各言上、
信忠曰、か程の企謀反一奴原か、なとか口々へ手を廻
さて可ㇾ有、於ニ途中一相果んこと可ㇾ爲ニ無念一、徒此所
不ㇾ可ㇾ退、毛利新左衞門、福富平左衞門、菅屋九右衞
門尤之御詫と申間、定ニ此儀に一、惟任深隱密しける間、
路次へ其擬不ㇾ成間、安土へ於ニ御移一は不ㇾ可ㇾ有ニ別

條ニ所、御運の末と覺たり、及ニ午刻ニ惟任一萬計にて押寄、二條に相籠八々坂井越中守、團平八、齋藤新五、野々村三十郎、赤座七郎右衞門、猪子兵介、增傅三郎、飯尾茂介、村井長春親子三人、菅屋九右衞門親子三人、毛利新左衞門、織田源三郎主（御坊の事）を始、究竟の衆六十五人、素不レ惜ニ身命ニ一被ニ相戰ニ一間、輙可ニ相果ニ一樣なし、其後寄手上ニ隣家ニ以ニ弓鐵炮ニ一責之間、信忠御腹切給、鎌田五左衞門介錯仕、御死骸は任ニ御遺言ニ一、焰の中へ奉レ入、年廿六、此鎌田追腹可レ切旨申けるか、何とかしたりけん終に不レ切、右之六十五人之內、討死衆六十三人也、織田源五（信長弟有樂ことゝ）被ニ遁出ニ一ける、時人令レ惡、水野宗兵衞（苅屋主、此度は遁て苅屋へ被レ歸、其後令ニ入道ニ一、岡崎へ被レ參しか、家康公無ニ參會ニ一（此宗兵衞は日比ニは武篇者也、梶原左衞門か嶺子松千代頻て町屋に居、然共起上、二條へ可ニ相籠ニ一旨申所、松千代內同名又右衞門と云者、爲ニ名代ニ一二條へ相籠、信忠感悅し給、長刀被レ下、能相戰て討死す、松野平介と云者、其日他出して信長御最後不レ知、後來て惟任をねらいけるか、中々傍へも不ニ寄せ付ニ一間、經ニ日數ニ一て後追腹仕死、是は安藤伊賀か侍也しを、武篇の者也し故に、信長被ニ召上ニ一、知行被レ下ける、其恩可レ報とて如レ此、明知日向守光秀は、信長信忠を心之儘奉レ討、其日及ニ申刻ニ一着ニ勢多ニ一、山岡美作守、同對馬守被ニ味方ニ一よかしと使を以云、山岡兄弟彼使か首伐て、勢多橋を燒て、山中へ引籠、明知は歸ニ坂本ニ一、此日未刻計、此事聞ニ ゆ安土ニ一、さて可レ有ニ如何ニ一と密々に成ニ疑心ニ一所、蒲生右兵衞大輔家中之者、自ニ京都ニ一しか〳〵と云、同二日、山崎源太左衞門已か家火を掛、山崎ゟ引籠、蒲生右兵衞屹と思案して、信長の公達女房達、皆日野へ退申さんと呼ニ迎馬ニ一、翌朝三日各同道申、古鄕日野の谷へ引退、女房達被レ申けるは、色々の寶物數物にならんこと無念也、蒲生取給て後火を被レ掛候へとの儀也、蒲生答云、其は欲に耽けるかなと後難如何とて一色も不レ取、家屋をも不レ燒、森の二郎左衞門に能々可レ守と云置、爰迄は清潔後日には少心違けるか、又は策か、明知へも無音にはなかりけるか、後には其事を布瀨藤九郎か科にして、藤九郎を牢人させられける、此藤九郎は蒲生右兵衞智也、又尾張國の水野監物は則從ニ明知ニ一、翌日明知安土殿守へ上りし時も伴ける、時の人非ニ人とて惡レ之、明知果て後、終に監物は牢人也、抑明知日向守光秀は

一僕の者、朝夕の飮食さへ乏かりし身を、信長取立給、坂本の主として、其上丹波國一圓被レ下、かゝる不思議存立事不レ及ニ是非ニ一次第也、忽蒙ニ天責ニ一、同十三日に相果、跡方なく成、（于時明知歲六十七）

信長近年被レ行ニ政務ニ一儀、無道も無レ之所に、如レ此橫死し給事、偏に弘法大師之當ニ法罰ニ一給云々、

家康於レ堺聞ニ此事ニ一、大和路へかゝり、高田の城へ被レ寄、城主へ刀幷金二千兩被レ下、其日に被ニ相立ニ一、六月四日、三川國大濱へ舟にて下着し給、明知を可レ討之旨被ニ相催ニ一、先鳴海迄出張也、此比秀吉公於ニ美作國高倉ニ一、森輝元（中國主）と對陣之處、信長沒死之由有レ告、先令ニ隱密ニ一、森と有ニ一和ニ一、攝州表ゟ打出、山崎寶寺上の高山へ人數を揚給處、明知彼表ゟ押出し、同六月十三日合戰、明知則敗北、坂本之城ゟ可ニ引入ニ一之旨存歟、遁ニ來於山科ニ一、百姓等に被ニ打殺ニ一（歲六十七、此時安土に指置左馬介聞ニ此事ニ一、坂本ゟ懸來、明知男の十五郎一所而城に火を懸切腹となり、齋藤內藏助をは廣、京都へ牽上せ渡ニ大路ニ一、於ニ六條河原ニ一刎レ首、被レ掛ニ獄門ニ一、此內藏介は信長勘當の者なりしを、近年明知隱して抱置、家康公鳴海居陣の處、秀吉より如レ此樣體委細有ニ注進ニ一之間、則令ニ歸馬ニ一給、六月廿八日、甲州出馬也、此先六月十日比、自ニ家康ニ一本多百助を甲州へ被レ遣、彼國は此春自ニ信長ニ一被レ置ニ河尻與兵衞ニ一、然處に信長聞ニ他界之由ニ一、國中庶民不ニ相隨ニ一、百助に可ニ相從ニ一體也、先起ニ一揆ニ一河尻居處ゟ押寄、百助拂レ之、河尻を上方ゟ可ニ相上ニ一之旨相擬處に、河尻無ニ左右ニ一百助を令ニ生害ニ一、我身も自害了、相從河尻士上口ゟ相上る、自レ是甲斐國は家康令ニ押領ニ一給、信濃口ゟは奧平九八郎信昌を自ニ家康ニ一被ニ指向ニ一、伊奈郡令ニ隨順ニ一、至ニ于諏方ニ一着陣、又自ニ甲州ニ一酒井左衞門尉を信州ゟ被レ遣、彼國可レ令ニ領納ニ一由、家康下知給、酒井諸事仕置不レ然哉、國中の民不ニ思付ニ一之處に、關東氏直卒ニ多勢ニ一信州を通、海の口若みこえ打出令ニ陣取ニ一、家康自ニ甲府ニ一出向令ニ對陣ニ一給、酒井左衞門尉も自ニ諏訪ニ一此所に來、此比又自ニ小田原ニ一都留郡黑駒筋へ相動處に、自ニ家康ニ一甲府に被ニ殘置ニ一衆懸向處、不レ及ニ一戰ニ一、小田原衆令ニ敗北ニ一間、追々討レ之、又奧平九八郎深志可ニ相移ニ一之旨、酒井相談處、深志之城主小笠原左近大夫貞吉小田原へ一味して逆心の間、鹽尻に居陣、酒井自ニ諏方ニ一甲州へ被ニ引入ニ一之間、至ニ于飯田ニ一是も引入也、此比所々一揆

あり、高遠へは保科彈正自二關東一氏直と來て合レ入レ城、此小笠原貞吉は二歳の時、深志を牢人して、此六月家康公以二下知一被レ入二深志一之人也、

十一月、家康氏直無事、家康女可レ嫁二氏直一之由有二諧應一、翌年小田原へ輿入るゝ、信州城々深志諏方高遠屬二家康一、自レ此信濃平均、但河中島は越後主長尾景勝被二相納一、又去五月、四國入可レ有とて、三七主信長息大坂迄被二打出一處、依二信長他界一、大坂在陣也、是に相伴衆丹場カ ◎羽五郎左衛門、何も自二大坂一攝州へ出、秀吉公と一手になる、織田七兵衛信長大坂爲二留守居一、自二信長一被二指置一處に、明知爲レ聟之間、於二大坂一三七主五郎左衛門有二談合一、押寄討レ之、自二此年中一秀吉公爲二天下主一、此秋柴田越前主、於二京都一佐々陸奥守主、越中秀吉公各有二談合一、可レ治二天下一之由にて、各歸二本國一、此多叡山かつ〳〵建立、正覺院僧正諸國勸進、

又去四月、自二甲州一瀧川左近河内城主、井北伊勢主也、關東へ被レ遣、小田原の儀は奉レ從二信長一と云へとも、關東の士瀧河へ思付は誅二殺小田原一、關東可二令レ取給一有二存念一、瀧河拜二領上野一、厩橋に在城す、然處に信長聞二他界之由一、小田原氏直率二多勢一彼衆を發向す、瀧河聞二此事一、武州之內てし河原を出向合戰、此時迄は西上野人數瀧川衆也、始は瀧川打勝て、本庄原まて追詰、數多討捕、後は瀧川負色になつて、厩橋を引退、蟇而厩橋を棄て、經二信濃路一尾州之歸二長島一、路次中無二異儀一、人數引連相通云々、

去五月、武田左衛門大夫甲州穴山こと也、家康公に相伴上洛之處、信長被レ薨時、於二大和國一一揆起て打果、息子勝千代武田信玄孫 織二其塵一、駿州江尻に在城す、是も一兩年中に令二病死一畢、さて穴山遺跡は絕果たり、惣別甲斐信濃諸士、去四月大概以滅亡也、此左衛門大夫を、此比は號二武田陸奥守一極二入道一、于レ時年四十二、

此八月、大洪水、駿州富士河かん原の町の東を流れけるか、俄に無レ水河原と成、吉原も此河付たり、平家物語にも、此富士河はかん原の町の東と在レ之、

天正十一癸未、去年より信雄信長爲二尾州主一、專秀吉公被レ馳二走之一、三七主信長息、信雄と同年、但別腹月弟也、岐阜に在、柴田馳走之、自二此比一天下の事、秀吉任二我意一、被二執行一間、三七主柴田一味、而秀吉公も可レ有二鉾楯一之由也、四月岐阜へ信雄秀吉押寄、三七主を被レ攻處に、北國衆柴田前田又左衛門後改羽柴筑前、丹場五郎左衛門出二江北一、自二秀吉樣一陣城一被レ置二人數一、志津か嶽を相攻、

因レ茲秀吉公旨二岐阜一彼表へ被レ向、此比瀧川左近尾州城主、井北伊勢主也、柴田と一味之間、岐阜三七主と瀧川左近を爲二相抑一、信雄主彼表に令レ居レ陣、

四月廿一日、於二江北一兩陣相向、柴田志津嶽を攻落し、所レ籠の人數打果、于レ時可レ企二合戰一之處、丹場五郎左衛門前田又左衛門屬二秀吉へ一、柴田備へ出レ手之間、則敗北、秀吉追レ之、越前へ打入、柴田居城へ押懸らる、敗北の士卒未城へ不二取入一の間、柴田城に懸レ火、同廿四日自害之間、越前則平均、柴田妻女不レ出レ城燒死給、是信長の妹、淺井備前守後室也、此腹に淺井息女二人有レ之、乳母才覺故、無二異儀一令レ出レ城給、大坂秀頼の御袋幷江戸將軍の御臺所是也、近年柴田家中に佐久間玄蕃伊賀但幼少名也、玄蕃は是柴田號、伊賀は柴田養子也、とて兩人あり、彼伊賀去正月、秀吉へ令二一味一、自二去年一江北長濱に柴田指置之處、於二彼地一如レ此一兩月之間令二病死一、養父恩重之處、令二謀反一之間、天の攻雖レ遁謂乎、玄蕃は專執二行武邊一、此度成二生廢一、自二秀吉渡二洛中一刎レ首、被レ掛二獄門一、三七主岐阜を有二退城一、尾州の野間にて腹を被レ切、

秀吉公瀧川左近居城河內被二相動一、瀧川上方牢籠、而秀吉公に從身上爲二不肖一、此年出二一身二頭子一、

四月、家康公甲州へ下給、暫甲府に令二逗留一給、去年令二謀反一信州之小笠原右近大夫貞吉、諏方の祝、眞田阿房守、保科彈正、其外何も令二出仕一、此時信州置目慥ならは、可レ爲二平均一物を、何の掟もなく、其儘被二指置一間、翌年秀吉公と鉾楯之時、小笠原右近眞田阿房守已下令二敵對一、

琉球國使入貢、

八月大水、近年無二比類一、

天正十二甲申、此比信雄爲二臣下一者も、賴二秀吉公を一奉レ輕二信雄を一之間、一兩輩令二成敗一給ふ、其中に岡田助三郎と云者、別而秀吉公機愛之人也、是尾州星崎城主也、如レ此之間、信雄秀吉內々不快由と云々、

三月尾州主信雄憑二家康公を一、秀吉公へ敵對給、則家康公尾州へ出馬、先北伊勢表へ信雄可二相動一之由にて、河內まて今は長島也、被レ移之處、犬山の城を令二調略一、森武藏取レ之移之由依レ有レ告、北伊勢への動を延引、

家康公淸須に令二在城一給、星崎の城には助三郎弟幷山口于レ今令レ居、彼地爲二肝要之巷一之間令二計略一、山

口を引付、自二信雄一知行を被レ遣る、城へ家康人數被二入置一、三月十七日、家康公羽黒表ゟ出馬、森武藏守羽黒古き屋敷に柵を付、三千餘令レ居レ陣を不レ知而、彼郷を以少人數可二燒拂一之由宣之間、奥平九八郎信昌一千計の以二人數一、爲二先登一押入處に、武藏屋敷表ゟ打出、折敷て相答、隔二小河一互に以二鐵炮一打レ之、奥平衆鐵炮の上手也、憑レ茲敵手負數多出來て、可レ漏樣依レ無レ之令二敗北一、犬山近邊まて追々打二之を一、此後相互動體を見に、武藏備不二堅固一、素武篇を嗜主也、是を無念に存、可二討死一之由思定歟、遺跡のこと◎脱カを書置をして硯箱に置けるを、四月九日、於二岩崎表一討死之時見レ之、誠に士の本意、哀なりし事共也、

同廿八日、秀吉公小牧表ゟ出張給、家康公對陣也、秀吉陣之面柵を付被二相備一、其勢十萬、家康信雄勢一萬六七千可レ有レ之歟の由云々、四月二日、池田庄入入道、同男庄九郎、森武藏爲二先勢一、三萬餘以二人數一、孫七郎秀次（秀吉公甥）岩崎より岡崎邊ゟ可レ動之旨令レ擬被二打出一家康公合戰可レ有レ之にて、六七八三日相續、小幡筋ゟ被二打出一と云へ共、敵不二相見一、九日に又被二打出一處に、敵先勢池田庄入攻崩岩崎の城を、軍兵數多討捕、池田聞二之を一出向之間、右之衆退散、家康公押出、直に合戰、庄入幷武藏守討死之間、士卒令二敗北一、二萬餘討取、秀吉公聞給則出馬、龍泉寺山に打上り給、于時家康公朝之合戰に、士卒相勞の間、先刻早小幡の城に令レ移給、其晩に及レ暮小牧山ゟ歸陣、但路次被二相廻一也、秀吉公は其夜龍泉寺に陣取、翌日本陣ゟ被レ歸、此度被二打負一合戰謂乎、此比さばせ甚五郎又可レ來歟の由家康公曰處に、如レ案此陣へ來、家康公ゟ出仕は有けれとも、無二擧容一間、又頓て逐電、高山ゟ揚二人數一令二用心一、恐怖給しと見たり、然處伊勢筋之手當に被二指置一美濃守（秀吉舍弟）幷筒井順慶、其外二萬餘、秀吉公の陣所につく、これによつて士卒快氣と見えたり、五月朔日、秀吉公小牧表の對陣を退給、先出備を漸々に陣拂をし給、其體神妙に見へたり、置目奇特云々、家康此體を見給、人數一騎も不レ被レ出、是も名譽の仕置也、秀吉公竹かはなを取詰、水攻にし給、同月下旬に落去、堤きれて水攻成就有レ之間敷處、堤不レ切以前に捲相濟の間、違背如何可レ有しとて令二出城一となり、秀吉公是に氣を直令二歸馬一給、家康公清須に令二在城一

給、小牧は酒井左衞門尉令二在城一、斯比信雄長島に在城、

六月蟹江城主心替而瀧河左近を引入る、暫時に家康公有二出馬一、被二取詰一、折節旱天の間、足立輙して如レ思被レ責レ之、瀧河令二降參一、出城之間、城主同退散也、秀吉自レ是被二疑心一、瀧河彌身上成二不肖一、其年の暮、瀧河親子共令二病死一、八月秀吉公尾州中通奈良表ゟ出張、取出を五三箇所有二普請一、家康公自二清須一出向、しげいしに令レ居レ陣給、信雄同レ之、聽て秀吉令二歸陣一し給間、家康も清須ゟ入馬給、此度秀吉公人數八萬六千之着到云々、又見及體も如レ此、信雄家康の衆總一萬之不足に見へたり、十月十六日家康遠州ゟ歸陣給、同月下旬に、秀吉公又北伊勢表ゟ出張、因レ茲家康公十一月又出馬之處、未尾州ゟ無二着馬一以前に、信雄秀吉令二一和一給間、家康公獨非レ可レ被レ及二干戈儀一條、同無レ事給、十一月十六日に歸馬也、斯時家康息を秀吉公可レ被二養子一にて聽而被二相上一、秀吉公令二悔悅一玉ふ、是を號二三川守秀康と一、在大坂也、於二河内國一知行一萬石拜領也、去十月佐々陸奥守（越中主、信長取立之人也、）信雄家康ゟ令二一味一、能登ゟ打入之由有レ告、然共絆已爲二以後一間無二其詮一、極月信雄濱松ゟ來臨有レ之て、當年家康公尾州に長陣を禮謝給、一兩日有二逗留一歸國也、

同十二月、佐々陸奥守濱松ゟ下、于レ時信雄吉良鷹野し玉ふ間、於二彼地一佐々有二對面一、さて聽而歸國、上下信州を通、

去二月、北條氏直下野國宇都宮ゟ相動、外廻輪幷町放火、及二歸陣期一佐竹（常陸國主）出張、宇都宮彌三郎、皆川山城守、みぶ、たがや、結城、是等は皆小田原へ敵對之間、每度與二佐竹一、下野國富田近所於二沼畠一、北條氏直と對陣、

同四月、當座無事の姿にて、双方歸陣、

天正十三乙酉正月

下野國佐野ゟ付城在番之小田原衆、馬足輕之動有レ之處に、城主打出る、小田原衆歸し合相戰、佐野城主を討捕、然共城は殘者共堅固に相抱、右之旨自二小田原一家康公へ令二注進一、彼首を二川ゟ持來、

此春より京都聚樂普請始、是後醍醐天王大内裡之蹟跡云々、然放歟古鐘其外家屋之具掘出しけると也、

四月、秀吉根比ゟ出張、彼寺則滅亡、是は去年秀吉公

小牧表へ在陣之時、屬二信雄家康一大坂表ゟ相動、所々令二放火一故に如レ斯、其比中村式部少大坂爲二留守居一被二指置一之間、出合戰、根比衆則敗北也、

七月十三日、秀吉關白成之御參內御悅、

親王　若宮　近衛大御所のこと　龍山　九條殿　一條殿　二條殿　是は近衛殿と座論にて則御立候

王　伏見殿宮　宮　宮　花山院　久我殿　大炊御門

秀吉公の事也　關白　菊亭殿　德大寺　西運寺

一初獻　のし　御盃　御かわらけ

二　かちくり　そき物　はむ　御ちん　御すい物たい

三　さしみ　とり　御すい物餝

四　ほまくり　けつり物　御さうに

五　むしむき　御そゑ物れうさし

六　ふひ　はい　うけいり

七　御本膳　たこ　からすみ　くしら

しほ引　やき鳥　さんせうはむ

あへませ　食　金銀箔あり　桶

かうの物　ふくめ

二　からすみ　金のさそく　にし　すし　あつめ汁

たこ　くらけ　鯛の汁

三　やき物金のきそく

かきはこ七つ　白鳥汁

まなかつほ

御菓子九色

うすかわ　からはな　やうひ　りんこ　まめあめ

こぶ　うちくり　もゝ　のり

以上つくりはな色々あり

七月、美濃守秀吉公舍弟四國ゟ相動、則四國平均す、

閏八月、秀吉公越中ゟ發向給、信雄從レ之出陣、以二彼捗無事一、佐々木越中國を大目上表して從二秀吉公一、

八月、信濃國眞田阿房守居城ゟ依二家康公仰一、甲信人數相動、寄手少々敗軍の體也、此眞田は去午年、家康公ゟ隨、自二去年一秀吉公ゟ奉レ從、于レ今家康公ゟ不レ從之間如レ斯、

同八月、大和國替國主筒井順慶、去六月死去、彼遺跡被レ移二伊賀一、則號二伊賀守一、大和の國者美濃守被二領納一、

十月、多武峯ゟ自二秀吉公一人數を被二指立一、則多武峰滅亡、

十一月十三日、石川伯耆守家康公臣下尾州ゟ退、是は秀吉公與二家康公一間柄爲レ使、然處家康公可レ有二上洛一之由秀吉宣、家康又無二左右一有二上洛一間敷由也、此上は定可レ被レ及二鉾楯一歟之由、依二衆知一如レ此、特に又爲二人質一二三男を秀吉公に指置之間、猶以右之通也、去秋越中ゟ發向時より越後景勝屬二秀吉公一、京都聚樂大名屋敷普請專也、此比叡山いよ〳〵建立、正覺院之僧正諸國を勸進、自レ此相續坊々追々立、然共去辛未年、此山滅亡の後、猿共一圓無レ之奇特と云々、

同十一月廿九日、子刻大地震、此時諸國山崩地裂、中にも北國如レ斯人馬多倒死す、尾州長島當時織田信雄居城百八里多以成レ川、城中家倒令二燒失一、關東は此地震無レ之、十二月信濃國深志小笠原右近大夫貞吉高遠ゟ動、高遠城主保科彈正也不レ及二一戰一之間、所々放火、此小笠原自二去年一家康公へ敵對、

延喜上人と云淨土知者有也、此僧先年大和國三輪の山に九年山居せられしに、其間山犬三疋來二草庵口一に、每夜居たりしと被レ語ける、又其後山城國高尾山に三年被レ籠し時、僧を可レ奉レ懸とて、每夜をとりをしける、定て狐のわさかと曰けるとなり、さて京都に居住有しに、餘人民物を持運ける間、已後は惡心も出來んするかと、此春頸をくゝり被レ死ける、有難かりし事共也、

天正十四丙戌正月廿七日、秀吉公家康公爲二入魂一、信雄岡崎まて來臨、家康自二濱松一出向對面給、双方快

然、而廿九日に尾州に歸給、三月九日、於二三島一
家康公與二氏政一對面、入魂の體也、十一日、又於二沼津一
對面也、五月秀吉公妹家康公に嫁、濱松に與を被レ入、
七月廿四日、親王崩御、此親王は正親町の一宮陽光院
の御事今上の父也、七月十日十一兩日、三州於二新城一
觀世大夫有レ能、亭主奥平九八郎信昌擊鼓快然す、自二
吉田一酒井左衛門尉父子來臨而鼓を擊、九十兩月、家
康公以二下知一、駿河甲斐三川吉田有二勸進能一、十月
家康公御上洛也、若上不レ給は、妹を返し給て、可レ被
レ及二干戈一之由一途に宣、殊秀吉公御袋の大政所を岡
崎迄可レ有二下向一之條、無二疑心一上洛し給有二對面一、彌
可レ有二入魂一之由也、因レ茲如レ此、家康公北の方自二濱
松一岡崎え有二御出一、御袋對面し悦給、秀吉公家康公之
上洛を快悦し給、刀脇指幷數寄道具（何も直千金の物也）被二進覽一
云々、家康驚而令二下向一給間、大政所も則上給、秀
吉家康入魂し給を、小田原の氏政父子心底不快と云
云、

十一月廿九日、今上即位、

天正十五丁亥二月、駿河府中石垣の有二普請一、自二去々
年一雖レ有二事始一、上方不快之間、指て事不レ行、今秀吉
公令二入魂一給、普請且々出來之間、自二濱松一北の方を
も引越給、

三日朔日、秀吉公九州御動座、筑紫不レ殘屬二當手一之
間、七月御歸洛也、

八月、家康公自二駿河一上洛給、九州平均を賀給、家康
公驚而令二下向一給、

閏十一月十三日、恭打の本因坊新城に下、亭主九八郎
信昌、此夏於二京都一爲二碁の弟子一の間如レ此、則令二
同心一駿河に被レ下、家康公圍碁を數寄給間、日夜有
レ碁、翌春令二歸京一、此春筑紫陣留守、秀吉公の甥孫
七郎秀次子（時中納言也）聚樂在城、而普請爲レ專、九州には佐
佐陸奥守を被二指置一處、一揆所々に起、陸奥守方々ゟ
相動無二比類一相靜る、其後召二上彼陸奥守を一被二生
害一、時の人是を令二不審一、是は先年秀吉公家康公鉾楯
の時、秀吉公ゟ敵對之間及二此儀一歟、

翌年有二圍碁勝負一、自餘の上手に先强く、本因坊を天
下一し給、

此五三ヶ年、三川遠江駿河有二拾二座云事一、諸商人之
儀は不レ及二言に一、少之貨物にも有レ役、中にも三川國
は淺井六之助と云者爲二奉行一、取分緊く行之間、庶民

爲レ之惱亂無二止時一、又誰人之雖二知行一、百姓を彼六之
助遣二之を一、然間爲レ逃二當座之難一、自二在々民屋一相應
したる土產捧レ之事無レ隙、

各の會曰、三月朔日、秀吉公九州御進發之砌、諸士出
陣日限人數積之事、

正月廿五日

二月一日

同日南條勘兵衛尉伯耆衆

同日木下平大夫

二月五日

本役八百 明石左近 播磨衆

本役四百 別所主水正

本役三千 中川右衛門大夫 藤兵衛事

本役三千 羽柴丹後侍從 長岡越中事

二月十日

本役五百 羽柴伊賀侍從 簡井四郎事

二月十五日

本役千五百 羽柴若狹侍從 五郎左子

二月廿日

三分一役千七百 羽柴東鄉侍從

三分一役千 木村常陸介隼人

三分一役千 村上次郎右衛門

三分一役百卅 山田喜左衛門

二月廿五日

三分一役千三百 織田三郎 上野殿子息

三分一役百五十 岡本下野守 太郎右衛門尉事

半役千 林長兵衛に人數付候て 森右近 武藏弟

三月一日

御馬廻衆

千尾州大納言殿衆

二百水野宗兵衛尉

四分一役五百 羽柴陸奥侍從 佐々藏介

前備

五百羽柴河內侍從 毛利

百五十 市橋下總守

本役一萬五千五百 羽柴中納言 美濃守殿の事 秀吉公御弟

本役一萬五千 羽柴備前少將 宇喜田八郎事

四千宮部中務法印 ぜじや坊事

同日龜井武藏守本役

同日垣屋平右衛門尉

二千前野但馬守

本役八百 赤松左兵衛

本役二百 福島左衛門大夫

本役三百 高山大藏少輔 右近事

三千羽柴越中侍從 前田又左

三分一役三千 羽柴北庄侍從 堀久太

三分一役三百 青山助兵衛尉

三分一役七百 溝口近右衛門

三分一役百 太田小源五

三分一役千七百 羽柴松島侍從 蒲生忠三舟にて人數あり次第

九鬼大隅守

同千羽柴岐阜侍從 池田三左衛門

三分一役五百 羽柴曾禰侍從 稻葉關白殿

御小性衆

三分一役五百 羽柴敦賀侍從 蜂屋殿

五百石川出雲守

四百羽柴左衛門侍從

二百五十 蜂屋大膳大夫子

百五十 生駒主殿佐

本役千五百 羽柴丹波少輔 秀吉公御甥 小吉殿事

半役八百 生駒雅樂頭 甚助事

百五十 有馬刑部卿法印
二百 稻葉兵庫頭
五百 津田隼人正 四郎左
五百 牧村兵部大夫 長兵衛
九十 池田久左衛門
百 稻葉右近
脇備
千 木下式部大夫
百六十 戸田民部少輔 三郎四郎
七十五人 長谷川勘兵衛尉
後備
百五十 早河主馬尉
二百 寺西次郎助
片桐市正
四百 池田備中守 三左衛門三郎
百七十 加藤主計頭
百 間島彦太郎

百 矢部善七郎
百 三田左太郎
三百五十 瀧川儀大夫
百廿 勢田掃部頭
百廿 古田織部頭
百廿 柘植左京亮與八
千二百 淺野彈正少輔
百六十 山崎志摩守
七百五十 戸田半右衛門

五百 富田左近將監
百廿 津田大炊頭
百五十 大鹽與一郎
百五十 加須屋内膳
百廿 河尻肥前守與兵衛尉子
百五十 吉田兵部少輔
百 丸毛三郎兵衛尉

百五十 佐藤才二郎
百五十 青木所右衛門
都合八萬六千七百五十

天正十六戊子正月
春大佛普請始、
卯月十四日、於二京都一聚樂ヲ行幸之次第、
主上爲二御迎一關白秀吉公乘車參內し給、
一番內裏御女房衆與十七挺、二番塗輿、三伏見院馬、二條殿同馬、應司殿同馬、其外公家衆各馬、唐橋殿馬、くわんむ矢を負弓を持馬、公家衆各馬、五つゝ殿馬、公家衆馬、柳葉(カ)殿馬、公家衆卅六人馬、中山殿馬、くわんむ矢を負弓を持馬、公家衆各馬、れい人四十餘人、鳥かふと裝束、笙の笛九、篳篥六、太鼓二、かく一、かね二、きんの棒四本、鞍かけ二、主上寶祚御輿の上に鳳凰あり、四方紫の綾にてまくのことく張、銀の棒三本、近衛殿馬、白張着廿人、くわんむ四人、布衣四人、たいふ尾所信雄こと馬、諸大夫十人、くわんむ四人、布衣四人、白張着廿人、鳥帽子すわう着卅人、からす丸殿馬、までの小路殿馬、

百七十 生駒仙
百五十 吉良山佐渡守

ひの殿馬、駿河大納言殿家康公のこと馬、諸大夫十二人、
くわんむ四人、布衣四人、しらはり着十二人、
烏帽子すわう着廿人、大和大納言殿秀吉公舍弟美濃守の事、馬、
諸大夫十六人、くわんむ四人、布衣四人、白張着十二人、烏帽子すわう着廿人、公家衆各、淨妙院殿馬、各公家衆、こわた殿馬、各公家衆、
法淨寺殿馬、中納言秀次のこと秀吉公甥、馬、諸大夫十二人、
くわんむ六人、布衣四人、白張着十六人、烏帽子すわう着十二人、公家衆各馬、牛二疋御車引替、牛飼一人、こしきぬに桐のとうのもんあり、
くつ紅絲いれふね一、關白秀吉公車、牛角耳別につくり付色金也、しりかい紅絲を以組之、諸大夫百廿人、くわんむ六十人、布衣卅六人、白張着五十人、烏帽子すわう着百人、長谷河藤五郎馬、
羽柴筑前守能登加賀越中主馬、諸大夫、くわんむ、布衣、白張着、烏帽子すわう着何も有之、織田上野守信長舍弟馬、丹波少將馬、岐阜主城介殿一男馬、長岡越中守馬、豐後大友馬、武衛馬、ひの蒲生飛驒守こと馬、三吉馬、毛利河內守馬、たゝのしほかう馬、
池田三左衛門庄入二男馬、金吾主政所甥、秀吉養子、馬、長曾我部土佐主馬、大和大納言養子馬、右公家諸士、各唐織を着、太刀を帶、同沓を着、十五日、京都の地子內裏ゟ向後可レ被レ納之由、秀吉公奏給、御感不レ斜、此近代武家納之、至二于自今以後一、此時衆中雖レ知二天下一、於二此地子一者、不レ可レ有二改變一由各獻二起請文一、是秀吉公依レ仰也、
十六十七御逗留中、進物不レ可二勝計一、初十五日に有二九獻御祝一、一獻々々に進物有焉、十八日還御、
五月、雷聚樂ゟ落、二人悶絕、
自二此春一京都に大佛始、
此年於二聚樂一關白秀吉公金賦りあり、內裡ゟ金千枚、其外銀進上也、諸大名ゟ金五百枚、三百枚、二百枚、其上銀を相添被レ遣、前代未聞之儀也、夥共無二云量一、其體城の門外於二廣地一、秀吉公束帶し給、將器に腰をかけ令レ居給、各も裝束し、謹拜二領之一、大名小名不レ殘如レ此也、非二楊震賢一、各拂躍不レ斜、
天正十七己丑正月、
四月、於レ淀秀吉公若君誕生、是號二八幡太郎一、大名小名は金銀、京堺ゟを始、所々の町人進物不レ可二勝計一、是進物大概以紅の褶也、頭のはやり物也、此年、三遠駿信甲、自二家康公一有二繩打一、去年諸給人之知行

成物の内、五十分一を被二召上一、五千俵の成物にて、百俵也、其成物高を以て、被レ充二行本主一、其上の出目之儀は被二召上一、伊奈備前專執二行之一、四月大政所赤痢を御煩、大閤秀吉公大祉何も有二立願一、米穀有二寄進一、中にも伊勢春日へは八木一萬石充也、其故にや雖二大病一本復也、

六月、大藏道知入道駿河ゟ下、是鼓打至二于當世一無双之上手也、

七月、家康公能し玉ふ、道知鼓を打、奥平美作信昌去亥夏より於二奈良一傳二此道一、伊井兵部少直政同秋習レ此之間、今於二駿府一猶以相傳す、

此年、延暦寺再興也、但諸國勸進、此事雖レ被レ得二秀吉公命一、古信長の御時、至二自今以後一、誰々雖レ知二天下一、不レ可レ有二叡山再興一之旨、被レ書二起請文一、依レ之急度秀吉公不レ及二助成一、以二法力一建立尤之由有レ仰、

八月、京都東山大佛之柱を、自二富士山一可レ出由、自二秀吉公一依レ仰、家康公之衆各引レ之、

天正十八庚寅正月、

家康公妻室（秀吉公妹、）於二京都一病死給、小田原爲二出勢一比之間、令二隱密一露顯し不レ給、此春、信州淺間山燒上、焔東の方ゟころふと云々、

此二三箇年中、有二氏直上洛一可レ入魂給一之由、秀吉公雖レ有レ命、氏政不レ及二承引一、（氏直爲二家康公聟一）

三月朔日、關白秀吉公關東ゟ御動座、先孫七郎秀次先二秀吉公一、駿豆境惣か原に着給、秀吉公彼地ゟ令二着馬一給、（此時つくり髭をし、大なるのし付を指玉ふ、）三日の内に令二出馬一、山中の城を卒爾に攻崩、則小田原ゟ押寄給、其勢卅萬と云云、城惣廻及二二里一、手攻口に堀々を被レ付、敵城にも人數三萬餘、雜兵共六萬と云々、然共敵衆て自レ城不レ出、先秀吉公湯本の寺に令レ居給、

自二五月一城の向の高山に石垣を築、被レ立二家門一、敵城を直下給、敵是に氣を屈、又豆州韮山ゟ分二人數一被レ攻レ之、城主北條美濃守（氏政弟）と云者也、此時搦手は羽柴筑前守（北國主前田又左衛門事）搦手の爲二大將一、其勢三萬餘、歷二木曾路一上野松依田城を取捲攻レ之、四月下旬落去、城主小田原譜代の臣下大道寺令二悃望一、從二筑州一爲二案内者一八形ゟ押寄、彼城主阿房守（氏政弟美濃守と同年、但一腹也、正月と十二月とに生、珍事云々、此阿房守は兄弟中にて、年來專爲二武將一、人數被レ付、知行已下任二存分一之處、今不レ及二五日滯留一に、如レ此事、不レ及二是非一次第也と云々、）則令二懇望一、從二筑州一、依レ此筑州武藏國ゟ進陣、此時秀吉公自二陣中一、淺野彈正大村常陸守被レ遣、家康公より本多中務平岩主計被二相副一、各筑州成二一手一、關東中之

城を攻落、素關東士卒悉小田原城に相籠之間、右の城城無人たる故、其程落去す、敵の輩妻子以下悉奪捕の間、小田原に所籠の士卒迷惑す、小田原籠城中松田尾張守（是は氏直代々臣下家老なり、）秀吉公ゟ令二忠信一、人數を城中ゟ引入、氏政父子を可レ令二生害一と也、松田一男は父在二一所一に、二男左馬介は氏直爲二近臣一之間、此旨を召寄相談處に、左馬助氏政氏直ゟ直令二言上一、但爲二此勤功一父之命を可二助給一之由申條、則松田を被二押籠一、

七月中旬、氏直背二父命一、寄手陣中ゟ走入、被二悃望一間、被レ助二身命一、此模樣專岩付十郎以二覺悟一也、（是氏政二男也、）氏政同弟陸奥守於二城中一腹を切、（委序に書載たり、）自二秀吉公一松田を早速に被二斬罪一、是は爲二譜代臣下一、主人ゟ令二謀反一、剩不レ遂二本意一之間、無二云甲斐一との貴命歟、左馬助は氏直高野山へ令レ伴居す、氏直病死之後、北國の主前田肥前守被二相拘一云々、又松田末子十三の僮、同令二生害一給、是多能にして殊美麗、人衆莫レ不レ惜レ之、見聞之衆拭二悲涙一、又松依田城主大道寺をも令二誅戮一給、是も人臣として令二悃望一こと、爲二比興一之由思給故か、韮山城主美濃守（氏政弟、）小田原如レ此成行間、城を渡家康陣中ゟ馳來、兄の生害之時介酌す、是は去

去年爲二氏直名代一令二上洛一之間、秀吉公有二憐愍之意一、大坂ゟ被レ爲レ上、於二河内國一知行一萬石被二充行一、（但下野は半國也、是近年小田原領分の國々也、）同月、秀吉公自二小田原一直に奥州會津迄令二出馬一給、依レ之奥州平均す、會津には蒲生飛驒守被二指置一、知行九十萬石拜領、政宗は岩手山に在城して、六十二萬石拜領、此月中、秀吉公御歸落、此冬奥州一揆少々雖二蜂起一、飛州隨分被二相靜一、又此年中、秀吉公ゟ爲二音信一高麗人渡る、此度關東城共、從家康公一被二指置一衆惟多之間、不レ能二書載一、結城には三川守秀康（家康公二男）在

城、知行十萬石後越前守忠也、忍には福松丸家康公四男 在城、知行十萬石後號二下野守一尾州清須に在城、

此比關東中知行取先私に竿をあて、員數を可二言上一之由也、翌春立二檢使一、或は四割、或は五割六割を懸て高の內に封す、假令十萬石之高にて、十五萬十六萬石に成也、小給之知行は、家康公より被レ當二竿を一之間無二別事一、

天正十九辛卯正月廿一日、大和大納言秀吉弟、美濃守秀、死去、

此春中、淺間山夥く燒上、 此春夏、奥州九のへい一揆蜂起、

七月、中納言秀次奥州有二出勢一、家康同先二之に一出陣給、九のへいの城主腐て召連、於二一の關一伐レ之、則靜謐して、十一月秀次令レ上給、

同七月、秀吉若君八幡太郎殿逝去、年三歲、 秀吉公愁嘆し給事不レ斜、依レ之秀次も聚樂幷關白之官を相渡し給ふべきの由也、果而如レ此、自レ是秀吉公を大閤と申也、

十二月、秀吉公三川國爲二鷹野一下向給、至二于禽獸一三萬之物數持せ御歸洛也、京堺井大坂町人、素公家武家從二其人々一普被二配當一、大和大納言死去已後、多武嶺且々寺僧還住、但寺領は前々の十物一也、是は此度大納言逝去の事、蒙二大織冠之爵一之由、時之人云レ之間如レ此と云々、

此夏、三川吉田の城門の邊に新き首を落す、其日同時に同國武節と云所にて人の首をねち切けると云々、

去六月、大雹降、

文祿元十一月改元 壬辰 三月廿八日、大閤秀吉九州に御進發、名護屋に構二陣城一令レ居給、高麗に人數を被二指立一、彼國過半摧碎、高麗人花之都を棄て退散す、日本人移レ之、名護屋には家康 公羽柴 筑前相殘、諸大名高麗に渡海す、中納言秀次聚樂に在城、 同冬、唐人以二多勢一高麗に出之間、日本人花之都を退散して、釜山海に退、高麗人は半弓幷鐵砲之樣なるを持、刀は齒ひきの樣なり、後には日本人道具を學て捨ける、 肥後國一揆、少々雖二蜂起一則平均、

於二名護屋陣中一、專能繁多、是四座之猿樂被二召下一如レ此、 自二此年一猿樂何も相分、大名衆に被レ預、被レ加二扶持一、

自二高麗一歸朝之衆云、山に似レ猿物有レ之き、其色赤事甚、但常に無レ之、自然見レ之たり、百姓等に問二事由一、

猩々之由答レ之、

武州江戶普請專也、家公康雖レ爲二留守一、息男中納言秀忠公在城也、

此年より三井寺鐘不レ鳴、

文祿二癸巳正月五日、太上皇崩、 去年冬、少々九州迄歸朝する間、此春重高麗に遣二人數一、赤國を被二責傾一、去年八月、御袋依二薨給一、秀吉公自二名護屋一上給ひ、非禮之儀式夥事也、 秀吉公聽而又名小屋に下向給、此秋迄在陣御、八月自二築紫一御歸落、各同歸國、但高麗には人數多被二指置一、 同年中、武州江戶普請專也、 此年中、關東旱損、大鷹於二江戶一多死、先年亞之春如レ此、 自二去年比一、奈良町人金借と云事をし出し、指せる無二證據一只切手にて黃金を借引す、然間貧者利分に迷惑して相倒間、入二德政一可レ給之由訴レ之、然者爲二禮儀一金子貳千枚可二進上一となり、秀吉公聞レ之給、知行も不レ持者、日本國之寶を何とて猥に執行哉、甚曲事之由宣、則被レ入二德政一、其後又金を借損失したる事不便之間、可二書上一之由依レ仰、十枚賣したる者は廿枚と書付、廿枚損したる者は卅枚四十枚と書上處、又此三箇一秀吉公可レ奉レ借之由宣被二召上一、

奈良上下迷惑相窮也、此金借大名衆も入けるか、秀吉公に奉レ隱二其名一云々、

八月三日巳時、大閤秀吉公若君誕生、後號二秀賴一、大坂に在城也、 此比、於二京都聚樂一關白秀次、謠不審耳多レ之とて、五山の知者幷足利學校に曰被付二抄を一、是末代の重寶也、但二人靜にさこくは花、朝顏にいうしはくやう、富士太皷にしうこうか手を出、是等は不レ知之由にて無レ註、

九月、大藏道知入道江戶より下、自二上州一小幡來儀、暫逗留、亭主奥平美作守信昌彌傳二奥儀一、是皷の上手猿樂道名人也、歲七十七、但尋常の六十歲程の體也、

來年者伏見山有二普請一、秀吉公彼地に可レ有二居所一之由曰間、此比より各大名內々屋敷有二普請一、

此比、諸國博士可レ有二成敗一之由曰間、山林より隱遁、其子細は先年大閤召遣給青女、闕落して不二相見一ことあり、此度見物の事有ける處に、見出之二搦捕一、日來有樣を被二相尋一に、博士隱置之由令二言上一之間如レ此、

去正月、正親町院崩御、時諒闇中、關白秀次鹿狩をし王ふに付有二落書一、院の御所菩提の爲の狩なれは、是そ攝政關白の家、此落書の主を堅改られける、其後露

顯しけれ共、公家の業なれは何の沙汰に及はす、文祿三甲午、自レ春伏見普請として、日本國之衆上洛、但奥州衆依レ爲二遠國一被レ除二普請一、

自二此春中一五月五日迄、關東は旱天、翌日六日より雨降、七月廿六日之夜、俄に大風、諸國損亡不レ可二勝計一、

秀吉公八月之比、聚樂秀次ゟ可レ有二御成一之由にて、度々延引、十月廿日比に御成也、十月自二中旬一普請衆あかる、去八月之風雨に木曾之梯落る、此比、東山之大佛漸出來之間、足代をも取、佛體をも塗、築山をも引、同冬中、越後景勝會津蒲生飛驒常陸佐竹何も御成也、

此春、るすんへ渡商人壺多持來、直輙之間上下取レ之、然處に此冬大閤秀吉聞レ之御、日本國之爲二寶物一を爭與二下直一哉と有レ仰、悉く被二召上一、翌年右之價一倍金子被レ納、壺は本主ゟ被二返置一、

此春、或女面二つの生二男子一、洛中を渡、京同邊土の町人見レ之、

此春、吉野ゟ爲二花見一出御、則有レ能、高野山へも佛詣し給、同有レ能、衆徒悉被レ充二八木壹石一、昔年白河院高野山行幸之時如レ此と云々、

此春、大閤秀吉公於二内裏一能し玉ふ、内府家康公加賀大納言も能し玉ふ、自レ春禁中ゟ御引出物、鵞眼三百貫文被レ出、此大閤如レ此左レ禮ことを時々すき給如レ斯、大閤幷家康公加賀大納言も狂言をもし玉ふ、

此春、奈良近所に不思議神子出來、年十七計也、或時伊勢御祓笠の上ゟ落かゝると覺てより、狂氣して垢離を日中に百桶計つゝかゝりける、さて井垣をゆいしめをはり、其身は高き所に居たり、さて詣くる者の出來、病立處に平愈し、痛所なとは、神子の手を以さすりけれは、そのまゝなをりける、貴賤群集不レ斜、問者の心に思事を、則先立てありのまゝ彼神子申に少も不レ違と也、其比檜姫しけるか、其年冬果て誕生しけるに狐なりける間、是を見て彼神子則死ける、

去五月、薩州の主毛利輝元依二興行一、紹巴昌叱兩吟に有二千句一、是は此春、於二安藝國一被レ行二萬句一、爲二其供養と一也、則兩人註をせらる、五日中に成就と也、

此比諸國知行之高帳之事

貳十貳萬五千貳百六拾六石	八郡	山城國
卅五萬六千六十九石壹斗	十三郡	攝津國
廿四萬貳千百五斛貳斗	十五郡	河内國
十四萬千五百七拾壹斛七斗	三郡	和泉國
四十四萬八千九百四十五石五斗	十五郡	大和國
十四萬三千五百五十石	七郡	紀伊國
十萬斛	四郡	伊賀國
七十七萬五千三百七十九石	十二郡	近江國
貳十六萬三千八百八十七石	六郡	丹波國
卅五萬八千五百卅四斛	十六郡	播磨國
六萬貳千百四石	二郡	淡路國
廿萬三千三百八十八石	八郡	備前國
一萬八千三百七十四石		同兒島
十八萬六千拾七斛七斗	七郡	美作國
十七萬六千九百二十九石	六郡	備中國
十一萬四千二百卅五斛	八郡	但馬國
八萬八千五百石	七郡	因幡國
十萬九百四十七石	六郡	伯耆國
十九萬四千百五十石	八郡	安藝國
十八萬六千百五十斛	十四郡	備後國
十八萬六千六百五十石	十郡	出雲國
十一萬千七百七十斛	六郡	石見國
十六萬七千八百二十石	六郡	周防國
十三萬六百六十斛	八郡	長門國
四千九百八十石	四郡	隱岐國
十四萬斛	八郡	豐前國
四十一萬八千三百十三石	八郡	豐後國
卅二萬五千六百九十五石	十郡	筑前國
貳十六萬五千九百九十八石	十郡	筑後國
卅萬九千九百卅五斛	十一郡	肥前國
卅四萬千二百二十石	十四郡	肥後國
二十八萬三千四百八十八石七斗四升	十四郡	薩摩國
十七萬五千五十七石二斗三升	八郡	大隅國
十二萬百八十七石四斗四升	五郡	日向國
十一萬七百八十四斛	六郡	丹後國
八萬五千斛	三郡	若狹國

四十九萬千四百十一石　十二郡 越前國
卅五萬五千五百七十石　四郡 加賀國
廿一萬斛　四郡 能登國
卅八萬二百九十八石二斗八升　四郡 越中國
卅九萬七百七十斛　七郡 越後國
一萬七千卅石　三郡 佐渡國
卅壹萬八千九十五斛　十二郡 出羽國
百六十七萬二千四百六石　五郡 陸奥國
四十萬八千三百五十八石　十郡 信濃國
二十二萬七千六百十六石　四郡 甲斐國
五十四萬斛　十八郡 美濃國
五十七萬千七百卅七石四斗　八郡 尾張國
二十九萬七百五十斛　八郡 三河國
二十五萬五千百六十石　十四郡 遠江國
十五萬石　七郡 駿河國
六萬千八百卅二石　三郡 伊豆國
十九萬四千二百四石　八郡 相摸國

六十六萬七千百廿六石　廿一郡 武藏國
四十九萬六千三百七十七石　十三郡 上野國
卅七萬四千八十二石八斗　九郡 下野國
卅九萬三千二百五十五斛　十一郡 下總國
卅七萬八千八百九十二石　十一郡 上總國
五十三萬石　十一郡 常陸國
四萬五千四十五石　四郡 安房國
五十六萬七千百五石一斗四升　十三郡 伊勢國
一萬七千八百五十三石九斗一升　二郡 志摩國
十八萬三千五百斛　九郡 阿波國
十二萬六千二百石　十二郡 讃岐國
卅三萬六千二百石　十四郡 伊豫國
九萬八千二石　七郡 土佐國
三萬八千石　三郡 飛驒國

都合千八百卅五萬三千九百四十二石　是近年竿、當給帳也
但壹岐對馬は爲二此外一也
惟時伏見普請役之帳

貳百四十萬貳千石　家康公のこと
十萬千石　江戸内府
五十三萬斛　三川守　結城宰相
五萬石　佐竹こと　常陸侍從
六萬二千石　羽三郎こと　宇都宮侍從
三萬九千石　那須乘寄合
四萬石　宮田左近子　佐野修理
九十一萬九千石　里見こと　安房侍從
六十一萬四千石　蒲生飛騨こと　會津侍從
十三萬石　伊達政宗こと　大崎少將
五十五萬千斛　最上こと　出羽侍從
貳十三萬五千石　本は前田又左衛門尉を、今は號二羽柴筑前守一　越後中納言
卅二萬石　前田肥前こと、但羽筑息、　加賀大納言
二十一萬石　羽筑二男孫四郎こと　越中宰相
四萬三千石　能登侍從
十六萬斛　松任宰相
六萬六千石　北庄侍從
村上周防

四萬四千石　濃口伯耆
十萬斛　東江侍從
二萬石　青山修理
八萬斛　青木紀伊守
五萬石　大谷刑部少輔
十三萬三千石　岐阜中納言
一萬三千石　兩遠藤
七萬斛　金山侍從
四萬石　郡山侍從
三萬斛　伊藤長門守
三萬三千石　金森法印
四萬斛　加藤作十郎
廿萬石　羽柴左衛門大夫
壹萬石　福島掃部
三萬石　德長法印
二萬斛　木下美作
三萬石　原隱岐
十萬石　田中兵部少輔
二萬斛　水野和泉
三萬五千石　一柳監物

壹萬六千石　日根基法印
貳萬石　西尾豐後
拾五萬二千石　吉田侍從
五萬千斛　山內對馬
十一萬二千石　堀尾帶刀
壹萬貳千石　松下右兵衛
三萬五千斛　有馬玄蕃
十四萬五千石　中村式部少輔
廿一萬七千石　淺野彈正
同左京大夫
八萬斛　伊那侍從
五萬七千石　仙石越前
二萬八千石　日根野織部
五萬八千石　石川玄蕃
三萬八千石　眞田安房
二萬七千石　羽柴下總
貳萬二千斛　岡本下野
二萬二千石　氏家內膳
三萬四千石　古田兵部少
二萬五千石　稻葉藏人

三萬五千石　九鬼大隅
五萬石　富田左近
同信濃守
十九萬四千石　石田治部少輔
六萬石　大津宰相
五萬石　長束大藏
五萬石　德善院
八萬千斛　宮部法印
二十萬石　增田右衛門
一萬二千斛　新庄駿河
一萬二千石　同越前
五萬石　羽柴伊賀侍從
二萬石　同美作
四萬五千石　大野宰相
同常心
四十七萬四千石　備前中納言
百十二萬五千石　安藝中納言
六萬千石　生駒雅樂
六萬千石　同讃岐
十七萬三千石　蜂須賀阿波

九萬八千石　土佐侍從
七萬石　池田伊豫
七萬石　藤堂佐渡
六萬二千石　加藤左馬
一萬四千石　村上出雲
三萬石　脇坂中書
二萬石　木下右衛門大夫
五萬三千石　小出大和
貳萬二千石　齋村左兵衛
五萬石　宮部兵部
貳萬石　木下備中
壹萬斛　龜井武藏
一萬石　增屋隱岐
十一萬石　羽柴丹後宰相
六萬二千石　羽柴若狹少將
二萬石　木下宮內
一萬四千石　木村伊勢
三萬石　戶源◎澤カ九郎
三萬石　小野寺孫十郎
三萬石　津輕右京

十萬石　南部大膳大夫
五萬石　秋田藤太郎
一萬七千石　早川主馬
一萬五千石　大田飛驒
壹萬三千石　竹中源介
六萬六千石　中河修理
一萬貳千石　稻葉兵庫
一萬三千石　津田長門
壹萬三千石　奧山雅樂
六萬六千石　山岐左馬
貳萬石　池田備中
一萬石　市橋下總
一萬千石　戶田武藏
壹萬石　谷出羽
一萬六千斛　赤松上總介
一萬石　土方勘兵衛
貳萬二千石　大◎小カ野木縫介
三萬千石　福原右馬介
二萬石　長谷川右兵衛
一萬石　山崎右京
一萬石

一萬石	蒔田權佐
一萬石	中江式部大夫
一萬石	別所豐後
一萬三千石	山口右京介
一萬二千石	石川備後
一萬石	松浦伊豫
一萬二千石	加須屋內膳
一萬二千石	片桐市正
一萬五千石	氏家志摩
一萬石	寺西備中
一萬石	同次郎介
一萬石	池田センノ
一萬六千石	織田三十郎
一萬三千石	桑山修理
貳萬七千石	宇田下野
二萬石	堀田(内カ)安房
一萬五千石	多賀出雲
一萬九千石	本田因幡
一萬二千石	杉若越後
	小川土佐

一萬石	峯田伯耆
一萬石	大野修理
一萬七千石	横口民部
壹萬五千石	石川肥後
三萬石	小出播磨
三萬斛	木下肥後
一萬六千石	桑山法印
壹萬石	有馬法印
一萬五千石	石田木工頭

都合千三百貳十九萬三千石、此外內裏御領幷公家門跡寺社、又無役等有レ之、

當代記卷三

文祿四乙未 秀吉公家康公へ御成事、秀次滅亡事、

慶長元丙申 大地震事、三井寺違二太閤命一事、

二丁酉 信州淺間山燒事、善光寺如來東山大佛へ入院の事、

三戊戌 太閤薨給事、善光寺如來信州へ歸玉ふ事、

高麗陣の衆歸朝事、三井寺衆徒還住の事、

四己亥 淺間山燒事、諸國飢饉の事、古太閤を奉レ崇レ神事、

五庚子 關原合戰の事、

六辛丑 あとりの事、高野衆徒與二行人一相論事、

七壬寅 佐竹滅亡之事、

八癸卯 家康公被レ任二征夷將軍一事、

九甲辰 京町人豐國を風流之事、十二月諸國浦々變易事、

十乙巳 江戶秀忠公上洛し給、被レ任二征夷將軍一事、

十一丙午 諸國町々失火の事、江戶石垣普請の事、京伏見光物の事、

文祿四乙未正月

三月廿八日、太閤秀吉公家康公を於二聚樂一御成、自二家康公一進上物銀三千枚、小袖百、此內唐織色色あり、綿千把、八丈島五百端、紺三百端、太刀長光、御腰物光忠、御脇指行光、御馬一疋、黑毛駁を置、家康公御息中納言秀忠進上物銀五百枚、小袖五十、越後布百端、御太刀一腰、御馬一疋鹿毛家康公御袋進上物小袖十、黃金十枚、同御息三河守より小袖卅、其外十萬貫以上の衆小袖廿、三萬貫二萬貫とをり衆小袖五つゝ、五千貫二千貫とをり迄小袖、或は三或は二進上也、即還御也、

四月廿三日寅日未の刻、西上野氷降、間に大なる天目程なる氷あり、麥麻一圓に損亡也、武州東上野も少少損亡、其夜龍の毛とを馬の毛之樣なる物、雨に交り降、同五月廿四日申日、又氷ふる、

關白秀次太閤を頃日御謀反の企露之由あつて、七月八日關白秀次聚樂退出、即出二家於高野山一、同十五日腹を切御、秀次若君二人、一二歲の孩兒、幷近習女房卅餘輩、渡二洛中一切捨らる、誠は秀次逆心之儀虛言と云へ共、行跡不二穩便一故、治部少依二讒言一如レ此、聚樂城幷諸侍之家門伏見を被二引移一、去五月、於二京都一江戶中納言秀忠屋敷を當二所を落、家人何も無二異儀一、其時尅京中六所へ落、

此比京都傾城共被二召上一、五人太閤被二召遣一、江戶內府公加賀大納言をも二人宛被二召遣一候へとて被レ遣、其外の人にも被レ下ける衆多し、右之傾城共の中に、歌舞躍を令二難澁一美女一人有レ之、其子細を被二相尋一に、不レ賤之親類多之、外分を思之由言上、依レ之彼兄弟に問給へは、此已前兩度相請召直す所に、兩度なから又

傾城屋へ走入之間、不レ及二是非一之由言上、然は則は
り付に被レ掛、
自二去年一關白秀次依レ仰、誅百二十番沙出來、是五山
文字智者被レ致レ之、
慶長元丙申、伏見御普請として、二月諸國衆上、河
內國堤關東衆築レ之、
同年春、太閤以の外御惱、三月俄御平愈、諸人成二安堵一
思、惣別未年より常御惱氣、自二三月一御息災奇特々々、
同春中雨細々降、五月中旬より六月廿六日迄露にい
る、此春雪節々降、四月四日にも雪降、五月九日尾濃洪
水、六月十九廿三日、信甲關東洪水、百年以來の大水
と云々、知行損亡不レ知レ數、武州之內葛井淺草にて、
人三四百人溺死、其外牛馬數を不レ知死、此時節も上
方は指せる事なし、六月廿七日より七月七日迄旱、翌
八日より又雨降、六月十四五日比彗星出、七月廿八日
より閏七月二日まで旱、翌三日より同九日まで降、同
九日に方今俄水、山崩人死、此水は所による、閏七
月十二日の夜子の剋に、上方大地震、京中は三條よ
り下伏見迄家損人死、上京は不レ苦、伏見御城中にて、
女鵜七十三人、中居下女迄五百人死、一の門三門の番

衆、門崩悉死、折節太閤中のまるに御座、御身無レ恙、
諸大名の家々倒る、人死事無レ限、大坂々井も同前、伏
見城殿主石かけは一も不レ殘崩る、大佛堂は不レ苦、佛
は損也、愛宕山坊中も倒、所々よりあかる眞壺過半
損、此六七月閏にても、上方は雨降、五穀豐なり、此地
震關東駿遠何も東は不レ動、此春家康公を被レ任二內
大臣一、自レ是內府公と申也、
前の七月の如二淺間燒上一、西の方へ焰ころふ、此故か
近江京伏見其比灰細々降、其故にや秋毛少々凶と云
云、信濃なとは此灰一寸計たまる、關東は不レ降、但是
も同秋凶云々、
去夏爲二音信一唐使渡海、則可レ有二對面一處、武者揃し
て可レ被二見せ一之旨にて、自二諸國一士卒被二召上一之
處、右之地震にて諸道具擊摧之間、被レ止二此儀一、此費
不レ可二勝計一、然は九月旦日、彼唐使に於二大坂一御對
面、唐使進上物段錦千卷、白絲五千、自二太閤一被レ下物かな
かいの物彼國に有レ好由如レ此、同三日に歸唐す、
木幡山を本丸に可レ被二取立一にて、七月十五日有二事
始一、十月十日本丸之分普請出來、
此比江戶に住の米津清右衞門家康公近習人妻女夢想に云、さ

かなる都の花は散はて、東の主か世をは次へし、
(此女歌道聊不レ辨、奇特云々、)
此夏秋度々大水、百年以來無二比類一、
八月五日、入レ夜大風、諸國損亡す、
此年中高麗より歸朝之衆雜子持來、日本の齋に似たり、
此比三井寺可レ有二退轉一之由太閤有レ命、是は勘當之者道具を、彼寺に依二隱置過一也、依レ此衆徒何も退散、此寺鐘近年不レ鳴、示二此儀一兆歟、奇特云々、又寺領は被レ寄二叡山一、此寺之鐘自レ此以來彌不レ鳴、
慶長二丁酉正月自二下旬一、伏見爲二普請一なり、此近年之普請人の退屈不レ及二是非一、餘緊々相拵間、及二晚にて
は目不レ見、或當レ石殘二身を一、又は頻に付不レ出二普請一者、其主人不レ出二飯米を一之間、成二乞食と一京中に充滿せり、此太閤秀吉公日本小國には不相應才人たり、然所に如レ此不レ顧二人の苦勞一給レ事、時人不審と云云、(中國西國衆は、重而高麗へ渡海、)
三月朔戌之剋、信濃國筏間山夥く燒上る、其焰之中に如レ雷光無レ間ひかる、火の色青し、其山下へは大石を幾等と云不レ知レ數推出、西上野茶臼天目程なる石多

降、常陸國迄如レ此と云々、
唐より象來、其毛の色如レ猪、象遣共に渡、長は六騎之馬に長計也、ふとくなり合たり、飮合は以レ鼻用レ之、象つかいの騎レ時は、折二膝を一乘する、此年又象來、自二右象一長高し、年も增す、始之象は六七歲也、廿六七歲迄も長高く成と云々、
夏の比、大佛之去々年之地震に破しを、秀吉公御覽し、か樣に我身をさへ保不レ得佛體なれは、衆生濟度は中々不二思寄一とて、善光寺の如來を可二移給一と也、同七月十八日、如來入院給、其行粧夥體也、武士は辻堅、諸宗之僧侶同法花宗被レ供二奉如來一、貴賤率二圍繞一渴仰事不レ斜、
自二此春中一、四條に太閤新構有二普請一けるか、地利狹して又白川出口に有二普請一、町人壞二家を一迷惑す、
九月宇都宮彌三郎背二太閤之命一、高麗に可レ被レ遣とて、卒爾に備前國迄被二相下一、さて宇都宮領被二當竿一、奉行爲二淺野彈正一、
十一月廿日の夜大雪、
自二此年中一、畿內京伏見大坂堺諸賣物不レ嫌二大小を一、五分一の役被二召上一、庶民爲レ之迷惑す、

此比伏見屋作大儀之由有レ仰、黄金弁八木各被レ下、
慶長三戊戌正月七日大雪降、
去年酉之十二月、高麗面日本より相抱たる城うるさんと云地ゐ、高麗衆四十七八萬にて推詰攻る、但彼城竟に持こたゐ畢、日本人數千討討るゝ、此說正月中旬京着、
二月會津より蒲生藤三郎移二宇都宮一、知行十九萬石拜領、去甲午之年、父飛驒守相果、然共今年まで在二會津之處に一、爲二幼少一之間、遠國之境目、在國可レ有二如何一之由にて如レ斯、此藤三郎は爲二家康聟一、會津へは越後景勝爲二國替一被レ移、則越後國有二繩打一、伏見御普請、近國衆は二月朔日、關東の衆三月旦より始也、四月八日、淺間山ゐ參詣衆八百人程燒死云々、昨日大小之違にて、今日は不二緣日一之由、山嶺にて呼ると云へ共、只人間の所レ謂也と心得不レ用レ之參詣處如レ此、
三月江戶大風、高棟之家損、城之北門吹倒、此時自二關東一上り船、或は荷物をはね、或は破船、五百餘艘之內百艘計無異儀云々、太閤秀吉公六月二日より御不例、御腰不レ立、八月十八日薨給、年六十二、病中に爲二形見一、送二金銀を男女上下不レ殘、隨二其人々一被二相賦一、此多少之劃、病中に自身し玉ふ、奇特云々、
七月廿七日、夜半より大風洪水、五穀損亡不レ可二勝計一、
八月十六日、善光寺如來俄下向、町傳に信州本善光寺ゐ送レ之、路次中にて脇佛は散々の體也、此善光寺如來上り給て後、太閤無レ程病氣之間、不吉之兆とて如レ斯、八月十九日、中納言秀忠公出京、九月二日江戶ゐ下着御、九月十六日、景勝立二會津一上洛、
此春、奥州平泉中尊寺一切經伏見ゐ被二召上一、如來堂に被レ置、是淸衡基衡秀衡三代之中に所二書寫一之經有二三部一、十月本國ゐ被二返下一、
十月孔雀自二伏見一江戶ゐ下る、但尾はなし、
九月之比、自二日本一相抱る高麗之城々ゐ、大明幷高麗衆都合百萬計にて押寄攻レ之、十月十日比、島津兵庫居城ゐ取懸之所及二合戰一、二萬七千餘討捕之間、大明衆敗北、二三日路追詰、追々四五萬程討捕、依レ之自餘之城々取詰、大明衆退散、則有二無事之扱一、十一月無二異儀一、九州迄何も歸朝、
此秋、諸國凶年云々、
此冬、三井寺僧衆還住、寺領如レ本、

此春、下京の神明堂にて、人ならは二三十人聲にて、卅日餘躍けるか、後には泣けると也、又八月十日時分に、將軍塚鳴動不レ斜、是等は太閤の凶兆也、
慶長四己亥正月自二中旬一、於二伏見一各有二物言一、是亡二家康公を一度との企、專石田治部少輔執行、折節內府公衆歷々自二關東一上着伏見一、又大谷刑部少內府公ゐ荷擔之間、彼組之衆多以同レ之、然而二月無爲、內府家康公與二羽柴筑前北國和平一、
二月廿日午の刻、淺間鳴事夥し、去酉三月如レ此鳴、雖レ然此度之鳴樣、酉の春よりも超過せり、又其夜寅の刻淺間鳴動甚、近年無二比類一之由、年老之者云焉、
二月廿九日、筑州自二大坂一伏見家康公來臨、彌可レ有二入魂一之儀也、內府公有二應諾一、三月十一日、內府公大坂筑州宿所ゐ入御、筑州病惱危急之間、子息肥前に不二相替一可レ有二入魂一之趣、家康公誓紙を被二乞請一、畏悅云々、さて三月二日の曉、筑州卒去、
三月十九日、家康公伏見之向島ゐ假に移徙、依レ爲二吉日一也、同廿六日より向島に令レ居給、此比、諸大名行二能を一、觀世賽生は、來年可レ行となり、九月七日、內府公大坂ゐ御下、其儘翌年六月迄、大坂西之丸に居住御、
閏三月七日、石田治部江州佐和山彼居城ゐ移閉口す、此間之就二言事一、令二氣遣一之間、三川守秀隆被レ送二路次を一是依二內府公の仰一也、此石田治部は、太閤之時無類之出頭人也、
四月十九日、阿彌陀か峰新八幡堂ゐ各社參、是太閤秀吉公を奉レ崇二神に一、號二八幡大菩薩堂一也、併依二彼遺言一如レ斯、然而有二遷宮一、翌日能あり、四座の猿樂行レ之、大菩薩は可レ有二如何一とて、其後改二豐國大明神一、
此春中諸國に糧乏云々、閏三月廿四日、四月四日、伊豆國妻良齡を出る上船、多以或は荷物をはね、或は破損云々、
六七月、下總上總武藏切々大風吹、夏秋凶、遠州此夏中三千人餓死、關東中も餓死あり、
此秋中、在二伏見一之衆佐竹、會津景勝、安藝毛利輝元、國々ゐ下、羽柴肥前守も北國ゐ被レ下、
八月十四日、內府公御參內、供奉之衆は肩衣袴也、
同十八日、豐國大明神有二祭禮一、翌日、金剛今春二座
行二能を一、觀世賽生は、來年可レ行となり、九月七日、
內府公大坂ゐ御下、其儘翌年六月迄、大坂西之丸に居住御、

十一月廿八日より十二月十日まで、淺間鳴動、此故か灰無二際限一小幡筋降、此寒中暖氣也、雨三度雨雪少降、

十二月廿三日立春、三更の比より巳刻まで雪降、

慶長五年庚子、此春中加賀羽柴肥前守利長與二內府公一〔割注〕家康公の事也間から不レ快、大坂諸大名拵◎被カあり、肥前守悃望也、金澤城に廿萬斛の城領を添、內府公息を養子し可レ讓之由也、扨も無レ事了、肥前母儀幷家老の人質江戶へ被レ下、依レ之內府公心悅、右之金澤城領も無二抑留一、子息養子も止了、此三月の比より、會津長尾景勝と內府公不レ快、六月十六日、景勝爲二成敗一內府公大坂を御出、七月二日江戶へ御着、同十九日庆申江戶を中納言秀忠公出馬、內府公は廿一日也、然處に大谷刑部石田治部於二江州一敵對、依レ之大坂奉行を始上方衆悉內府公を謀反、此已前會津へ出張之上方衆、宇都宮より歸上る、內府公へ聊不レ可レ有二逆意一之旨有二應諾一、如レ此之間、內府公同八月四日、自二小山一江戶へ歸馬、中納言公は暫く宇都宮に有二逗留一、所々普請あり、此七月爲二手合一伊達政宗與州白石の城を攻崩、外曲輪の者共悉討捕、本城は依二悃望一助二身命一、大將分四人虜、伏見城內府公人數有レ之、此時迄は堅固也、八月朔日巳刻、伏見城落居、其體有二逆心の者一敵を引入、火箭を射る間、城中燒崩、尾州淸須城主福島左衛門大輔內府公へ依二一味一、番手として內府公より彼城へ人數を入らるゝ、此外岡崎吉田濱松墨川橫須賀駿府與國寺三枚橋、此城々へ同番手入る、苅屋水野和泉守〔內府公御袋の弟〕內府公に先立て參陣の處、上方衆かゝの江の彌八と云者、不慮に令二口論一伐二和泉守一相互死す、其座中に堀尾帶刀被レ居ける、是をも數刀切、然共何もかす手なる間不レ苦、

此春、於二武州一江戶松平十三郎へ云人の馬の尾に、鼠巢を喰い子を產、是其身の惡事か、家を燒けると也、又兄之主殿介於二伏見一討死す、凶事を告か、

又武州忍に山伏あり、正月雲を見て、吉凶をトとあり、此春、北國の鉾楯は無事になるへきと、始終申けると也、於二東筋一凶事可レ有の由を申、奇特と云々、此以前も、彼山伏關白秀次太閤秀吉公逝去可レ有事をも兼て申レ之由也、此四月、天王寺御堂建立大普事あり、貴賤群集、聖德太子の朱印、各奉レ拜レ之、卅三間之御堂も修理あり、大佛をも佛體を再興あり、是何も

內府公就二異見一、八歲之秀賴より與行也、此夏中、善光寺河中島御堂建立、木曾の棧去々年より人不レ通、是も去年之夏より事始て出來、伊那河橋も同前、

八月廿二日、岐阜城主織田中納言〔信長孫也〕幸田の渡へ出、尾州衆と合戰、即岐阜へ推こみ、町中放火、翌廿三日稻葉山乘崩、數輩討取、中納言を虜、〔是は信長孫、信忠一男也〕右の內府方之衆至二赤坂一進レ陣之處、大柿居陣する石田治部島津兵庫人數かう戶渡にをいて行合、則大柿衆北、又數輩討捕、關東方衆至二赤坂一陣取了、

九月旦丑、三日より九月節、九月朔丑、內府公江戶を出馬、十五日濃州至二赤坂一着馬之處、夜半に敵關ヶ原を自二大柿一相廻、於二先陣一企二合戰一、此日雨降霧深、而行先不二分明一、伊勢筋へ相廻西國衆二萬五千餘、こうづ駒野に居陣す、關ヶ原には石田治部浮田中納言大谷刑部島津兵庫小西攝津守將陣の處に、金吾中納言〔政所の甥、太閤之養子也〕內府公屬二味方一之間、敵敗北、數百討取、此時脇坂中務小川左馬介俄屬二內府一、翌十六日江州佐和山押寄、佐和山は治部依二留守一則落城、於二城中一垂〔治部兄〕同父自害、十七日休息、十八日八幡、十九日草津、廿日大津少有二逗留一、廿六日淀、廿七日大坂入城也、此時迄森輝元與增田右衛門大坂令居也、秀賴は依爲二幼稚一、內府公無二遺恨之間、本丸に居城也、信州眞田此度大谷刑部と令二一味之間、秀忠公宇都宮より直に被二抑寄一所、先上方ゟ可レ被二相上之由一、依二內府公仰一、拋二細事を一、自二眞田一急被レ進レ陣、此時伴之衆馬勞行步不レ安、廿三日草津迄着陣、廿七日內府公同日に大坂ゟ入城也、同廿三日石田治部於二江北一に虜、小西攝津守十九日生虜、此九月廿日、奥平美作守信昌爲二京都の仕置一上洛、廿三日於二京都一安國寺〔森輝元歸依之僧、但携二武邊一也〕を美作手へ生捕、安國寺伴之者數輩討取、右石田治部小西安國寺大坂堺井より京都へ、同廿日被二指上一、十月朔日大路を渡し、於二六條川原一刎レ首掛二獄門一、浮田中納言打死之由、其時巷說、長束大藏於二江州一刎レ首掛二獄門一、增田右衛門高野登山、金千九百枚、銀五千枚出し、身命計相助らるゝ、森輝元は七箇國上表、二箇國領納、〔防州長州、是は內府公へ味方の衆人質大坂に有レ之を、森居城廣島ゟ遣間、無二異儀一爲二返取一也、其儘大坂下屋敷居住、此陣留守中會津景勝少の行に不レ及、此時國配當あり、安藝備中兩國を羽柴左衛門大夫、播磨羽柴三左衛門、備前美作金吾中納言、

出雲隱岐堀尾帶刀、紀伊國淺野左京、但何も本領分は則被二上表一、伊豫は藤堂佐渡加藤左馬介、筑前黑田甲斐守、若狹京極宰相、丹後京極修理拜領也、此衆何も本領上表也、但此內黑甲藤佐加左其國に本領依レ有レ之、其領共如レ此、肥後の國は加藤主計頭、讃州は山內對馬、北國の主羽柴肥前江州へ出合也、是は自二大坂一暇を請、十月歸國なり、十一月十六日、自二大坂一江戶中納言公御上洛、十八日御參內、十九日歸洛、同廿七八日比內府公病惱、十二月九日同廿六日、京都大雪、十二月十三日、信州眞田城を渡し、親子共に高野に上る、九月十月十一月三箇月打つゝき大也、來年も又如レ此九十十一大也、珍事と云々、但三箇月大つゝけは、亂逆の兆と京童部云也、十二月廿九日大雪、十月自二會津一出羽のもかみへ動、もかみ家中之城主二三人會津へ一味、依レ之もかみ城廻まて放火、此時上方悉平均之由、陣中に相聞る間、右に會津へ一味のもかみ方の城主等、又もかみへ同心す、依レ之敵敗軍之際及二合戰一、會津之人數二三千も被レ討、

此十一月十二月明る正二三月迄、於二大坂一ふんとうふんとうと呼る、非二人音一、虛空にて如レ此呼、

此九月より翌年二月中旬迄、京都爲二置目一奧平美作在京、二月美濃國之拜領へ下る、其後暫京都之守護無レ之故、京童部吐二放言一、又盜賊徘徊不レ可二勝計一、京境井愛宕其外所々、此度敵對之衆、金銀不レ知レ數有レ之、悉內府公へ納、十一月十二月內府公不例、

自二去る年一大谷刑部少內府公に別して忠信、然而此度謀叛之事如何となれは、去比浮田中納言（備前主）家老之衆と爲二主從間一有二云事一、大谷者中納言理を專被二云立一、內府公彼家老之者被二介法一、此儀に付て大谷批據を申之由依レ宣如レ此、

去春船堺浦に寄、是はイギリスと云島船、黑船の敵也と云々、然間船中に具足大鐵砲數多有レ之、具足は腰より上計也、內府公見物し給、上下見之を、さて猩々皮以下令二賣買一、無二異儀一令二歸國一、彼船爲二唐船の敵一間、可レ令二誅罰一物をと人皆云レ之、

去七月上方衆內府公に謀叛時大坂惣構口々番手事

一濱の橋　毛利民部大輔　一高麗橋　高田河內守　藤堂三河守

一平野町橋　宮木丹後守　一淡路町橋　早川主馬

一備後橋　生駒主理修殿　同主　一本町筋橋　蒔田權助

一久太郎町橋　峰須賀阿波守　一久法寺町橋　竹中伊豆守

一かんとうし町橋　服部土佐守　一うなぎ谷町橋橫橋橋共に　小野木縫殿助

一天王寺口　橫濱民部　一甲津口　上田主水

一南方ほりつめの口　奧山雅樂助　一平野口新屋　小出大和守

一玉作口　多賀出雲守　一玉作口　杉若主殿

一京口ノ小橋谷　出羽守　一中の渡　山崎左馬助

一福島口　山崎右京進　一天王寺より南の口　石川備後守

一天王寺より平野口　赤松上總介　一天王寺小坂水所　木下左京

一大和口　川尻肥前守　一福島川口の番　脇坂中務　曾三郎兵衛　同右衛門八

右手前々々に番所を被レ立、番衆慥に在レ之而、妻子なと出る事をは堅可レ被二停止一候、往還は無レ滯可レ被レ通候、以上、

慶長五年庚子七月十五日　長束大藏　增田右衛門尉　德善院

慶長六辛丑正月、內府公齒冬之病氣故、諸國衆無二出仕一、同月十五日有二出仕一、內府公病惱依二本復一也、薩摩島津于レ今無二上洛一、佐竹無二上洛一、去年亂逆之砌、事の體を見合、不レ出二己か國を一之間、今恐二身の科を一歟、內府公三月廿三日辛酉、自二大坂一伏見ゟ御移、其日甚雨、翌廿四日、秀忠公同從二大坂一伏見ゟ御移、是日も大雨也、廿八日丙寅、中納言秀忠公上洛、翌廿九日丁卯、參內、被レ任二大納言一、

去二月城々有レ定、井兵部少輔直政江州佐和山、本多中務大輔勢州桑名、松平下野守（內府公三男長吉）尾州淸須、奧平美作守信昌濃州加納、石川長門守同大柿、本多豐後守三州岡崎、松平玄蕃同吉田、松平內膳遠州濱松、同三郎四郎同縣川、（是は內府公弟、但父は別、）酒井與七郎同田中、內藤三左衛門駿府、天野三郎兵衛駿河興國寺、大久保次衛門同三枚橋、本多縫介三川吉良、江州大津を勢多ゟ移し、戶田左門可レ被レ置と也、大坂には秀賴公有レ城給之間、內府公人數不レ被レ置、

四月十日、大納言公關東ゟ下向、內々會津立の有二陣用意一、十五日當佐竹父義重上洛伏見ゟ着、

去年自二愛宕一眞壺二百餘上る、是此度敵對輩之壺也、依レ人被レ施レ之、

此年正月之比、西上野箕輪小幡其許近邊に、あとりと云小鳥無二際限一有レ之、とりもちなくして、藪なとにてさゝ網を以二十丗つゝ取、夜中には手にて多くとらゆる也、去年の十二月廿日比より有けれ共、中にも正月十日比さかりなりける也、

此春疫病關東に流布して人多死ける、在所によつて八人九人住む家には、一人二人殘りける所も有とかや、信濃も同前、

四月十日、鼓打大藏二介入道々々知死、年八十五去年の五月、於二難波一有二勘進能一、其時鼓を打ける奇特云々、

五月廿七日甲子雨、此春夏慥て雨也、六月十九日廿日大水、此夏中あつき事なし、十七日より廿三日まで七日打續大雨、廿二日尚以大水、

此比會津無爲、曩勝相望に付て有二寃宥一、近々令二上洛一、內府公ゟ可レ有二出仕一之由也、六月下旬之比彦坂小刑部御折檻、則閉口也、是は內府公知行方三目代之其一也、同月前々崎普請、大津之家門幷石共被レ移二彼地一、

七月朔日會津を長尾景勝立、同廿四日伏見に着、會津則上表、米澤信夫郡にて知行二十萬斛給、會津は蒲生藤三郎拜領、七月廿日、美濃北方にて蛙鳶を取、丙辰未の時珍事也、同月十四日五日より、內府公瘧病、同廿七日本復之所、又甚病惱、八月三日四日より本復、

此秋諸國凶年、九月の比、於二江州一近習之輩十二三人知行被二充行一、同月、北國之主羽柴肥前息ゟ大納言秀忠公之息女を有二祝言一、年三歳、彼肥前無二男の息一、以二養子を一如レ斯、但別腹の弟也、去年關ヶ原合戰之砌、俄に關ニ咏方に一小川左馬助、于レ今新本知行聊無二拜領一、是は何時も捨レ弱附レ強之由、諸人依レ訴歟、

內府公十月十二日丙子、關東下降、其日長原泊給、十三日佐和山、十四日大垣、十五日岐阜、十六日之朝、加納城場廻見給、十一月五日、內府公江戶ゟ下着、閏十一月二日、江戶町不レ殘大火事、此後も數箇所度々町火事、同十日京都雨にまじり土ふる、喩へはかわらけの粉の樣なると云々、又十五日如レ斯、近江邊ふる、十一月九日、江戶より忍河越ゟ內府公爲二鷹野一出御、廿八日歸城、十二月四日岩付邊所々又鷹野、此正月於二江戶一內府公越年也、十二月廿八日、宇都宮の奧平大膳大夫家綱に被レ充二行知行十萬石一、是奧作守信昌一男也、此秋叡山ゟ三千石、豐國ゟ二萬石被レ寄二知行を一、又內裡御領幷公家領方々に有しを、被レ寄二京邊士一、

此比高野行人與二衆徒一有二言事一、去年木食は石田治部令二一味一、方々敵城を被レ拵し依レ罪被二牢籠一なり、此文殊院は木食弟子也、是內府公氣相歟、木食遺跡彼文殊行人たる間、素爲二荷擔一衆徒意趣爲レ理之間、文殊院非分の由也、依レ之公事無レ利、此故衆徒與二行人一內內間柄不快甚也、

慶長七壬寅正月朔、朝雪降、十九日壬午、內府家康公江戶を出御、二月十四日伏見着城、伊勢路を通御、

北國主羽柴肥前守關東ゟ下、內府公逗留中、於二江戶一可レ有二出仕一との內心歟、正月廿一二日比、江戶ゟ可レ被レ着之由、先立て雖レ有二其告一、上方諸衆關東下向無用之由依レ仰、肥前主にも無二對面一上洛し給、肥前者於二江戶一大納言秀忠公ゟ出仕有レ之、肥前は則伊勢筋上洛、於二伏見一內府公ゟ有二出仕一、於二江戶一大納言公ゟ金百枚、銀千枚、小袖百領、脇指正宗進物也、大納言公より肥前に金子百枚、馬、鷹幷鍋、藤四郎の脇指被レ遣了、

正月、大納言ゟ於二關東中一二十萬石被レ渡、但此內二三萬石不足之由也、則小性幷小馬廻以下不レ殘、大納言公より配當也、

二月、佐和山城主井兵部直政病死、年四十一、男左近大夫年十七、繼二其跡一佐和山に住す、

三月十三日、內府公爲二年頭之禮一大坂ゟ下向、秀賴へ對面也、則十五日還御、同廿七八日比、島津使者相上る、

四月十三日、濃州大水、みつや堤千間餘相きれ、町之者多分死、家流牛馬同死、此時中野塘もきれけり、此年濃州別而凶年、同廿八庚申、內府公上洛、一日休息、五月朔日參內、二日於二院御所一今春能仕、當世の上手也、晩に雨、見物の衆ぬれけり、三日相國寺佛詣、此兌長老內府公氣相なり、四日又今春能有レ之、此能未レ終に、內府公伏見へ還御、

五月八日、常陸佐竹國替之儀也、折節在二伏見一、右之旨以レ使宣ける、兎角之意趣無レ之、賢意次第之由返答了、則十二日常陸在國之父義重幷家中へ、此使有レ之、愛田砥澤邊にて廿萬斛、佐竹に可レ被レ下となり、六月十四日、佐竹城城請取、薩摩の島津龍白近々上洛仕之由言上すと云共、終に無二上洛一、內府公起請文申請と云共、事延引す、今の分計略歟、

六月朔日より伏見普請あり、上方諸大名在伏見す、同月十日比、南都蘭麝臺、從二內府公一以レ使被レ爲レ見、同勅使被レ遣、此比彼蘭麝臺を被レ切度由、頻雖レ有二內存一、是を切ぬれは、餘命不レ幾之由云傳によつて被レ止也、蘭麝臺と云はをふらんと云沈香也、蘭麝臺と云ふ

は無レ之事を云ならはしたり、をうらんに幷て紅塵と云沈香有レ之、是何も勅封藏にあり、

此五六月黒船着て、舟人千二百人在レ之、

かう地交趾より内府公に有二音信一、生虎一、象一、孔雀二、但虎者不二京着一、七月朔日、美濃加納普請始、同三日大雨、此水無二指儀一、但尾州しの木柏井の川出、彼國所所堘切、八月十日比、加納普請衆上る、普請の樣子遲俄暖氣、十一月小廿六日寒に入、廿九日晩より雨、此出來之由、内府公宣に依て、如何にも麁相なる儀也」、寒中暖寒中節々雪ふる、雨も切々降、然共寒前寒し、去六月、秀賴公爲二所願一、於二住吉一萬句始、其發句、氣也、十二月四日、東山之大佛燒、銅をはかし佛體

住吉の松の幾世の下涼み　昌叱

へかけゝる時、火もへ出、

此八月廿八日の風雨、關東は夥して、所々水入、大凶十一月廿六日内府公江戸を出御、十二月廿一日、熱田年也、内府公十月二日關東下御、四日市場より舟にて熱田宮上給、薩摩主又八龍伯養子、十月十日比爲二宮に着御、路次中應野故上着遲々、少々不例也、諏出仕一上る、内府公依二留守在大坂一す、龍白可二上洛一方の海氷、此寒中うすくして馬不レ通、御渡は有レ之之由内府公雖レ有レ命、去年弟兵庫頭就二謀反一危む故、かち渡は有レ之、來年日てるへき由と云々、北國は心歟、甥の又八を被二相上一、此取持之人藝州之主羽柴此年雪深き故、來年水可レ出と申けるとなり、諏方の左衛門大夫、路錢又は有二大坂一之糧を被二運送一、同御渡りの馬の足跡に見樣あり、來年は亂逆可レ有レ之十八日、備前美作兩國主金吾中納言被二相果一、此人常歟の由と云々、

に大酒之故歟、狂氣人之體なるにより、侍數人成敗之去子年より浮田八郎薩摩島津所々隱居之處に、内府條、此十月上旬の比、可レ被二改易一之處に如レ斯、時人公儀次第可レ有二成敗一歟之由、島津又八言上、是は於二伏見一、十二月下旬出仕之砌如レ此言上云々、又八則

若自害にてもや有らんと、下薗疑をなす、　九月松平下總守、美作守信昌息、三州作手拜領、是は奥平代々弓立所に付て如レ此、　十月廿七日夜半、下野國宇都宮町悉燒亡、侍屋敷も所類火、同此比、江戸町も二三町火事之由也、十一月始之比、加賀金澤城爲二天火一燒、人馬道具已下不レ殘燒失云々、同廿二三日比より

九州へ歸國、

去春叡山東谷に入二盜人一しか、此比露顯して、妻子共成敗也、　此比より佐渡國に銀倍增して、一萬貫目餘上に被レ納、先代越後景勝彼國領納之時分は、わつかなりしと云々、又石見國金山も倍增して、四五千貫目被レ納、是も先代森輝元の時は僅の義也、家康公分國になりしより如レ此、右之兩國大久保石見守拜領也、但金山之義は彼人爲二代官一、銀は上に右之通被レ收、每年石見守三月佐渡に相下、八月伏見へ上、九月、十月者石見國に下、是金山相改、彌銀多分爲レ可レ被レ納也、去秋土佐國に唐船寄、彼國主山内對馬守日本船にて取二卷之一番を付る、唐人も對馬守に、卷物以下以レ使令二音信一、伏見にも急度の可レ遂レ禮之由宣之條、對馬守使被船に乘移る、さて伏見に可レ給二檢使一由令二言上一間、使を被二相下一、然處風能折を得、帆柱引上、鐵砲のことくなる物三つ放し、鐘鼓打鳴し番に付、小船共乘たをし走ける、對馬守使も同有二彼船一間、引連行、其比人の嘲二弄此事一也、唐人も二三人殘留、是は對馬守に音信の使也、此船より惣別如レ此船を押る時は、帆柱を取物なりけるを、油斷にて不レ取事不覺也と云

云、

慶長八癸卯正月、伏見出仕之儀、元日は先秀賴公へ可レ有二出仕之由一、卅日に内府公仰有間、夜中に上方大名衆大坂へ下着、朔有二出仕一、元日未申刻伏見歸着、翌二日内府公に出仕也、備前美作兩國　金吾中納言被レ果後、各内々企望之由云々、　廿七日鳳來寺護摩堂炎上、又天狗倒し有て、二王堂の角を擊碎、惣別彼山あるゝと云々、　此年中に、衆徒數多病死也、

二月六日、池田三左衛門備前國被レ下之由朱印被レ出、美作國は信州河中島主森右近國替有て彼國に移、此比内府公可レ有二將軍成一云々、　然而二月十二日、征夷將軍有二勅使一、同四日内府公大坂に下給、翌五日歸城、秀賴公に爲二年禮一也、

遠州久野居住の松下右兵衛爲二國替一常州へ下、　此比自二諸國一武州江戸へ、千斛に一人つゝ役人下る、町に國々名付有て、町場可レ有二普請一と也、　十九日朝雨ふる、未刻止、酉刻日蝕あり、其色あかき事甚、亥刻の終時分月蝕あり、兩蝕同日に有事珍事か、　遠州久野宿主久野三郎左衛門入道七千石被レ下、遁住可レ有と也、此息先年於二京都一喧嘩故果、終に不二跡立一三郎

左千石被ㇾ下、關東に近年在、
三月廿一日寅日、內府公上洛、廿五日家康公御參內、
被ㇾ任二征夷大將軍一、氏長者、幷學院淳和院兩院別當、
牛車兵仗、從一位右大臣源朝臣、
行列之次第

一番　御物　同朋　二御出奉行板倉伊賀守　三雜色
御物　右本多藤四郎　渡邊半藏
四隨身御馬　左山上彌國郎　島田清左衞
鞘殿善六　橫田彌五左衞門　五白張七人　六諸大夫歩行
高木九介　近藤平右衞門
竹中采女　森左兵衞　三好助三郎　三好久三郎
佐々木勝九郎　近藤七郎太郎　松平五左衞門　戶田采女
內藤四郎左衞門　秋本茂兵衞　松平右衞門　布衣　近藤登助
大久保宗十郎　酒井主水　永井右近　諸大夫　七番　三浦豎物
布衣　米澤清右衞門　右中山左介　柴田左近
御車　家康公
布衣　成瀨小吉　左安藤彥兵衞　榊原甚五兵衞
橫田甚右衞門　日下部五郎八　長谷川久五郎
阿部左馬助　豐島主膳　林　藤五郎
花井勝右衞門　伊那熊藏　加藤吉左衞門
高木善三郎　朝比奈彌太郎　石川半三郎
鳥井九郎左衞門　里見讃岐守
八騎馬諸大夫　本多縫殿助　井伊右近大夫
都築與右衞門
松平甲斐守　松平出羽守　本多上野介　石川長門守
松平飛彈守　松平玄蕃頭　本多豐後守　本多中務大輔
與三川守秀康事　同京極事　同池田三左衞門事
九越前宰相　豐前宰相　若狹宰相　播磨少將

同隱岐左衞門事
安藝少將

此日參內之節より相蟹、還御の比雨也、四月十六日伏見に歸城也、
此比かふき躍と云事有、是は出雲國神子女名は國、非好女、但仕出、京都に上る、縱は異風なる男のまねをして、刀脇指衣裝以下殊異相、彼男茶屋の女と戲る體有難したり、京中の上下賞翫する事不ㇾ斜、伏見城にも參上し度々躍る、其後學ㇾ之かふきの座いくらも有て諸國へ下る、但江戶右大將秀忠公は終不二見給一、
七月三日、將軍家康公上洛、同十五日伏見へ還御、
同七月廿八日、大坂秀頼へ將軍孫女祝言也、是者將軍息大納言秀忠公息女也、自二伏見一船にて大坂へ被ㇾ移、年七歲、秀頼十一歲、常之十三四計之比也、
此春上方諸大名關東へ下向、秀忠へ有二出仕一、
去五月五日午刻、雪雹、三川之山中降、中にも名藏山多降、木の葉悉打落す、くちなわ多死之由也、八月浮田八郎后九州上る、是は去る子之秋、於二關ケ原に一討死之由人皆諦ㇾ之、然處其合戰場より薩摩へ落行、近年隱居之處、彼國主右府家康公へ屬之間指上せ、父子伊豆國大島へ被二指流一、將軍家康公息御滿、

此春常州みとへ被二相移一之處、九月死去畢之由、伏見へ注進也、年廿一、八月昌叱死去、是は連歌之達者也、去年四月紹巴死去之後、京都之爲二宗匠と一、
觀世大夫六月關東へ下、七月七日、於二江戶一能有ㇾ之、九月二日、觀世大夫濃州加納へ着、同五日の夜、飛驒夜能有ㇾ之、同本まる於二作州信昌一終日有ㇾ能、岐阜近邊の者爲二見物一、七月廿五日、前々か崎城主左門樽より落死す、息采女跡を繼、
十月十八日庚子、右府家康公關東下向、其日長原迄可ㇾ有二下着一之由被二相定一之處、少年の息二歲頻に被ㇾ逐ㇾ跡之間、可ㇾ有二同道一之由付て、晚より俄に前々か崎迄下着給、此若君兄四歲、同關東へ同道御、去七月親言之時、上方諸侍秀頼公へ疎略有ㇾ之間歎之由誓紙之由風聞、專羽柴左衞門大夫藝州備中主取行云々、
十月九日、相摸國ばにうの渡より大磯平塚迄氷ふる、其大なる事天目程也、他所一圓不ㇾ降、
十二月三日、淺間山三四ヶ度鳴、此響三川美濃へ聞ける、同七日寒に入、此冬殊暖氣、寒中雨雪節々降、中にも廿三日の夜大雨水出、十二月廿五日より明る正月八日九日迄寒し、其後俄に暖氣、此冬、關東は節々大

雪、寒事超二過近年一にせり、十二月上旬の比、於二伯耆一に二國主中村一角(年四十)臣下の横田内膳(是孫皆用人、併將軍侯二氣相一)を直に生害、此儀將軍甚不快、内膳一男構に楯籠之間、卒爾に難レ遂二成敗一、出雲之主堀尾より人數相加責レ之、寄衆數百人沒死、其後有レ扱、令二楯籠一處之上下可二相助一令二諾應一、城主切腹、十二月五郎太郎主(將軍息男、年四歳)、被レ定二甲斐主一、主計從レ之、於二常陸國一廿萬石長福主(年二歳)、將軍息男、是は去秋逝去之御滿遺跡也、河中島を竹主拜領也、(是も將軍息男、年十二歳、)

此冬、山岡道阿彌於二伏見一相果、(年六十二)將軍別而氣相也、

此年京都町人を十人組と云事あり、依二將軍仰一也、洛中上下迷惑す、十人之中一人犯二惡事一には、九人の者可二與同罪一之由也、是は京伏見其外邊土に、盜賊令二亂行一之間、爲二政道一如レ此、然共福人は貧人に組事を愁、財寶を他所に令二運送一置レ之、此政於二洛中一先代不レ聞之由云々、此比、江戸の大納言秀忠公任二右大將一給、

十二月廿三日、京都三條之比丘尼御所どんげん院失火、

慶長九甲辰正月朔日晝、夜半以後大雪、元日より八日九日まて寒、其後陰氣、二月十日之夜丑刻に、魂打歟、とん〳〵と五六度鳴、其後はた〳〵と云事夥し、此比、關東中神社堂宮自二家康公一有二建立一、

三月朔日、將軍立二江戸一御上、先一七日熱海に湯治、

三月廿九日庚辰、伏見に着給、少年息男兩所同レ之、

三月廿九日及二酉刻一、日のまわりより雲四方に飛事夥し、珍事也、去年二月十五日朝、當年正月朝も、大方似レ之云々、三月前々か綺に伊勢大神宮飛移給とて人參詣す、

此年、或女頭二ある孩兒を生、先年も如レ此之子を生けるか、洛中を渡しける、其年何して凶事有レ之し程にとて、此度は不レ渡則害しける、此比有二怪異一、内裏之庭中に從レ何共なく、長持二枝あり、之をあけて見に、一には生頸多有レ之、一はあくれ共蓋不レ明、其上に菜のすん〳〵に切たるを設、不思議なりし事共也、又近江國横關に怪異あり、巳の刻迄は水もなき所に、及二午刻一每日血池出來たりと云々、

四月五日、於二伏見一上方大身衆有二年頭禮一、同小身輩六日に有レ禮、兩日の禮諸大夫分九十八人、小袖一重宛、自二將軍一被レ出、

三月廿七日、於二院御所一、觀世大夫能仕、三月盜賊自二山崎一搦來則成敗、是は京町人子共養子之由令二約束一、代物衣類已下を取、其子を淀河に沈けると也、三條どんけん院從二秀賴一可レ有二建立一之由也、

卯月廿日、越前之秀康關東下向、右大將爲二見廻一也、(是は右大將兒、當年廿一也、雨故廿九日濟須に着玉ふ、唐瘡病者なり、)卯月廿一日、淺野左京大夫所へ將軍有二御成一、去十日時分可レ有レ之由之處、延引にて如レ此、廿三日、關東大風雨洪水、土方はさして不レ降、五月三日、松平飛驒關東へ下向、(美作守信昌息、)猿橋爲二節所一之間皆下馬、于レ時豐田久兵衛と云者之馬、主の脇指をくわへ扱、久兵衛是を取んとする所に、馬口をふる、彼脇指にて久兵衛手をつく、不思議なりし事共也、此二三ケ年、國々伽藍從二秀賴公一建立し玉ふ事甚也、定て心中に有二立願之儀一歟、此夏人魚伏見町に有レ之、人見レ之、從二北國海一上ると云々、

五月七日、清須下野主但馬へ湯治、

六月朔日より、武州江戸普請、六月二日、羽柴左衛門大夫(藝州備中主)關東下、是右大將秀忠爲二見廻一也、同五日宰相秀康從二關東一歸上、此日岐阜に被レ泊、同八日伏見(◎濃州の伏見か)に被レ着、福島左衛門大夫も、此日河手に泊、互に無二見廻之儀一、六月十日丑、將軍上洛、十六日參內し可レ給之處、雨故延引、翌十七日甚雹亂し給、但則本復、廿二日丑參內也、廿四五日、於二京都一能有、

七月一日伏見へ歸城、

七月朔日より佐和山城を彦山へ被レ移普請あり、七月五日、神島左衛門大夫關東より上、此日濃州河戸に泊、此日夕立甚、佐和山普請場へ雷落、隨分之者伊勢衆三人、其外十人死、五三十も手負在レ之由也、此頃伏見も右普請あり、西國衆悉相上令二普請一、七月十七日未刻、武州右大將秀忠公若君誕生、(將軍右府息、)十箇月に雖レ不レ滿平產、同廿五夜、俄大雨、六七月旱魃、國民令二迷惑一、同十七日於二伏見一宰相秀康公將軍御成相撲あり、同廿一日、秀康大名衆有二振舞一、能あり、同廿一日に、清須の主下野主自二伏見一歸國、此中於二伏見一不レ斷頻也、同廿二三日比、三州鳳來寺山移動搖、衆徒彼山滅亡歟之由を存、本堂へ打寄居す、同廿五日甲戌、戌剋夕立甚、近年如レ此急雨無レ之、夥雨也、

八月四日壬午、酉の時より大風、誰そ時迄は雨少降時も在レ之、戌剋より雨不レ降、風計也、諸國失毛不レ可二勝計一、八月十四日壬辰、八月節也、伊勢尾州近江

美濃者大風、山城大和畿內此風不レ吹、三川もさして不レ吹、尾州長島高波にて、堤崩水入、同五日申之時終より雨降、八月十日比、自二佐渡國一大久保十兵衛上る、銀子山繁昌之由悅玉ふ、佐渡國を十兵衛に被レ下、但銀山はのぞく、八月十五日、豐國爲二神事一諸大名馬を出し、賀茂の社人務レ之、其馬の裝束追繩沓已下、何も紅の唐絲也、鞍鐙以下結構の儀也、同四座猿樂能有レ之、十八日、同豐國神事、京町人風流あり、其體六組にしてをとる、見物の上下幾千萬と云不レ知レ數、但在二伏見一の大名小名見物無レ之、當年太閤秀吉第七周忌に依て如レ此、同廿日京都町人伏見に風流來、同八月之比、出雲之國主堀尾信濃守死去、此比京中又遊士盜賊多之、當月中、關東從二右大將秀忠公一諸國道路可レ作之由使相上、廣さ五間也、一里塚五間四方也、關東奥州迄右之通也、木曾路同如レ此、

閏八月小、十四日壬戌、將軍家康公關東下向、又去五日美濃尾張伊勢大風、然共至て無二失毛一之儀、長島伊勢浦近邊は、鹽風に付て損毛也、此秋關東凶年、此秋木津川橋從二秀賴公一被レ掛、其長二町餘と云々、十一月十八日寒に入、翌朝少雪ふる、廿日夜廿一朝迄大雪、此寒中諏方湖水不レ凍、人馬一圓不二相通一、今年程暖氣之儀此已前無レ之由云々、五年以前庚子之冬程寒しける事無レ之由、何も諏方の住民云レ之

十一月廿九日晚より大雨、

十二月之比、將軍大鷹多落る、大方六七十居もをつるか、尾州苅屋邊の鷹も同前、十二月十一日夜より日々十六日迄雪ふる、但積事はさしてなし、同十六日戌刻、丑寅之方に魂打三度、同地震、其夜自二關東一上者、今切之東舞坂に泊、右之魂打と聞へければ、俄に大波來て、橋本に家百間程有所に、八十間計潮引て行、總に十間計殘ける、人多死、折節舟に乘合ける者は荷物をはね、舟は山際へ打上ける、其時釣に出ける舟廿艘計行末不レ知、此時伊勢國浦々潮數町干たりける事一時計也、漁人共魚鮑已下心の儘に取處に、潮俄に來て、大石共浦々へ打上ける間、生て歸者なし、其內に年老之者は、如何樣不審に思、急陸へ上者は、少々生て歸も有ける、右の波の打上ける石共に、鮑已下或は五十或は卅有ける、島々に人屋又兵糧の藏以下船網、無二殘所一潮に流行、行衞不レ知、關東も此波同前云云、二百四十四年先、康安元年辛丑七月廿四日、攝州難波浦に如レ斯之儀有ける由、太平記に在レ之、

右之大波之比、伊勢山田岡本町七百間餘燒失、人馬多死、依レ之暫神前ゟ社參を被レ留、紀伊國四國西國何も此波同前、地震は所により大小あり、關東も同前、上總國小喜田◎田喜カ領海邊取分大波來て、人馬數百死、中にも七村跡なしと云々、諸國內の海は不レ苦、攝州兵庫の浦は一圓不レ苦、是は先年丙申の地震、他所に超過しける故かと所の者申也、六月下旬、攝州小屋之池の鯉鮒悉干死す、彼所の者は、昔年行基の魚を被レ放けると云傳、依て是を不レ取、あたりの村より彼魚をぬすみ取けるとなり、如レ此の干魃の樣しも、此已前兩度有けると云々、

此年、京都知恩院立、從二右府家康公一建立、當時無双之寺院也、

此夏自二高麗一爲レ使淨雲大師と云僧來、家康公關東下向し給已後京着す、依レ之翌年春迄在京、家康公曰旨を得高麗ゟ歸朝、彼使之樣子は、先年秀吉公高麗ゟ人數被レ渡已來、自二明朝一高麗人數を設、彼番手之衆狼藉不レ可二勝計一、爲レ之迷惑す、日本無事於二相究一者、明朝衆相返、如二前々一有度之由と云々、

慶長十乙巳正月九日甲申、將軍爲二上洛一江戶を御立、淋病氣故駿府に暫有二滯留一、二月五日庚戌立給、同十九日伏見御着、

正月十五日、於二大坂一左義長在レ之、見物の者多し、然處に大藏平三道知子、當時跛の上手、人にをされ胸を打血を吐、三月十一日沒死す、上下無レ不レ惜レ之、

正月末は暖氣、二月三旬共寒す、中にも十二十三日比打つゝき、三度大霜、草木爲レ之凋、二月中雨節々降、廿五日戊の刻害少動、但當春初、其夜半に玉うち、十九日甲子雨、廿二日三日雨、廿八日九日雨、二月廿四日已己右大將立二江戶一上洛、十八日可レ有二出張一之處に、打續大雨故如レ此、國々大河船橋を掛、其行粧、

先陣館林の　榊原式部大夫　佐野修理大夫
信州小室の　仙石越前守　同深志の石川玄蕃頭
二番奥州住伊達政宗也　羽柴越前守
三番越後の　羽柴左衞門督　同　溝口伯耆守
四番甲州府中の　平岩主計頭　信州飯田の　小笠原信濃守
同國　諏訪因幡守　同高遠　保科修理頭
甲州都留郡の　鳥居彥右衞門

五番 長尾景時也 米澤中納言
六番 奥州會津の 羽柴飛驒守
七番 上總小喜の上總住 本田出雲守
八番 相州小田原の 大久保相摸守
岩付の 高力左近
九番 江戸上方衆今江戸在 酒井右兵衛大輔
同 淺野采女
同 鍋島信濃守
同 市橋小兵衛
右大將家御通鐵炮奉行金のなし 江戸衆 服部石見守
同 森河金右衛門
同 服部中
同 細井金兵衛
弓奉行三百挺、口猶々皮、 久長源兵衛
佐橋甚兵衛

信州沼田の 眞田伊豆守
松下右兵衛
同 加賀守
江戸に住本田大學助
水野市正
同 内膳
同 田中隼人
同 三枝松土佐守
屋代越中守
加藤勘右衛門
青木五左衛門尉
倉橋内匠助

鑓奉行二百さや納皮 近藤石見守
乘物かきのし付
持道具之分
鐵炮卅丁、もちてのし付 黒猶々皮、
挾箱もちのし付
右大將秀忠公乘物かき何ものし付
茶番衆
小姓衆
使番衆
大番衆
土屋民部少輔
柴田七九郎
内藤新五郎
内藤若狹守
土方河内守
滿口孫左衛門
戸川宗十郎
神屋彌五郎

都筑孫右衛門尉
引馬ひきのし付
弓もちのし付 卅張
長刀もちのし付 二枝
鑓もちのし付 五本
長谷川讃岐守
安藤對馬守
各名不レ及レ記
高木主水
安部彌一郎
牧野九右衛門
上杉源四郎
藤堂内匠介
西尾隼人
須賀攝津守
秋山平左衛門

跡部民部
阿部備中守
津田正藏
小出信濃守
眞田左馬助
永田三郎次郎
青山常陸介
堀伊賀守
又若黨馬乘奉行
同步行者幷小者
永田善左衛門
馬廻和鐵炮奉行
石川八右衛門
同弓奉行
本田百介
内藤甚五左衛門
同長刀同鑓奉行
同挾箱

柴田三左衛門
山名平吉
脇坂主水
牧野傳藏
水野太郎作
木造左馬助
水野隼人
堀讃岐守

永井彌右衛門
永田正左衛門

小澤瀨兵衛
山田十太夫
朝倉藤十郎

後陣
一番上野高崎の 酒井宮内大輔

同大湖の牧野駿河守

上總の住内藤左馬助
二番右府家康公末の子 松平上總守
三番 松平安房守
下野古河の 同 丹波守
四番 最上出羽守
五番于時出羽の住 佐竹右京大夫
六番 南部信濃守
七番 鳥居左京

上野の本庄の 小笠原左衛門

信甲衆は木曾路を出る、何も先勢江州大津に逗留、泊々日次之事

廿四日かな川、廿五日藤澤、廿六日小田原、二十七日三島大雨故、三日逗留、三月二日蒲原、三日府中、四日藤澤、五日かけ川、六日濱松、一日休足、八日吉田、九日岡崎、十日清須、二日一日能あり逗留、十三日大垣、十四日佐和山雨故一日逗留、十六日長原、

自レ是行儀にて、三月廿一日至二于伏見一着給ふ、

右大將御供衆私道具數の事

鑓炮千挺 弓五百張 鑓千本 長刀百枝 挾箱三百

此年相國寺法堂建立、是大坂自二秀頼公一一萬五千石

依二合力一也、

三月廿一日乙未、右大將伏見に御着、先陣後陣之衆同レ之、

廿九日、右大將秀忠公御參內、是は去々年之冬、被レ任二右大將一を賀し被レ申儀也、四月上旬羽柴肥前守北國の主上洛、養子犬丸を同道、則前將軍家康公へ出仕、犬丸進上物金子卅枚、加賀羽二重三百端、小袖五十也、自二家康公一刀脇指被レ下、右大將秀忠公へ犬丸出仕、進物金子五拾枚、加賀羽二重五百端、小袖百也、同肥前主進物黃金卅枚、加賀羽二重三百端也、自二右大將一犬丸へ刀脇指被レ下也、肥州家老何も右大將へ有レ禮、進物各小袖也、此犬丸は秀忠公聟也、肥前守は則有二歸國一、犬丸在二伏見一也、

四月九日、右大將金森法印へ御成、此法印于レ時家康公の氣相の人也、其晚右田織部所へ有二數寄會一、此織部于レ時數寄者也、去二月より雨繁し、大方三日に二日はふる也、同八日壬子、前將軍御上洛、十日御參內、十五日己未、雨、此日伏見へ御歸、十六日庚申、右大將秀忠公有二將軍宣下一、十七日自二伏見一上洛し給、廿日廿一二雨、五月節々雷二三度、風あらく寒し、廿四五日比、遠州駿河大水、島田茶屋をし流す、自二此時一町河に成

間、町計東に島田町立、廿六日庚午、當將軍御參內、征夷大將軍の悅申也、去廿日甲子、可レ有二參內一之由の處、打續雨故及二此日一、此度官位內大臣正二位淳和院別當牛車之宣旨也、新將軍進物、銀子千枚也、其外公家衆へ何も小袖馬以下被レ送、廿七日、公家衆新將軍へ參入、及レ晚伏見へ御歸、

五月朔日、新將軍へ大名小名有レ禮、上方大名、或銀子或小袖也、本よりの衆は太刀折紙也、馬代うす錢三百疋也、五月三日四日五日、於二伏見一能在レ之、初日四座立合、後日三日目は觀世今春迄也、此比當將軍秀忠公在伏見し給し中、秀忠公之衆の小者共と、御所家康公の衆の小者共及二喧嘩一、双方二三千つゝの人數也、手負死人兩方に數多有レ之、是は江戶にての有二意趣一如レ是と云々、七八日比、大坂下民荷物運送し、人の心不二相定一、是は此比秀賴公伏見へ上給、其上々洛し給ふ尤の由、右府家康公有二內存一、此旨從二京都之大政所一、是は太閤之北政所也、大坂宣處に、秀賴公母喜是非共其儀有レ之間敷、若違而於二其儀一者、秀賴公を令二生害一、其身も可レ有二自害一の由頻宣間、聞レ之下民周章不レ斜、秀賴公伏見へ上給事無二勿體一の由、上方大名

共の中より、大坂へ有二內通一之由云々、依レ之秀賴公上洛延引也、十一日爲二新將軍名代一竹主、右府末子十四才、大坂へ被レ越、則伏見へ被レ歸、秀賴快氣と云云、此比今度上洛之關東衆依二將軍仰一、先立て思々下國、十五日、將軍家關東下向、甚雨、然間前々か崎に泊給、十六日諸國洪水、同日雨、然共港口、十七日龜山、十八日桑名、十九日有二逗留一、廿日至二清須一着御、清須三日逗留有て、廿四日に立給、今日より快晴、廿三日雨ふる、能在レ之、廿六日濟須に有二喧嘩一、二雨月以前に、小者を打擲せられけるに、爲レ雪二其恥一と也、甲賀左馬介と云者也、小者被レ打ける者は、少身の者、名字分明不レ知、六人在けるか、彼左馬介津島に行ける歸路を待請て、六人の者打出、左馬介を討、左馬介供の者共二三人、跡より來て戰處に、侍四人中間一人被レ討、六人の者の中一人ふかく手負ける間、五人之者不レ捨レ之、家へ取籠腹を切けるとかや、一人の手負を捨て落行は、不レ可レ有二異儀一處に、日來賢◎堅カ云合ける故に如レ此、六人の者何も覺悟しける間、女房被官小者以下、悉其已前に其好々へをとしけると也、時の人上下莫レ不レ美二談之一、五月下旬、伊勢安濃津城主富田

信濃守と浮田の左京云事あり、左京妹は信濃爲二妻女一、去比左京小姓を成敗しけるに、彼小姓の知音の者爲レ散二鬱憤一、小姓を伐ける侍を剪害しけると也、是は浮田左京親類たる間、左京親父狀をそへ、信州へ遣間、相抱けるに、度々成敗可レ有レ之由、自二左京一信州へ云送、然共信州妻女にも親類たる間、于レ今抱置、其後是非共可レ有二成敗一之由云送處、何方へ哉覽闕落之由返答了、依レ之左京腹立甚也、自身勢州津へ參可二相果一之旨思立行處、折節信州爲二留守一、然處に家の年寄出合、何として御來儀御太儀之由申處に、無二是非一令二同道一相上り、於二大津邊一腰の刀を取、如二囚人一にして伏見へ召連、於二彼地一互可レ算二干戈一之處に、各令二異見一、右府家康公へ令二言上一、右府相公は蟄居同前の間、當將軍も可二言上一の由曰間、六月十五日、伏見を立關東も兩人共に下向也、六月四日、將軍秀忠公武州江戶に着玉ふ、去五月廿四日より雨不レ降、旱魃、下民悉迷惑相極也、當春日本國の船、ルソン、トキン、シヤムロへ爲二賈買一渡海の處に、如何したりけん一艘も不レ歸、右の船或當レ岩破損、或喧嘩をして被二殺害一けると云々、又爲レ取二財寶一、彼島々の蠻打殺しけ

る共云、又去年エゲレンと云處の者共、黒船を押取ける處に、日本の商船參合二商買一過分得レ利歸朝の船在り、三川矢作川を可レ被レ通とて、米津に堀をほらるる、是右府家康公の依レ仰也、彼國の知行役、幷其知行うりの桔梗屋の道圖と云者也、京町人渙レ之、當春船を多遣けると云々、十四日晩、伏見夕立雨甚、京都は不レ降、此年も干魃付て、攝州小屋の池水干魚共死、但去年の程には無レ之、去月廿三日之巳後雨不レ降、諸國旱魃甚也、

六月廿八日夜甘雨ふる、少の間の夕立也、七月朔日未申剋夕立雨甚、二日酉の剋より夕立、子丑の剋まて降、三川國はさして無二干損之儀一、五日晩、右府家康公伏見西の丸ゟ御移、本丸屋作に付て如レ斯、七月八日九日能在レ之、初二日は觀世太夫行レ之、後一日は日吉梅若八太夫仕レ之、此三人は丹波猿樂也、九日之晩より終夜甚雨、但村立のことく也、夏攝州小屋の池、去年干鯉共又死す、七月廿日、美濃尾張伊勢近江三川大水、伏見京はさして水不レ出、關東も此水不レ出、ろく川の堤西も二箇所、東も二箇所切、大柿へ水入、大柿の下も堵切、高須ゟ水入、三十年已來の水の由云々、但木曾川はさして不レ出、三川ねふの木

淺井堤切、所々水入、廿一日、右府家康公御上洛、伏見屋形造作之間、其中可レ有二在京一と也、廿二三日比より、三川矢作川を可レ被レ通とて、米津に堀をほらる、是右府家康公の依レ仰也、彼國の知行役、幷其知行百姓人足令二普請一、士は百石に二人、百姓は百斛に一人也、八月十日、關東大風大水、老人不レ覺洪水と云云、去夏中干魃、此年大凶年と云々、此水は關東中迄也、上方は不レ出、十二日右府家康公伏見ゟ歸城、九月小十五日丁亥、右府伏見を立關東下向、例式少年之息男兩所伴レ之給、十六日佐和山、兩故兩日逗留、十九日赤坂、廿日岐阜、廿一日稻葉山狩有レ之、鹿七十七留る、翌日手負鹿二留る、廿二日朝、加納へ右府打寄給、城普請出來の間快氣し給、及二未剋一立給、清須ゟ御通、兩日有二逗留一、廿五日未明に、岡崎へ御通、十月朔日、遠州中泉に着御、同十五日中泉立給、十七日駿州田中に着給、廿二日田中立給、十月廿四日、長島元河内尾州城主菅沼志摩守日來煩の間、爲二養生一令二上洛一之處、不應に頓死、此父繼部、去年八月死了、志摩守女房ゟ、去々年春死去也、同廿八日に江戸へ御着、

十月小、上旬より清須下野主腫物煩、其後腫氣、

十一月十七日、右府家康公爲二鷹野一川越をしゟ出御、廿二日京都は雪降事二寸程、廿五日於二北野一貳部喧嘩在レ之、是兵法の論故也、將軍秀忠公爲二鷹野一鴻の巢出御、十二月廿日比迄有二逗留一、

十二月小、中旬下野主煩甚危急、自二辰剋一至二午剋一偏如二死人一、然午の剋終に藥を口中へ押入る處、さて蘇生成、奇特と云々、十五日俄減、さて追日平愈也、二日於二江戸一服部石見守改易、其故は夜行して、於二町中一害レ人、于レ時誰人不レ知レ侵、然間辻切數の由訴之間、自二將軍家一町に金被レ掛、可二申出一の由被レ立レ札、其後右の仁しわさの由露顯の間如レ此、廿一日夜雪ふる、此日より打續大雪降、中にも江州大雪、深さ八尺計と云々、北國之儀は云に不レ及、廿六日、右府自二忍川越一江戸ゟ還御、此日酉戌剋、伏見火事出來、有馬玄蕃長屋より出て、淺野彈正、會津飛驒、松平飛驒、彦坂平介、大久保主殿助、同石見守、板倉伊賀守、眞田隱岐、遠山民部家失火、其外たちうり町通燒失、

此夏爲二先王追善一、叡山三井寺南都衆徒、於二內裡一御はんこう在レ之、御經始を互望レ之、從二禁中一學問器量次第可二相始一之由有二宣下一、先例も如レ此云々、山衆

含二鬱憤一留二出仕一、依レ之右府家康公へ令レ申之處に、右府も又如レ此曰、向後可レ守二此式一と云々、

十一月下旬より、信州淺間山燒事多之、然て午の正月末より不レ燒、

十二月廿一日より甚寒、雪風也、十二月十五日、南海洪波、此時八丈島の邊、大山一夜の中に涌出、

此夏高麗より爲二音信一三使來朝、專謳二無事一と云々、

慶長十一丙午正月大、朔日立春、丑剋雨、卯辰剋雪、巳剋より終日雨、二日快晴、伊豆國金山に銀子多可レ出と云々、大方は佐渡國より出る程も可レ有レ之と云也、此已前代官彦坂小刑部たりしを引替、向後大久保石見守可レ爲二代官一と也、大方は土百目にて銀百目の積になる、是は金子と銀とましり出と也、

同正月、所々失火、京邊土の吉田、奈良、てんがい、上坂本、江州の野洲、武佐、三川國吉田、赤坂、遠江の白すか、橋本、下野國館林町失火也、自二關東一上る者云、所々町々無二失火一處は大方無レ之云々、

當冬より正月十二日迄風雪降甚寒、十五日殊風烈し、同正月中旬、於二江戸一宇都宮之奧平大膳大夫屋敷の庭に生首有レ之、同比宇都宮城旗竿の上にとうの鳩子

を十二產、何も羽狀已成就し、翔翔す、同廿日比、當時筑後國主田中兵部息子主膳、（歲廿計）召遣小姓を令レ切籠二、男有二別事一過、親兄如レ此間、二男も同被二抑籠一、二月八日大雨、去正月十三日以後雨始て降、

舊冬廿一日より于レ今寒事甚、

此日關東は雨不レ降、大御所於二江戶一伊達政宗へ有二御成一、終日可レ有二遊興一之處、風特烈して、ほこり座中を吹入事甚し、依レ之膳部終て後頓て令二還御一給、此外無二御成一、將軍家は所々を有二御成一、

同二月、宇都宮山に旗出現ハ冬見レ之、同廿五日甲子、細雨、夜に入大雨、廿七日俄に風あらし、夜前戌刻、雨に珍黑雲有レ之、

三月四日、大氷降雷鳴、

當時肥後國主加藤主計頭息女（年九歲）關東を下向、榊原式部大夫息に爲レ可レ嫁也、正月七日九州を出、同廿六日至二大坂一着船、此間在京、三月九日岐阜に着輿、四十五丁、但十丁は人不レ乘、馬上之女八十三人也、相伴物頭三人か、長柄の鑓五十本餘、鐵砲七十丁餘有レ之、主計頭は此日今須に泊、直に清須を通、

三月十五日申、右府家康公江戶を出御、一昨日可二立

給二之由宣一と云共、雨故及二今日一、同廿日至二駿府一着御、來年彼地可レ有二普請一とて、其樣子順見し給、同廿五日午駿府を御立、廿六日中泉、廿七八兩日大雨大水故、天龍河船橋落る、廿九日吉田迄御出、其日雨降と云共至二岡崎一着給、同日於二鎌倉一井を堀とて、銀の茶の湯釜井小壺を堀出す、大御所江戶を御出之日路次ゟ持來、關東の事たる間、當將軍持參可レ申の由曰、江戶へ被レ遣、

四月、駿府在城の內藤豐前江州長濱へ移、駿府には家康公來年より、彼地御座所にし依レ可レ給也、

今春親大夫（當時能之上手なり）江戶へ可レ下とて、座の者共引連下處に、於二駿府一大御所曰、江戶は普請最中也、自レ是可二歸上一之由也者、則從二駿府一歸上る、大夫旅中之造作、其費徒になし失レ氣云々、

此春、關東中炎旱、麥毛一圓凶、但四月四日より雨降、駿河より西へは麥毛吉也云々、

四月廿八日、御所家康公御參內、其日伏見へ還御、二條之御座所へも上下無二御寄一、

伏見有二石垣普請一、但一萬石收より內の衆勤レ之、一萬石より上の衆は、駿河爲二普請一可レ下間、被レ除二此普請一、

羽柴肥前守息筑前守於（大事）江戶被レ下、四月出レ國、五月三日濃州岐阜被レ泊、

相國寺三門建立、是は去（壬寅）備前國金吾果給ひ、已後改易之時、餘米三萬石、羽柴三左衛門借用之通を、今相國寺ゟ從二家康公一直に令二寄進一給ふ、是を以此三門立也、

五月朔日快晴、二日三日風あらし、四日晚より五日同雨、十二十三雨、十八九より霽に入、長雨也、同六日、下野國館林城主榊原式大夫頌二臟物一痰也、同十四日巳刻死去、此兄七郎右衛門近年隱居す、此春大御所被二召出一、知行三千石被二宛行一、駿河久能可レ令二在城一之旨被レ定處に、當月朔日死去、又於二伏見西郡殿（大御所御內息女）一十四日午刻頓死、是播州池田三左衛門（性儀也）、榊式太は三左の子息之勇也、同日凶事不思議云云、

廿五日夜に入大風、三川國關東等麻爲レ之損、同大水、上方は廿年以來洪水、美濃尾張は此水無指儀、三川は所々堤切る、關東も水は無二指儀一、午五月廿五日之大風に、自二伊豆國一江戶ゟ石運送之船數百艘破損、其

内鍋島信濃守（九州衆）石舟百廿艘、加藤左馬之介（豫州衆）四十六艘、黒田筑州（筑前衆）舟卅艘也、其外五艘三艘不レ可二勝計一、同廿五日酉剋終、伏見有二光物一、縦は唐笠程之光物自レ城出、豐後橋の通と見へて落たり、其跡をちいさき光物如レ右出て、右の通へ落、又同月十三日に、伏見古宮より挑灯程の光物出て、是も右之通へ行落、又加藤主計頭屋敷より、行燈程之光物出頓て落、愛宕山にも唐笠程の光物有レ之由京町人云レ之、又やふれ車と云變化の物京中に在レ之、縦は車の通音する間、見レ之所に、目にも不レ見、昔年兩度如レ此怪異有レ之き、二度共に凶兆と云々、

去比松の丸番衆松平若狹守（于レ年於二伏見一に死す、五左衛門于、女事に付て改易也、

六月朔日巳剋終地震、同申剋終又地震、四日、去比より駿府普請、七月朔日に可レ始之由、美濃見張飛驒遠江三川へ被二相觸一の處、此日又來正月迄延引の由有レ觸、三日辰時少地震、

江戸石垣、去四月末に早普請之衆出來、則石通にうめられし堀を又ほり、五月末に出來、六月十日比、伏見歸上衆も有レ之、是は福島左衛門大夫組也、左衛門太

も六月十五日に、清須まて被レ上、廿日比に伏見へ可レ被レ着と也、自餘の衆普請出來、追々上らる、但各人數は未被二殘置一、

當代記卷四

是は慶長十一丙午の年之事也、年號此以前に書付る、

去比、江戸普請中に、福島左衛太夫（安藝備後兩國之主、池田三左衛門尉（播磨備前兩國之主、云事あらんとす、其故者、左衛門太下女闕落して三左に居、左衛門太中間、三左衛門外を通りけるか、見付て盜所之前にて押付捕レ之、侍中間出合、狼藉者成とて、彼中間搦置、左衛門太聞レ之云、國を出し時、家中の上下被二相觸一樣、此度江戸普請中、不レ可レ致二喧嘩一、人にあたまはられ於レ令二堪忍一輩は可レ有二褒美一、人を打擲し、喧嘩仕懸たる者は、一族妻子等迄、可レ行二同罪一之由令二下知一處、如レ此儀不レ及二是非一、三左屋敷に被二搦置一中間幷女、則可二返給一、以レ使被レ伸條、則被二返遣一、則刻二首を一、右之中間搦ける三左中間

共、相構不レ可レ有二折檻一之由、左衛門太より被レ申所也、三左も神妙の御存分承之由被レ申、左衛門太宿所を被二參向一、被レ及二禮謝一、又左衛門太も翌朝三左宿所を被二參入一、昨日之御出忝之由被レ伸之間、云事相濟畢、此三左衛門太夫正則短慮荒々敷して、被官以下常に戰栗之處、此度かゝる神妙成存分奇特之由、于レ時皆感レ之、或者之云、時分を被二相待一かと云々、

自二江戸一被レ上三於伏見に一加藤主計頭、各に被二相語一、御普請出來之後、一萬石に百人持之石貳つ宛上可レ申、其外儀は氣次第之由被二相觸一之間、各及二此儀に一、或は百二百、或は五十三十石を進上也、又始石を二三萬各々に借し給、是は去年將軍上洛し給時、關東に被レ殘衆々宛課、被レ聚處の石也、各石不レ寄以前に可レ被レ遣之由にて如レ此、さて普請出來の上、此石を被二返上一處、大小に付何角奉行中六ヶ敷儀有て、及二迷惑一之由被レ語、

東三川國花井山會下傳藏主と云僧、於二風來寺一法花經三千部令二讀誦一、さて花井の寺を歸、七日斷食して、十月十日に入定也、年七十八、當世の奇特と云々、

六月廿七日、安藝國嚴島の記也、彼所代官山本小兵衛

船着、相摸國三浦ゟも小黒船着、此船にも糸一萬斤在レ之と云々、薩摩國ゟも白船貳艘着、又紀伊國ゟも小黒船着、近代如レ此唐舟多來事無レ之、

同七月廿七日、自二伏見一大御所家康公上洛し給、

八月二日三日兩日、於二京都一二條御構に一能有、初日觀世脇の能行レ之、後日脇能今春也、去年大藏平三相果し後、大つゝみの上手一圓無レ之と云々、八月七日

八日兩日、於二院御所一能在レ之、初日式三番、脇能觀世左近行レ之、後日式三番、脇の能今春行レ之、同十一日、家康公幼息五郎太圭長福圭叅內、被レ任二少將一、五郎太圭は右兵衛佐、長福圭は常陸介、廿日比、少有二喧嘩一、同廿七日、大御所伏見ゟ還御、

此春比より、奥丹波ゟ舟を可レ入とて、淀川を堀けるか、此程成就して舟往來有ける、是兵糧可二運送一之支度也、嵯峨の角の藏嶋是を取行、奇特と云々、又甲斐國ゟも川舟を可レ入匠有けると也、同八月廿一日、午巳剋より申剋迄大風、此比、加藤肥後守能在レ之、觀世太夫行レ之、是者去年今春太夫に能をさせられけるを、大御所觀世太夫に能をさせられさる事を不快と聞ゟけれは、今年及二此儀一、觀世太夫に銀子廿枚、から

織の小袖一重、むす子に銀子十枚小袖一重、唐織う（ママ）す板、其外座中ゟ面々及二引出物一、又此能見物快然之由有て、唐織のよるの物十、大御所ゟ進上也、

同廿九日之夜より、翌る朔日巳剋迄大風、美濃近江伊勢大風也、尾州より東は少之儀也、四國中國は大風、濱邊ハ鹽所々ゟ入、北伊勢も鹽所々ゟ入、長島へ鹽不レ入、大島へは鹽入、九月秋も不レ熟、兩度の風故歟、關東猶以凶年と云々、

此比、院御所築地普請、越前圭秀康公の衆務レ之、

九月廿一日、亥日、大御所伏見を出御、關東ゟ下向し、給、十九日に出可レ給之處、大雨故及二此日一、

此度は、越前の中納言秀康圭在伏見し可レ給之由、大御所下知し給之間、被レ任二其儀一、

江戸本丸普請、屋形已下出來、廿三日に將軍秀忠公移徙也、

同卅日、亥子兩剋雪甚、大雨風烈、此比雪駄事近年無二比類一、此日雨故、大御所白須加に御宿、

今月中旬には、未菊替て不レ開、及二下旬一少々開、今年程遲事無レ之、

十月六日、大御所至二駿河一府中に着給、城場の事、今

の城より南河野邊と云所ゟ被レ移、來年可レ有二普請一と也、廿六日、駿府を大御所御立御下、

十一月四日、己巳至二江戸一大御所御着、

十一月六日亥剋、伊勢國桑名火事、魚町油町しよく人町本町片葉町京町は一方、以上三百間餘失火、

高麗與二日本一有二入魂一は、明朝の番手可二引取一之由付て、自二高麗一使者可レ有二渡海一由、從二對馬一以二使者一江戸ゟ被レ申、自二大御所一刀銀、其上九州にて米千石彼使に被レ下、自二將軍一同刀銀子被レ下歸國也、

駿府城場之事、此間之有增相替、此以前の居城可レ有二普請一に被二相定一、但南東北ゟ少々可レ被二取出一と也、十五日、安房國圭里見の梅鶴、於二將軍一被レ致二元服一、父は去々年死去せられける、安房國に奇特の梅木在レ之、初春に梅花咲、三月櫻の花咲、梅花は紅の八重にして香深し、櫻は一重にして白し、梅の實は尋常之梅よりもちいさく、一木にして如レ此儀、無二其類一事歟、

廿一日、大御所從二江戸一川越ゟ出御、

十二月、將軍秀忠公自二江戸一、爲二鷹野一東筋へ御出、古河下妻佐竹筋有二廻見一、是大御所依二異見一給レ如レ此、

十日乙巳、寒に入、俄に五六日さむし、此以前甚暖氣也、

此比、院の御所築地越前衆あがる、京町人仰付、始は二千人程宛出、後は五百人程也、來年中にも難二出來一と云々、此とき町人ふれなかしの者、禮錢を取令二依怙一之間、何者のしわさにや、目安を上間露顯と也、さて京中家を日記に付、三萬貳千間餘有レ之、但公家門跡方、六條本願寺神社方、寺方は此外也、されとも何共成敗の事無レ之、

此比、伊豆國金山ゟ行金可レ鑒之由、京中に札立、同諸國より下事不レ知二其數一、

廿二日丁巳之夜より、あくる廿三日巳剋迄大雨、其日終日曇、廿三日に快晴、

此冬中暖氣故、地さして不レ氷、來年旱魃の兆と云々、然者五日三日宛兩度大きに寒する故歟、諸木いたみ、蜜柑なとは枯たり、

廿三日、於二江戸一伊達の正宗息女を、上總守大御所未子嫁し給、伊賀國圭筒井在所上野の城燒も、其侍町人家悉不レ遁二此災一を、兵糧過分に失火と云々、志摩國長島の城圭菅沼新八、去年十月、於二京都一死去、其遺跡を第三の弟左近相繼、是は近年令二在江戸一、將軍に令二

近習故歟、此兄采女新八遺跡を雖レ望不レ叶、然而采女弟に新八遺跡を被レ奪、彼所に居住、無レ詮哉思けん、しうと江州之城本に居住之間、彼所に行けるか、

當月俄に死去、

此年、東山大光寺立、是は古太閤政所御願也、將軍塚の山麓地盤平け、亭大光寺洞家寺也、地形は福島左衛門太夫加藤主計頭、政所ね爲二合力一被二普請一、

慶長十二丁未、餘冬より大御所幼息長福主菟痘煩、元日辛丑、

正月朔、巳の刻終日細雨、夜に入雨也、及レ晩風烈、同日於二江戶一、大御所息女誕生、後伊達政宗息ね可レ嫁との約束也、二日の夜薄雪、江戶語初也、各ゑほしかみ下也、形儀殊ごうとう成體、近代武將に珍也、

餘冬、鴈鴨貨買、關東に一圓無レ之、爲二鷹野一つ、十已下堅成道し給間如レ此、

關東は、六七八三日大雪也、上方は小雪也、

六日、江戶大地震、但他國へ不レ動、江戶計也、七日より三日打つゞき、於二江戶一能在レ之、觀世は去年十一月下、今春は十二月下る、初日能之砌、かんだの下町二百間餘燒亡、彼町人能見物の處に如レ此、仕場居より皆退出、

同正月七日より三日之能之時、江戶にて太夫とも仕合之事、將軍より被レ下物、

觀世太夫銀百枚　今春子銀百枚

今春大太夫に銀百枚、綿百把　京町人とわきの役者也

金三枚　進藤久右衛門　金壹枚　今春わき　今藤六右衛門　小皷

同壹枚　大皷六藏、但道知弟子　大皷也

同　今春又二郎　金壹枚　同大皷　今春彦九郎　小つゞみ

同　かう清五郎　五郎二郎子　大つゞみ

同　長命太夫　同　はくこく善太郎　つれ

同　日吉　同　福王　觀世わき　觀世つれ

同　山しな彌右衛門　金貳枚　大藏彌右衛門　狂言當世上手　同上手

同貳枚　長命甚六　同　兩　鷺二右衛門

銀廿枚　高阿彌又左衛門　同　銀廿枚　同京町人大つゞみ　上田又四郎

此外猿樂共、何も銀十枚宛被レ下、

十一辛亥日、立春、殊暖氣也、大御所少々淋病御煩、

十五日、寅の刻より午刻迄雨、大御所淋病氣御惱也、

此春、大力彌太郎自害、是は大御所中間頭、財寶不レ乏者也、此事は伏見にて中間中ね兵糧被レ下けるか、關東後にて可レ渡を、上方後にて渡しける、其間の出目、大方成二引負一間、是を可レ辨由の仰を無理と心得令二自殺一と也、上下哀愍之一と云々、

十八日、夜に入雨、十九日迄雨、

此比、駿河爲二普請一越前美濃尾張三州遠江衆下る、上方衆去年江戶普請に被レ下衆、此度駿河へ悉相下、是は何も一萬石二萬石、或は千石二千石とりの少身の衆也、

長福主菟痘平愈の間、廿日にさか湯浴給ふ、同正月廿日、清須の主薩摩守元下野守、去年改名忠吉江戶下向、肥後國主加藤主計息男九才、於二江戶一死去、菟痘頽と也、此二三ヶ年爲二人質一在二江戶一也、

正月、於二伊勢一鯨をつきけるに、さめ一口に三尺四尺宛喰ける丈鯨たるへしとて、亦是をつきける、さて見レ之に、廿四五尋計有ける、わにさめと云々、

二月三日四日五日殊風あらし、六日清須薩摩守江戶被レ着、夜半江戶大地震、上方此地震無レ之、

二月十二日、於二江州佐和山一、家中物云有、西江勘兵衛と鰡石見子と爲レ及二喧嘩一、惣別者壬寅の春、兵部少輔直政死去の後、彼家中二つに成物云不レ絕、去々年大御所御通之砌聞給、石見を佐和山被二退散一、去年又御所御下之砌、清須より關東へ石見は被二召連一、此度之物云は石見息子なり、

二月十三日より江戶本丸と西の丸の間にて、觀世今春勸進能在レ之、兩御所棧敷あり、同く諸大名さ敷在レ之、知行役と云々、但一間に付永樂一貫文なり、

同勸進能の時、四日のくわんしん錢百廿貫在レ之、さしき錢六十貫在レ之、一人に十錢つゝと被二仰出一候へは、太夫とも云く、やゝ子躍なとも左樣に御座候間、外聞めいわくの由申し札を不レ立、人によりて勸進錢をとる、但何も永樂なり、

觀世今春江戶より罷上時、駿河にて大御所より下さるゝ分、

江戶小判五兩　觀世太夫　江戶小判五兩　今春太夫　狂言

金壹枚　大藏彌右衛門　金壹枚　長命甚六　同狂言

同金壹枚　同狂言　鷺二右衛門　同　京町人、當時わき也　進藤久右衛門、

去年凶年につき、此比俄米石高直、殊大御所御煩之由、京都に令二風聞一に付、猶以如レ此と云々、

清須主薩摩守於二江戶一煩給ふ、

當足利學校近代の知者なり、大御所吾妻鏡、此已前免

長老并元學校於二京都一直されしを、今披見して、文字を數にをとし置か、是を見出言上す、爲二其褒美一金三枚引出物なり、

二月十三日、美濃國加納飛驒守康(◎唐カ)犬岐阜山へ入、鹿をながら川へをい入喰客、(◎き カ)その鹿いかにも大なり、角珍きなり、縱は袋角の如し、但尋常の角の長さにして大なり、小刀を以てけつりみれは血出る、或人の云、是本々の袋角と云物也と云々、當世如レ此之角無レ之、

廿日、國と云かふき女、於二江戸一にをとる、先度の能のありつる場にて物進をす、

當冬より正月迄暖氣、二月始中終甚寒氣、從二高麗一無事扱の使隨分の人來の由、對馬より在二其告一の間、路次中泊々屋形を作り、可レ有二馳走一と也、此寒氣故、海上あるいか、于レ今無二渡海一と云々、

廿九日、大御所江戸を御立、相摸國中原に爲二鷹野一逗留し玉ふ處に、金の茶具、釜、天目、水さし、ひしやく、同柄杓置、茶酌已下、悉く紛失、是近衆の輩の仕わざかとて、供の衆上下、其夜の泊所之宿を被レ改と云とも、分明の儀無レ之、其夜番之衆あいば勝七、落合長作、岡部藤十郎、是三人を方々城に被レ預、勝七はか

け川、長作田中、藤十は沼津なり、翌朝右之釜のふたを數にをとし置か、是を見出言上す、爲二其褒美一金三枚引出物なり、

此比、たはこと云事あり、各行レ之、但後はたいるとて嫌レ之者もあり、是は南蠻より渡と云々、去年の比より京中に有、

清須主薩摩守、此中令レ煩給ひつるか、少得二減氣一、廿六日、將軍へ出仕あり、直に大御所へも可レ有二出仕一之由言上之處、大御所駿府へ御立前取籠の由曰ふ間延引、薩摩主は、此日より大久保加賀守宿所に逗留、廿八日大御所加賀守所へ入御、薩摩守と在二對面一、廿九日壬戌、大御所江戸を御立、駿河へ出御、

三月朔日、雨、越前中納言秀康越前へ下向、人數は駿河普請として、相下間、在伏見無二其全一との分別か、煩不レ可レ然間、越前へ罷下の旨、駿河へ飛脚を以令二言上一如レ此、三月板倉伊賀居所へ、虛空より礫を打、色々の祈禱をしけるとなり、

此日より江戸普請あり、關東衆務レ之、先一萬石役にくり石二十坪也、船を以可レ在二運送一とて、一萬石に五艘宛かし預る、上野國中瀨邊より運レ之、一坪と

云は、一間四方の箱に一つ也、中瀨より一箇月に兩度、此舟江戸へ上下す、

三日、晩に少曇といへとも雨不レ降風吹、

五日、佐和山城主右近大輔(今兵部少丞儀、關東へ被レ下、輔と改名)先上野國安中に可二居住一の由、大御所令二下知一玉ふ、彼地爲二私領一故也、五日戌の剋、清須薩摩守忠吉、於二江戸芝に一逝去、此中煩の中、尾張へ歸國有度之由曰、一昨日三日江戸を立、於二芝に一果玉ふなり、年廿九歲、大御所(四男)、將軍秀忠公指次一腹の弟也、秀忠公一腹の兄弟は、此忠吉計也、

六日、古薩摩守の內石川主馬、稻垣將監追腹を切、薩摩守の令レ供、

九日、夜前より雨、今朝殊に風烈して大雨也、城の塀亦は下民家破損、

近年駿河與國寺の城被レ置、天野三郎兵衛與二井手甚之助一云事あり、富士の下野原田の百姓與二三郎兵衛侍與及二鬪諍一に、百姓蒙二疵を一、於二三島一目安を上る條、双方召出及二對決一、百姓口上の旨無二相違一、其上百姓脊五六十箇所之刀疵あり、百姓退處を追付代レ之事狼藉至極せり、依レ之三郎兵衛を被二改易一、(是久き奉公者、年及二八旬一仁也、)

薩摩主逝去之事、從二江戸一以二土井大炊を一被レ申、於二小田原一可二言上一處に、右之茶具相失に付、大御所逆鱗之間不レ申レ之、於二三島一令二言上一、薩摩主日來煩之體を被レ及レ見故歟、さして無二愁傷一と云々、

十一日、大御所至二駿府一着給、

薩摩主家中、爲二駿府普請一在府、薩摩主於二江戸一死去之間、相下無用之由大御所下知あり、內々江戸より依レ仰、將軍清須へ歸上處、請取所之普請可二出來一之由、大御所曰間、自二途中一又駿河へ歸令二普請一、

十六日、小笠原監物(薩摩主自愛小姓たりしか、役取立、近年悉皆之出頭人也)去年薩摩主わ少有二述懷一、奥州わ下松島居住、自二父和泉守一告之處、則松島を出相上、今日江戸に着、十七日、薩摩主葬禮寺於二增長寺一に、小笠原監物腹切令二自害一、其體殊神妙、見人流二双涙を一、(監物小性有二佐々木清九郎と云者一、同腹切監物令レ供、是は去年喧嘩にて人殺害、其砌可レ有二成敗一を相助、依レ難レ忘二恩賞一如レ此、)同廿日、薩摩主葬禮被二執行一、不レ知二末代一、前代未聞之結構也、監物、將監、主馬、清九郎、同愚懇之吊也、龕合五、同墓も五、是不吉之兆と云々、

同三月廿五日、五百石之知行に壹人宛人夫配課、駿府

普請として可二相下一由也、先伏見ゟ上二荷物一、長持以下駿府ゟ運送すべき由被二相觸一、是畿内五箇國、丹波備中近江伊勢美濃當給人知行、幷藏入合十箇國之人夫也、去年爲二江戸普請一下る衆、幷近習輩知行は除レ之、此五百石夫、大坂秀頼公領分へも同前被二相配一相下也、此度下二荷物一之内、金銀百五拾駄有レ之、是は町々傳馬也、一駄に金は六百枚付と云々、

此荷物相下付、京畿之者共、何角謳歌之説也、

此比、古薩摩衆駿府普請指置、尾州清須へ被レ返、

廿六日之晩雷なる、北山邊夕立、廿七日、晩雷鳴、東美濃よりまめと邊迄氷降、此氷大にして小鳥なと打害す、麥麻損亡、去乙未之年四月も、上野國如レ此氷雨度降、其時も村々に降しか、此度も其體にして、東美濃にも不レ降筋有レ之、

卯月朔日、未剋より亥剋迄雨、去月九日以後是初也、下民悦二此事一也、但翌日風荒して、柿の木若枝なと皆吹切、(四月之比、梅津の僧愛宕ゟ參詣之時、山伏出合賣物を誂、京都伊賀守所へ遣すと也、)

去年堀し丹波國ゟ川舟通事、日照時は潮淺して難レ通、大水時者三箇所瀧水強して難レ通、今年甲斐國ゟ舟路を又堀也、

四日、甘雨降、但小雨也、十四日十五日同雨大雨、十五日丁未四月節也、廿日八專に入、廿一日雨、廿二日より快晴、八專二日目に雨降は永雨也と云事相違歟、

駿河普請衆中、濱松縣川吉田岡崎衆、高麗爲二馳走一本國ゟ被レ返、

此比、京都長吏爲二見廻一駿河江戸ゟ下、

同下旬、大坂町數百間燒亡、

廿七日、朝大霧降、廿八九兩日細雨

閏卯月二日甲于雨、

此比、自二伏見一金銀又百五拾駄駿河へ下、

四日快晴、

此比、大御所近習衆以下、伏見家を少々こほち、或は疊或は戸沽脚族も有レ之由風聞、

於二京伏見一何者しわさにや、猥籍不レ可二勝計一、及レ暮は通路不レ輙、

當月朔日より江戸普請、關八州幷安房信濃越後奥州出羽衆行レ之、關東衆百萬石を二十萬石宛五年に分、八十萬石にて石をよせ、廿萬石にて殿守之石垣被レ築、奥州衆伊達正宗、米澤長尾景勝、會津蒲生飛驒、

最上山縣出羽守、今愛(カ)秋田に住の佐竹、越後の堀久太郎、同國溝口伯耆、同村上周防守、右之衆は百萬石之外、何も堀普請務レ之、

此比、關東普請衆に扶持被レ下、二月々之勤定に出也、

去年之石垣高さ八間也、六間は常の石、二間は切石也、此切石をのけ、又二間築上、其上に右之切石を積、合十間殿守也、惣土井も二間あけられ、合八間の石垣也、殿守臺は二十間四方也、

後卯月六日、高麗人去月廿一日に京着、此間在京、今六日に出京關東ゟ下、勅使三人、貳人上々官人、二十六人中官、又其次八十四人、下百五拾四人、合貳百六十九人歟、右之二百七拾人之内、日本人少々在レ之、是は先年彼國ゟ打入し時、殘留居住の者歟、泊々事、守山、佐和山、大垣、清須、岡崎、濱松、掛川、藤枝、清見寺、三島、小田原、藤澤、神奈川、何も路次中、宿朝夕の餉、御分領代官衆行レ之、鞍置馬百四五拾、小荷駄馬貳百疋餘、人足三百人計也、鞍馬は路次中城々より出、幷所々船橋以下馳走也、大鷹五十本居下、是も城々より鷹師出す、但近江美濃衆之鷹師江戸迄相下、鷹は何も尾羽を切、舟にて渡故歟、

此渡海之衆、何も衣裝きらひやかならす、不審と云々、

勅使三人乘物、其内先一人、乘物之内に書物を左に置、右に人形を作、作花をもたせたり、朱にして置、是指南車の古事の木人か、此三つ之乘物は、高麗よりの乘物也、上々官人と右之貳人は、日本之乘物也、馬に乘事一段上手也、跡へもをり、先なる馬へ飛移乘る、かん能馬にも鞭をあて、走共早道共なくのる、食物は庭鳥上々同雜ふた上々、鳩上、鴨同、鶉雀同、鯛同、鮨、かまぼこ、鯉、鮒同、雲雀、鮑以下上の食物也、賤者共はにんにくを好也、茶も上々、酒を好、何も鹽物はさして無レ之、菓子以下迄大方此分也、甘き物を別而好と也、勅使三人は、路次にても左右を見事無レ之、形儀神妙也、何時も宿を出入時、如二鐵炮一なる物を三つ放、鐘鼓を打鳴す、

高麗人間、卯月廿六日江戸に着、

此度、高麗人進上大鷹、京都を四十八出けれ共、於二路次一過半をちて、二十二羽江戸ゟ參着、此内も頓鷹少し、後に聞は、八羽をちすして有けると云々、先年、大閤秀吉公ゟ、高麗より如レ之進上の大鷹有、九州にて何も鳥屋へ入來、秋の末に鳥屋を被レ出し間鷹無レ恙、

此度は長路を下故歟、右之通損たり、

閏卯月八日、午刻、越前中納言秀康主逝去、年三十四、日來唐瘡相煩、其上虛也、京都より盛法印、臘庵、道三、此三人之醫者相下、被レ用二藥一けれ共不レ叶、翌日古秀康公內長見右衞門追腹を切、年二十二、かいしやくの侍同自害す、十一日、古秀康內土屋左馬介腹を切、是は生國は甲斐國也、武田滅亡之後、家康公小性して有けるか、先年令二喧嘩一、結城に行秀康に奉レ付、去辛丑年、秀康越前へ被レ移、知行四萬石被二宛行一、大野に令二在城一、子共二三人有けるか、曾不レ及二遺言一、萬事一圓不レ構と云々、最後殊神妙と云々、かいしやくの者同令二自害一、同秀康主內本多伊豆守、是も可二自害一旨思立處、自二大御所一被二下知一被レ留畢、是萬端之用人也、

十九日、金銀八十駄、自二伏見一駿河へ下、

廿日、炎干良久、土民失レ耕二作業一、此以前折雖レ降二細雨一只土地しめる計也、

關東は麥毛一圓不熟、駿河より西へは吉、

廿四日大雨、廿五日終夜又大雨、

當年は、于レ今黑船不レ渡、是は通子去年唐船頃に告て云、船多渡海之間、糸日本に多し、今年又猶着レ船は、糸可レ爲二下直一と云々、依レ之不レ來歟、但大御所より印子壹萬御誂と云々、印子一つと云は、或は百目或百五文目有レ之と也、印子壹つを銀壹貫四百匁程の直と也、然は印子壹萬は銀壹萬四千貫目の價歟、もとより唐人は銀を吹直し、銅夾を皆吹捨、本々の銀迄を取、此度大御所命には、不レ吹して丁銀を可レ取由曰、是唐船の者共不快と云々、

同閏四月廿六日、尾州古薩摩守遺跡に、右兵衞主を被レ定、年八歲、大御所九男也、依レ之平岩主計頭先滯須に可二在城一由、大御所仰之間、平岩主計自二甲州一駿府へ參上して、貴意之旨奉レ之、則甲州に歸、廿九日朝大霧、

遠江縣川に被二居城一、松平隱岐守、是家康一腹の舍弟、父は別也、伏見に可二在城一之由、大御所同將軍令二下知一給、縣川城同本領、息男に被二相讓一、

五月二日、午の終より大雨水、

此比、大久保石見守佐渡に下、銀山仕置可レ仕之由依レ仰駿州を立、伊豆之金山銀、しか〳〵此比は不レ出と也、

六日、於二江戶一高麗人出仕、進物、人參貳百斤、虎の皮五十枚、毛氈廿枚、唐莚五十枚、むりやう百卷、大熊五

十羽、此欄過半失す、此以前に注之也、青皮廿枚也、又對馬守進物、段子五十卷、油布五十端也、

越前古秀康息男三川守、年十、此近年在二江戶一也、去月秀康死去付、去廿二日江戶を立、五月十日に越前に被レ着、翌日則秀康葬禮被二執行一、其體夥體也、大方三月於二江戶一被二執行一、清須薩摩守葬禮に相同、是も土屋左馬介、長見右衞門、其かいしやくの者兩人、合て龍五墓も五也、去三月薩摩守葬禮の時も五人、是凶兆歟の由下民歌レ之と云々、

導師知恩院長老也、布施長老に銀五百枚、此外わき長老十人計有、是に銀廿枚宛、平僧の役者に五枚つゝ也、此五枚之內を、導師長老より或は廿目或は卅目へきとられける、又萬事付入間、敷物をも是を爲レ可レ取、何角好み、短き物をも長く被レ好、京中の上下惡口、其比無二止時一、惣別此長老は氣遣爲二比與人一とて、町人檀那皆引切、他坊之僧を歸依しける間、其後は知恩院婢して、人跡絕たる體也、

同五月十日比、相國寺の兌長老從二關東一被レ上けるに、被レ持金子を於二箱根一取剱落す、是は於二江戶一從二將軍一相國寺造作に令二合力一給金也、

五月十四日乙巳、高麗人江戶を立、從二將軍一引出物被レ出、勅使三人に銀子三百枚宛、上之しや官貳人百枚宛、惣人貳十六人中上官、其下八十四人にをし入五百枚被レ出なり、

同日駿府宮か崎町火事出來、四五町失火、夜るの四つ時なれは、無二鬪次一入亂財寶を奪取、

惣て此比人を猥伐取、依レ之金を札に被レ掛けれ共、誰か仕宅共未二申出一、

廿日、高麗人自二江戶一歸上、今日於二駿府一大御所有二對面一、進物不二覺悟一間、當座卷物なとの體也、城中未家屋不二出來一之間、座中不レ久則退出、本多上野所にて振舞有レ之て、其日に藤枝迄相通、先年太閤秀吉彼國へ人數を被レ遣し時取來男女、此度召連上る、彼者共高麗に歸朝を悅事無レ限、高麗人路次中行時、常に馬を急に責ける間、馬病事無二際限一、

廿三日、駿府殿守の根石置始也、

伊豆國に山寵りの者有レ之、有難念佛を申ける、人皆歸依しける、此比は小田原山に來、身より光を放なと沙汰有ける間、上下馳走此事也、

同廿六日、平岩主計頭從二甲州一來て、滯須北之丸に在

城、本城には古薩摩守主の御前方、煩付て今在城故也、

五月廿八日、土用に入、

去月廿八日より六月三日迄、取分稠旱、あつき事不レ斜、人民皆霍亂を煩、

六月四日丑日、此日より涼氣也、土用の丑の日より秋風吹と申事封(符カ)合之、誠奇特也、

六月始之比、越中の外山に怪異有、縦は頭長く頸は鶴頸の樣也、腹如何にも大きに、足の指も三つ宛有ける、細々出ける間、鐵炮を以打ければ、玉を手に取て捨けると也、弓にて射ければ、則矢を取てをりけると也、其繪圖從二北國一京都へ持來、此はけもの岩田傳左衞門屋敷より出、傳左衞門他所へ行は、自然付て行事も有とかや、

京都將棊さし共、此比駿府江戸ゟ下、此時の上手名は宗桂と云者也、是京都町人也、是に角行弱さし手春知、觀乘坊、宗古(是は宗桂子)等也、此宗桂は、信長代よりのさして也、今年五十三歳なり、

遠江國懸川の城主松平隱岐守伏見ゟ被レ上、西之丸可レ被二在城一となり、

六月十三日、未刻より大雨也、此以前夕立雨折々なれ共催計にて、惟のぬるゝかぬれぬ程の體也、惣而當年春夏程の旱魃、近年無レ之、庶民迷惑此事也、今此雨上下の人民喜悦不レ斜、此雨より三川東國はさしての事なし、少之雨也、旱魃損亡不レ可二勝計一、

此日、駿府は地震、

此度奈良猿澤の池水干たり、少殘水に魚共いきつき居たる間、水常に濁ける、此池の水濁れは凶事となり、

宇都宮の主從二奥平大膳大夫家綱一、善知鳥と云鳥を、父美濃國加納奥平美作守信昌ゟ進獻、此鳥謠に在レ之間、日來有二一見一度との依二存分一如レ此、松前より鹽に付來、彼鳥の體、箸は鳥のはしのちいさき者也、頭は猪のしかりけのごとし、とさか在レ之、足は水鳥のごとし、水かきあり、但かけつめなし、鳥の大さはあちと云水鳥のちと長き者也、生きたる時鳴聲、千鳥の聲の高きもの也と云々、子を平砂に生捨けるか、我とそたちけると也、生立れは親餌を養けると也、此うとう四月五月六月七月在レ之而、八月より三月迄はなし、

十四日、尾張國津島の祭、宵のしかくの時夕立來て挑灯雨にきゆる、翌朝の拍子物の時も雨也、此近年の祭は天氣よし、

此春、伏見の城中に有ける金銀段子金襴以下諸財寶共、速駿州ゟ被レ下、依レ之近習之侍、内々家壘以下迄駿府ゟ運送之間、京童嘲哢不レ斜、京童に不レ限、心有人不思議の仕當の由風聞也と云々、

駿府江戸普請手レ今緊き事不レ斜、下々の者共、及二晩には一圓眼不レ見と云々、

此比九州島津使者駿河へ下、彼在府中に、船に乘遊君を召連遊ける、酒興の餘見苦敷事も有けるか、普請衆見て人嘲哢、薩摩國之習かたくちにして戲事を不レ知、被レ咲けるを恥辱と思、令二喧嘩一及二闘諍一、方々の小者共退去、池田三左衞門家中者殘留て相戰、島津使者搦置けるか、爲二後日一存追放、彼者及二恥辱一間、腹を切可レ申條、相手を御成敗可レ有之由奉行衆へ相屆、此儀爲レ私難レ治間被二言上一、さて池田三左衞門家中、于レ時普請物主と、島津使兩人成敗畢、

去六月十三日の雨以後、又旱魃、

此比於二京都一大御所朱印をまね、板倉伊賀守所ゟ持來、傳馬をあつる、伊賀守は不レ寄レ思、され共彼官の者見改ては盜人也、印判をほりたる者は洛中の者也、朱印持來者は非二京都の者一、兩人なから則令二成敗一、

七月二日甲午駿府城家屋漸出來の間、今日大御所移徙也、多武峯大織冠の木像身體腫けるか、うみて血くさし、七十年以前も如レ此の事有ける、是天下凶事と也、何時も如レ此之事は、大和國丹波市と云所より青蓮院ゟ注進し、さて奏聞有ける作法也と云々、此度も勅使を可レ被レ立と也、然共勅使立て無二相驗一、これは、二度無二歸京一作法とて、各辭退有ける、

又奥山にて、夜々に城を攻る粧あり、是天狗の所爲と云々、

十三日、駿河清水の津ゟ、賣買の米船一統四百艘着す、駿河沓谷筋船入を、五百石夫に被レ爲レ堀處、水多して被レ堀間敷とて、只一日堀レ之、其後被レ止、

七月廿五日、掃星戌刻西方に出現、光五尺計、但薄し、曉方又掃星北方に出現、是は宵の星の光に增たり、掃二間計、掃星二つ出現珍事と云々、

又邊土西の岡青塚に矢根生出たりとて見物す、縦は

古き剃刀なとのことくなるか三つあり、此以前凶事之様と云々、

廿七日、西美濃大垣城主石川長門守死去、年五十四去月廿六日大方死去に相定しか、夜半より不慮得ㇾ減、此間は殿守可ㇾ有二普請一とて、材木等被二用意一けるか、終に保死也、幼息九歳不二相替一大垣に令二居城一、

八月四日甲子少雲、六日大雨、七日朝大水、

十一日、大垣長門守葬禮也、知恩院長老爲二導師一、是ほ大御所家康公淨土宗にて被二引立一ける間樣ㇾ之

布施物導師長老銀五十枚、わき長老に五枚宛、平僧之役者二枚宛也、此時も知恩院長老何角施物に構、萬端付比興心中迄の由、京中に風聞し、

惣而此近年、當家臣下之損死其數多し、去壬寅の春佐和山井兵部少、翌癸卯之年前々か崎之戸田左門、去年丙午榊原式部兄弟幷息男、今年越前主清須主、又横須加出羽守已下、其外少身之輩不ㇾ可二勝計一、

十二日清須古參摩守女中、上野國安中ゟ被ㇾ下、母儀と一所に可ㇾ有二在住一由、大御所依二下知一也、

十四日の夜風雨、十五日朝大水、美濃國米野と云所、去夏旱魃之比、爲ㇾ可ㇾ取二用水を一、入戸をして木曾川を懸入たり、此度の大水に、入口四百間程切れ水押入、加納城堀の水と入相兼て、水入之所は不ㇾ及ㇾ申、其外何も如ㇾ海、又川戸河無二際限一出、川上より家流堤切たり、尾州三河も同前、矢作川橋落、所々堤切る、中にも米津水押入、暫不ㇾ引、

西美濃より近江幾内は、さして此水不ㇾ出と云々、關東も此水不ㇾ出、

去十日比より、主上御惱、但癒而御本復、

十五日、駿府普請衆、太刀請取の町場出來して被ㇾ上、但二の丸は半分此時出來、半分は西國衆の人數築ㇾ之、九月中に可ㇾ爲二出來一歟と云々、

石垣之事、駿府本丸百二十間四方、高さ九間、殿守の臺十三間也、二の丸八百五十間程也、其外内外之入隙合て千間程也と云々、二の丸高さ七間、間中本丸の内石垣高さ或は七間、或は五間之所もあり、

此二三箇年中、九州中國四國衆、何も城普請專也、亂世不ㇾ遠との分別歟と云々、

京都町人已下、種々恠異に付如ㇾ此歟、圖卷說と云云、

九月五日乙未亥刻終、洛中光物あり、叡山の方より南ゟ飛、駿河も同前、大方諸國如ㇾ此、十日比、愛宕山に

て見ㇾ之は、京中繼松夥有と見たり、此比より北野社社、從二大坂秀頼公一被二造改一、不ㇾ限二北野一惣而寺社佛閣、此近年造營也、秀頼公幼稚にまします、御袋の發願歟奇特と云々、故吉兆靈夢度々ありと、京中に風聞、此夜遠江國新坂町悉失火、

十一日、遠江國横須加の城主大須加出羽守長々煩に付、爲二養生一春中より在京、於二三條一夜半に死去、年廿五、幼息五歳、不二相替一横須加の主也、

十月四日甲子大御所家康公駿府より江戸ゟ下給、伏見居住の近習の輩、何も暇給て伏見へ上る、自二關東一駿府ゟ令二歸城一給はん比可ㇾ致二參上一由也、

同四日卯刻、江戸將軍姫君誕生、十四日甲戌、大御所江戸に御着、江戸將軍ゟ從二御所一金子三萬枚、銀壹萬三千貫目御渡、西の丸より本丸へ運ㇾ之、

十八日、信濃國飯田の城主小笠原兵部大輔もと信濃守、去年改名、妻室疱瘡煩被二相果一、年三十、是は大御所孫女、古三郎信康公之息女也、是は信長にも孫也、

去比隱岐守伏見ゟ被二相上一、其跡に小笠原左衛門佐岡部内膳、其外自二將軍一番手の衆相上る、彼衆伏見城中に有ㇾ之道具を相改む、是大御所依二仰一也、

於二江戸一大御所ゟ數寄に將軍御出、茶の會有、相伴の衆長尾景勝、元越後佐渡主、今奥州米澤の主也伊達正宗、元會津二本松信夫の主、今大崎岩手山の主也、但在二佐竹元常陸國の主、今愛田の主也、是三人と云々、

五百石夫、十月切に普請相務、駿河より上る、

同廿八日、大御所將軍ゟ茶之會にて御成、

十一月朔日、大御所爲二鷹野一武藏國浦半川越忍所々ゟ御出、

此五三年中、蒙二勘氣一衆七八人有ㇾ之、依二小過一知行改易之沙汰なかりしに、此比如何有けん知行を被ㇾ改、近年の所務可ㇾ被二召上一由代官中ゟ仰也、彼知行者、於二關東一大方五百石千石宛也、

在江戸丹波五郎左衛門先太閤之御時、加賀國松任主、今牢籠在江戸也、家失火、類火一間、此火飛てたやす口の門燒畢、

十一月十九日、申刻より終夜大雪、廿一日寒に入、

今年は五百石夫、駿河爲二普請一相下付、右之十箇國之百姓相詰り、年貢辨濟不ㇾ成、此冬福島左衛門太夫備後兩國主息男亂行之間被二押籠一、日來道行人鐵炮にて放懸、人屋ゟ同放入、狼藉不ㇾ可ㇾ勝計、其上父死たるとて、葬禮のまねをし、種々樣々不思議共多之間、父駿府ゟ以二使者一此旨言上し被二殺害一、

廿日より同卅日迄、寒きこと甚、近年に無レ類雪、日々夜々に降、地氷る事不レ斜、

於二大坂本丸一本因坊利玄有二圍碁一、秀頼公見物し給、利玄先にて貳番、始利玄勝、後同、利玄先に將碁、三番目本因坊先にて本因勝、

十二月小　朔日、洛中大雪也、　五日甲子雪降、

壽命院古道三弟子、證者上手也、當時文宗達者也、出家落也、十一日相煩、十四日死去、是犬枕双紙作者也、

相國寺兌長老　當時大御所無類氣相也、洛中洛外寺方公事訴被二取行一、其上金閣已下數箇寺押領、去秋始より發病、此比死去、惣別僧方無形儀にして、成人の息有なんと於二京中一嘲哢す、金銀貯甚多と云々、

遠江國原川町悉燒る、

十二日辛未大御所家康公、從二關東一至二駿河一着給、

廿一日、立春、

廿二日辛巳丑刻駿府城中失火、女房衆夜の物置所之局ゟ手燭臺を置、其火張付に移、家屋不レ殘燒亡、大御所幷若君姫君、何も女房衆無レ恙、こちやと云御末之女房、當時爲二出頭一しか、門之所にて人に踏害さる、其外男女少々死す、

一の刀箱に三十四五在レ之間、是は取出す、二の箱に七十貳在レ之間、をもくして取出事不レ叶、箱を打わり刀を取出し、泉水ゟ投入る、後是を取上、京都本阿彌召下、さひたるをは或はとき、或はぬくいける、其中に一圖さびたる多分在レ之、

此度火事に燒る物之事　白雲の壺（是は先年自二太閤秀吉公一拜領し給つる名譽の壺也、腰に白き藥廻けれは、白雲と號す、白雲は似レ帶廻二山腰一之心也）其外眞壺七つ八つ、正宗の脇指、三原の脇指等也、其外常の居所に有ける物は、不レ殘燒畢、不レ遑二枚擧一、されとも數奇の道具、各名物有二文庫一、遁二火難一、城中金銀以二奉行一燒跡を改被二取置一、其數を不レ知、又駿府南海邊に久能と云有レ山、彼地四方岩にて、如レ立二屏風一、金銀專取置、是彼番衆は榊原七郎右衛門息子也、去年父相果し後在城し有レ之、然共未知行不二拜領一、

右之外獅子笛燒失、三十年以前より、春日市右衛門と云觀世座笛吹に預けられ吹けるか、去々年相果し後、男も笛達者に吹けれは、如レ親被レ預、每年親時より多は返上ける間、此度も如レ此、大黒の笛は、十八年以前庚寅三月、太閤關東御動座之砌、武州濱山城落居時、笛主押折討死しけると也、此笛主は古彦兵衛笛上手の

男、今又是を彦兵衛と云しなり、大黒獅子とて、二の笛、今の世の名物也、大黒獅子を金にて鑒、笛の頭に入けるにより如レ此號、

廿三日、大御所小傳次と云小性の屋敷に令レ移給、是は先年家康公駿府に在城の時、伊井兵部少輔屋敷也、其時は二の丸の外たりしか、今年之普請に被二取出一ける間、今二の丸内なり、此小傳次は（年廿計）右兵衛主の母堂、未大御所に奉公以前の子也、廿四日、大御所本多上野守屋敷に御移、是も二の丸之内也、日々本丸に御出、燒跡廻見也、

女房衆私之金銀燒る事、金卅枚あちやの局、金千五百枚龜の局、（是は右兵衛主の母、是上總主の母、）其外ちやあの局、（是は長福主の母、）或は五百枚或は三百枚也、まんの局の金六十枚、火事之砌人奪取、何も銀子は此外也、

駿府城火事付、諸國大名小名參上之事、無用之由被二相觸一、

圍碁之上手本因坊、法花宗清僧也、自二京都一駿河に下、去廿日に府中に着、廿二日碁一番大御所見物之處、右之火事に付則江戸へ下、同碁打道石を始隨レ之、此度は利玄は不レ下有レ堺、此比圍碁手相之事、本因坊（是は利玄に半石强し、）年四十九、利玄年四十三、道石年廿八、五三箇年以前より、利玄と手相同事也、

十三の上手事、仙也老人鹿鹽仙甬（是仙也子、當春於筑紫喧嘩して死す、）壽齋（年五十餘、是算年廿二、是も當夏病死、）門入六藏等也、並の上手と云は、本因坊に先の碁也、

松平隱岐守伏見西の丸に、去夏より在城有けれ共、知行子レ今相渡るへき沙汰なければ、彼家中の上下疲勞不レ斜、本丸は此以前よりの留守居衆定番也、其外松丸を始、丸々番衆關東衆有レ之、

此冬寒する事、廿箇年不レ覺之由皆誦レ之、

未年は凶年歟、卅七年以前之辛未には、叡山滅亡、廿五年以前の癸未には、織田三七信長次男幷柴田修理（于時越前國主）滅亡、十三年以前の乙未には、關白秀次太閤秀吉公甥滅亡、今年丁未には、越前中納言秀康公二男清須侍從、薩摩守忠吉逝去、今又駿府城火災、何も爲二大凶一歟、

當年京田舍に人多病死す、播磨國池田三左衛門家中、此三箇年中に知行取壹大略相果、今は若黨之者迄之由云々、

此比、大御所近習の衆、萬事今日今日と云事を專云被レ戲、依レ之江戸將軍近習の衆も如レ此と云々、

慶長十三戊申年

四月朔日己丑朝少曇、未申刻日蝕也、曆には辰巳刻と出しけるか、時は違也、昔年建久九年戊午正月朔日、日蝕、是凶兆と云々、其年賴朝姉聟二品能保父子、暫時薨と吾妻鏡に有、

駿府ゟ材木爲二運送一、諸國浦々舟船相改、日記に被レ載、兵粮賣買之不レ可レ致二渡海一之由、堅被二相觸一、

舊冬駿府火事に付、女房衆五人ゟ、諸國大名小名不レ殘令二音信一、皆金銀小袖等也、

江戸將軍ゟ各出仕、元日也、

自二江戸一爲二使者一安藤對馬守駿府ゟ來る、江戸材木所々有レ之、駿府造作可レ被レ用レ之と云々、

於二駿府一大御所ゟ出仕、二日也、大坂秀賴公より使者、幷自二江戸一使者酒井左衛門尉を以、被レ遂二年頭之禮一、此日江戸諸初、

正月四日、伊勢國朝熊坊中燒亡、たゝ一坊殘と云々、

八日、於二駿府一淺間ゟ、城女房衆より湯を被二參せ一けるに、詫宣に云、火を惡しくしけかすの間、十日丑刻に、又火事有へき由被レ示、依レ之下々女房衆周章して、荷物を門外ゟ出し、無入計也、神子うつけたる事

北野社出來間有二遷宮一、御輿を松梅院遷さんとせられけれとも、曾て不レ動、然而古例を改引付を被レ見けるに、西の岡の者、昔年御輿を負けるとて、彼郷ゟ被レ尋に、ゆかりの者無レ之と云々、色々相尋けれは、京に一錢剃刀して渡世の者有レ之、彼者の先祖、昔も天神の御輿を負けるとて召出す、さて彼者來て御輿を持けれは、安々とあかりけり、上下成二奇特思一、近年北野に舞殿なかりしか、此度悉造營、次に新舞殿被レ建、則右御輿持たりし者、爲二禰宜一彼舞殿令二在社一、參詣貴賤最花餞を與レ之、

此春、秀賴公疱瘡令レ煩給時、天神御使とて色々有二吉瑞一と云々、

四日、伊勢國桑名本町家屋非餘燒亡、去々年午十一月、通二火難一町也、六日、夜前より終日雪降、

此比、大坂秀賴公疱瘡令レ煩給事甚危急也、西國中國衆密々有二見廻一、是被レ憚二家康公前一歟、中にも福島左衛門太夫急大坂ゟ參上と云々、

十日彼岸に入、此中日酉刻、入日殊緋して、日のまはりうきあかる樣に見たり、日まいけるとて、男女拜レ之、

廿七日夜より廿八日終日大雨、下民悅レ之、此已前雪雨雖レ降、徒土地しめる許也、

此比迄餘寒如レ冬、草木一圓不レ茂、花較遲、當秋も可レ爲二凶年兆一歟と云々、

秀賴公煩漸本復、北野天神影向有二奇特一と云々、

十四日、駿府城屋形悉立、

水野對馬守於二常陸國一壹萬石拜領、さて長福主ゟ被レ付、此仁實人之由云々、舊冬より此儀仰なりけれとも被二固辭一、雖レ然依レ仰終に以及二此儀一、

中山左助同五千石、同常州にて拜領し、是も鶴丸へ仰付、

此春小人島の者也とて、於二京都一鼠戸を結、代を取人に見せける、縱は日本人ならは、五六歲の童部の長也、

廿九日丁亥申終酉頭、日輪二在と云々、但日影雲間へ移歟、雲殊緋、

三月三日庚寅夜前より雨降、及二亥刻一休止、

駿府城內屋形何も瓦葺、但御座所は白鐵を以葺レ之、

十一日戊辰未刻大御所駿府城ゟ移徙、亥刻、俄雷動搖、風雨烈、但鳴而休止、

去正月、伏見傾城名字號紛失、亭主又一相尋之、此比於二肥後國一露顯、近江國大御所藏入代官下代芦澤新平と云者彼女を盜出、肥後國は小銀爲二生國一間相下、遠境山里に隱居しけれとも、尋常非二住居一とて人皆不二審之一、終以令二露顯一、彼新平をは則搦取、女をも押置、男女偕下二駿河國一、於二府中一令二籠者一、此小銀形不レ可レ耻二陵闕妾一、

園基上手本因坊、自二去正月一在二江戸一、將軍可レ下レ見二象碁一給よとて、自二京都一宗桂被二召下一、十日に十番さしける、一日に一番宛、勝負相交成レ持、象碁は本因坊宗桂對揚也、此比從二江戸一上二駿府一令二逗留一、

卯月、關東は自二年内一此比迄雨さして不レ降、當月中旬より雨頻降、

建仁寺名物之藤花、今年不レ咲、人不二審之一、

十日、碁打利玄下二着駿府一、道石と每日碁有レ之、三十番内七番道石勝越けると云々、

道石は本因坊令二同道一、六月下旬令二歸洛一、此比は女性に非有二存知人一、夜は大御所見給之一と云々、

大久保石見守去月佐渡國より下、銀子當年は曾不レ出、依レ之爲二水流し一溝を深堀、色々被二了簡一ける、まぶのあな海の地形と對揚歟、水まぶに多して難レ堀と云云、諸商人欲レ及二餓死一、如レ此條、盜人狼藉無二止時一と云々、

廿一日、駿河府中風烈して、庶民家屋少々倒る、

此日、美濃尾張大水、

此夏麥豐年也、但關東は麥凶年、

奥州南部に有レ金とて、金鑿共彼山より自二佐渡國一相下、始は無二際限一出けるか、聽而出止、又金鑿共松前より下、松前之主彼地兵粮乏間、已來飢饉兆なりとて不レ能二許容一と云々、

廿三日己卯日輪入誰かれ時より以前、光物有レ之、自レ北通レ南、去月廿九日夜子剋にも光物有レ之、

福島左衞門大夫息被二相果一間、先年被レ遣し大御所めい、此比武州關宿より自二藍州一被レ下、

五月、伊賀國主筒井伊賀守被レ召下駿府一、是彼臣下中坊飛驒守と有二云者一、彼か依二讒言一、大御所甚不快、則伊賀守を被レ下二江戸一、其子細は、自二去子年一、彼飛驒守掛二心南部一、中坊奉公かましき事を言上しける、彼取次大久保石見守依レ取二申知行一、少々代官を仕候、駿府屋作爲二代官役一、組人々作事しける、彼飛驒息子元來

繼二父跡一、伊賀守令二奉公一、飛驒此比令レ煩間、息子下二駿府一、右可レ致二作事一由飛驒令二下知一、息子則可二相下一由令二支宅一◎度カ處、伊賀守爲二我家中者一間、下儀無用由令二下知一押留之事、彼是少事令二讒言一と云々、彼伊賀守行跡、常に被官已下にも不二對面一、隱居山中に打二鹿計一、依レ之往々不レ可レ持レ家由臣下衆思儲と云々、去正月、彼伊賀守家屋に種々有二怪異一、正月二日に鹿入二臺所一、容◎害カ之、又金銀藏幷數寄屋園爐裡門外門中有レ之、同時落と云々

三川國苅屋城主水野日向守、去年十月、かふき女名字號二出來島一、隼人召連被レ下けるか、去月比引連令二上洛一、衣裝已下きらびやかにしてかふきける、內々於二聚樂一勸進にかふかせらるへきよし被二思立一けるか、不レ可レ然由知音者頻令二諫言一間被二相止一、勸進法樂にかふきける、見物貴賤成レ市、去年十月被二逮下一時、亭主に銀子參拾貫目被レ出、此度衣裝其外造作銀子七拾貫目入用由、京町人有二謳歌說一條、若輩者共見物せぬはなかりけり、

廿日、大水、

駿府中かふき女幷傾城共多して、動は有二喧嘩一、依レ之可レ拂之由大御所曰、

廿四日、伊勢大神宮有二大神樂一、是は大坂秀頼公乳母局有二參詣一、秀頼公幷御袋爲二祈禱一、二前被レ行二大神樂一、

廿六日、六月節也、

六月三日、鞍馬開張、多聞天の尊體、縱は十歲計の童兒の長也、吉祥天母◎女カの御長、毘沙門の尊體よりも耳の上ほと高し、禪西童兒之御長、毘沙門の乳のとうり也、

六月八日大水、洛中室町水押入家財浸、河內國攝津國堤上水越、美濃國より東はさして水不レ出と云々、十一日、又洪水也、去四月より今長雨、關東上方も此分也、十五日、尾州津島祭也、鹽早引故、山二つ不レ渡、十六日、今朝より快晴、

越前國古中納言秀康息女被レ下二江戸一、今日出レ國、是は毛利輝元（元安藝國を始、中國十二箇國主、今は周防長門兩國主也）息男近年被レ在二江戸一、爲レ被レ嫁二彼方一也、此比、丹波國前田主膳令二狂氣一、家老者共令二殺害一、則物狂、京近江步行し、於二水口一被二打擲一、無二正體一有樣也、扨伏見より召連令二籠舍一、彼領分幷家內自二駿河一依レ仰令二改易一、

筒井伊賀守可レ有二改易一之由大御所依レ命、自二江戸一以二使者一、桑名加納佐和山、但家中侍幷伊賀守財寶儀、無二異儀一任二其人心一、何地へも可レ遣由也、此使七月朔日、桑名本多中務加納松平飛驒守參着、則通二佐和山井伊兵部少輔殿一、

廿四日之晩より、又日々雨、

廿五六七南風烈、　西國は高鹽にて、船多以破損と云云、　廿九日、於二洛中寺町一谷出羽守息子と古蜂谷伯耆守孫子と及二喧嘩一、蜂谷孫子則死、

七月朔日、大雨洪水、同四日より雨不レ降、其後きつく炎天也、

五日、伊勢桑名美濃加納近江佐和山主出軍、　同八日、伊賀國上野城ゟ、右三人被レ移二人數一、十日に各入レ城、本丸松平飛驒守令レ居、二三丸國取にて右兩所被レ令レ居、

於二駿府淺間一、大御所末子[是福主]被レ行レ能、

廿日、此比より尾張國爲二檢地一、伊奈備前守參着、則村里被レ當レ竿、

伊賀國上野城に伊兵部相殘、飛驒守中務は可レ令二歸國一由、從二江戸一飛脚、廿六日に參着間、則兩人は歸國也、

廿八日大雨、　去三日雨後是初也、　廿九日、大雨夥降、

此夏、關東の者とて、京都ゟ來るは、腕は次第に末程ほそく、こふしの體は猶以ほそし、其先に指たゝ一つ有、酒なと飲時は、臂をあけ盃を臂にてはさみ飲、繩を能ないける、縱は手のある者よりも繩を速ないける、

七月、飛鳥井與二松下一云事有、頃年松下鞠のゆるしを出しける事不レ謂由、飛鳥井存分也、殊飛鳥井家の外、鞠のゆるし不レ可レ出由、信長秀吉御書付有、依レ之駿府ゟ被二言上一間、飛鳥井理運勿論也、

八月朔日、大水、七十年已來無二比類一由、古老申レ之、諸國堤切、村里如レ海、洛中ゟ水入、人馀多流死、諸國損亡不レ可二勝計一、

此水東三川より東國ゟはさせる儀なし、播磨より西國は尙以水不レ出、

二日より快晴、　九日より雨降、中にも十三日大雨、丑刻より大風洪水、　十二日、金森法印[若名五郎八]死去、

江戸將軍去十日に進發、十八日戌刻至二て駿府一着御、

大御所則有二對面一、進物此末に注レ之、廿日午刻、駿府殿守打鎚大工中井大和守給二祿薄一、錢千貫文、銀子袋八つ[壹袋に廿枚入]太刀等也、其外諸職人之棟梁太刀折紙引出物也、右之大工大和守任二諸大夫一、殿守の棟に五色幣三本、何も薄板染物也、

弓二挺幷矢被レ立、大御所幷將軍坐二彼砌一、

此殿守模樣之事

元段十間　十二間[但七尺間]　四方落　椽あり　二之段同

十間　十二間同間　四方有　欄干　三之段[腰屋根瓦]同十間　十二間同間　四之段　八間十間同間[腰屋根鬼板　破風何も]

白緞　懸魚銀　ひれ同　さかわ同銀　釘隱同　五之段　六間八間[腰屋根懸魚]　鰭　唐破風[鬼板何も白緞さかわ釘隱何も銀]

六之段　五間六間[屋根懸魚]　破風[鬼板白緞さか輪釘隱銀]　物見之段　天井組入　屋根銅を以葺レ之　軒瓦滅金　破風銅

懸魚銀　ひれ銀　筋黃金　破風之さか輪銀　釘隱

銀　鴟吻黃金　駄斗板　逆輪同黃金　鬼板拾黃金

廿二日、於二將軍旅宿一[駿府二の丸]大御所末子[常陸介七歲幼稚名長福丸]能仕給、廿五日朝、於二本丸一有二振舞一、刀行平被レ獻二將軍一、駿府遊女共、去比は是故下々有二喧嘩一、間被二相拂一しか、此比は又町を割被レ渡と云々、

此比、西國大名衆、駿河ゟ爲二移徙一祝儀被二相下一、

廿七日、於二駿府淺間一有レ能、今春太夫親子觀世寶生金剛行レ之、今春親太夫四番、觀世太夫翁共五番、今春若太夫寶生金剛是三人一番宛也、

九月三日、將軍秀忠公自二駿府一江戸へ御歸、今日淸見か關泊給、十日比より、畿內中國西國四國北國衆、移徒爲二祝儀一被レ下二駿河一、　進物之事、始は或は銀百枚、或は銀二百枚に、何そ相添被レ上しか、後參之衆は銀五百枚三百枚に、詩繪の長持五ゑた十ゑた相添進上也、其上各江戸ゟ相通、將軍ゟ出仕也、

此比駿府にて每夜切レ人事甚也、被レ掛レ金可二申出一旨被二下知一けれとも、于レ今無二其沙汰一、又日々有二喧嘩一、互及二死傷一、

自二江戸增長寺一、淨土宗長老駿府へ來臨、大御所三條血脈、三日精進潔齋し、十五日被レ行レ之、

去比より法花宗與二淨土宗一可レ有二法論一由、自二法花之僧常樂院一頻被レ勸、京都の法花宗內々不レ可レ然由被レ思けれとも、常樂院不レ用レ之と云々、

四國衆伊駒讃岐守妻子江戸ゟ引越、將軍快氣し給、普請役半分可レ被レ除由曰と云々、

九月十二日、大御所清須ニ御成あつて、彼國置目等ニ出ニ兵糧一、其外も秀頼公より金銀材木被レ調、此ため可ニ下知給一由、自ニ去比一度々曰しか、俄今日關東へ御ニ黄金の千枚吹のふんとうを江戸ニ被レ下、於ニ江戸一これを板金に吹けれは、右之内卅四五枚不足と云々、下、江戸には無ニ御出一、直に方々鷹野し給、將軍自ニ江尾張國當夏より被レ當レ竿、此比漸終る、此檢地始より戸一武藏の府中へ出合、遂ニ面上一給、上下の諸給人知行被ニ押置一、竿終る上、替地を可レ被ニ廿四日、爲ニ勅使一吉田左兵衛參ニ詣多武峯一、是去年春宛行一とて、先もとより奉公の衆は、古米を百石の知より大織冠木像破血出ると云々、昔年如レ此事有レ之行に付て貳拾石、近年被ニ相抱一衆は、百石に付百拾石時は、以ニ勅使一被ニ祈念一けれは平愈ありとて、任ニ古被ニ下置一と云々、何と分別しけるやらん、新參之衆退例一被レ及ニ此儀一と云々、廿日、下野◎總カ國古河の城參之者多之、平岩主計頭甲斐國知行、去夏より被ニ召燒亡、城主松平丹波守在ニ江戸一留守也、上一替地于レ今不レ渡、下々大略逐電すと云々、十月三日、鞍馬寺毘沙門開帳也、去六月より至ニ于今此二三ヶ年以前より、たはこと云物、南蠻船に來朝し日一百ヶ日の間開帳、貴賤參詣不レ可ニ勝計一、開閉兩時て、日本の上下專レ之、諸病爲レ此平愈と云々、然處此共に令ニ參詣一、青蓮院介ニ法之一給、尊體出入之儀、當時比咳レ之者、悶絶して頓死多之、又自ニ南蠻一醫師來朝衆徒妙壽院介借也、彼堂去年春、從ニ秀頼公一修理ありして云く、此たはこ吸もの雖レ有ニ發病一藥を與事如何けれとも、麁相由曰、又當夏小屋をあけ、堂の柱を以と云々、たはこの事醫書に依レ無レ之如レ此云、我朝の レ漆塗、彌結構也、是依ニ秀頼公仰一也、毘沙門御長、醫師も同レ之、縦は人ならは十歳計の童之高さ也、吉祥天女は毘沙十日比、淺野彈正妻子江戸ニ被ニ引越一、門御耳のたけほと高し、禪西童子は毘沙門御乳の通江戸の內藤修理霍亂相煩、即十日に滅す、是は將軍家ほと也と、妙壽院被レ語也、幼少の時奉レ付、此間は將軍の御前方に被レ付レ之けるか、俄如レ此、十一月五日、建仁寺新寺立、是は奥平美東山大佛、來年可レ被レ立とて、金子を自ニ秀頼公一被レ出、是を大御所より被ニ請取一、又大御所より此代に被

作守信昌建立也、從ニ美濃國加納一人夫相上令ニ普請一、此寺を號ニ久昌院一、

十一月十五日、去夏より有ニ沙汰一ける法花宗淨土宗法論之事、今日於ニ江戸新丸一可レ被レ遂ニ一決一由也、淨土宗所化衆之中、廓山と云僧を被レ出ニ相手一、彼廓山問云、五乘齊入之天願は、三佛同證の所說、如何是ニ經無得道之意趣、法花第一の常樂院屈するか、又存ニ不相應の相手由一歟、爲ニ儀兵一由存る歟、稱ニ發病由一令ニ平臥一、更に無ニ返答一、廓山進而曰、前問難レ未レ及ニ返答一、重而下ニ一問一、汝か義門擧て四十餘年未顯眞實之一句に、或執て尋常顯咄宏言家之爲秘、依之令會如來之正法、破私曲之邪義、夫未顯眞實之一文は、法華使有緣機、爲令生信受、若約佛意之遐者、五時半滿所說、聊無嫌隔、故に無量義經に、法譬合說して云、井池江河、溪渠大海、水性無差別と云へり、其上汝依經之譬喩品には、我昔從佛聞如是法、見諸菩薩受記作佛と說、文句には方等敎中開大乘實惠與令不殊と釋す矣、是法花以前の諸經、眞實得道之明文に非る耶、如何々々、此時も常樂院無ニ返答一、廓山重而訶曰、常樂院不レ叶ニ返答一者、法弟五人相寄一句謂々と、再三難レ責、全如ニ啞人ニ敢絕ニ言語一、故に宗論之任ニ法義一、常樂院幷法弟五人之法衣請ニ取之一、明鏡被レ遂ニ勝利一畢、

于時慶長拾三戊申十一月十五日

判者高野山遍照光院在判

右の法衣請取衆中之事

第一常樂院　弟子衆　第二上總國連◎來カ源判　第三堺衆

玄聽判　第四同玉雄判　第五上總國琳碩判　第六同可圓判

已上師弟六人、法衣請取者也、

土方河內守於ニ江戸一病死、日來たはこを用ける故、喉破相果と云々、是元來尾州內府信雄信長公二男無雙の臣下也、當時江戸將軍爲ニ進士一、

十二月、バンチヤア國より以ニ使者一、駿府大御所ニ令ニ音信一、大御所しやうぎに腰を掛、彼使者有ニ對面一、是は船着島商船往來地也、

十二月大、二日寒に入、二日、大御所江戸御立、同八日駿府ニ御着、去十月自ニ下向一於ニ關東一鷹野し給、白鳥一つ鶴六十取、鴈鴨は不レ知ニ其數一、

三河國足助山家代官三宅辰介親子三人被ニ生害一、知行成箇引負依レ有レ之、自ニ去夏中一被ニ押籠置一けるか、今

如レ此、嫡男は大御所近年小性して近習也、美男殊心撰神妙なりき、上下輩惜レ之、

此冬、江戸永樂錢捨て、薄錢可レ用之由大御所曰、是は近年藏に置れける永樂損しけるとて如レ此と云々、永樂貯置町人已下迷惑と云々、但又以來は可レ被レ用二薄錢一之由、下馬札歌と云々、

去秋松平周防守(于レ時下野國風間城代)丹波國前田主膳(去秋狂氣)領分令二拜領一相上、此事各匿笑、日來周防氣違以下如何有けん、上下人如レ此、於二丹波主膳屋敷上山一急被レ爲二普請一けるか、城に成間敷とて、自二十二月比一被レ止けると也、

此寒中雨節々、降雪は兩度降、霧度々降けり、寒中暖氣なり、

尾州清須古下野守自二關東一相從衆外、近年被二相抱一侍、不レ限二大小一悉被レ離二扶持一間、各令二他國一、亦于レ今清須に隱居族も有レ之、

自二關東一相從士に、去秋檢地付、于レ今知行不レ被二相渡一無足と云々、

清須小笠原和泉守、自二去夏一在二江戸一、知行は下總國さくらにて二萬八千石拜領しけるか、下野國風間城主松平周防守去秋丹波に上し後、在城者なかりける間、小笠原和泉守被レ遣、(城領三萬石也、)於二江戸一土井大炊、安藤對馬、青山圖書浴二新恩一、各本知行一倍也、是何も將軍秀忠公近士也、

舊冬就二火災一、正二月方々音信無二被踈一、

三月三日			
一貳拾	大燭臺	豐後國伊東修理大夫	
同			
一拾	中燭臺	同人	
一貳拾	手燭	同人	
一三拾	眞取	同人	
一三つ	眞取金子	同人	
三月四日			
一拾	燭臺眞取共	同九州宮木右京	
一三箱(但五貫目入)	蠟	會津飛騨守內町野左近助	
一三箱(五貫目入)	蠟	同岡半兵衛	
一貳百挺	蠟燭	吉倉六兵衛	
已上			
四月六日			
一三卷	緞子	奏者番	永井右近
同			
一壹束	杉原	比叡山正學院	
同			
一三束	杉原	同	
同			
一壹本	末廣	比叡山橫川西塔	
		同	

同			
一壹束	杉原	三州小松原寺	
同			
一壹本	末廣	同	
同			
一壹束	杉原	遠州安寧寺	
二壹本	末廣	同	
一壹束	杉原	下妻玉泉院	
已上			
四月十日			
一壹下	緞子御袴	奏者番	石川主殿頭
一拾	御料理鍋	大坂衆青木民部少輔	
一拾	錫之剪立	同人	
已上			
四月十日			
一百把	綿	奏者番	永井右近
			淺野彈正少弼
			遠山民部少輔
已上			
四月十四日			
一參拾枚	御馬代銀子	奏者	淺野彈正
同			
一四つ	御小袖	同人	
同			
一壹腰	御太刀(一文字助吉)	淺野紀伊守	
同			
一百枚	御馬代銀子	同人	
同			
一拾	御羽織	同人	
已上			
	奏者番	永井右近	

四月十五日			
一拾さし	御鷹決拾	上方衆千石取羽柴三左衛門	多羅尾久八乾平右衛門
同			
一拾筋	大緒		
一拾	御小袖		淺野紀伊守
已上			
四月廿二日			
一壹束	杉原	三州岡崎	法花寺
同			
一壹端	綾	同人	
同			
一五袋	秀蕊	高野文殊院	
同			
一五卷	純子	同衆徒中	
同			
一貳	同	同青正巖寺	
同			
一壹束	杉原	扇子	同人
一五本			
已上			
四月廿四日			
一壹束	杉原	奏者番	遠山民部少輔
一壹本	末廣	玄榮	同人
已上			
四月廿六日			
一五卷	大段子內緋純子(かん長老弟子あり)	奏者番	永井右近
			民西堂
同			
一五疋	白羽裏	同旭西堂	
一五疋	白羽裏	瑞藏主	

四月廿八日
一千枚　已上　奏者番　石河主殿頭
一同　五拾端　御馬代銀子　薩摩國主　島津陸奥守
一同　壹卷　段子　奥州父島津龍白
一同　五端　金襴　同所島津攝津守
一同　三拾　板物　京都知恩院
一五包　錫香箱　知恩院使者　榮傅
金屑丸　同人
五月朔日
一五拾　已上　奏者番　城和泉守
一拾枚　ゑひ鎭子　大坂衆長谷川式部少輔
一壹つ　紫革　同人
一貳　盆盞さんし　養安院
薰衣香　同人
五月朔日
一拾　已上　奏者番　石川主殿頭
一五つ　御帷子　毛利藤七郎
一同　御帷子　毛利宗瑞
一五つ　御帷子　讃岐國主　生駒讃岐守
一同　御帷子　福原越後守
一同　五つ　御帷子　伯耆國主　中村伯耆守
一同　貳つ　御帷子　一角弥　三州西丸　本多縫殿佐
一同　御帷子　九州衆かに住　寺澤志摩寺
一三つ　御帷子　飛驒國主　金森法印
一同　御帷子　養子金森出雲守
一三つ　御帷子　京極修理亮　丹後侍從
一同　御帷子　美濃國主　平岡平左衛門
一五つ　御帷子　九州衆木下右衛門大夫
一貳つ　單物　美濃衆西尾豐後守
一三つ　御帷子　上總衆本多出雲守
一同　御帷子　此國主若狹宰相
一五つ　單物　美濃衆德永法印
一同　御帷子　法印子德永左馬助
一三つ　御帷子　美作國主　羽柴右近
一同　御帷子　豐前國主　細川內記
一五つ　御帷子　伊勢衆九鬼長門守
一同　御帷子　大和國住　桑山伊賀守
一貳つ

一同　貳つ　御帷子　河內國衆　桑山又四郎
一同　五つ　御帷子　秋田の主　佐竹右京大夫
一同　貳つ　御帷子　奥州相馬の主　相馬大膳
一同　御帷子　下野那須衆　成田左衛門尉
一三つ　御帷子　相馬長門守
一同　貳つ　單物
一四つ　御帷子　伊勢衆古川吉左衛門
一同　三つ　御帷子　上野の沼田の主　眞田伊豆守
一同　三つ　御帷子　大坂衆速水甲斐守
一同　三つ　御帷子　同大坂衆伊藤丹後守
一同　三つ　御帷子　同　堀田圖書頭
一同　五つ　御帷子　因幡國衆龜井武藏守
一同　三つ　御帷子　大坂衆青木民部少輔
一同　五つ　御帷子　出雲隱岐國主　堀尾帶刀
一同　三つ　御帷子　此出雲隱岐國の主帶刀孫　堀尾三之助
一同　五つ　御帷子　近江國衆　朽木兵部少輔
一同　貳つ　御帷子　由良信濃守
一同　御帷子　豐後衆伊東修理大夫
一同　五つ　御帷子　美濃國衆　津田孫一郎
一同　三つ　御帷子　九州衆稻葉彥六
一同　御帷子　關東衆岡部內膳
一同　三つ　御帷子　九州衆宮木右京進
一同　御帷子　丹波衆谷出羽守
一同　貳つ　單物
一同　御帷子　奥州南部の主　南部信濃守
一同　御帷子　奥州住元常陸衆　戶津右京進
一同　御帷子　美濃衆遠藤但馬守
一同　御帷子　伊勢衆織田上野介
一同　御帷子　遠州よこすかの　松平國
一同　五つ　單物　奥州米澤　勝景
一同　三つ　御帷子　最時年寄悉皆人也　直江山城守
一同　貳つ　單物　薩摩國主　島津陸奥守
一同　御帷子　同家中島津右馬頭
一同　拾　御帷子　安房國主　里見安房守
一同　五つ　單物　大和たかとり　本多因幡守
一同　御帷子　上野國本庄　小笠原右衛門佐
一同　五つ　御帷子

同 一 貳つ　御帷子　下野衆那須權大夫
同 一 貳つ　御帷子　近州衆朽木河內守
同 一 拾　御帷子　備後安藝兩國主　羽柴左衛門大夫
已上　奏者　石川主殿頭
永井右近
西尾丹後守
城和泉守
遠山民部少輔

五月三日 一 拾　御帷子　肥後國主　加藤肥後守
同 一 五つ　御帷子　阿波國主　蜂須賀阿波守
同 一 三つ　御帷子　生駒藤太郎
同 一 三つ　御帷子　當時伊賀國主　藤堂和泉守
同 一 三つ　御帷子　九州衆今在江戸　立花左近
一 五つ　御帷子　下野佐野修理
一 貳つ　御帷子　今大和衆　松倉豐後守
一 三つ　御帷子　水谷伊勢守
一 四つ　單物　伊勢龜山　關長門守
一 三つ　御帷子　越後久太弟今江戸信濃小室　羽柴美作守
一 三つ　御帷子　仙石越前守

一 三つ　御帷子　豐後國小川壹岐守
五月三日 一 拾　御帷子　最上出羽守
一 三つ　御帷子　下野國こが城主　松平丹波守
一 三つ　御帷子　近州衆長濱　內藤豐前守
一 五つ　御帷子　信濃ふかし今松本と云　石河玄蕃頭
一 拾　御帷子　奥州岩手山　羽柴越前守
一 五つ　御帷子　伊達政宗事　松平筑前守
一 五つ　御帷子　加賀能登越中三ヶ國主　水野日向守
五月三日 一 五つ　御帷子　遠州懸川今屋敷　松平隱岐守
一 三つ　御帷子　伏見居住　松平河內守
一 貳つ　御帷子　隱岐守子今懸川の住　松平紀伊守
一 三つ　御帷子　戶河肥後守
一 五つ　御帷子　遠州濱松　松平左馬允
一 三つ　御帷子　美濃衆高橋下總守
一 三つ　御帷子　關東關宿　松平甲斐守
一 五つ　御帷子　伊勢神戶城主　一柳監物
五月三日 一 五つ　御帷子　筑後國主　田中筑後守
一 三つ　御帷子　同子　田中隼人
單物　豐後衆荒木　中川修理

一 五つ　御帷子　越中國主お犬舍弟　羽柴肥前守
一 貳つ　御帷子　大坂衆　蒔田權助
一 三つ　御帷子　越後衆　溝口伯耆守
一 三つ　御帷子　大坂衆　石川肥後守
一 三つ　御帷子　伊勢衆　分部左京亮
一 三つ　御帷子　三河吉田城主　松平玄蕃頭
五月二日 一 貳つ　御帷子　武藏岩つき　高力左近
一 貳つ　御帷子　織田民部少輔
一 三つ　御帷子　上野前橋　酒井河內守
一 貳つ　御帷子　上野ふこう　牧野駿河守
一 五つ　御帷子　大坂衆　片桐主膳正
一 三つ　御帷子　大和衆　伊東掃部

已上　奏者番　城和泉守
永井右近
西尾丹後守
遠山民部少輔
石川主殿頭

五月六日 一 拾枚　紫革　尼ヶ崎　又次郎
一 拾斤　丁子　高野無量光院

已上　奏者番　石川主殿頭

五月七日 一 三つ　御帷子　九州衆松浦法印
已上　奏者番　遠山民部少輔
五月八日 一 三つ　御單物　二條一殿
同 一 貳つ　御袷　三寶院門跡
同 一 貳つ　御帷子　與福寺門跡
同 一 壹束壹本　杉原　常菩提院
一 拾　匂袋　同人
一 拾枚　銀子　山中主水
一 五疋　羽裏　坂本新五郎
一 五端　白布　御藥屋勝七
一 貳端　かな金木綿　片山小右衛門
一 貳拾　鎭子　美濃衆中川半左衛門
一 貳つ　御同服　大和衆桑山伊賀守
一 壹下　御袴　同人
五月八日 一 拾　御帷子　桑山與兵衛

已上　奏者番　城和泉守
五月九日 一 五つ　御帷子　大坂尼ヶ崎　建部內匠

已上　奏者番　永井右近

五月十一日
一壹束一本　杉原　三河悟眞寺
五月十三日　已上　奏者番　石川主殿頭
一五つ　御筒服　中川修理大夫
一五拾枚　御馬代銀　中川内膳
一拾　御帷子　同人
五月十一日
一拾　御袷（りんず緞子有）　中川内膳
一壹對　錫剪立　高野文殊院
一拾束　高野紙　行人方
五月十八日　已上　奏者番
一五つ　御帷子　西尾丹波守
一壹つ　御枕　飛鳥井宰相
一拾　御匂袋　同人
一三つ　御帷子　同人
一三筋　御帶　閑齋
五月廿三日　已上　奏者番
一五さし　御麈決拾（針たて靜香）　遠山民部少
一二本　圍　龍庵
五月廿六日　已上　奏者番
一弐拾斤　人參　石河主殿頭
一弐拾五端　絰紬内（りうたう五）　九州柳河豐後守
以上　奏者番（むりやう）　永井右近
五月廿九日
一五束　那須紙　那須權太夫
以上　奏者番　石河主殿頭
六月一日
一五拾端　發絢　深井丹後守
一三拾枚　革　大和衆松倉豐後守
一五つ　燭臺　同人
以上　奏者番　遠山民部少輔
六月五日
一拾枚　御麈の打板　佐久間久六
一拾筋　御麈大緒　佐久間左兵衛
一拾　御麈もとをり牙（但象）　同人
以上　奏者番　石川主殿頭
六月六日
一壹つ　御ふせこ　權西堂
一壹束　杉原　文殊院弟子　宮内卿
六月六日
一壹端　綾　同人
一拾足　白布　南都五師（南都不法無益動論院院）　衆
一拾挺　油煙　同根提命寺
一五挺　油煙

一三疋　驪　同諸寺三十三箇寺
一壹束壹本　杉原　同
以上　奏者番　遠山民部少輔
六月九日
一五つ　御筒服（緞子もあり）　古田六左衛門
一拾枚　菖蒲革　秋山左三郎
一拾さし　御麈ゆかけ　大坂衆長野次右衛門
六月九日
一壹面分　碁　越前子殿府詰衆　仙石三左衛門
以上　奏者番　西尾丹後守
六月十一日
一壹束壹本　杉原　南都極樂坊
一壹束壹本　杉原　雍州西京南都　藥師寺
一壹束　杉原　大寺
一五挺　油煙　同人
一五束　杉原　甲州身延山
一壹束一本　相原　駿河閑能寺
以上　奏者番　遠山民部少輔
六月十八日
一五枚　紫革　豐後衆竹中伊豆守
六月十八日
一弐枚　うちつき　宗古
以上　奏者番　永井右近
同十九日
一弐拾疋　驪　杉若藤右衛門

六月廿一日
一五つ　以上　奏者番　遠山民部少輔
一壹箱　單物　なない謙庵
一壹袋　香物　同人
一弐張　半夏　同人
一壹本　御弓弦懸　美濃衆岡田將監
一壹つ　簀　同人
一壹つ　矢筒　同人
六月廿二日
一壹つ　御弓立　岡田將監
一拾九　御矢　同人
一壹束一本　相原　三州大樹寺
一壹束一本　杉原　光明寺
以上　奏者番　石川主殿頭
六月廿一日
一拾　單物　志摩九鬼長門守
金子　同人
一壹枚　遠山民部少輔
以上　奏者番
六月廿五日
一拾　生絹　六條本門跡
一五拾枚　銀子　同人
六月廿五日
一五筋　大緒　宮内卿
一三掛　熊皮泥　少貳法印

六月廿七日 以上 奏者番 榊原伊豆守
一五束一本 杉原 ひこの山北 院
一貳箱 三大部 同所内 藏坊
一貳つ 御樂ふるひ 大戸壽德庵
一壹束 杉原 近州佐々木神主
以上 奏者番 石川主殿頭
七月二日 白布無類 越後國主松平越後守
一拾卷 同 同人
一五拾卷 銀子御馬代 監物子堀 雅樂佐
一三拾枚 大緒 松平越後内堀 對馬守
一五筋 御帷子 同人
一五つ 蠟燭
一貳百挺 已上 奏者番 西尾丹後守
七月五日 むりやう 南禪寺傳長老
一壹卷 杉原 高雄上人
一壹束一本 杉原 高雄僧正
七月七日 杉原 奏者番 永井右近
一壹束一本 上方衆舟越五郎右衛門
已上
同 御帷子
一五つ

一三つ 御帷子 藤堂和泉寺
一五つ 御帷子 奏者番 越中子息 細川内記
已上 西尾丹波守
七月八日 御圖 淺野對馬守
一貳拾五本 紫革 中坊久三郎
一拾枚 手燭 多羅尾次郎左衛門
一貳つ 奏者番 石川主殿頭
已上
七月九日 金子 大坂秀頼公
一拾枚 紫革 赤座内膳
一貳拾枚 包丁刀 遠州二諏坊
一貳枚 小刀 同人
一貳つ 御鞍白木 イセキ
一壹口 奏者番 遠山民部少輔
已上
七月十六日 紅花 當時悉皆知行奉行 伊奈備前守
一五拾斤 蠟燭 同人
同 永井右近
一貳百挺 奏者
以上
七月十八日 金襴 ルスンの屋形
一五端 大段子 同人
一三端緋緞子も有 繻子 同人
一五端

一貳尋壹尺 猩々皮 ルスンの屋形
一貳壺 イソハニヤ酒黒酒白酒 同人
一壹端 段子 カヒタン
一五本 長蠟燭 同人
一三端 臨須 同人
一三つ 御手巾 ハテレン
一五つ内二盃 ビイトロ 同人
一貳百斤 紅花 上總衆本田出雲守
以上 奏者番 石川主馬頭
七月十九日 チリメン ルイス
一拾端 金襴 同人
一貳端 リンス 同人
一壹端
以上 奏者番 遠山民部少輔
七月廿二日 蠟燭 松平下總守
一貳百挺 西尾丹後守
已上 奏者 カホチヤの屋形
七月廿四日 キヤウ 秀頼公
一壹カラケ
八月朔日 御太刀長光
一壹腰
一貳百枚 金子 同
一五拾疋 曬 大坂衆有樂子羽柴左門
一五枚 銀子 大黒屋長左衛門

一壹本 キヤラ 同人弟
一三拾本 シユロ掃 伊勢松坂城主の事也 古田助左衛門
一貳拾帖 もりした紙二枚かけ
以上 奏者 遠山民部少輔
七月廿五日 銀子御馬代 和泉の岸和田 小出大和守
一五拾枚 御袷 同人
一拾 銀子御馬代 但馬のいづし 小出右京亮
一三拾枚 御袷 同人
一五つ 御帷子 同人
一五つ 大緒 同人
七月廿五日 御袷 江戸詰衆 小出信濃守
一五拾筋 杉原 高野大德院
一五つ 奏者番
一壹束一本 永井右近
以上
七月廿九日 曬 奈良惣町中
一貳拾疋 遠山民部少輔
已上
八月朔日 御太刀長光 秀頼公
一壹腰
一貳百枚 金子 同
一五拾疋 曬 大坂衆有樂子羽柴左門
一五枚 銀子 大黒屋長左衛門

一貳拾枚　銀子　銀座中
一貳卷　大段子　中將葉道　滴
一貳端　リンス　同荅彌三右衛門
一貳斤　大白糸　平野忠五郎
一貳斤　大白糸　萬屋一右衛門
一壹斤　五色付糸　淀や次郎右衛門
一五斤　丁子　御藥や道初子
一貳卷　セテン　いとや七郎右衛門
一貳枚　紫革　桔梗や道圓
一壹腰　御腰物來國光　越前國主越前少將
八月朔日
一壹腰　御脇指國安　越前國主越前少將
一五百把　綿　同人
一貳百枚　銀子　同人
以上　奏者番　永井右近
八月十五日
一五枚　紫革　大和衆松平右衛門
以上　奏者　遠山民部少輔
八月九日
一拾卷　リンス　小西長左衛門
一貳卷　ヒロウタウ　同人
一五拾枚　銀子　志摩關長門守
八月九日
一五つ　御ハヲリ　同人
一五つ　單物　同人
一壹帖　日本紀　吉田二位
一壹つ　御硯箱　神龍院
一壹箱　論語抄　同人
已上　奏者番　石川主殿頭
八月十三日
一三つ　御ハヲリ　豐後衆稻葉彥六
一百挺　蠟燭　堀民部
已上　奏者番　石川主殿頭
八月十五日
一壹卷　段子　東福寺南昌院
已上　奏者番　遠山民部少輔
同十六日
一貳つ　御小袖　上方衆藤堂將監
已上　奏者　永井右近
江戶將軍駿府御上之時
八月十八日
一一腰　御太刀長光
一千枚　銀子
一三拾　御袷
一拾　御帷子
八月十八日
一拾　單物

以上
同
一二腰　御太刀助重　上總主
一百枚　銀子
一百疋　越後
一貳百把　カナヒキ
以上
同
一五百挺　蠟燭　大久保相摸守
一三百挺　同　右兵衛大夫　酒井雅樂頭
同　同　土井大炊助
一貳百挺　銀子　藤堂和泉守
八月十八日
一百枚　金子御馬代　本多佐渡守
一三枚　奏者番　西尾丹後守
以上
八月十九日
一拾　薩取　大和衆松倉豐後守
一貳拾枚　金子　大坂當時出頭人　片桐市正
一三拾端　リンス　同人
巳上　奏者番　石川主殿頭
八月廿一日
一拾　御袷　當時數寄之師　古田織部
巳上　奏者　永井右近
八月廿一日
一三拾把　綿　將軍近習江戶詰衆　鳥井左門
一貳百挺　蠟燭　將軍近習十人　戶田備後守
一貳百挺　同　耶右衛門事　高木主水佐
一貳百挺　同　武鑑者の主水子　倉橋內匠助
一百挺　同　江戶近習惣三郎事　鵜殿兵庫頭
一百挺　同　同青山圖書助
一五筋　大緒　同太田新左衛門
一五サシ　御ユカケ　帶刀子同　安藤彥四郎
以上
奏者番
八月廿三日
一貳拾枚　銀子　丹波衆谷出羽守
一五つ　御小袖　同人
一拾枚　銀子　青木民部少
一三つ　御蒲團段子　同人
一拾枚　銀子　朽木河內守
一貳つ　御筒服　同人
一三つ　御小袖　同人
一貳拾　薩取　大坂衆石河伊豆守
梭櫛掃　住吉屋宗　外
八月廿三日
一貳拾本　毛氈　川勝信濃守
一五枚　紫皮　東美濃衆遠山拗九郎
一貳つ　御小袖　大和衆小出播磨守

一壹斤　紅原　堺の宗　盆
一三貝　麝香九　奏者番　大和玄修　西尾丹後守
八月廿四日
一百挺　已上　蠟燭　江戸衆大久保右京亮
一拾疋　蠟燭　江戸衆大久保主膳正
一百挺　蠟燭　同右近子　永井信濃守
一百挺　蠟燭　傳八事　同森川金右衛門
八月廿三日
一百挺　蠟燭　伊賀子　板倉周防守
一壹束　杉原　増上寺
一壹卷　段子　同所
一壹束一本　那須紙　ケイカン
一壹束一本　同　トンリヤウ
以上
八月廿五日
一百挺　蠟燭　奏者番　遠山民部少輔
一百挺　蠟燭　將軍近習小　水野監物
同　左衛門事
一壹束一本　杉原　同井上半九郎
以上　奏者番　大岸寺
八月廿六日
一貳卷　ヒロウトウ　大坂衆民　石川主殿頭
一壹束一本　杉原　部少輔本　青木法印
以上　奏者番　大見寺

一壹束一本　杉原　西傳寺
以上　奏者番　永井右近
八月廿八日
一五拾把　綿　但馬豐岡城主　杉原伯耆守
一貳拾枚　銀子　同人
一拾枚　銀子　大坂衆蒔田權佐
一三つ　御小袖　同人
一拾枚　銀子　九州衆宮木右京亮
一三つ　御小袖　同人
八月廿八日
一拾枚　銀子　河内國衆　桑山又四郎
一三つ　御筒服りんす　同人
一拾枚　銀子　大坂衆伊東丹後守
一五つ　御小袖　同人
一拾枚　銀子　大坂衆速水甲斐守
一五つ　御小袖　同人
一拾枚　銀子　同堀田圖書
一五つ　御小袖　同人
八月廿八日
一三つ　御小袖　福島兵部少輔
一貳つ　同　土上イ橋右近
一貳つ　同　佐藤孫六郎

一五つ　單物　多賀左近
一三つ　御小袖　神保長三郎
一五枚　銀子　古信長公弟　織田民部少輔
一三つ　御よぎ　今在大坂　同人
一拾本　梭櫛箒　織田民部少内　大堀治部
一壹端　段子　もすや宗　觀
一壹箱　朝倉山椒　織田民部少内　長野次助
一貳つ　御小袖　福富兵部大夫
已上　奏者番　西尾丹後守
禁中より
一御太刀　一腰　金子御馬代
一壹枚　金子御馬代
以上
一貳つ　御小袖　公家衆廣橋大納言
一貳つ　御小袖　同勘修寺中納言
一壹面　ゴケ　井家攝津守

一五筋　大緒　速水右兵衛尉
一拾サシ　御腰ユカケ　立入河内守
一三枚　皮　速水右近大夫
一五口　御鞍　湯淺右近
一五筋　大緒　亭祐法印
一五つ　足持せ　石川肥後
一拾枚　銀子　同人
一貳つ　御小袖　山名伊豫守
一拾枚　紫革　大和衆鈴木越中守
一壹束　杉原　相國寺鹿苑院
一壹卷　綾　同人
一貳冊　跡文　同人
一貳束　杉原　知恩院
一壹端　板物　同人
一三拾枚　銀子　豐後小川壹岐守
一百把　越前綿　同人
一三拾枚　銀子　大和衆福島播部助
一拾　御小袖　同人
一貳冊　職原抄　當知者やそく事　中院中納言入道
一拾　御小袖　伊勢神戸城主　一柳監物

一百枚　銀子　伊勢神戸城主　一柳監物
以上　奏者番　永井右近
九月二日
一拾　御小袖　丹波福知山　有間玄蕃頭
一貳枝　長持　時絵　同人
一百枚　銀子　同人
一三つ　御夜物唐織　阿波國主　蜂須賀阿波守
九月二日
一五俵　臺子　同人
一百枚　銀子　讃岐國主　生駒讃岐守
一三枚　虎皮　同人
一三丈四尺七寸猩々皮　銀子　京極舍弟　羽柴丹後侍從
一百枚　越前綿　同人
一三百枚　銀子　大和詰衆　大和弟也　小出大隅守
一百枚　御小袖　此國主若狹宰相　樞原伊豆守
一五つ　以上　奏者番
九月四日
一拾　御小袖　出雲隱岐の國主　堀尾帶刀
一拾枝　御長持　同人
二百枚　銀子　同人
二貳拾　御小袖

一貳百枚　銀子　出雲隱岐の國主　堀尾帶刀
御夜物唐織　伯耆國主　中村伯耆守
一貳つ　一角事
一壹つ　錦の御蒲團　真綿　同人
一三枝　御長持　時絵　段子の褥　同人
一百枚　銀子　同人
一拾　御小袖　淡路國主　脇坂淡路守
一五十枚　銀子　同人
一拾　御小袖　加藤左衛門尉
一三拾枚　銀子　同人
一五拾把　美濃綿　遠藤但馬守
一三拾枚　銀子　同人
九月四日
一百把　越前綿　美濃衆　西尾豐後守
一三拾枚　銀子　同人
一百把　越前綿　三州苅屋　水野日向守
一五拾把　越前綿　吉田松平玄蕃頭
一貳百把　美濃綿　三州四郡　同　主殿頭
一百把　江戸綿　岡崎　本多豐後守
一五拾把　江戸綿　三州衆同　縫殿助
二貳拾　江戸綿　小田原衆三郎左衛門事　戸田土佐守
三州衆丹場　勘介

一五拾把　江戸綿　尾里助右衛門
以上　奏者番　石川主殿頭
九月五日
一五百枚　御馬代銀子　安藝國主　羽柴左衛門太夫
同
一五つ　猩々皮、カッハ　同人
一五枚　虎皮　同人
一五つ　御小袖　筑紫衆　毛利伊勢守
一三拾枚　御馬代銀子　同人
以上　奏者番　遠山民部少輔
同六日
一壹つ　御香爐　道標
一三拾さし　御腐決拾　上杉　上條
一五つ　片口　佐々木次郎左衛門
一壹束一本　杉原　地藏院
以上　奏者番　樞原伊豆守
同七日
一拾　御小袖　奥州岩手山　伊達政宗事　羽柴越前守
一三つ　御小袖　景勝
九月七日
一貳つ　御小袖　直江山城守
一三つ　御小袖　出雲堀尾帶刀
一三つ　御小袖　同　三之助
一貳つ　御小袖　石川玄蕃

一三つ　御小袖　此國主若狹宰相
一貳つ　御小袖　筑紫衆　高橋右近
一貳つ　御小袖　生駒藤三郎　唐津の住
一三つ　御小袖　筑紫名護屋　寺澤志摩守
一貳つ　御小袖　美濃衆　永德左馬助
一貳つ　御小袖　大坂衆　桑山又四郎
一貳つ　御小袖　上野の眞田伊豆守　沼田上總介
一貳つ　御小袖　本多出雲守
九月七日
一貳つ　御小袖　上野酒井河內守
一三つ　御小袖　安房國主　里見安房守
一三つ　御小袖　下野佐野修理大夫
一貳つ　御小袖　毛利藤七郎
一五つ　御小袖　宗瑞
一貳つ　御小袖　京極舍弟　丹後侍從
一三つ　御小袖　志摩九鬼長門守
一貳つ　御小袖　丹波福知山　有間玄蕃
一貳つ　御小袖　藝州羽柴左衛門大夫
一四つ　御小袖　加藤肥後守
一四つ　御小袖　阿波國主　蜂須賀阿波守
一三つ　御小袖　丹波國衆　谷出羽守
一五つ　御小袖　同　三之助
一貳つ　御小袖　石川玄蕃

九月七日
一貳つ　御小袖　遠州掛川今在伏見　松平隱岐守
一貳つ　御小袖　松平河內守
一貳つ　御小袖　古田兵左衛門
一四つ　御小袖　越中加賀能登伊勢神戸　羽柴肥前守　一柳監物
一貳つ　御小袖　豐後衆伊東修理
一貳つ　御小袖　大坂衆石川肥後守
一貳つ　御小袖　九州衆稻葉彥六
一貳つ　御小袖　織田上野介
一三つ　御小袖　美濃西尾豐後守
一貳つ　御小袖　島津右馬頭
一貳つ　御小袖　越後久太郎弟在江戶　分部左京亮
一三つ　御小袖　美作國主　羽柴美作守
一五つ　御小袖　豐前國主　羽柴右近　細川內記
一貳つ　御小袖　松平甲斐守
一貳つ　御小袖　豐後小川壹岐守
一貳つ　御小袖　美濃衆市橋下總守　永井右近
以上
奏者番　石川主殿頭

九月八日
一貳つ　御小袖　遠州横須賀　松平國
一貳つ　御小袖　美濃衆遠藤但馬守
一貳つ　御小袖　九州衆戶澤右京
一貳つ　御小袖　奧州南部信濃守
一三つ　御小袖　奧州南部伯耆國主　中村伯耆守
一貳つ　御小袖　大和衆本多因幡守
一貳つ　御小袖　信濃小室　仙石越前守
一貳つ　御小袖　奧州相馬之主　相馬大膳
一貳つ　御小袖　伊勢龜山　關長門守
一三つ　御小袖　佐竹右京大夫
一貳つ　御小袖　美濃德永法印
一貳つ　御小袖　那須太郎
一五つ　御小袖　讃岐國主　生駒讃岐守
一五つ　御小袖　出羽最上出羽守
一貳つ　御小袖　因幡とつとりの城主　池田備中守　西尾丹後守
以上
奏者番　永井右近　遠山民部少輔　榊原伊豆守

九月八日
一壹腰　備前國主　松平武藏守
一五百枚　銀子　同人
一貳拾　御小袖　同人
一百把　綿　同人
一百枚　銀子　同人
一拾　御小袖　因幡とつとりの城主　池田備中守
一五拾枚　銀子　中國衆山崎左馬允
一五つ　御小袖　同人
一貳百枚　銀子　土佐國主　山內對馬守
一貳拾　御小袖　同人
一貳百枚　銀子　伊豫衆加藤左馬助
一三百把　綿　同人
一貳つ　御夜物段子　左馬子　加藤式部少輔
一壹つ　御蒲團段子　同人
一百枚　銀子　美作國主　羽柴右近
一貳拾　御小袖　同人
以上
奏者番　西尾丹後守

九月九日
一五拾枚　銀子　有樂
九月九日
一三つ　御夜物　同人
一壹口　御鞍　同人
一壹掛　御鐙　同人
一三拾枚　銀子　美濃衆織田孫一郎
一拾　御小袖　同人
一百枚　銀子　出羽國最上出羽守
一五拾把　最上綿　坂上紀伊守
一壹卷　白綾　近州一ノ宮山寺　世尊院
一壹束　杉原　同人
一壹枚　紫革　祝丹波
一貳枚　革　矢橋喜入
以上
奏者番　石川主殿頭

九月十一日
一拾枚　銀子　伏見居住の衆　佐久間久右衛門
一三つ　御小袖　同人
一三つ　御小袖　平遠江守
一貳つ　しと子　駿府詰衆　桑山鍋
一三つ　御小袖　同詰衆島　彌左衛門
一壹束　杉原　宗把

以上　奏者番　永井右近
一五枚　菖蒲革　八幡山豐藏坊
以上　奏者番　西尾丹後守
九月十六日
一貳丁　大鼓の革大小　丁　全
九月十六日
一壹丁　大鼓の皮　丁　全
以上　奏者番　永井右近
一壹腰　御太刀長光　松平筑前守
一千枚　銀子　同人
一三拾　御小袖　同人
一五つ　御小袖　筑前内横山山城守
一五つ　御小袖　同奥村伊豫守
一百把　關東綿　遠江久久野三郎左衞門野衆
一貳っ　御蒲團　桑山左衞門佐
一貳拾枚　銀子　同人
一貳拾　鉗合子蒔繪　大島與兵衞
一三つ　御小袖　同人
以上　奏者番　榊原伊豆守
一貳拾　御小袖　安藝毛利子松平長門守
一五百枚　銀子　同人
一拾枚　菖蒲革　毛利年寄福原越後守

一壹腰　御太刀光忠　羽柴肥前守
一百枚　金子　同人
九月十九日
一貳百端　紅はふたへ　同人
一拾枝　御長持　同人
一五つ　御小袖　羽柴肥前内松平伯耆守
一壹束壹本　杉原　法然寺
一壹束壹本　杉原　最上の館行藏院　石川主殿頭
以上　奏者番
九月廿一日
一貳拾疋　羽重　山門三院
一壹束壹本　杉原　神光坊
一壹束　杉原　遠州かすい　永井右近
以上　奏者番
同廿三日
一拾　御小袖　伊讃に住元藝州津の城主　富田信濃守
一五拾枚　銀子　同人
以上　奏者番
同廿四日
一壹束　那須帛　江尻江成寺
以上　奏者番
同廿五日
一貳つ　御小袖　大和衆本多若狹守
一拾　合子蒔繪有　同人

一壹束壹本　杉原　千江別當
一三束　杉原　大山八大坊
一五束　杉原　同八大坊隱居
一拾枚　毛氈　石川日向守
巳上　奏者番　永井右近
九月廿七日
一貳拾枚　紫革　讃岐國主生駒讃岐守
一壹束壹本　杉原　清須の正覺寺
巳上　奏者番　石川主殿頭
同廿八日
一貳つ　御小袖　織田民部少輔
以上　奏者番　遠山民部少輔
同廿九日
一壹束壹本　杉原　三州岡崎源空寺
一壹束壹本　杉原　隨念寺
以上　奏者番　永井右近
九月廿九日
一五つ　御小袖　薩摩島津陸奥守
一貳つ　御小袖　筑紫衆秋月長門守
以上　奏者番　西尾丹後守
十月二日
一壹束二本　杉原　横須賀仙養寺
以上　奏者番　遠山民部少輔
同四日
一五つ　御筒服陵子有輪子　分部左京亮

一貳拾枚　銀子　分部左京亮
一拾　御小袖　飛騨金森出雲守
一三拾枚　金子　同人
一壹束壹本　杉原　山中寶藏寺
一壹束壹本　杉原　安樂寺
一壹束壹本　杉原　妙眞寺
一壹束壹本　杉原　岩村城國寺
一壹束三本　同　報土寺隱居
一拾本　扇子　こかの不動院生越イたうせの山本坊
一拾本　同　石川主殿頭
巳上　奏者番
同七日
一壹卷　繪子　近州柏原成菩提院
一拾本　扇子　意白
一壹束一本　杉原　江戶天德寺
十月五日
一貳束　杉原
一壹束一本
同
一壹束三本
扇子
一拾本
同
一拾本

一壹束一本　杉原　本泉寺
以上　奏者番　永井右近
十月五日
一壹束一本　杉原　大朝
一壹束一本　杉原　新知恩寺
一壹束一本　杉原　仙林寺
一貳束　那須紙　大山寺八大坊
以上　奏者番　西尾丹後守
十月十日
一五つ　御小袖　美濃衆德永左馬助
一五拾枚　銀子御馬代　同人
以上　奏者番　遠山民部少輔
十月十一日
一百枚　銀子　松平伯耆守
一百把　綿　同人
一壹束一本　杉原　比叡山南光坊
以上　奏者番　永井右近
十月十一日
一壹束一本　杉原　長床坊
一壹つ　御簡服　稻葉彦六
一壹つ　御紙子但御簡服　同人
以上　奏者番　永井右近
同十二日
一三十枚　砂金御馬代　南部信濃守

一三卷　セテン　西岡の光明寺
一五拾　御弓ユカケ　青山石見守
一三筋　大緒　青山左近
一貳つ　御小袖　筑紫唐津衆寺澤志摩守
一五十枚　銀子　同人
以上　奏者番　石川主殿頭
十一月十四日
一拾指　御ユカケ　豐後衆伊藤修理大夫
以上　奏者番　遠山民部少輔
一貳つ　御小袖　大和衆松倉豐後守
以上　奏者番　石川主殿頭
同十六日
一貳つ　御小袖　青木法印
一壹つ　御茶椀　同人
一壹つ　御茶杓　同人
以上　奏者番　永井右近
一壹卷　ビロウトウ　伴天連
一壹卷　錦　同人
一壹面　銕南蛮　同人
一四十五枚　口唐紙　同人
一五拾挺　南蛮らうそく　同人
一三枚　紫皮　島田新十郎

一三本　小刀　アカハヤシ
一貳拾把　綿　毛利播部
一貳つ　紺フク　武藤清兵衛
十二月廿一日
一貳つ　已上　奏者番　石川主殿頭
御小袖　羽柴對馬守
已上　奏者番　西尾丹後守
一三つ　御ハサミ箱　山岡主計頭
一拾枚　銀子御馬代　同人
一五つ　御小袖　出雲子今飛驒守　金森五郎八
一五端　唐木綿　三郎右衛門　遠山民部少輔
已上　奏者番
廿六日
一三つ　御小袖　此國主若狹宰相
一四つ　御小袖　藝州羽柴左衛門大夫
一四つ　御小袖　肥後國主加藤肥後守
一五つ　御小袖　越中子息國主豐前國主細川內記
一貳つ　御小袖　、片桐主膳
一貳つ　御小袖　九州宮木右京
一貳つ　御小袖　關東衆岡部內膳
一貳つ　御小袖　大坂速水甲斐守
一貳つ　御小袖　大坂伊藤丹後守

一貳つ　御小袖　丹波衆谷出羽守
廿六日
一三つ　御小袖　堀尾三之助
一三つ　御小袖　出雲國主堀尾帶刀
一貳つ　御小袖　青木民部
一二つ　御小袖　羽柴刑部法印
一二つ　御小袖　志摩九鬼長門守
一二つ　御小袖　美濃德永左馬介
一貳つ　御小袖　美濃遠藤但馬守
一二つ　御小袖　奧州住元常陸衆戶澤右京
一貳つ　御小袖　筑紫衆高橋右近
一二つ　御小袖　佐久間久右衛門
一三つ　御小袖　石川玄蕃頭
一貳つ　御小袖　本多因幡守
廿六日
一貳つ　御小袖　美作國主羽柴右近
一貳つ　御小袖　豐後小川壹岐守
一三つ　御小袖　松平伯耆守
一貳つ　御小袖　吉川藏人
一貳つ　御小袖　關長門守
一三つ　御小袖　美濃金森出雲守
一三つ　御小袖　羽柴丹後守

一貳つ　御小袖　平岡平右衛門
一貳つ　御小袖　豊後衆木下右衛門大夫
一貳つ　御小袖　松平丹後守
一貳つ　御小袖　元大和大納言衆今駿府詰衆小堀遠江守
一三つ　御小袖　九州寺澤志摩守
一貳つ　御小袖　生駒藤太郎
一貳つ　御小袖　桑山伊賀守
一貳つ　御小袖　桑山又四郎
一貳つ　御小袖　伊賀國衆去年より大和に住松倉豊後守
一貳つ　御小袖　津輕越中守
一貳つ　御小袖　信州眞田伊豆守
一貳つ　御小袖　美濃衆西尾豊後守
一三つ　御小袖　水谷伊勢守
一六つ　御小袖　毛利輝元是松平長門守長門周防主毛利輝元事
一貳つ　御小袖　毛利宗瑞
一貳つ　御小袖　毛利伊豫守
一貳つ　御小袖　福原越後守
二貳つ　御小袖　來島右衛門市
一貳つ　御小袖　元九州衆今在江戸立花左近
二貳つ　御小袖　日根織部

一貳つ　御小袖　下野國衆那須權太郎今大坂詰衆石川肥後守
一貳つ　御小袖　有馬左近
一貳つ　御小袖　元美濃衆今一柳監物伊勢に住
一五つ　御小袖　能登越中加賀三ケ國主羽柴肥前守
一貳つ　御小袖　攝州衆有馬玄蕃頭
一貳つ　御小袖　小田孫市
一貳つ　御小袖　稻葉大夫
一拾　御小袖　奥州伊達政宗事羽柴越前守
一三つ　御小袖　中川修理
一貳つ　御小袖　北條大之助
一貳つ　御小袖　美濃衆市橋下總守
一貳つ　御小袖　中國衆池田備中守
一貳つ　御小袖　松平紀伊守
一貳つ　御小袖　淺野彈正少弼
一三つ　御小袖　元常州佐竹本今秋田の主佐竹右京大夫
一貳つ　御小袖　奥州衆相馬長門守
一貳つ　御小袖　奥州衆相馬大膳正

同一貳つ　御小袖　東美濃衆稻葉右近
同一貳つ　御小袖　九州衆伊藤修理大夫
同一貳つ　御小袖　遠州濱松住松平左馬助
同一貳つ　御小袖　豊後稻葉彦六
同一貳つ　御小袖　分部左京亮
同一貳つ　御小袖　遠州横須賀松平國
同一貳つ　御小袖　今下總國主内藤左馬助
同一貳つ　御小袖　島津薩摩國主羽柴陸奥守
同一貳つ　御小袖　同家中島津右京亮
同一貳つ　御小袖　藤懸美作守
同一貳つ　御小袖　近州前々か崎住上野の本庄三州吉良住小笠原左衛門佐
同一貳つ　御小袖　戸田左門
同一五つ　御小袖　本多縫殿佐
同一貳つ　御小袖　石川主殿頭
同一貳つ　御小袖　永井右近
同一貳つ　御小袖　西尾丹後守
同一貳つ　御小袖　遠山民部少輔
以上

十二月廿六日
一五つ　奏者番　御小袖　奥州米澤主元越後佐渡主景勝

同一貳つ　御小袖　同家中但悉皆也直江山城守
同一貳つ　御小袖　江戸衆土屋民部少ィ輔
同一貳つ　御小袖　美濃衆德永法印
同一貳つ　御小袖　信州小室に住仙石越前守
同一三つ　御小袖　播磨の三左衛門息今備前國主松平武藏守
同一貳つ　御小袖　三川兎屋水野日向守
同一貳つ　御小袖　遠州横須賀松平國
同一貳つ　御小袖　今下總國主内藤左馬助
同一貳つ　御小袖　關東關宿の主松平甲斐守
同一貳つ　御小袖　九州肥後に住今加藤主計と不相相良左兵衛
同一三つ　御小袖　播磨衆龜井武藏守
同一五つ　御小袖　九州筑後國主田中筑後守
同一貳つ　御小袖　元右馬允被官今直參になる稻垣平右衛門
同一五つ　御小袖　筑後子田中隼人
同一貳つ　御小袖　三州吉田松平玄蕃頭
同一貳つ　御小袖　六郷兵庫守◎頭カ
同一貳つ　御小袖　南部信濃守
同一貳つ　御小袖　大坂衆蒔田權佐

同一五つ　御小袖　中國衆蜂須賀阿波守
同一貳つ　御小袖　遠州衆松平河内守
同一貳つ　御小袖　今近州長濱に住内藤紀伊守
同一貳つ　御小袖　那須衆成田左衛門尉
同一貳つ　御小袖　遠州衆久野三郎右衛門
同一貳つ　御小袖　上野大畑に住牧野駿河守
同一三つ　御小袖　房州衆里見安房守
同一貳つ　御小袖　羽柴美作守
同一貳つ　御小袖　近州高島但河内子朽木兵部少輔
同一廿把　越前綿　朽木河内守
同一貳つ　御小袖　松平將監

以上　奏者番　永井右近

石川主殿頭
西尾丹後守
遠山民部少

十二月廿八日
一貳つ　御小袖　伏見居住駿府詰衆猪子内匠
一五筋　大緒　駿府詰衆赤井豐後守

同一五枚　紫革　松田三郎兵衛
同一三枚　うちつき　駿府詰衆小堀藤三郎
同一壹つ　てふき　小倉忠右衛門
同一壹卷　段子　駿府詰衆森左兵衛
同一五卷　しゆちん　筑紫衆有間修理
一拾さし　もろゆかけ　同人

以上　奏者番　永井右近

去慶長五庚子年已來進物、每年大概以如レ此、年々之儀以レ之可レ知レ之、

當代記卷五

慶長拾四己酉年正月小元日甲申

元日、甲申駿河江戸士出仕如二每年一、美濃國伊勢國先方衆、於二駿河一無二越年一、大御所無興し給、同日、江戸品川町火事、

四日、江戸本町火事、五町程燒亡、石川玄蕃家有二此內一、

七日、庚寅大御所爲二鷹野一遠州ゟ御出、其上尾州迄可レ有二御出一と云々、

十三日、遠州中泉を御立、其日濱松、十四日吉田、十五日吉郎ⓒ良カ御逗、於二吉郎一目安を上者有、是は古下野主被官也、大御所見レ之給、壹人近寄て子細可二言上一由曰、彼士十人計刀指なから走寄ける間、大御所驚給、彼等を可二成敗一由曰、則退散處、歩行士共追レ之、其中に壹人拔刀戰死ける、相殘者行方不レ知、

十五日、江戸未の町燒亡、

近日大御所清須ゟ可二着給一とて、清須城掃除しけるに、殿守上の段之戸不レ明、無理に押明けれは、人有かきの手に輪違を付たを着、鑓の實を二つ砥てそ居たりける、偖彼者を糺問しけれは、尾州内さなけ者とそ申ける、盜人にても無レ之間、當座に成敗もなかりしか、十四五日中に死ける、

十九日、壬寅石兵衛主大御所末子、于レ時十歳、駿府を出被レ上、是は大御所於二岡崎一出合、清須ゟ依レ可レ有二同道一也、

廿日、大御所自二吉郎一岡崎ゟ御着、

武州關宿城燒亡、

廿三日、右兵衛主被レ着二岡崎一、

廿五日、大御所右兵衛主清須ゟ御着、

清須古下野御衆有二知行配當一、去午年下野主被レ爲二加增一ける通、或は二千石千石、或は五百石三百石分、何も此度被二召上一、又去年秋、被レ當二罕時一、高六萬石減しける分を割合、喩は六百が千石に成と云々、右衆知行所、或は五ヶ所十ヶ所、或は十五ヶ所二十ヶ所にて相渡と云々、

從二大坂一秀賴公爲二使者一片桐市正參向、當時大坂惣奉行右兵衛主ゟ御物大刀銀子百枚音信也、

廿七日、美濃伊勢衆、右兵衛主ゟ被レ遂レ禮、銀子或は拾枚或者二拾枚也、

從二美濃國加納一大御所息女、勢州桑名大御所孫女清須ゟ參向、被レ遂二對面一、從二大御所一金子五拾枚宛被レ出、

廿八日、紀伊國主淺野左京清須ゟ參向、右兵衛主清須ゟ入部賀し被レ申、是は右兵衛主與二左京女一、緣邊依レ有二契約一如レ斯、

多武峯大織冠木像幷御影、木松爲二勅使一吉田左兵衛被レ爲二參詣一有二祈念一、如レ元平愈由曰けるか、其後程なく又破ける由、普令二風聞一、

中國西國大名、所々城々普請丈夫相構由、於二岡崎一令レ聞給、內々不レ可レ然由曰、

此比京七條に鹿民産二男子一、喩は三歲計の如レ兒、顏三方面也、父則害して埋レ土、其比八幡祭なりけるに、或者堀無レ之、八幡祭に持行有、三方荒神とて鼠戶を結、代物を取てみせけるに、其價甚なりと云々、

此春、東山大佛從二大坂秀賴公一可レ有二建立一とて有二其用意一、材木自二舊冬一浦々にて被二買取一、西國同中國四國北國大名、兵粮或二萬石、或一萬石五千石三千石、秀賴公に進上、大坂に船にて運送也、伊勢太神宮、來秋從二駿府大御所一可レ有二遷宮一由と云々、

於二江戶一銀師申云、去年十月より金を持來て、よなよな吹レ之、金を拾兩人に借、壹ケ月に貳兩付、合拾貳兩にて返二辨之一、此禮不審也とて、銀師右之旨を奉行所へ言上、依レ之彼借金を被二籠舍一、

二月大四日丙辰大御所清須御立、岡崎御泊、右兵衛主令二同道一給、

五日、大御所岡崎御立、

清須衆有二諫者一、可レ被レ改レ之とて、清須年寄衆駿河に被二召連一、從二駿河一小笠原和泉守（于レ時下野國烏間居、）可レ上由被二仰遣一、此以前清須儀好惡可レ被レ糺由付如レ斯、

美濃國尾張國、去年破損堤被二築給一、役百石に貳人、百姓役百石壹人也、駿河近習衆給役被レ除、

十一日、大御所駿河に着給、

十九日、從二大御所一爲レ使本多上野介江戶に下、是者上方衆人質克々可レ被二改レ之置一と、幷常陸介主へ於二長福一事五拾石通、於二常陸國一可レ被レ渡由を將軍に曰被レ遣、此外有二密事一由令二風聞一、

去年秋冬比より至二當春一、關東衆被レ致二人數揃一と云云、是內々依レ仰二將軍一也、

二月廿日、去年可レ有二宗論一由曰し法花宗常樂院、此度從二江戶一京都に被レ上、一昨日十八日京着、今日洛中小路々々被二相渡一、其上耳鼻そく、相從之法花宗上八、上總國連源、堺之玄旌、同玉雄、上總國琳碩、同可圓、此五人も被レ渡二洛中一、是は鼻計そかるへ、其後右之六人之衆、耳鼻そきし後被二追放一、彼弟子五人內、餘強鼻をかきけるにや、當座壹人死、京中廿一ケ寺法花寺へ、大御所仰出に曰、不レ組二常樂院一、念佛無間と不レ申由書付て於二上之者一、不レ可レ懸二其咎一由下知し給處、法花寺上人謂云、此度法問は曾不二申出一、是は理不

盡御沙汰間、書付上問敷由言上、然者法花寺可レ有二斷絕一由也、常樂院洛中被レ渡し時、法問者不レ出レ言間無二勝劣一、是者以二儀兵一被レ行之間、不レ及二是非一とて、色々の吐放言一と云々、

此比關東衆駿府に祗候、被レ遂二年頭禮一、又九州衆も去年不參間、駿府に下、有二徒移禮幷年頭禮一、

於二駿府一伊達政宗進物事、金子百枚、馬二疋、脇指二腰、小夜之物（唐織段子也）拾、以上、其外女房衆五人に金五枚宛被レ出、頃年從二女房衆一萬事事言上、男方より言上之事、大小共不レ成間、女房衆賄賂不レ可二勝計一、又男方之衆三四人に、銀五拾枚宛之贈物也、

此度伊達政宗を松平陸奥守被二改名一、始の名は羽柴越前守たりしを、唯今如レ斯也、

田中兵部、當時筑後國主、於二伏見一頓滅、

廿六日、本多上野介從二江戶一歸二着駿府一、

廿六日、井出志摩守死、日來無二病氣一、頓病起立所如レ斯、當時知行合二代官一出頭甚也、

廿九日雨、於二伏見一中坊飛驒を殺害、是は去年夏、伊賀國主筒井を、於二駿府一令二讒言一者也、正爲二臣下一如レ此逆臣、不レ及二是非一由人皆誦レ之、惡まぬ者はなかりしか、忽蒙二天罰一歟、逢二橫死一、其體者伊賀守被官山中と云者、主牢人後、伊勢國九鬼長門守所居たりしか、舊友間、中坊所へ來て、及二夜更一まて相語、其後中坊は奥の家に引入臥たりし、彼山中は中坊息子と一所臥たり、何者の仕態にや、中坊首を二刀切る、家中者一圓不レ知レ之、夜半に常に用二藥をけるか、時過迄不レ言間、女房障子明見レ之けれは如レ斯、筒井伊賀守身上、此中坊依二讒言一相果しかは、中坊不慮相果し事、伊賀守さこそ心地よからめ、伊賀守は無足にして、當時江戶に籠居せらる、

京都廿一寺法花宗、右之常樂院と不二一味一、念佛無間由不レ申旨、書付可レ上由、類從二所司代一被二譴責一、努々書付不レ可レ上由雖二存詰一、渡世習歟、昨日廿八日、如レ右書付を上ると云々、

中坊害しける者、伏見町に札を立ける、其書に云、我は伊賀守譜代之者也、爲レ散二主君鬱憤一、中坊を伐、此後又中坊男を伐へし、さて罷出腹を可レ切と也、

九月、伊勢太神可レ有二遷宮一とて、從二御所一兵粮六萬俵寄進、但五三箇年以前古米と云々、依レ之地盤の土を引けるに、古き柱之穴へ堀當けると也、是凶事と

て、禰宜とも如何可レ有と評定しけるか、又くるしかるましとなり、是は長祿寬正之比、榎藏掃部と云者、國司北畠方と及二干戈一被レ疵、其故は山田ゟ從二國司一役を可レ被レ當由付て及二此儀一、さて掃部云、思神慮及二干戈一處、如レ此儀頼しからすとて、神殿に火を掛燒死、其後七箇年程經て、可レ有二還宮一とて地盤を引けるに、彼燒柱の穴に堀當、時國主有二凶事一けると也、此禰宜衆思レ之如云歟、

三月小朔日、當時 筑前國主黑田筑州於二駿府一出仕、爲二年頭禮一銀子百枚、去年九州衆は爲二遠國一間、徙移之禮無レ之間、此度徙移禮有レ之、進物 金子三拾枚、長脇指、唐織夜物一、同小夜之物一、 塗籠弓百張、虎皮うつほ百被レ獻、

信州淺間山、此春燒こと夥、往慶長元比、二三年打續如レ此燒る事あり、凶相たりし間、此度も下臈危レ之、小笠原信濃守(時信州飯田城主)女を將軍養子し給、長岡越中守(時國主)男爲二妻子一被レ遣、來月下旬、九州ゟ可レ爲二着船一歟、

同朔日、駿河水降、此日關東下總國笠井水降て、家十七八間破損、雷夥鳴、右家之中一屋之人悉取て、其日に關宿の杉の木掛ける、

三月二日、酉刻より翌三日巳刻迄雨、午刻より快晴、

四日、常陸介(長福主卒、于レ時入歲、)能し給、黑田筑州寺澤志摩守、

同九州衆被二見物一、

清須衆富永丹波同男、戶田加賀守、松平攝津守、同石見守、日來無二法度一之由有二讒者一、清須を可二罷立一由大御所仰也、又古小笠原監物、近年無覺悟たりし事、如レ右有二讒者一、彼同心、殊氣相侍三人被レ行二成敗一、是は自二去々年一播磨國へ行、憑二池田三左衞門尉一居たりしか、依二大御所仰一被二殺害一、如レ此間、清須之侍于レ今不二安堵一、

越前之古秀康逝去の時、追腹相伴したりし土屋左馬介男知行、大御所依レ仰、古左馬介知行被二召上一、

三月六日、如二冬天一、殊風烈、里は時雨、山は雪也、惣別此春于レ今無二暖氣一、去月廿日比より、三日に一日は必雨、翌日定つて風烈、

加藤主計頭從二肥後國一上る、今日伏見を立て、駿河江戶へ下る、

十二日甲午戌刻、高野山小田原谷燒亡、寺町屋合千家計と也、但寶には七百餘宇失火と云々、

去比より奥州會津蒲生飛驒守形儀亂る、家老之者共悉可二退散一由相構と云々、

三月廿二三日比、羽柴肥前守居所、越中國外山城燒亡、吉光脇指、落葉壺、かたつき火鼈を遁、其外財寶悉燒失、

三月廿五日、下野國宇都宮領那須領氷降て、鴈鴨青鷺鴉雲雀已下諸鳥多死、一鄕にて鴈十二拾三所もあり、他所は此氷一圓不レ降、

廿五日丁未午刻雷數聲、同村立、當春是初雷也、山際は靄也、

廿六日、清須年寄井小笠原和泉守事、今日又氣色甚、是併依二讒言一也、和泉者去正月より、下野國風間令二拜領一彼城居けるか、知行被二召上一、國を可レ被レ拂と也、富永加賀守、攝津守、石見等者、國は被レ拂間鋪と也、但知行は被レ出間數由仰也、藤堂和泉守(元佐渡守、去年改名、駿府ゟ出仕、今日被レ遂レ禮、銀子貳百枚、小袖五進上、去年伊賀國拜領後、始而出仕也、

小笠原和泉守、富永丹波守、松平攝津守、松平石見守、何も清須を罷立上は、近年彼衆同心之者、同親類緣者等、悉清須を可二罷立一由被二仰出一所也、依レ之皆令二他國一者多之數不レ知、其家々戶入壘以下、如二日來一從二奉行所一改請取と云々、

古太閤御時より、猿樂共大坂に令二詰番一相詰、於二向後一者、大坂番を相止、駿河に可二相詰一由、今日大御所仰也、

廿九日、常陸主(長福主事、)能せらる、藤堂和泉守爲二見物一也、藤堂和泉守より常陸主ゟ、能道具一裝束被レ獻レ之、

此比駿府大御所不例、脈一度不レ足、其上目霞給と云云、

四月、山うは也とて、東山東福寺邊にて、鼠戶を結人にみせける、縱は頭之毛は白く、眼之廻赤し、何物を食すれとも一口に喰、貴賤見レ之、能々聞、しろ子の物狂也と云々、

卯月小二日癸丑池田三左衞門妻子同息男從二播磨一被レ下、今日駿府に被レ着、是大御所爲二息女一聞、爲二對面一也、息男江戶にも可レ被レ下と也、

京都鼓打幸阿彌又五郎、於二駿府一病死す、

此比、從二北國一肥前守、於二京都一諸道具被レ求、中にも武具道具急に被二買調一と云々、

此比、荊組皮袴組とて、徒者京都充滿、五月搦二取之一、七十餘被レ行二籠舍一、令二糺明一、此者廿人に普喧嘩を慫、後被レ改レ之、組頭を四五人成敗あり、殘者共非二指科一、只一組之知音まて之儀たる間被レ寛レ之、組頭の名は左門と云者也、荊組とは人に喧嘩をかくるに依て也、皮袴組とは、荊にも劣さるとの儀也（依二此儀一たはこ法度也、右之徒者もたはこにより組になりと云々、）

四日乙卯未剋より申剋まて、白雲一筋、東西經緯、長さ無レ計、さて東より先消去、天正拾一年癸未四月上旬、如レ此之有二天變一、其時は北より消、十二三日經て、於二江北一秀吉公與二柴田一合戰、越前衆破北、則柴田滅亡也、此夜、三州五油町悉失火、

駿府大御所御座之間近所へ、何とも不レ知人、水はしりの板をくゝり來、則戒見けるに、一圓のたはけものなり、非レ可レ有二誅戮一被二追放一、去二月、清須の殿守へ來居たる者の類乎、

薩摩國島津琉球を働、彼島平均、惣別琉球より島津方へ、毎年綾船と名付進物有しを、近年唐を相談、日本への音問不レ入事由を、琉球之しやな達而申、島津方を令二無音一、依レ之百餘艘を以相働也、琉球を着岸之時、しやな帥二人數一、拾七島防戰す、于レ時野郎後を廻責之間、しやな破北、琉球入或は討死、或は被レ疵、則七島毒島へ打入、王城を攻破て、王を生擒と云々　しやなと云は、琉球にて武者大將也、彼しやな日本を嫌て、唐を可レ屬との企成しか、果して如レ斯、（野郎とは無足にて、島津被官也、）

四月七日雨降、

八日、入日殊こかる、縦は鞠程之雲、日の廻を飛散、是旱の兆歟、此日殊風烈、春中より一日雨降は風烈ふて、今不レ止、此春中餘寒甚、

桑名本多中務知行、一男美濃守年卅六讓被二隱居一、一兩年依二煩氣一如レ斯、年六十二、

十一日壬戌申剋より雨、夜中大雨也、去八日入日粧旱の兆と云とも、今雨也、

大御所不例、大方本腹し給、

同四月、薩摩之島津百餘艘集二兵船一、琉球を令二渡海一、彼島不レ及二一戰一、則内裏を貢崩、王を生捕令二歸朝一、彼島中雖レ令二檢地一、指て知行も無レ之、漸々拾貳萬俵有レ之と云々、

廿八日、於二駿府一能あり、常陸主于時八歳、三番し給、播磨池田三左衛門息男藤松（于レ時十一歳）三番、其弟兩人同能し給、藤松は去比駿河より江戸へ被レ下、則駿河を被レ歸て之能也、

翌日廿九日、今春親大夫、同子大夫、觀世、寶生、金剛有レ能、

又翌朔日（五月朔日有レ能、）是は今春若大夫、大大夫三番、子大藏大夫梅若日吉、今春新五郎、大大夫二番、子金剛龜千代、古金剛寶子能あり、

五月二日雨降、先月より旱間、民此雨を悦、但未不レ足と云々、駿河節々雨降、上方關東は旱也、

三日、奥州會津飛驒妻女（大御所末の女、）駿府へ着給、

五日、播磨之池田三左衛門尉妻女、同藤松兄弟、何も立二駿府一被レ上、金子貳百枚、銀千枚、綿千把引出物也、藤堂を正宗之脇指、舍弟兩人をも脇指被レ遣、

八日、自二申剋一終夜大雨、曉天休止、去二日小雨以後是初、貴賤悦レ之、

此比、於二駿府一右兵衛主常陸主を請し、及配膳本多上野介、松平右衛門佐、成瀬隼人、永井右近、安藤帶刀等也、是何も近習中年老也、

去々年三月四日、金作之茶具失たりし時之當番落合長作、相場勝七、岡邊藤十郎、被レ行二流罪一、長作は鬼界島、勝七は隱岐島、藤十郎は伊豆大島、

十一日、于レ時伯耆國主中村一角（號二頓滅一、）未無二息子一、遺跡可レ有二如何一と云々、

若狹國主京極宰相病死、息男近年在二江戸一、父死去間、若狹をも被レ上、

十七日、於二江戸一藤堂和泉守所をも將軍御成、去六日自二駿府一今春大夫召下能有、

十八日、將軍御成爲レ悦、在江戸衆各を、藤堂和泉有二振舞一、同能有、

十九日雨、

廿二日雨、是より長雨也、

廿五日、駿府於二天守一雷落、其女可二相移一由下知し給、

廿九日、申剋雷數聲甚、美濃國加納三箇所をも雷落、其中松田彌七郎と云者家、爲二雷火一燒亡、

此日、於二江戸一今春大夫能あり、然急雨、三番過被二相止一、

五月十八日、淺野紀伊守（紀伊國主）悉皆之用人松原内記を、左内と云（年十七）者指殺、其故は、彼左内京都之者なりし

か、紀州へ奉公望依て可レ下の由、傳を以松原内記方へ云送、内記則承引し、小袖以下を遣令二招請一處、内記戀慕甚成ける間、紀州へは不レ出して、私に抱置令二上臈、されともみけしける、是女人の態成とて、下女を二人あをり被レ害、局女房衆二人可レ被二遠流一と也、

六月小朔日辛亥 駿府本丸女房局に火をつたるの間、燒記戀慕甚成ける間、紀州へは不レ出して、私に抱置令二上臈、されともみけしける、是女人の態成とて、下女を二人あをり被レ害、局女房衆二人可レ被二遠流一と也、

二日、入二八專一、會津飛驒守妻大御所末女、駿府を立て奥州へ下向、引出物金二百枚、銀千枚、綿千把、最前播磨息女同前被レ出レ之、

八日戊午 六月節、

九日、黒船幷小黒船二艘、九州至二長崎一、當月朔日着船由、今日京都披露、

十二日、三河國苅屋城辻風吹て、櫓以下吹落す、其筋在々右之風吹、他所一圓不レ吹、

此日同國山中下山と云所氷降、是を取て見るに、一時計は不レ消、彼郷田畠悉損亡、

十四日甲子 毎日の雨なれは、今日も同前、

十五日、當時豐前國主長岡越中守、昨日被レ着二駿府一、今日出仕、

十六日、越中守常陸主へ參上、亭主則能あり

廿二日、今日より西風落、快晴と見たり、此中の長雨、

近國田畠凶と云々、一昨日廿日土用入、

七月十日比、今春大夫自江戸一駿府へ上る、去五月江戸へ駿府より下し後、在江戸中兩度に二日、於二將軍一能有、二日は藤堂和泉守、一日伊達正宗、合六日能有レ之、十四日從二駿府一京都へ使者被レ遣、是は公家衆於二禁中一、主上近習女房猥參會、無二形儀一故也、主上甚遺鱗、公家九人、近習の女房衆五人、何も可レ被レ行二死罪一と也、此中猪熊は、太閤秀吉時も如レ此儀有し、又此度も隨一也、從二禁中一駿府へ聞二宣下旨一逐電せらる、是は織田有樂息左馬助以二才覺一被二闕落一と云云、依レ之左馬助可レ爲二同罪一かと云々、元來左馬助かおきての第一也、

たはこ法度之事、彌被レ禁と云々、

七月下旬より、美濃國有二檢地一、

七月卅日、三河岡崎鐵放藥置レ之二階失火、

此七月、駿府町中ゟ躍を被レ當間、月合迄躍、

八月、於二江戸一大久保次右衛門屋敷火事出來、内藤若狹守古修理一男 家及二類火一、財寶悉燒失、

九日、亥刻より京都畿内大風、翌日又亥刻迄大風、江州作毛損亡、他國さして不二損亡一、此風美濃尾張三川は、十日午刻より亥刻迄吹、

從二江戸一伏見爲二番替一被レ爲レ上人數、松平丹波守、土岐山城守、松平丹波守、山口但馬守等也、八月十二日より城在番也、

同八月 十六日、大洪水、西國東國何も同前、去年八月の水より、美濃より遠江國迄三尺程高し、關東畿内西國は、去年の水より三尺程下し、

去年の比より、内裏稀有なること有、主上近習之女房衆、廣橋局、唐橋局、以上五人亂形、中にも此兩人主上寵愛の女性也、廣橋は則廣橋大納言息女、唐橋は中御門也足當時の知名之息女也、縱は傾城かふき女の如く、洛中を出行、專公家九人是に對面、酒盛最愛し、被レ亂二鬮次一、右九人衆と云は、猪熊、烏丸、飛鳥井兄弟、大炊中將、花山院、德大寺、松木、齒藥師兼安か男備後と云者也、御末の女房中より此事を言上す、主上逆鱗不レ斜、駿府ゟ以二勅使一、右之公家衆局衆を可レ被二斬罪一由被二仰下一、依レ之板倉伊賀守駿河ゟ罷下、子細を問給、猪熊罪科に恐被二闕落一、

脇坂中務於二淡路國一、太閤御時より三萬石拜領して被二居住一けるか、此比伊豫ゟ有二國替一、於二彼地一五萬

石拜領也、淡路居住に少給人何も同前、淡路ゟは當座藤堂和泉守人數を被レ遣二番手一、

當年雨降かちなりとて、町人年寄付レ之見けるに、正月より八月廿七日迄、百廿日雨降ける由、京中沙汰しける、

去年永樂錢遣間鋪由、於二關東一被レ定ける、當年滅方勘定時、右定以前之勘定には、永樂錢を滅方に可レ有レ之由、目付代官衆俄に永樂を調けるを、關東町々商人亦永樂を被レ用けると心得、永樂を調事不レ斜さるか、果して如二去年掟一、永樂錢すたりければ、此度も商人失墮不レ可二勝計一、

九月初、於二江戸一有二喧嘩一、戸田半丞（近江國前々ゟ鳥城主古左門四男）眞田左馬助（安房守四男）切害、半丞は令二逐電一、

西國大名等、近年大船を拵置、是自然の時催二大軍一可レ上歟之由云々、依レ之此舟ともを自二駿府一可レ有二破却一由曰、先淡路國ゟ可レ被レ寄と也、

十六日未刻、北野天神石鳥井、無二其故一顛倒、

伯耆國古中村一角遺跡被二收公一間、自二江戸一弓氣多源七郎、九貝久三郎を被レ遣、兩人共に將軍近士也、右何も大御所下知也、

公家衆亂行隨一の猪熊、於二九州一押取、籠輿に乘被レ爲レ上、九月十八日京着す、

丹波國篠山の城、石垣普請出來之後、去六月從二江戸一上る普請奉行内藤金左衛門駿河へ來、大御所出行之時、於二庭上一欲二目見一處、甚無興し給、是は城普請大御所仰出しよりも丈夫にしけるに依て、出來遲々の故也、彼兩人可レ爲二改易一歟と云々、彼奉行庭上迄呼出しけること、定而本多上野介大久保石見守可レ爲二指南一とて、暫言葉懸もなかりけり、

廿一日、伊勢太神内宮、今日有二遷宮一、貴賤群集不レ知二其數一、然處社壇鳴動と云々、

廿三日夜、愛宕山本堂ゟ盜人入、翌月西の谷に居けるを搦捕、始は物狂の爲レ體をして登山しけるか、果して如レ此、

廿三日、板倉伊賀守自二駿河一歸京、公家衆九人西國ゟ可レ被レ流と也、五人之局は東國可レ被レ流と也、

此比、上總守（大御所末子、年廿）家老之者皆川山城守、本來關東皆川主上總主養父也、山田長門守以下各以二目安一駿府ゟ言上、其故は、上總主行跡荒々として絶二言語一たり、如レ此儀を數ヶ條書載、則上野（總）主從二江戸一駿府

ゟ被二參上一、大御所直々理を被二言上一、家老衆各被二改易一、

廿七日、伊勢外宮有二遷宮一、

去六月、九州ゟ黒船着し砌、小黒船二艘着けるか、八月十日の大風に、舟少々破損して風に被レ放、行方不レ知出けるか、此比上總國大野浦へ吹寄、則駿府ゟ右之旨有二註進一間、被レ下二奉行一、舟中の荷物、舟主共心之儘に商可レ致曰、

廿七日、古太閤政所御方のかう藏主、今日出京、駿河ゟ被レ下、古木下肥後守遺領二萬石あり、息男宰相宮内兩人令レ知二行之一、政所へ可レ被二昵近一由自二駿府一曰處、政所は宰相壹人に宛レ之、宮内には一圓に不レ被レ渡間、大御所甚無興し給、若有レ理者可レ被レ聞とて、駿府ゟ被二召下一、惣別近年政所老氣違、比興成事多しと云々、當年は彼二萬石領可レ被二召上一とて、板倉伊賀守當毛可レ納由曰、

九月晦日、於二江戸一有二喧嘩一、縱は水野市正所ゟ、遠州濱松城主松平左馬助を招請、其座敷にて久米左平次と服部半八と云者及二口論一、左平次を半八一刀ついて退出、左平次則追懸處を、八大夫と云者、左平次を前より抱、左馬丞も半八原鎗（最カ）なりければ、半八を爲レ可レ遁、左平次を後より被レ抱、左平次か云、我已被レ築畢、難レ成二堪忍一間、可レ被レ離由申けれとも不レ離、さて左平次不レ堪二怨怒一、左馬頭を一刀築條、暫時左馬被二相果一、半八は其場を退けるか、於二相摸國大山一追懸被二生害一、亭主市正は寺入しけるか、十月中旬に被レ爲二切腹一、左馬遺跡被二收公一、依レ之石川主殿頭を濱松領爲レ可レ被二改納一、自二駿府一被レ遣、左馬家中の者共、當毛より被二改易一、其中山本善右衛門小浦新兵衛と云者兩人は、當知行無二別條一、濱松左馬頭は織田有樂斟也、男子三人、一男七歳と云々、左馬妻子江戸へ被二罷下一、

唐船糸の賣買于レ今無レ之、何事も自二駿府一下知し給、依て商人徒に長崎逗留す、糸の程を被二相定一、十一月長崎へ重て商人を可レ被レ下との儀也、先其中は夏秋中より、于レ今自二駿府一糸を京中ゟ被レ爲レ賣、又銀を前々は吹ぬき、南鐐にして唐人は取けるか、此度は不レ吹して、日本之丁銀判の儘可レ取由、自二駿府一黒舟ゟ下知し給、唐人迷惑此事也、然共先以任二此儀一、

去々年より伏見城在番中、岡部内膳、丹波國龜山に

可二在城一由、自二江戶一將命也、依レ之十月五日六日比、彼地へ移、知行二萬石可二拜領一と也、城普請は來春可レ爲の由と云々、

江戶少つゝの普請、關東衆務レ之、其中口鹿川より江戶わ間、路次潮入て道惡かりけれは、上の野山を或は三十尋或は二十尋堀入る、底に石多して、普請者及二迷惑一しか、十月末に出來畢、

十月二日、於二駿府大御所之於數寄一有二茶會一、客は織田有樂入道、藤堂和泉守、西尾豐後等也、昨日可レ有二此會一處、雨故及二今日一、西尾は伯耆國依二在番一、則翌日上る、

去比より若狹國古京極宰相息男家中之者共、無二簡次一任二雅意一由有二其聞一、依レ之自二江戶一以二使者一可レ被レ改と也、彼使者は鵜殿兵庫と云者也、去月下旬に江戶御出、是皆駿府より依二下知給一也、宰相は當年夏、於二駿府一頓死、息男は在江戶成けれとも、將軍息女若狹國にましまし依レ爲レ聟、父被二相果一し時、則若狹わ被二歸國一、

十月三日、戶田九右門死去、是は駿府鷹師也、當時專鶴を被レ爲レ取に、此くふしの外大概無レ他、去年中に百三十五鶴を取けるか、百十計は此くふしにて取りけると也、

十月十日、禁中五人の局、伊豆國の島わ被レ流、去二日に出京せられけるか、駿府わは不レ被レ寄、直に被レ通二伊豆一、其體何も髮を剃か、小袖を布子に替、下女貳人相添、五人一所に在島也、

公家衆流罪事、花山院は幾か島、飛鳥井少將隱岐島、松木與二大炊侍從一は薩摩方ゆわうか島、飛鳥井と難波は先駿河へ被二召寄一、烏丸德大寺は御赦免也、猪熊と兼安の傳後兩人は、京都淨土寺常善寺にて殺戮也、猪熊最後の體彌蕊二耻辱一と云々、右の流罪衆、籍月可レ爲二上旬一と云々、

十六日、氷野市正於二江戶一生害、其故は、先度之喧嘩、彼於二宿所一有て、松平左馬頭以下橫死之者多かりし故也、市正の外無二行儀一之族、多被二疵敗一衆事、三浦かいほう三吉、せらた小傳次、荒尾長五、あるか忠三郎、をまた伊右衞門、馬宮彦九郎等也、此中彦九郎は欠落といへ共、妻子以下被二召取一間、一兩日中罷出腹を可レ切と云々、同改易衆事、小要二左衞門一、小前孫四郎、岡部庄七、小川左太郎、藤方平九郎、津方左衞門、

戶田喜左衞門等也、是皆去々年の八月より伏見城在番、此八月江戶へ下出二伏見一無行儀露顯之間、爲二法度一如レ斯、

廿二日夜入て、於二駿府一大久保藤十郎石見守家燒亡、但不レ及二他所一、

當秋大鷹、近年より數多出來して、大御所喜悅し給、大御所廿六日甲戌東わ御下、今日善德寺、彼地に一兩日可レ有二逗留一と也、本多上野介大久保石見、此時始而被レ懸二言葉一、

相摸國土井山に口出けるとて、大久保石見守を被レ遣、此所は大久保相摸守拜領の地也、定而已來は替地を可レ被レ遣か、

廿七日、山田長門守松平讃岐守上總主家老、自二去比一被二押籠置一けるか、今日被二成敗一、

於二大坂一太閤御時より猿樂藝の能者に、一人に付或五十石、或は卅石被二宛行一間、去年迄自二秀賴公一不二相替一被二出下一、當秋被レ止二此儀一、是は去春大御所仰に、在大坂止、駿河可レ令二祗候一由曰故歟、

廿九日、美濃國大垣城主石川日向守死去、年七十六、是は去年長門守死去之後、男依レ爲二幼稚一、自二關東一被レ下在城ありし、

中國西國北國大名衆、何も關東わ十二月下て、於二江戶一可レ有二越年一催也、是併自二駿河一內々依二御諚一也、

奈良之猿澤の池、十月十五日より水をかへ、十一月四日五日比、魚を一方の水のたまりわ寄、主池掃除して、廿二日小川の水を入る、魚共十荷計死ける、是一乘院依二夢告一也、此事不吉例と云々、昔年八十年以前にも、如レ此池かへしは、天下凶、亦去永祿十年丁卯にも、此池にてたりとてかへけると也、

翌戊辰年天下大亂、是より三好天下主家滅亡、

十一月五日、大御所從二三島一駿府わ令二歸城一給、內々依二不例一也、江戶將軍わ爲二使者一安藤帶刀被レ遣、

七日、自二江戶一本多佐渡年七十一、駿府わ參上、大御所關東下向を相止、自二三島一令レ歸給間、急江戶を立て、今日府中わ着、

江戶將軍駿府爲二見廻一可レ有二御越一旨、先般大御所わ有二內證一、先々此度可レ有二延引一由大御所曰、

八日、丙戌公家流罪衆、今日出京、親人々々日來恩賞之家人以下、名殘を惜落涙數行と云々、烏丸と飛鳥井二番目の息難波侍從は伊豆國わ被レ流、其外は如二書付一、

安藝國より福島左衞門大夫江戸ゟ可ㇾ被ㇾ下にて、今日十日大坂ゟ被ㇾ着、

十六日、本多佐渡守自ニ駿河一江戸ゟ歸る、

尾州清須を名小屋ゟ可ㇾ被ㇾ引とて、自ニ駿河一普請奉行牧助右衞門來て、彼地を地割、廣狹を繩張をする、來春可ㇾ有ニ石垣普請一とて、此地は去天正十三乙酉年、織田信勝信長二男、彼國主たりし時、被ニ普請一しか、すな土にて土居堀崩れは被ニ打置一、殊井水出來るの條、上下の者不ㇾ好ㇾ之、今度は石垣たるへき土惡とも不ㇾ苦と也、其上去八月大水清須ゟ驅入けれは、自然の時水責に可ㇾ輒とて、來年名小屋ゟ可ㇾ被ㇾ移と也、

廿五日、福島左衞門大夫伏見を被ㇾ立、關東ゟ被ㇾ下、路次は木曾筋也、

廿六日、大御所不例なりしか、今日快氣、

大御所三川國ゟ爲ニ鷹野一可ㇾ有ニ出御一とて、中島爲ニ作事一大工貳百人仰付、彼所代官普請相稼、三川國侍より千石役に壹人宛手傳之出ニ疋夫一被ㇾ急けるか、俄に又相止、依ニ不例一歟、惣別今年は何角不例のみ也、

十二月大、此冬雨節々降、

去夏、黒船數艘着けれとも、糸の賣買子ㇾ今不ㇾ止間、京都糸同板物甚高直也、

九日、去年九州長崎之有馬修理被官共遣、明朝あま川ゟ爲ㇾ商渡海處、彼所之シンニヨロ商人用也、幷カピタン是は船頭司、あま川の賣買の樣子、日本人知なは、重而黒船長崎ゟ雖ニ着船一、難ㇾ得ㇾ利由存、日本人三百人餘一所へ呼入、悉燒害畢、爲ニ此相當一此船者共可ㇾ討由、自ニ駿河一有馬修理日、殊日本人燒害したりしシンニヨロカピタン來朝間、幸儀彼船を雖ニ計呼一、終不ㇾ上ニ陸地一間、不ㇾ及ニ了簡一、船をからくり、以ニ干戈一可ニ討果一用意あり、是を黒船唐人見知して、今日九日俄に船を出し、十二三里程漕歸ける處、風忽起て十里ほと吹返して、ゆわうと云處へ黒船上、然る處有馬修理此間からくりし船を漕寄、勢樓をあけ、黒船ゟ漕寄、素有ニ案内者一、鹽消の有ける所へ火矢を討間、忽燒亡條、黒船沈滅却畢、前代未聞次第也、

黒船より長崎寺きりしたん國の坊主、預け置物之事、糸三千斤小箱五千と也、惣別此度は兼て之賣買違、少物も銀子請取、則糸物を渡す、此以前は糸物任ニ通子申條一、何程も渡し、歸帆比銀を請取しか、如何思けん、代りを不ㇾ取以前者、少之物も不ㇾ渡と云々、

右黒船水の上計燒、水ゟ浸所者沈て于ㇾ今有、二十五尋程沈舟の分有、以來海士共を召寄、此船に網を付可ㇾ被ニ引上一可ㇾ有ニ計歟一、銀は三千貫目程可ㇾ有、印子は何程可ㇾ有ㇾ之も不ㇾ知、糸は少々浮上けるを取て、駿府使持參、

京都糸物俄高直、此秋糸壹つにて、銀子壹貫二三百目價なりけるか、黒船滅却後、貳貫七八百目價也、

十一日、夜前より今朝迄大雪、

此比、駿府仰云、於ニ近江國一上總守家康公末子年二十、六十萬石可ㇾ被ニ知行一由也、又翌日五十萬石可ㇾ被ㇾ渡と曰、近江佐和山城主古井伊兵部少輔息、號ニ今兵部少輔一年二十一、信濃國中島ゟ可ㇾ被ㇾ遣と也、

美濃國大垣城主古石川長門守息、號ニ今安藝守一年二十、爲ニ幼少一間、下ニ關東一可ㇾ致ニ在江戸一、大垣ゟは石川主殿頭大久保相摸守二男可ㇾ移由曰、

遠江國濱松城十二日入城ゟは水野備後守同對馬守兄弟被ㇾ移、此對馬守は自ニ去年一常陸主ゟ被ㇾ付依也、去る九月、松平左馬丞横死之時改易後、濱松狼藉無ニ止時一、彼被官殘者共のしわさの由風聞付、右兩人を爲ニ置目一被ㇾ遣、知行未無ニ其沙汰一、

遠江駿河兩國、常陸守主ゟ家康公末子年八歳、可ㇾ被ㇾ渡と也、近習輩悉常陸守ゟ可ㇾ被ㇾ付、此内本多上野介は、江戸將軍ゟ可ㇾ奉ㇾ付と也、

遠江國横須賀城主國丸年五歳爲ニ幼少一間、安藤帶刀彼家中者を可ニ引廻一由也、

十二日、牧野右馬丞東上野大胡の世を恨被ニ隱居一、男被ㇾ譲、死去、年五十六、六七年以前より

十三日、小寒入、來年立春は十四日也、

此冬、暖氣如ニ末秋一、此以前、冬かゝる無ㇾ樣、雨雪節々降、

此五三箇年摺本と云事仕出、何の書物をも於ニ京都一摺ㇾ之、當時是を判と云、末代之重寶也、

酉十二月、黒船被ニ打果一し時、長谷川忠兵衞と云者、別而令ニ計略一、是は駿河より長崎ゟ毎年着船の賣買の檢使、糸以下の事專取引、左兵衞か弟也、此忠兵衞も同使也、黒船退治の時、小船二艘もより町屋を買取て、せいろにして黒船の下ゟこぎ入へき謀也、先黒船に近付時、石火矢の無ㇾ之方ゟ廻、黒船之下へ我ら船を乘入、則黒船ゟ乘移、アンジンを打取、是は黒船の主也、是は先年日本の船の者共悉殺害せしは、此アンジンか業也、

十二月下旬、美濃三川衆爲二越年一駿府ゟ下る、尚須衆も右兵衛主駿府に居給間、同駿府ゟ下、
上方衆於二江戶一可レ有二越年一とて、國を被レ立けれとも、自二江戶一被レ上レ之、
今年は京都より東國は凶、西國豐年と云々、
慶長十五庚戌年元日戊寅天赦日、
正月大戊寅朔日快晴、
元日、於二駿府一各年頭禮あり、從二將軍一大久保加賀守
駿河ゟ昨日着府、同今日有レ禮、
二日、於二駿府一大坂秀頼公使者伊藤掃部今日有レ禮、
九日丙戌大御所自二駿府一至二田中一爲二鷹野一御出、其より尾張國名護屋ゟ御越、繩張仰付、二月より可レ有二普請一と云々、
十三日、大御所一昨日自二田中一桐良ゟ御出、中泉ゟ昨日可レ有二御越一由被二相定一處、俄自二桐良一駿府ゟ御歸、今日十三日夜節分也、
十九日丙申大御所爲二鷹野一田中ゟ御出、
三河國吉良に赤き鶴有、珍事と云々、
廿四日、大御所田中より、遠州中泉ゟ御出、
廿五日、恭上手本因坊を始、何も駿河着、從二去年九月一有二江戶一、去廿日江戶を立て、今日參着、將棊さし何も于レ今在二江戶一、
二月小二日己酉大御所自二中泉一田中ゟ御歸、同四日駿府ゟ御歸城也、此度鶴三十六取、鴈鴨之儀不レ被レ數、去未年二月、於二相摸國中原一失たりし金子茶具水指金已下出る、
廿日、將軍江戶を御出、此日大雨、
廿一日、大雨、所々川水增、
播州の池田三左衛門、紀州の淺野紀伊守、四國の加藤左馬助、丹波の有馬玄蕃已下、去比國を立て駿河ゟ下る、此大水付川を輙不レ得レ越、徒路次逗留、福島左衛門大夫自二舊冬一在二江戶一、此比駿河ゟ被レ上、廿四日立二駿河一被レ上、遠州三川大水付、路次逗留、
廿三日、大雨翌朝迄雨也、
廿四日、將軍駿府ゟ着給、此比節々雖二雨降一、大御所任レ仰如レ斯、
閏二月大二日、越後國堀監物同丹後兄弟但別腹、於二駿府本丸に一及二對決一、自二去年一兄弟不和にして、越後守ゟ信長小姓堀久太孫監物令二讒言一、弟の丹後を追出す、丹後從二去年一令二在江戶一、專駿府江戶相詰出頭人を企公

事捧二目安一、今日兩御所聞レ之給處、監物非分と云々、
又越後守五十歳監物元の監物子也、親は去年死去、爲二最負一被レ上二目安一處、大御所只一ヶ條聞給、爲二幼少者一如レ此儀不レ可レ申、是も監物所レ爲由曰、則越後國被二召上一、上總主大御所末子年廿二、被レ遣、上總主此度相二仲將軍一在二駿府一間、同四日立二駿府一被レ歸二江戶一、近々越後國ゟ可レ有二入部一支度なり、其以前爲二番手一信濃衆三人小笠原兵部大輔、飯田城主、石川主善、深志城主、眞田伊豆守、沼田城主、去子年より領遺跡一越後ゟ被レ遣、此越後守は伊勢桑名本多美濃守中務男智也、去未之年、嫁二大御所一有二養子一被レ遣間、此度も從二大御所一迎を被レ遣、越後國駿府ゟ可レ被レ上となり、
同四日、迎使兩人立二駿府一、越後國ゟ下る、
八日、此中駿河在府西國衆、尾張國名護屋可レ有二普請一とて、今日立二駿府一被レ上、
十日丙戌將軍爲二鹿狩一今日駿府御立、三川國田原ゟ被レ趣、今夜田中城止宿也、
此度將軍御供、關東衆盡二美麗一、其費不レ可二勝計一、
十三日、大御所息女三歳逝去、是者伊達政宗息ゟ可レ被レ嫁契約なりしに如レ斯事、政宗可レ爲二恐怖一歟、
十四日、將軍至二田原一着給、十五日雨故無レ狩、十六日
十七日大久保山藏玉山狩場にて、鹿貳百四十七、猪二十二、合貳百六十九留、三川衆人多召連被レ出、鐵放弓無二際限一、十八日休足、十九日將軍家御袋依二忌日一無レ狩、廿日、ひるわ山被レ爲レ狩、鹿百五十、猪三十四、合百八十四留、廿一日、雨故無レ狩、廿二日、わかみ山まくさ山被レ爲レ狩、鹿百六十二、猪三十三、合百九十五留、廿三日、たつほに落し也、鹿五十二、猪二、合五十四留、
申刻西の端より東の果迄赤雲一道あり、半分程迄は幾筋も有、去々年も如レ斯白雲ありし、◎此二行恐くは摸入ならん
都合七百貳留、此内鹿六百十一、猪九十一也、
廿四日、將軍田原を立給、廿七日、將軍駿府着給、
去十七日、於二此狩場一將軍近習輩岡部八十郎江戶衆、中川八兵衛衆、美濃及二喧嘩一、八兵衛を二刀切、八兵衛如何したりけん刀不レ得レ拔互退、其時八兵衛郎等申云、此止は汝行八十郎を可レ切由申付、郎等共走懸る、彼八十郎向者を切斃、一人者後より八十郎切害、さて將軍より仰付、則八兵衛成敗也、此喧嘩中、狩場衆せこなみ一圓不レ亂、喧嘩は相手計也、日來依二法度堅一也、
羽柴下總元織田常心臣下、其後大閤臣下となる、今在江戶、病死、

廿日丙午申刻終日蝕、

三月小朔丁未十六日より四月節也、

去年被二召上一古木下肥後守大閤の政所弟遣領貳萬石、淺野彈正被レ下、彈正息杏紀伊守、右兵衞主依レ爲二舅父一彈正ゐ大御所被レ及二懇切一但右兵衞主幼稚間、今緣邊云合迄也、

五日、將軍駿府御立、江戸ゐ下向也、從二大御所一曰、右兵衞主常陸主儀賴思給間、大御所逝去後、別而可レ被二引立一由也、將軍哀思給歟、其日路次中落涙迄也、惣別此比、西國大名共に對面時、如レ斯何もへ大御所曰、

十日、於二尾州名小屋普請場一黒田甲斐守家中輩與二平岩主計頭者一有二喧嘩一兩方當座死、

十一日、勅使出京駿府ゐ下向、依レ之板倉伊賀守同道、是讓位儀急御宣下也、

十二日戊午今朝當二八十八夜一然共不レ降レ霜、

十三日己未寅卯刻月蝕、

十八日甲子昨日より今朝迄雨降、

十九日、常陸主有レ能、已上五番、

廿三日、細雨、

此比高野山衆徒行人聖、何も背云事、駿府に在レ滯、衆徒中云事は、去々年當遍照光院と按察使坊との云事有し時、遍照光院衆儀有て、按察使を可レ被二押籠一との使を立たる間、按察使則遍照光院ゐ往、菟も角も可レ成由被レ申けるに、遍照光院折節此儀を門弟衆儀談合せられけるとて留守たり、然處ゐ此旨を弟子告來る、則其衆儀衆有二評定一、按察使坊に被二押籠一、然共指たる依レ無レ科、長々敷置けるに、あせて駿府ゐ下、事由令二言上一間、遍照光院其外、其時の衆儀の衆を召下被二相尋一けるに、按察使不レ違二言上一、大御所甚有二氣色一、遍照光院を搦取、乘物にて國送に高野山へ被レ遣、其上被レ加二誅戮一、右の衆儀の門弟共被二流罪一、其上按察遍照光院ゐ移、高野山於二云事一は、向後可レ任二存分一由印判被レ出間、去々甲申年より以來、彼按察使成二遍照光院一、衆徒の坊々をも任二我意一、無罪をも追出、我氣に應する僧を置、傍若無人の仕置也、然間法性院の門弟共、無二過して多以被二追出一條、當春相下在府と云共、遍照も在府、殊大御所氣色好ありけれは、日日出仕の間、法性院令二言上一事不レ協して、于レ今駿府に滯留也、又行人と聖との云事は、聖に家の高棟を可

レ止との儀也、聖は自前に如レ斯仕來由言上也、此後大御所如何可レ有二下知一哉、惣別近年彼一山云事不二斷絕一、佛法末世の今如レ此儀、爲二天魔障碍一歟、此已後遍照光院と法性院有二對決一、大御所直聞屆給、去々年遍照光院ゐ被レ出し朱印召返、法性院ゐ被レ渡、法性院被レ播二面目一、

廿八日、駿府城召仕上臈女房成敗也、是は連々金子盜事及二度々一、事既露顯間、被レ及二殺害一、去未年失たりし金子の茶具、此二月出たりしも、此女房のしわさかと人口也、

當月、金剛太夫三郎是は大閤の時、七つ大夫と云し者也、於レ堺勸進能有レ之、打續雨降けれは、延引覺外也、其砌有二落書一、今日も又能さふらうと觸けれは雨降ぬれはこんかふ入ぬ此頃中院也足入道被二逝去一、當時公家中智者也、一時人惜レ之、去年息女流罪、其愁積所歟、

四月小丙子朔日、

九日甲申、三川國の山中日近と云所ゐ石ふる、大さ四五寸許なる石五つ、其砌天震動して如レ雷、昔寬喜二年庚寅奥州芝田郡廿四里中、柑子ほとの石降、十月十六日事也、如二雨降一と云々、同年六月九日、美濃國蒔田庄、武藏國金子里、雪交二雨霰一降、是も十六日事也、同月十八日、卯刻日蝕、同月十八日、時氏逝去、去月十七八日已後炎干、

於二京都一金剛三郎太夫致二勸進能一、

十一日、昨夜より未刻迄細雨、下民悅甚、及レ晩快晴、

十四日雨、　十五日、於二京都一意庵死去、當時醫者達者也、去比より於二駿府一痘瘡被レ煩、頻に暇を被二言上一けれとも、途中遠路可レ有二如何一とて不レ被レ赦、病及二危急一無理被二歸洛一、果して如レ斯、

十八日癸巳天上日、及レ晩雨、昨日十七日より五月節入、此比、今春若太夫七郎於二京都一勸進能有レ之、道成寺のをし拍子違、無二腮次一體也、

十九日、於二駿府一下手揃の有レ能、大御所爲レ慰見二給之一、右能遠山民部少輔年七十五也、東鰉右衞門年六十六七許也、元來三川國足助人也、池田備後守秀雄公衆、今在駿府、等也、此備後は年四十六七、常に此道にすき被レ能、

今月旱の樣なるか、小雨折々降、三川國は一圓不レ降、當月上旬比、エゾの松前駿府江戸へ出仕、大御所曰、カイクジン海狗腎と云魚調可レ進、此魚を食すれは長命也と云、此魚むかふに鰭有、身に毛あり、長一尺横四

五寸と云々、ヲットセイとも云也と云々、
五月小、朔日乙巳午刻月蝕とありけれとも、曇故不レ見、
三日、駿府は大風、家々破損、他國風不レ吹、
此比川中島本領越後國相添上總主ゐ被レ渡、是は越後國村上周防溝口伯耆兩人拾五萬石の分拜領、此通被二相除一故也、
七日、梅若大夫於二駿府一致二勸進能一、五日の中人多寄、
今月三日大雨、昨日より八專入、木曾川別而大水、尾州名小屋ゐ可二運送一買二材木不レ殘流、
十四日、伊達政宗自二江戸一被レ着二駿府一、
十五日、梅若於二駿府淺間一致レ能、大御所見二給之一、
十八日、大雨、西美濃大水、堤不レ殘切、此度木曾川水不レ出、
廿一日、長尾景勝自二江戸一被レ着二駿府一、
廿二日、大雨又大水、
廿三日、常陸主大御所末子九歳、右爲二兩客一被レ爲レ能、翁は觀世太夫可レ仕大御所下知し給處、夜前觀世左近逐電行方不レ知、是は梅若太夫を被レ爲レ愛故歟、自レ元身上不自由、此間別而すりきり、萬事不レ叶レ心間氣違歟と云云、
廿四日同五日、兩客被レ下二江戸一、
廿五日、長尾景勝伊達政宗、自二駿府一江戸ゐ被レ歸、
廿六日、三川國大水、西三川は去年八月の水より三尺下し、東三川は吉田邊は、去年の水に四尺計高し、隣遠兩國も大水也、
下旬に建部内匠死去、當月十八日より煩と云々、是太坂秀賴公近習也、刀脇指總而かな物の目聞也、江戸駿河の若き衆弟子八百人餘と云々、此小性長吉、内匠死去八日目に追腹を切、時の人不レ譽レ之云ことなし、去三月内匠駿府逗留中、與二傍輩一令二逐電一、於二三河國吉田一押留けるを、傍輩侍二人成敗有き、此長吉は無二異儀一如二前々一仕はれしか、此度奇特の死をしけるとて、人譽レ之、
此比、京都町人米屋のうせいと云者、以二大御所御意一、ノビスパンゐ渡海、賣買任レ心歸朝、猥々皮多持來、但金銀は及レ聞し程はなし、雖レ然他の國他の島より多、重而日本人渡海無用の由、ノビスパンの者堅日本人えしめす、
六月大朔日甲戌
二日土用入、去春より至二于今一疫癘不レ絶、人多死、

三日、尾州名小屋普請、今日より根石置、北國の松平筑前、自二春中一被レ寄レ石、西付二尤を被レ積、其外衆何も本丸也、此中羽柴左衛門大夫正則備後安藝兩國主、羽柴三左衛門播磨淺野紀伊守紀伊國主、右兩三人は、去年奥丹波城被二普請一間、此度名小屋普請は可レ被レ除由、大御所曰、其用意無レ之處、去三月、俄名小屋普請可レ被レ致曰付、取分被レ急間、衆中并及二迷惑一と云々、

名小屋普請知行役事

百三萬貳千七百石　松平筑前守羽柴肥前守前、今は名代、
八十萬七千五百石　羽柴三左衛門輝政、此中備前國淡路國は去三月二男に被レ下、播磨備前淡路合三ヶ國分也、
卅七萬四千三百石　淺野紀伊守
四拾九萬八千貳百石　羽柴左衛門大夫
卅五萬七千石　鍋島信濃守九州衆也、元龍藏寺内
卅壹萬石　黒田筑前守筑前國主
卅萬貳千石　田中筑後守父去年春死去、九州衆
卅萬石　羽柴越中守
貳拾萬石　松平長門守毛利輝元息、周防國長門兩國主、今在二江戸一、
廿萬貳千六百石　山内土佐守本土佐去々年死去、土佐國主、是は甥、今跡目也、
拾九萬千六百石　加藤左馬頭伊織甲國主、
拾八萬六千七百石　蜂須賀阿波守阿波國主
九萬五千石　寺澤志摩守
八萬五千九百石　生駒雅樂跡目
三萬石　木下右衛門
貳萬石　竹中伊豆守元美濃衆今豐後衆
壹萬九千石　森伊勢守同豐後衆
五萬六千石　稲葉彦六元美濃衆今豐後衆
五拾貳萬石　加藤肥後守主計事、是は殿主二四被レ築、但其身所望也、
右何も太閤秀吉公の御竿の積也、

合五百五拾八萬八千五百石歟

此外中國西國の中、丹波國龜山被レ致二普請一、
此比、丹波國龜山普請中に、薩州島津龍白弟從二丹波國一煩付、伏見來病死す、是は去庚子之年、美濃國關ヶ原合對の時、兄の兵庫退散之期、手負馬離、行歩不レ任二進退一、死人之上に倒臥處、奇特の夢想有、彼夢に云、是より東え下、成二木食一可レ送二年月一との告也、然間希有にして全レ命關東へ下、如二夢想一令二木食一、經二十箇年一去年春、薩摩へ歸國し有レ之けれとも、見知たる者もなし、漸々右之旨人に語と云とも、於二彼合對場一討死由披露有げる間、中々不二思寄一事なれは、取あく

る者もなし、往々其樣體を見て、相似たる所も有けれは、遠俗させ見レ之は無レ紛、　此旨龍白同又八え申
屆條、則令二對面一語二往事一令二落涙一、さて所領を遣し
居住の處、此度不レ慮相煩令二死去一也、
名古屋尾州本丸石垣、十二日三日何も出來、此上二九可
レ有二石垣積り有一、
十二日、此中連日長雨、如二五月雨一、今日殊木曾川洪
水、尾張國方堤數ヶ所切、上は矢那、富田前、をいり、
下は加々の非等也、
今日東山大佛堂、大工斬始也、
去五月より大雨洪水雖レ及二度々一、京畿はさして無二水
損一、濃尾三此三ヶ國別而大水、下民爲レ之愁、
十三日、伊奈備前守領所代官也、於二江戶一死去、
十四日、時々晴、戌刻月二重笠樣にして、其雲五色也、
十六日、今日尾張國津島祭行レ之、昨日十五日、如二毎
年一可レ有レ祭處、五月を大と云事を、何者か云出しけ
ん、就レ其如レ斯、　今日十六日より快晴、
東山大佛堂に、九十本宛三重に柱立、合百八十本也、
此直一本付銀子拾六貫目宛也、但自二遠國一運送共に
此通也、佛の前八間廣き間、大木一本に付銀子百貫目
也、其外金銀入用幷人足手間不レ可二勝計一、太閤の御貯
の金銀、此時可レ有二拂底一と云々、去天正十六年始し
大佛殿は、木食專執行也、米三萬四千石被二宛行一之
內、六千石程餘太閤ゟ被二返上一、但其時は諸大名奉加
三萬石餘有レ之と云々、此旨木食上人　知音人ゟ被レ語
けると也、
廿四日、宇都宮奧平大膳女、今日駿府着、是は兩御所
依レ命、出雲國堀尾幼息爲レ令レ嫁也、是大御所彦也、
廿五日、宇都宮女出仕、大御所懇志し給、銀子五百枚
被レ出、去十三日於二江戶一登城時、自二將軍一銀子參百
枚被レ出、
七月朔日、大御所爲二河狩一、瀨名之谷ゟ出給、
六日、將軍從二江戶一武藏府中ゟ、爲二河狩一出給、
十日晚より細雨降、去月十四日の雨已後旱魃、今此濡
上下人悅レ之、
此比、從二江戶一爲レ使土井大炊靑山伯耆駿府ゟ來入、
子細不レ知レ人、
丹波國龜山普請出來、殿主は藤堂佐渡守對二兩御所一
進上由有て相立る、
此比より、代官衆中銀子を可二辨上一由也、去年の水入

の米下直成故、上來の如くに依レ有二勘定一也、
美濃國　黑野主　加藤左衛門尉一楊下總守　伯耆國え可
レ致二國替一由、自二江戶一奉行衆書狀、今日十九日彼在
所ゟ到來、各令二支宅一可二引越一由有二返狀一、伊勢國龜
山之關長門守右同前と云々、
薩摩國島津陸奧守　又八事、去年改名、リウキウの王令二同道一相
上、今日廿日都を立て駿河江戶ゟ下る、去年島津人數
リウキウゟ令二渡海一、彼島の王を生捕歸朝して今
及二此儀一、是よりリウキウを島津令二押領一、彼島田畠
令二檢地一、都合拾三萬石有レ之と云々、琉球に付島五十
三島と云々、右十三萬石之內也、
昨日迄八事也　廿一日、申刻より大風、及二亥刻一休止、畿內諸國
田畠損毛不レ可二勝計一、但遠江より東者さして此風不
レ強、去年之風より強吹ける間、家屋或は破損或は顚
倒、其責無レ限事歟、　此風さして作毛に不レ當由後に
聞ゆ、
　此風に奈良の神木六十本倒と云々、昔年應
永十貳乙酉年、春日神木六千枯、又永正三年丙寅奈良神木
七千本餘枯と也、
廿七日、美濃國加納松平攝津守　元飛驒守、去春改名、爲二加增一四萬
石、於二當國一拜領可レ有由、從二江戶一奉行申狀也、　同
下總守、伊勢國龜山城領相添、五萬石拜領、同狀也、三
河國作毛も依レ爲二本領一無二相違一、是兄弟駿府大御所
孫也、
去江戶衆松平越中守、土肥大炊、橘左近、丹羽五郎左
衛門、各壹萬石宛拜領、此橘左近は、先年關原合對砌
屬二石田治部少輔一、大津城責し躍、九州人也、去子年よ
り無足して令二在江戶一、丹羽五郎左衛門は信長公臣
下、五郎左衛門子也、是も去子年亂逆敵對、加賀國小
松城主也、近年在江戶也、此外伊井掃部　江州彦山、左近大輔別腹兄、
壹萬石、其外或者五千石、或者三千石宛拜領、但近年
無足の衆也、
廿九日、大久保石見守着二濃州岐阜一、去夏より越後國
國中村里相改逗留、信州を通、直美濃國ゟ來る、是當
國去年地檢鄕村知行爲レ被二相改一也、
八月大朔日癸酉　廿日、長岡越中守父玄旨、於二京都一老死、是當時俗方
之智者也、年七十七、但十ヶ年以來も老耄、無レ筋事を
も時々は被レ申けると也、　江戶增上寺淨土宗住寺可レ有
レ成二國師一とて被レ上、是大御所嚴命也、依レ之紫野の
國師を闕、吾朝に國師二人無レ之故也、專念之宗國師、

前代未聞、

八日、島津陸奥守殿、今日出仕、進物一大平布五十端、一段子五十卷、一銀子千枚、已上大御所へ進上也、右兵衛主常陸介圭南所へ銀子百枚宛、紅糸五十斤宛也、女房衆五人へ銀子貳拾枚宛、段子十端宛也、島津同道琉球屋形、一兩日中駿府へ可レ被レ着と也、

十四日、琉球人出仕、去十日に着二駿府一、今日對面し給、自レ是江戸へ下る、駿府逗留中、琉球王之弟病死、十八日、島津陸奥守を召寄有二振舞一、則常陸主能し給、貳茂、八島、鞍馬天狗、梅若丈夫、源氏供養、老松、此時廣間疊ふるびたる由曰、年寄中折檻し給、

十九日、今日毎年於二豐國一猿樂能行、今年者今春太夫勤レ之、但毎年に替て弓矢の立合迄を舞、能ばなし、大方春日の十一月の祭禮に似たり、

廿四日、去比常陸主母儀被二湯治一、今日可レ被レ歸之由にて、爲レ迎常陸主同舍弟の鶴丸夜半被レ出、後朝大御所聞給、夜中に門を開事曲事の由、同門番則被二禁獄一、甚無興也、先度十八日後出頭衆未不快之所に、又此事に付而各止二出仕一、

廿五日、琉球人着二江戸一、年十七八之小性、十四五の小性兩人有、シヤミセンを引、十七八計の小性、名字ヲモイシラ、十四五の小性はヲモイトクと云、小うたを皆々謠レ之、在江戸衆彼小性を呼、シヤミセンをひかせけると云々、言語は日本人と同レ之、但少ついは違と也、髪を頭の右にからわに結レ之計也、上下之路次に何時も宿入之時、笙横笛鐘太鼓ひちりきにて、管絃の如して宿へ付と云々、之を道行と云と也、王は彼座中へも不レ出、奥に有レ之隱らるゝ體也、琉球にも日本のまねをして、詩和漢連歌、又猿樂の能なとも有、宗は禪淨土聖道宗有レ之、

九月大朔日癸卯

二日、豐國神主吉田二位死去、近年煩敷不行歩なりしか、此春より俄腰もたゝ健達也、然處如二頓死一、年七十八、

九日、去月より于レ今長雨、今日雨間之晴也、此比名護屋普請衆縱普請不二出來一、其、出來たる由を駿府へ令二言上一、物主々々は可レ被二歸國一との内證也、さて人數は殘置、悉出來可レ仕之由也、昨八日に羽柴三左衛門播州へ可レ被レ歸とて、名護屋を被レ立、

今日於二駿府一近習之衆、幷年寄衆出仕、大御所面へ少

之間出給、奥にて碁有、本因坊德番にて利玄四目勝、又道右と門入碁有、門入勝、

此比、一夢當時儀故無雙上手也、古薩摩主被二相抱一、清須に近年住す、有二駿府一、大御所儀放

稽古し給、

此比、古田織部當時茶湯數寄者國一也、駿府江戸へ下、將軍數寄し給間、上下馳二走之一也、會毎膳部にかばらめを用、十日比增上寺國師成就して、此比出京、路次々々人夫已下以外打擲、其外行儀驕體不レ可レ勝計、在京中智恩院の長老と不快と云々、彼增上寺寡二公儀一、自他に付任二我意一、被二企二慮外一、時人惡二まぬ之一者はなかり、爲レ此弟子宗門さへ如レ斯、況於二他宗一乎、

安南國天竺内と日本の爲二音信一、船薩摩浦へ去比著岸、進物之事、一沈香之木之柱拾貳本、但一本に付四人持、一沈香之粉柱壹本、一糖水拾壺、一沈香拾斤、是は上沈也、一象牙貳、一鸚鵡壹つ、一孔雀壹つ、一リンケイ壹つ、是は鳥也、一モンノ綉貳疋、右之通書立を以注進、近日駿府へ可レ有二運送一と也、是は以來商船を可レ越ための由也、惣別日本に銀多之由、近年唐南蠻の島々に沙汰有レ之と云々、

廿七日、去七月より琉球の王、駿府江戸へ出仕して、九月十四日立二江戸一被レ上、今日美濃國被レ着二岐阜一、其上琉球へ有二歸國一、毎年御調物を可レ被レ上諸廻にて、無事之姿たるべきかと云々、但此儀于レ今無二披露一、琉球は暖國にて雪不レ降、始而日本にて雪をみると話、其年琉球に被レ歸、如二約束一也、

廿九日、自二江戸一土井大炊助駿府被レ來、是より相上、上方知行代官手前相改、將軍へ向後可レ有二領納一由、自二大御所一曰に依て也、

十月小朔日癸酉

三日、土井大炊助自二駿河一江戸へ歸下、上方知行代官中相改儀延引也、右に書代官中、手前より金銀數多被二召上一、諸代官中相辨之儀、迷惑此事也、

五日、松平攝津守自二駿府一江戸へ昨日參着、今日出仕、新知之黒印幷御馬拜領、翌朝則可レ上由、何任二下知一、

六日、將軍於二江戸一大久保相摸守所へ御成、

九日辛巳、申刻駿府城火事、上臺所の梁の上、大黒柱の上より燃出る、時人天火かと疑レ之、亦先年未の年火事以來、何者の業にや、九度火を付けると也、されど共人見出し、度々に消レ之、此度も火燒し事もなき所より燃出る事、五三日以前に火を付けるか、ふとき木

なれは俄に不ニ燃出一、日數を經て燃出るとの取沙汰也、是は偏に女の業となり、又云、三日以前に、南の方より一丈計の火飛來て、城の上にて消たるを、人皆見レ之と云々、兎角三日以前けふり立ける共云、右の火事、臺所幷あちやの局廊架燒失、あちやの局金銀小袖諸道具燒る、此火飛て二の丸中東の方、八屋三つ四つ長藏瓦葺三十間程燒失、

十一日、建仁寺新寺久昌院に有ニ法事一、奥平美作守信昌行レ之、祖父道改父牧庵石堵禪居庵に有しを、久昌院へ遷て及ニ佛事一、

十四日丙戌午剋大御所東へ下給、今日清水、

十五日、大御所從ニ清水一至ニ善德寺一給、於ニ路次一菱食を餓放にて被レ打、則藤堂和泉守に被レ下、

十六日、十七日、十八日、善德寺御逗留、

十六日、於ニ江戸一伊達政宗所へ將軍有ニ御成一、亭主を及ニ三盃酒一、

十九日、從ニ善德寺一至ニ三島一大御所着給、

十八日、戌剋勢州桑名の本多中務死去、彼ニ一番目の息出雲守、去十四日江戸より桑名へ參着と云共、病者無性の間無ニ其詮一、

廿一日、大御所鷹野場至ニ武州ロロ一着給、此所へ將軍從ニ江戸一有ニ光儀一、被レ遂ニ面上一、將軍は則江戸へ有ニ歸城一、大御所は自レ是方々有ニ鷹野一、さて江戸へ可レ有ニ光儀一との儀なり、

廿一日、戌剋北にあたつてとゝめき響有、

廿二日、夜雪降、山には此已前より雪有けれとも、里は是始也、二三寸雪滿、

當秋冬は、鴈鴨關東にも不レ多、依レ之廿三日將軍上總國へ御越、鐵放を以彼表の鴈打給ふ、其故にや鴈鴨大御所鷹場に、此以前よりは多し、

十一月大朔日壬寅

去春、越後國主堀越後守古久太郎男、改易時、妻女本多美濃守女去年の冬、唐被ニ召上一、駿府に居住、今月九州長崎有馬修理男船燒ぜし修理本なり、駿府に出仕しけるか、可レ娶之由大御所仰也、無ニ異儀一承諾、則於ニ駿府一有ニ見參一、修理男伏見に上る間、美濃守女をも被レ爲レ上、此旨長崎に先檝申下、迎船を乞けれとも、寒中海上不レ輙して、翌春迄伏見に逗留也、父桑名美濃守、遠國に女被ニ差越一事迷惑此事なり、修理息も廿三計の者也、日來妻子有て、殊三歳の男子有けれとも、右之旨特命なれは、元の妻を退及ニ此儀一、

廿七日、大御所立ニ江戸一駿河へ上給、

上方衆如何に聞けん、三川國岡崎山々にて、石場被ニ取置一、

十二月大朔壬申

江戸にて將軍茶會にて、各宿所に入御、

十日、大御所此間路次中有ニ鷹野一、今日駿府着給、

十二日、丹波國代官權田小三郎與ニ野瀨小十郎一有ニ公事一、自ニ大御所一本多上野介安藤帶刀を以、双方口上を被レ尋、然而小三郎申事不ニ届樣一曰、

十三日、大御所鷹野え出給處、秘藏の大鷹被ニ見失一、來三月、大御所可レ有ニ上洛一由曰、

松前より大鷹十六居上る、此內十三落て、たゝ三つ殘、武州忍又遠州中泉鳥屋え被レ入し大鷹共多損して、鷹師共蒙ニ勘當一、

廿四日雨降、惣別此寒中雨雪節々降、寒以前は暖氣なりけるか、可レ入ニ小寒一兩日以前より寒き事甚、入ニ大寒一兩日後より暖氣、小寒の冰大寒に脫とは此事歟、

廿五日、立春、

美濃國伊勢國先方衆、幷三河在國衆、明日明春尾州名護屋可レ有ニ普請沙汰一也、出羽奥州信州、幷關東衆江戸可レ有ニ普請一と也、

當代記卷六

慶長十六辛亥正月大朔日壬寅快晴、

駿府各出仕如ニ毎年一、自ニ江戸將軍一、以ニ酒井左衛門尉一被レ遂ニ年禮一、

三日、江戸奥州會津の蒲生飛驒守屋形燒亡、奮冬月迫に將軍を奉レ入、亭主正月二日に會津へ被レ下、於ニ路次一聞ニ此事一、播磨の國主池田三左衛門尉屋敷類火、但門は除ニ火難一、家屋は何も無ニ相違一也、

七日戊申大御所爲ニ鷹野一遠州に御出、今日田中迄出御、

九日、大御所榛原郡鷹野し給、夫より中泉に御出也、

十日、三川國御油町燒失、

十六日、雨、十七日、大御所自ニ中泉一駿河に御歸、今日ロロ御泊、十九日、大雨、廿一日二日より、雨打

續ふる、

廿五日、尾張國名護屋新町百五十家燒亡、　廿六日、美濃國笠町燒亡、

二月小朔日壬申先月より于レ今雨ふる、此日江戸神尾五兵衛家失火、是は駿府おお(ちや)息子也、六日、今日甚雨故、春日新の能延引、

九日、稻富於二駿府一病死、是は當時無類の鐵放の上手也、

十二日、雷、當春初也、　十六日、風甚寒氣如レ冬、　十七日、晩より終夜大雨也、十九廿日廿一日迄風烈、寒氣如レ冬、　廿二日、亥刻地震、

此春、薩摩國龍白病死、兼而如二當日一追腹切者三十餘人、同弟兵庫頭も病死、是は今の薩摩の國守主陸奥守父也、去子の年於二關原一合戰場より遁下て、近年隱居、

三月大朔日辛丑今日より江戸普請始るといゆとも、亥には六日より始る、　五日、駿府犬御所、今日上洛可レ有レ之由曰處、雨故六日丙午立給、田中に今晩止宿し給、

七日縣川、八日濱松、九日吉田、十日岡崎、十一日名護屋に着給、翌日は彼地に逗留し給、　十三日美濃國の岐阜、　十四日赤坂、　十五日近江國彥根、　十六日長原、　十七日入洛し給、　十一日、未刻雷數聲、此日氷二度ふる、

丹波國代官櫨田小三郎、此一兩年野潮と云者と山公事有、小三郎企二雜意一に付て被二改易一、則途二勘定一、代官所の引受として、金子七百枚令二辨上一、

十九日夜半、德長左馬介宿所上京燒亡、翌夜又二條御構の近所の寺燒失、

廿日、大坂秀頼公上洛し給、家康公對面可レ有由、織田有樂を以家康公より被二申遣一、

廿二日、三川國岡崎城主本多豐後守死去、去月十日比より風毒腫依二相煩一也、

廿三日癸亥家康公參內し給、供奉の衆無二裝束一、家康公は勸修寺亭にして裝束し給、

廿七日、讓位儀式大概以如二先例一、此日見物無用之由、家康公下知し給、同廿七日、秀頼公立二大坂一淀に着給、京都より爲レ迎右兵衛主家康公息、年十二歲、常陸介家康公息、年十歲、幷池田三左衛門加藤肥後守淀へ參向也、秀頼公大坂を立給時、彼地虛空に光と云々、　廿八日辰刻、秀頼公入洛、則家康公の御所二條の御越、家康公庭上迄出給、秀頼公慇懃禮謝し給、家康公座中の入給後、秀頼公庭上より座中へ上給、先秀頼公を御成之間の入申、

其後家康公有二出御一、互の可レ有二御禮一之旨、家康公曰と云共、秀頼公堅有二辭退一、家康公を御成之間の奉二出し一、秀頼公遂レ禮給、膳部彼是美麗に出來けれ共、遁而可レ有二隔心一かとて、たゝ御すい物迄也、　大政所是は秀吉公の北の御方也、出給相伴し給、頓而立給、右兵衛督常陸介途中迄被二相送一、秀頼公直に豐國の有二參詣一、大佛を見給、伏見より舟にて其日及二酉刻一大坂の歸着し給、大坂の上下萬民之儀者不レ及レ申、京畿の鄙民悦只此事也、此時も大坂光と云々、

此度於二京都一家康公より秀頼公御進物之事、

御太刀眞盛　御馬黑毛　金子三百枚、猩々皮三枚、色違枚肩、一枚黑、一枚緋、長一枚に付五間つゝ段子三十卷、此內錦十卷也、刀一腰一文字、脇指一腰、左文字、是は古秀次隨一道具也、

秀頼公より右兵衛主への進物、

太刀一腰光忠　金百枚也、

常陸主への右同前也、

女房衆への遣物、

あちや　かめ　かち、此三局へ金一人へ三十枚つゝ也、

家康公近習の衆へ、秀頼公より被レ下物之事、

本多上野介、大久保石見守、板倉伊賀守、京都代官此三人へ一人に付金三十枚つゝ、安藤帶刀、村越茂助、成瀨隼人、米津清右衛門、是四人へ一人に付金廿枚宛也、永井右近、大澤、西尾丹後、城和泉、　榊原伊豆、此五人へ一人に付銀子百枚つゝ也、

扨惣の女房衆へ金子三百枚、其外藥師臺所人へ被レ下物、銀子卷物等也、　豐國大明神へ銀子三百枚、於二大佛一大工大和へ銀子二百枚被レ下、

家康公より秀頼公へ被レ進物、

御刀一腰、大左文字、御脇指一腰、鍋と(をし)、御鹿三居、何も島屋之大鷹也、御馬十疋也、

卯月小朔辛未　二日、右兵衛主常陸主、大坂秀頼公へ爲二禮謝一被二相下一、

右之進物之事、

銀子千枚　御太刀一腰但遣太刀也、　御馬一疋

右之分家康公より秀頼へ の御進物也、

銀子二百枚　綿三百把

右之通秀頼公の御袋樣へ家康公より御進物也、

銀子百枚　綿二百把　紅(ハナ)三百斤

右之三色御姬樣へ家康公より被レ進、是は江戸將軍

の御息女、秀頼公の妃也、
御太刀國宗銀子二百枚、
右兵衛主より秀頼公へ御進物、
同　同
常陸主より秀頼公へ御進物、
銀子百枚　綿二百把　紅(ハナ)三百斤
銀子百枚　綿二百把　紅(ハナ)三百斤
御袋様へ右兵衛主よりの進物　常陸主右同前の御進物也、
銀子百枚　綿二百把　紅(ハナ)三百斤
御姫様へ右兵衛主よりの進物　常陸主同此通也、
秀頼公より右兵衛主へ被レ進物、
御脇指吉光　刀高木貞宗　段子百巻　かりたの小皷のだう　是は右兵衛主小皷なすき給故也、皮共に、御小袖　同はをり
秀頼公より常陸主へ被レ進物、
刀二字國俊　脇指まつら信國　段子百巻　まゝねの小皷のだうかはともに　能の装束　是は常陸主能すき給に依て也、小袖十、はつぴ三つ、かりきぬ三つ也、
供の衆へ秀頼公より被レ下物の事、
年寄衆へ刀一つ宛　猿楽十八人、何も小袖同、ばうへ同、さて其日伏見へ舟にて被レ上、
三日、大御所伏見へ御越、此以前賜給萬物御覧あり、

此日、下野國上野國氷村々にふる、宵の酉の刻より翌朝迄ふる所も有、然者其所は二尺あまりたまりけると也、狐狸鳥皆以死、
五日、家康公従二伏見一歸京し給、　六日、淺野彈正近年在二江戸一、此中煩歿、死去、下野國鹽原へ湯治之處、彼湯にて二三日不例、不應にして如レ此、　十一日、於二京都一常陸主能し給、此日夜半より翌朝巳刻迄雨ふる、三月五日の雨以後是始也、庶民悦事無レ限、
十二日御即位、家康公忍にて見物し給、今上十九歳と云々、
同十二日、戌刻、月の輪赤青雲、二重笠のごとくにあり、
十四日、二條御殿にて能有、家康公是を見給、　翁、高砂、柏崎、今春太夫仕レ之、　千手、重衡、うたう、少進法印行レ之、是は本願寺の衆也、　猿楽共には何も小袖被レ下、別の被レ下物なし、
十五日雨、去十二日の雨不足の處如レ此、民悦レ之、
十七日、大御所知恩院へ佛詣し給、　十八日、大御所出京下給、此日永原、十九日彦根、廿日朝雨、及レ晩休止之間、柏原迄御出、廿一日岐阜、其夜鵜飼見物し給、鵜

數百二十集けれ共、鮎はちいさき茶椀の蓋に一つもとらす、　廿二日、家康公加納へ御成、其日名護屋迄御出、　廿三日、大御所名護屋御立、熱田宮より舟にて下給、其日東風烈吹て、舟不レ任二進退一、希有にして野間邊へよせけるか、言語道斷不自由さ無二云計一、廿四日、今日も又東風、ちたの郡へ御舟をよす、　廿五日、三河國むろへ舟をよせ、餓の事なりけれは、人馬もなくして不自由也、下々の女房なとは、歩行にして吉田へ行けると也、御供の上下男女舟に不レ醉はなし、大御所索醉不レ給、右兵衛主常陸主もさして醉不レ給となり、
此比小黒舟鎌倉の三浦へ着、
淺野紀伊守父の葬禮を、於二高野一執行、盡レ美、當時無類の孝行者也、
五月小朔日庚子　四日、五日兩日共に雨ふる、
去三月より、江戸于レ今普請いつもきふく急給間、此度は猶以其通と云々、依レ之御用を多取ける間、關東の下民設二錢貨一と云々、
十九日雨、此時大和は洪水にて、長谷川夥出けるか、三輪近邊の田畠一萬石餘損毛と云々、

江戸普請最中也、伊達政宗町場破損二百間、是を各へ配分して普請有、
六月小朔日己巳　今日より尾張國名護屋爲二普請一、美濃伊勢兩國先方の衆參着、去年彼地普請被レ致、大名千石に一人つゝ人夫を名護屋へ被レ出、舟入をほる、諸國より内裏の普請を被レ行、築地一間に付て、八尺間銀貳貫五百目の作料以務レ之、取分關東衆依レ爲二遠國一銀を相上、此銀板倉伊賀守大工大和守相請取、京の町人賃にて行レ之、
唐より小船共多來朝、糸澤山に來、
十七日、出雲國堀尾帶刀死去、昨朝より蛮亂、俄以如レ此、　廿四日、肥後國加藤肥後守元の名主計死去、
北國の前田肥前、去春より被二相煩一、福島左衛門太夫、去春より被レ煩、存命不レ定の間、繼目判形依二所望一、息男駿河江戸へ被レ下、
七月大朔日戊戌　三日、江戸井伊兵部少輔屋敷より火出、榊原遠江屋敷及二類火一、
八日、美濃國高巣住德長石見入道法印死去、五三ヶ年以前より腰拔、座敷中も不二行歩一也、遺物金九百枚有レ之云々、十日比、江戸普請出來、但依二手前一未出來も

有レ之、
八月小朔日己辰 二日より八月節、
廿一日、奥州會津邊大地震、石垣悉崩、屏楹以下悉落、殿守破損、死以下落、人馬多死、近邊山崩川の流を留、依レ之知行二萬石餘湖水となる、他國此地震無レ之、中にも柳津本堂倒、在家多ころひ山崩、是は偏飛驒守佛神を蔑如にし任二我意一、其天罰の謂と云々、
九月大朔日丁酉
五日、江戸將軍息女十一歳 出御、是は越前の古秀康息男、今號二少將一、當月廿八日、於二彼國一依レ可レ有二祝言一如レ此、十一日、將軍姫君至二駿府一着給、
此比、をもき咳氣諸國に煩、上下人不レ免レ之、
十五日、於二駿府一能有、姫君に見せ申さるへき爲也、一昨日可レ有を、姫君咳氣し給に依て及二今日一、十六日、姫君駿府を可二立給一處、咳氣以外也、
此日、八せんに入、又土用にも入、
十八日、姫君咳氣有二本腹一、今日駿府を立給、廿五日
辛酉雷數聲時雨ふる、
此秋、中國西國は凶年、五畿內も不レ宜、近江より東國は豐年也、但信州下野上野奥州は凶也、

十月小朔日丁卯 三日、戌刻小地震、晩より翌四日夜中迄雨、
六日壬申 大御所爲二鷹野一關東に御下、此度は右兵衛主常陸主無二同道一、翌日善得寺にをいて、鶴鐵放にて自打給、九日、大御所至二小田原一御着、翌十日朝中原へ御返、
十日、午刻小田原城主大久保相摸守男加賀守死去、去年春中より煩、終以如レ此、年三十二、
於二江戸一浴二新恩一衆四五人、松平丹波、山口但馬等也、是伏見在番不レ亂二法度一相務故也、下野國皆川舊領を以配當なり、
十六日、大御所江戸に御着、
去夏肥後國主加藤主計死去の後、息男從二江戸一去七月九州に被二遣返一、爲二幼少一間、爲二置目一藤堂和泉守被レ遣、今日十六日勢州津を立、肥後に被レ越、從二江戸一目付の衆、牟禮江右衛門、小津瀬兵衛此兩人被レ遣、廿二日、於二江戸一能有、今春太夫并少進法印行レ之、翌日も同能有、去月下旬に今春太夫着二江戸一しか、大久保加賀守死去する事、將軍哀傷し給故、至二于今一延引の處、大御所より依レ仰此能有レ之、

廿六日、大御所爲二鷹野一江戸を出給、今日戸田着給、今春太夫罷上之間、將軍より引出物被レ下、銀子百枚、御服二重、何も唐織、雄の小袖也、座中の猿樂共、何も御服被レ下、其中に春藤わ 大藏長右衛門、同助藏、幸の清五郎、鷲伊右衛門狂言 山科彌右衛門、今春彦九郎、狂言德右衛門、此等之者共には、或は金一枚或は銀十枚つゝ被レ出、大藏太夫にも御服一重、銀十枚也、少進法印唐織二卷、銀百枚也、
大御所於二江戸一、德川の先祖の位牌所を被レ尋、年老の百姓申けるは、瀨羅田の近所に其寺の蹤跡有と申間、使を遣し地を見せられける、死石佛已下堀出す、則江戸增長寺今國師越給、一寺を可レ有二建立一之由曰、
十一月大朔日丙申
來春、江戸石垣普請可レ有レ之とて、西國衆人數を遣、於二伊豆山一石を被レ聚、
此比、諸國水涸、南都猿澤の池水絕間かへて、水を町人運送し入る、池に刀一有、水かゆる者取上る、
九日、於二駿府一右兵衛主疱瘡令レ煩給、
十七日、未刻伏見新町より火出、兩替町燒、其より大名衆屋敷廿計及二類火一、但去夏よりこほし殘の家共也、十七日夜半より風甚、翌十八日 終日猶以風甚、
嵯峨の角の藏了以、以二才覺一川を堀、大坂船京の三條迄入、依レ之京都自由にして、米薪已下下直なり、京都町人悅レ之、廿三日、大御所從レ東至二駿府一御歸城、
右兵衛主煩本復、依レ之御氣色快然と云々、
東山大佛殿漸出來、死を上揃なは柱破るへきかと云云、其故は、皆はぎ柱也、此比はし〳〵と噂の由人語レ之、其上軒短くして、佛の膝に雨ふりかゝるとなん、
十二月大朔日戊寅 二日、夜に入霧、寒甚、三日、終日大雪、四日五日迄、以上三日之間甚寒、六日、小寒に入、今朝より快晴、暖氣也、七日、終日雨、翌八日風大烈、
新庄駿河、於二下總國法度所一鷹を遣、鳥見の者江戸へ令二言上一、依レ之駿河父子退散、
十一日夜半より翌十二日終日雨、十七日夜より十八日雨、寒中に如レ此雨節々ふること稀也、來年大水可レ出かの由人語レ之、去霜月中旬の比より、京中井の水乏、少あるも渴て用事不レ成、廿三四年以前如レ此有けるとなり、極月は雨節々ふりける間、後には

井水出たり、廿二日、終夜雨、五日以前より暖氣也、
廿七日、未刻より夜中雨、
此年五穀豊年、

當代記卷七

慶長十七壬子年正月大、元日快晴、
朔日酉申駿河江戸諸人出仕如二例年一、
二日、入レ夜雪二三寸積、
此比、江戸將軍の二番若君疱瘡し給、但頓而本腹也、
三日、舊冬晦日より甚寒、寒中は暖氣成し、
四日、平岩主計頭、去朔日晩に於二名古屋一九死去、
今日大御所聞給、於二病重一は犬山へ移、於二彼地一可二相果一を、於二名古屋一死る事不レ謂の由曰、甚無興し給、
六日、立春、
七日、大御所遠三尾可レ有二應野一とて、今日駿府を御立、藤枝に一日逗留し給、九日相良、十日横須賀、十一日中泉、十二日濱名、十二日彼地逗留御、十四日吉田、十五日吉良へ着給、
八日、戌刻より九日夜迄雨、十日、風烈、入レ夜雪六七寸積、十一日十二日毎夜雪、十三日快晴、
十五日雨、今日大御所吉良ゟ御着、
十八日、近年絶て久き左儀長、今日卯刻於二内裡一被レ行、
廿日、大御所岡崎へ御越、此中於二吉良一鶴鴈鷹令二物數一、
廿三日雨、廿七日、大御所岡崎より至二名古屋一着給、古平岩主計家に宿給、但新殿造作出來御座所とす、廿九日、大御所從二名古屋一岡崎ゟ御歸、
從二去年一諸國多分江戸將軍ゟ被二相納一、但美濃伊勢兩國は駿府ゟ納、駿河遠江尾州是三ヶ國は、右兵衛主常陸主分國也、於二近江一十三萬石駿府へ同納、
二月小朔日丙寅
二日、大御所今日岡崎を御立下給、三日、大御所雨故今日吉田御逗留、
十三日、及レ晩細雨、入レ夜風雨、翌朝休止、廿日の夜寅刻地震、廿二日雨、廿四日雨、

三月大朔日乙未
十日、入レ夜雨、翌朝休止、去月廿四日雨後是始、
十一日、將軍江戸を御出、駿河ゟ御上、
十二日、山々雪見ゆる、去月當月甚寒、麥毛凶、
此比ばてれん宗に日本人成事堅被レ禁、小笠原權之丞、榊原加兵衛、原主水、此外五三輩被二改易一、至二自今以後一は、十人組に諸奉公人をなして、若其中の者於レ成二彼派一は、則可二申出一との義也、
十九日、將軍至二駿府一着御、
土屋民部於二江戸一病死、
廿三日、岡本大八と云者有、親は在江戸す、彼大八九州長崎の有馬修理儀を於二駿府一取持者也、從二修理方一金銀を於二指越一は、各年寄衆幷女房衆遣レ之、彼取成を以、九州鍋島知行中を三部申請可レ出之由僞て申候、眞と心得、金銀を大八方ゟ渡す、素爲二謀計一間、不レ及二何沙汰一、得二金銀を一大八令二私領一、此旨修理令二言上一間、廿三日於二阿部川原一火炙に被レ成、
廿五日、駿府能有、少進法印今春太夫行レ之、常陸主も能し給、此内遠山民部、鈴木久右衛門、池田備後一番つゝ行レ之、兩御所笑給、廿六日、能有、仍如二昨日一、
松平下總守ゟ大御所より、石火矢十二丁大鐵放十二丁、其外鐵放三百丁、鑓弓番具足已下數百被レ下、
從二將軍一各へ御服、或十或五被レ下、
廿七日、大御所ゟ爲二茶會一將軍御越、なげづきんと抹茶入を被レ遣、是當時の名物、價千金の上と云々、
廿九日、藤堂和泉守所へ將軍御成、銀二百枚小袖三十、和泉守令二拜領一、少進今春大夫能有、從二亭主一將軍ゟ長光の太刀、幷脇指進上、常陸主右兵衛主へも脇指令二進献一、
大八被レ行二罪科一砌、大八申云、從二大御所一長崎唐船の糸、彼是の使被レ遣、長谷川左兵衛を修理暗打に可レ仕の由、大八ゟ申合候つる由を白狀致候間、修理爲二門人一として、被レ預二大久保石見一、其後甲斐國被レ遣二郡内一、息左兵衛は不レ可レ懸二此科一の由曰、本領令二安堵一、如二前々一長崎居住、
卯月大朔乙酉日今日肥後國加藤主計幼息大御所出仕、進物金子百枚、卷物三十、むく〳〵の袷十、將軍へは、於二江戸一可レ有二出仕一の由也、
二日、大御所と將軍對談及二數刻一、他人不レ聞レ之、
八日、又能有、九日、同能有、兩日共に少進令春仕、

其間々に常陸主能し給、從二將軍一少進幷今春、其外座中の猿樂共、去年如於二江戸一被レ下物、銀御服なり、

十日、將軍駿河を御立、江戸へ下給、

十六日雨、今月三日の細雨の後是始、下民悦レ之、

廿日、亥刻、三川國吉田玄蕃氣相惡き由にて、則無言、子刻死去、去年父玄蕃頭如レ此頓死體なり、可レ謂二奇特一、

廿二日、能有、大御所賢慮の外の猿樂千歳を舞けるとて、當座に叱給、依レ之舞臺に並居ける猿樂共、周章不レ斜、又一度式三番を仕、扨脇の能過、大御所本丸へ御歸の間、能は空止たり、希代の曲事也、

廿三日、昨今雷數聲、當春可レ謂二初雷一、

周防國有二佐異一、民家に道行と覺て宿を借、臺所方膳部用意す、彼是下人に云付る聲は聞けれとも、人體不レ見、不審に覺て地頭方へ令二注進一、則來て見けれ共右之通也、さらは地頭振舞をして見んとて、招けれは則來、膳部酎酒已下常の人の如二食事一也、然共姿は曾て不レ見、是は如何樣怪物成と心得て、犬の逸物共を十疋計取、中に入戸を立けれは、犬共戰栗してかゝみけり、さて犬を見けれは、殊外に摧碎しける體也、其座敷に犬を打ける杖とも幾等も在レ之、其後客云、我等をは狐狸の類と被二心得一候歟、不レ謂被レ成樣の由申、さて元の宿へ歸、其上振舞の爲二禮謝一錫を片に送、甚美酒也、人多集て呑けれ共、此錫の酒不レ盡と云云、

美濃國岩佐云所の近所に、百姓一人女子有レ之、今は歳十六計と也、此比彼女子口より小蛇出て、座中に徘徊して、又口へ入、彼小蛇從レ口出し時は、女子無性なり、如レ此の事人皆をそろしき事に耳云けれは、父彼女子を害けると云々、希代の不思儀也、

五月小朔日乙未

四日、從レ晩五日雨、自レ是露に入、

七日、上總守大御所息、江戸屋敷夜半燒亡、家不レ殘、但他所不レ及二類火一、

有馬修理九州長崎主、去月より甲斐國都留郡をかる、可レ致二殺害一の由大御所命也、

九日、五月節、

十三日、奥州會津主蒲生飛騨病死、常に大酒、諸事無行儀放埒と云々、彼小性本山主膳、岡佐右衛門、右之兩人自殺、

廿六日、辰の刻小半時俄風甚、夜前より大雨、

廿七日、大水、

五月中、六月七日八日比迄、關東は旱魃、

六月小朔甲子日、去月廿八日より當月二日迄快晴、四日より又雨、此以前の如露長雨なり、

今日朔日夜半過、江戸土井大炊屋形不レ殘燒亡、但不レ及二他所一、

六日、此間九州加藏肥後息十二歳、出雲國主堀尾山城守十四歳、在二江戸一、今日將軍彼兩人有二振舞一、則本國に可レ上之由暇を給、依レ之八日江戸を立上、

十日、六月節、

十二日、從二今日一快晴、去月四日より昨日十一日迄長雨也、十五日、晩甚夕立、此比無二比類一、廿一日、未刻より大雨、

廿二日、大水、朝東風甚烈、午刻より申の終迄大風、但此大風伊勢美濃尾張三箇國强々吹、東はさして不レ吹、此時の風に、伊勢尾張海にて破船二三十艘、又伊勢海より大坂へ兵粮賣舟、熊野浦にて七八十艘破船と云々、三川遠江浦々にて二百艘破船と云々、中國西國の浦々も數多破船と云々、奥州會津も大風、同大水なり、關東は旱也、廿三日土用に入、

廿六日、美濃尾張大水、鹽田の堤切、津島表も水入、美濃國外濱の堤も切、去月四日より長雨、但間々に二三日つゝ天氣の日も有けれとも、大方は雨也、從二今日一快晴、近江より上方西國も夕立は有けれとも、多分旱、

於二江戸一徒者集り、人を切事無二斷絕一、六月廿八日柴山孫作上口泰公の人也、彼者共を一人成敗しける處に、彼黨類孫作所にも奉公して有けるか、我類を被レ切けるとて、則主の孫作を切殺、江戸中にも彼徒者三百程有けると云々、諸國に奉公して居ける者共、合三千人と云々、此中江戸にて有二穿鑿一、九十人程搦捕籠に被レ入、彼孫作切候者は、小者にて候つるを取立、侍にして懇切しけるに、忘二重恩一主の頭を切、不レ及二是非一次第也、則彼者を生捕、類を被レ尋けるに、大將分は大鳥居いつ兵衛、大風嵐の介、大橋すりの介、風吹はちり右衛門、天狗郷右衛門なと云名也、則彼任二白狀一被二相尋一、悉搦取被レ行二成敗一、さて京都に有二下知一、大坂堺其外國々を彼一類成敗可レ有由也、依レ之無緣の者には、此比宿を借事なし、旅人爲レ之迷惑す、彼いつ兵衛すまうをも

能取、兵法をも能つかう間、若衆かふきとはしらす近付けるを、被レ行二罪科一、國々ね被レ遣、

穗坂長四郎越後衆被レ預二村上周防一、坂部金太夫同越後衆濱口伯耆被レ預、岡部藤次奥州被レ預二米津勘十郎同奥州被レ預二津輕一、佐平次佐渡被レ流、南部、

彼かふき共の傍輩、徒者と不レ知して別而近付ける者に、かふき者の中、去五月喧嘩して死けるを葬んとて、無二等閑一傍輩に其事とは不レ云、無縁の者死ける間、結縁のため代物少合力候へとて樣々云ける間、無二何心一代物少出しけるを、號二其一類一して被二成敗一、此者共無レ罪して死をかうむる、迷惑なりし事共なり、

下野國笠間の城、二三箇年以前より無二城代一、今松平丹波守古河の城主被レ爲二相移一、さて古河は小笠原左衛門佐、古酒井左衛門尉男、信州松尾掃部大夫養子して、先年國替の時より、武蔵國本庄にて一萬石拜領、古河へは可二相移一の旨將軍下知し給、笠間は城領三萬石、古河は二萬石なり、

七月大朔癸巳日、

五日、近江より西は風甚、但去月廿二日の風程はなし、此時も熊野浦にて破船、

去月廿六日より十一日迄さふく旱、

十二日より如二夕立一、十八日迄日々雨降、從二十九日一快晴、

廿四日、江州長濱の内藤豐前死去、歳七十、

廿八日、戌刻より同廿九日細雨、去十八日夕立の後始レ之、下民悦レ之、此日子の刻より、大久保石見守俄大中風相煩、

廿九日、同雨、卅日、未刻より終夜大雨、

此七月、奥州下野國なと下民多死、石田治部少たゝりとて、奥州米澤より送レ之、會津よりも又送レ之、

八月小朔癸亥日、雨、昨今の雨に今朝大水、美濃國會禰堤切大垣へ水入、大垣の下の堤も切たる間、翌日大垣水漸引、

二日甲子夜前丑刻より雨休止、

四日、細雨及レ晩、雷當二山方一一聲、翌五日より快晴、

九日、去五日より至二今日一暑氣甚、惣別此夏中同、土用中もさしてあつきことなし、

十二日、八月節、

十三日、大御所爲二川狩一濱名へ御出、及二晩に一御歸、

十四日、從二今日一又雨、

當月始、黒船至二長崎一着、去々年來朝黒船、悉被二打

果一の間、自レ是以後、來朝不實の由人みな思設處、長崎の住僧彼國人たるに依て、此二兩年依二相調一來朝云々、其外小船共多著岸、猩々皮毛氈巻物糸如レ山來と云々、

廿五日、洛中大水、新舟入の屋形堤以下浸水、見二懲之一歟、此以前家可レ作と思立ける者も止けると也、

廿八日、此度黒船の唐人駿河へ參着、

此度來朝の唐船共の内、ヲランダ國より來る仁、鳩の比なる鳥一、大鳥一、何も生鳥を駿府江戸へ進上すへきとて京都迄上る、右の小鳥は人の云事を聞て則如二其言一、大鳥は頭は鶴に似たり、背の毛は猪の脊の毛に似たり、

九月小朔壬辰日、羽柴三左衛門駿河江戸へ可レ被二相下一とて、近日伏見へ被二相上一、今日至二未刻一西返殊強、則休止、但水は不レ出、從二去月一長雨、于レ今不レ止、近江伊勢美濃尾張は、此風强吹、從二遠州一東は少吹、伊賀國上野城古の殿守をこほち、新殿守を立けるか、五重の上の重計荒、惣は未塀も不二出來一に、右之西の風に倒、大工幷手傳の者百八十人倒死、此外手負も少々有とかや、美作國此時大水出、城近邊にて三千程人死、其外彼國中にて二千餘、都合五千程死と云々、同牛馬同前、洛中はさして不レ吹、さして草木に何の國も不レ當と云々、

十二日雨、此比迄去夏中より雨打續、上下迷惑也、殊當月二日の大風に倒伏田畠、此長雨に付不農也、諸國大方此分也、但從二駿河一東は大風不レ吹、夏中も今も長雨なし、

十三日、播磨國池田三左衛門、一昨日着二駿河一、今日有二出仕一、大御所則對面し給、

同日戌刻、東山黒谷の堂燒亡、法然の御影同失火、

十五日、池田三左衛門於二本丸一有二振舞一、從レ其直に江戸へ被レ下、

廿六日、長雨今朝迄降、但其間或は一日、或は二日三日早時も有、從二今晩一快晴に成、

此比會津の古浦生飛驒守息男家康公孫子、歳十歳、駿府ゟ出仕、大御所對面し給、五三日在府、さて奥州へ被レ歸、

十月大朔辛酉日、四日甲子入レ夜戌刻より雨、六日、雨不レ降、

福島左衛門大夫駿府江戸爲二出仕一被レ下、口口駿府に

着府、
越前國古三川守秀康、去慶長十二丁未年卒給砌、家中年寄七人して金子隱取と云々、此事去年人公事申事付、右の七人の内岡部伊與と云者、江戶へ下事由を可二言上一旨相催、美濃國大垣迄下處、か程の儀達二上聞一事如何の由、當二川主幷家中の年寄人を遣、從二大垣一彼伊與を呼返、然共至二當年一彼公事無二落著一間、彼伊與江戶へ下、牧主殿と云者も、右の七人の内たるか、岡部と同道し、江戶へ下の由を申けるか、如何思けん、高野ゟ直に令二登山一と云々、

十九日、右七人内久世但馬と云者被二生害一、息子加賀國に有けるか、此之事の見廻來て、但馬と一所にして死、同但馬聟、是も見廻に來て同死、其外以上但馬於二屋敷一侍分百五十人死、中間小者は悉十八日晚出けるとかや、寄手先本多伊豆也、是も右の七人の内なり、先當座被レ宥、三川主より人質を被レ遣、伊豆居城府中に彼人質を置、伊豆は北の庄參令二先登一、伊豆人數能者共、當座に廿八人死、手負四十人餘と云々、其外寄手多賀屋者共始、惣而二百計保死すと云々、

同廿日、弓木左衞門（右の七人の内）生害、於二此屋敷一も寄手三十人計死、右是は古三川主の時、知行方專一の用人也、同日、上田隼人也、是は（同右七人の内）寄手ゟ理を云送、其身計腹を切、被官共をは出ける、然處寄手心易、屋敷の内へ入ける處、隼人内の侍五六人留居て、寄手と戰ける間、爲レ之寄手討死す、

今村掃部口口兵庫右理爲レ可二言上一、廿五六日比に北庄を立東國下、

此比、上總主（大御所息男）駿府へ來給、去比久無二出仕一の由、大御所曰付如レ此、則有二對面一江戶へ下給、

此比、南部東臺寺衆徒三人搦取、此外一人同宿、以上四人也、其故は、六七年以前勅封藏ゟ忍入、敷板を切拔、寶物の内金作鷄同盃を搜取て、折々京都へ持上、令二兩替刷一私用、今年彼盃を其儘にて可二兩替一の由令二相談一、亭主見レ之非二尋常物一、殊昔の年號有ける間、如何樣、是は勅物歟御物歟、存二不審一間、此旨を彼僧に申、僧及二難義一、往々此事亭主口より可レ漏と思取、別宿亭主を振舞、飼二鴆毒一、間則死畢、妻女頓板倉伊賀守所へ行て言二上此旨一、從二伊賀守一奈良代官ゟ相屆間、彼僧三人幷同宿一人搦て京都上せける、伊賀守事の由を直被レ尋けれは、有の儘に令二白狀一、さて南都へ

下證東國ゟ言上、來年二月、薪の能見物集貴賤に相見之一、其上可レ有二成敗一なと風聞也、猿澤の池遊覽構入レ之、貴賤見二物之一、

閏十月小朔辛卯（十六日霜月の節）、

二日、大御所駿府より東へ下給、內々去月廿四日可二下給一由、同處種物氣付、至二于今一延引、一昨日と曰しか依レ雨及二今日一、今日も依レ雨江尻迄出張、

三日、今春太夫其外猿樂共、從二駿河一上、去春叱申、此中在府しけるか先以如レ此、

十二日、大御所江戶着給、路次中依二應遣給一也、十八日、大御所於二江戶一、從二新城一本丸へ入御、廿日、大御所爲二鷹野一、從二江戶一御出、

越前國公事達二上聞一、本多伊豆守清水丹後江戶へ被二下寄一、

大御所關東方々鷹野し給、鶴鷹取事無二際限一、中にも於レ忍白鳥を鷹取之間快氣し給、將軍は鴻巢にて鷹野し給、

十一月大朔壬申日、

十二三日比の事、三川吉田を松平主殿助（是は先年於二伏見一討死せられし主殿助子なり）拜領也、松平主殿此間の在所西郡にをいて五千石、古松平玄蕃弟庄次郎拜領、

十三日、未刻地震、

十七日、寒に入、昨日甚寒して、入レ夜雪るふ、

廿一日從二辰刻一廿三日迄晝夜雨ふる、廿三日朝風烈、

廿六日、申刻雷二三聲一、寒中の雷珍事歟、

同廿六日、大御所關東中鷹野し給、今日江戶迄御歸、

廿八日、於二江戶新城一、越前國年寄本多伊豆守と今村掃部清水丹後（何も傍輩）及二對決一、兩御所直に聞レ之給、追而從二將軍一理非の旨急度可二仰出一と也、

十二月大朔庚寅日、從二夜前一今朝甚寒、酉刻終より終夜雪降、近年大雪也、二日の及二卯刻一雪止、此日大寒入、

同二日、大御所江戶御立、駿河ゟ歸路し給、

六日、去從二二日一今日迄、打續雪降、

越前國家老之事、去月廿八日兩御所聞給し、此比、從二將軍一仰出云、今村掃部頭清水丹後守爲二非分一の間、掃部は一僕にて伊達政宗に被レ預、丹後は岩木の被レ預二鳥居左京助一、本多伊豆利運成て、越前國の儀悉皆可レ爲二彼異見一の由仰出なり、

十一日、從レ晚終夜雨、十二日同雨、

今日庚子禁中作事始、右の儀式、貴賤令二見物一、
十四日、丑刻、駿府町火事、本町米町通町等也、
十五日、未刻、大御所駿府歸城し給、
十七日、立春、戊亥雨刻雨降、
中國西國大名、多以駿府にて越年也、
此冬、信濃國諏訪湖不レ氷の間、水上人馬不レ通、
廿五日雨降、
廿八日、又雨降、今年は夏秋冬雨しげき事、近年無二比類一、寒中も甚陵氣、偏に如レ春、
三川國水野日向守後藤德乘丸壺抹茶入被レ取、價判金二百枚也、此外北礪墨跡、釜已下數寄道具多以被レ取、何も一色に付直或は判金廿枚或は三十枚と云々、
此年、五穀不レ熟、

當代記卷八

慶長十八癸丑年正月大庚申日

年中從二諸國一進物儀、慶長十三戊申年之所に書二載之一、大略每年此通也、
中國四國西國大名、於二駿府一越年、三日に立二駿河一江戶へ被レ下、元日二日は駿府は雨降、他國は不レ降、
五日、大御所山鷹遣給、勢に不レ殘可レ出之由曰間、皆以所レ出也、
六日、終日雨、從二元日一此日迄甚寒、
七日、今日大御所爲二鷹野一田中へ出給、從レ其遠州へ可レ有二鷹野一之由曰しか、暖氣故無レ鳥延引也、
八日、山口但馬於二江戶一將軍家より改易也、故は古石川長門守女但馬男に嫁、從二二三箇年已前一長門存生之時一無二斯儀一之由曰、長門男被二押籠一處、依レ婆レ之如レ此也、
十一日より翌朝迄大雨水出、江戶は巽也、
十五日山口但馬就二目安之儀一、大久保相摸守腹立甚、相摸息男兩人、翌日出仕、
十七日雨、終夜同雨、十八日二月節、
十九日晚より廿日雨、廿二日大水、
廿五日、申刻播磨之三左衞門尉死去、昨日從二辰刻一俄發病、吐血中風と云々、
二月小朔庚寅日、去年冬從二高麗一駿府へ進上の大鷹十一

此比至二九州一參着、何も若鷹也、
二日大坂火事出來、三の丸長屋米石多以失火、風橫ゟ火を吹切て、自餘の丸へ不レ移、
羽三左死去付、從二江戶一駿府ゟ爲レ使土井大炊參上、播磨へは山岡五郎作爲レ使被二指遣一、
十八日九日大雨、翌朝大水、從二去年一于レ今雨降事重重、
青山播磨守元藤右衞門尉死去、是は將軍幼少之時、悉皆の年寄也、
三月大朔己未日、今日土用に入、於二大坂一小出播磨守死去、
五日、駿府於二三九一、常陸主能し給、五番常陸主、翁脇の能末の祝言觀世大夫仕レ之、今春大夫二番仕、合九番也、此觀世大夫は慶長十五年庚戌蒙二勘當一去年召直、駿府に祗候、廿八日より九日迄兩日、駿府又能有、常陸主四番、今春六番、少進四番、觀世三番、梅若一番、合兩日十八番、
恭打の本因坊依レ召院參、恭之儀色色有二院宣一、中にも仙人の打し恭作物、直に院作有て、本因被レ爲レ見、此時院宣に、恭に有二別知一と云事は、三家祿と云書物に有レ之、酒に別腸有と云不レ知と也、
和云、是は賓退の祿と云書物に有レ之と承、此書物さがの妙知院に有レ之、又月合の比、利玄依レ召院參、是へも右之作物同前なり、則利玄仕レ之、奇特之由有二宣下一、利玄院中象恭を被レ遊、本因利玄依レ爲二出家一也、何も法花宗也、さて右之兩人何も駿府へ下、院は中象恭天下一と思召、
四月小朔癸丑日、
二日、上總主從二江戶一駿府へ來儀、暫逗りう、
五日六日、駿府能有、初日少進本願寺門徒、下妻築也、今春大夫立合、後日今春息子兩人幷梅若大夫、又藤堂和泉小姓等能つかまつり、
此比富田信濃守ことを今伊勢國住、從二坂崎對馬守一知行在二今石見國一、
在二江戶一、日比彼人不行儀、又去庚子年亂逆之砌已來之義を以、目安將軍へ令二言上一、依レ之青山圖書爲二使者一駿府へ◎脫文カ被レ得二父意一、則飛脚を以信濃守を召に被レ遣、
肥後國古主計跡目、家中有二公事一、家老之もの共、從二去月一駿河在府、
越前國家中、去年之云事再發歟、家老者從二去月一令二在江戶一、

七日、本多平八郎兄弟、（今伊勢桑名城主之忠勇、）去正月より府在、今日暇給て江戸へ被レ下、

八日、昨日之雨に水出、島田町家少々流、

九日、伊達陸奥守（政宗）駿府へ入來、暫逗留、佐竹は十二三日已前、駿府へ入來して遂二年禮一、則江戸へ下、

十四日、後藤庄三郎所へ、（今の世の數寄とて宗匠、）從二古田織部所一金を可レ借給一之由謀書を持來者有、庄三郎彼使を相改處、爲二盜人一間、則奉行所へ注進す、彦坂九兵衛（當時知行代官、井駿河町奉行、）方より、彼者之宿へ押入欲二掠取一處、九兵衛若黨六七輩手負、三人當座死、此義經二一兩日一達二上聞一、甚腹立し給、彼盜賊の宿主大御所の步行奉公人也、彼頼二親柴田左近一令二勘發一給、右之後藤庄三郎銀師也、今茲夜大御所々々膝本、金之指引申付出頭人也、

北國主羽柴肥前守煩以外之由、以二使者一言上、爲二音物一肩衣（直五百枚）一つ、金子五百枚進上、若君兩三人に金子五十枚宛同進上、江戸將軍へ號の刀一、新實藤四郎の脇指一進上、是も若君兩人金子五十枚宛也、

或說に云、肥前煩は非二實儀一、爲二虛病一歟之由謠歌說也、京都町人因如レ此云、

十八日、駿府又能有、此日板倉伊賀守立二京都一駿府

下、

廿日、五月節、

廿五日、大久保石見守死去、年六十五、從二駿府一死骸を甲州へ持行、葬禮急度令二用意一處、近年代官所勘定速不レ遂レ之して、左樣之義無益之由、甚以大御所曰問、右支度徒止レ之、右之聞二御詫一、石見下代之者共消レ魂と云々、

五月大朔戊午日、廿二日より六月節、

今朝大水出、惣別去年夏秋冬、當年春夏打續雨重き事、近年無二比類一、乍レ去當年は至て大水不レ出、

松平筑前守（加賀國肥前守弟、則遠江息男同前也、）今十七日に駿府へ下着、是より江戸へ被レ下、

大久保石見男共蒙二勘當一、其故は父代官所可レ遂二勘定之由、詫與仰成けれ共、若輩故不レ知二前後一、如二上命一難レ成之由言上付如レ此、石見國務並佐渡國拜領之由思設處、惣而知行分、於二關東一千石ならては不レ被二宛行一之由貴命成けれは、今迷二十方一と云々、兄の藤十郎は縣川、其次外記は横須賀、青山權介（江戸の青山圖書簽子、）小田原、其外男子四人、都合七人所々へ被レ預、何も一僕の體にて被二押籠一、右の七人の石見男共、八月九日於二

其所々一生害也、

大久保石見守下代共召集、於二駿府彦坂九兵衛所一被二押籠一、近年押領之金銀悉被レ改條、不レ殘出し獻レ之、

和泉坂より入唐の商人、此比至二長崎一歸朝、依レ之唐物俄價下、此入唐之商人廿人餘、其內於二明朝一四五人死と云々、

十八日大雨、十九日大水、去春より始水出と云共、非二指水一、廿日より快晴、

此比大坂秀頼公、住吉度々令二遊行一給、

大久保石見守遺物、堅被二改付一、金銀從二諸國一上分、凡五千貫目餘と云々、其外金銀にて拂たる道具不レ知二其數一、何も駿府へ藏納、右之道具大方の覺、

茶椀、天目、同臺、（茶具何も有レ之、）椀、折敷、印龍、香合、茶釜、同風爐、水桶、燭臺、手水盥、同柄杓、手巾懸、香盒、鏡臺、櫛箱、同櫛、油桶、燭眞取、手箱、しやみせん、きせる、そのほか女人の道具にかゝらぬ物共有とかや、一笑一笑、

右何も金子銀子二通有けると也、前代未聞次第也、右之石見存生之時、慶長六年辛丑年より今年迄十三年

間、佐渡國石見國諸國金山へ、年中に一度宛上下、路次中の行儀夥事也、召遣之上郎女房七八十人、其次合二百五十人同道の間、泊々の宿、何も代官所成けれは、家々思樣に作並たり、其外傳馬人足已下幾等と云不レ知レ數、每度上下如レ此、偏如二天人一更凡夫の非レ所レ及、就レ之諸國下民同町人、その費不レ可二勝計一、又其泊々朝夕食事、同其町々の者務レ之、たゝ爲レ之迷惑する、

又伏見に在レ之又有と云（遊君遊女亭主、）又北野の八官と云者已下の方より、好女を或は直銀子五十貫目六十貫めにて召上けるか、只今彼女を本主へ返被レ直、右之銀子を運上す、彼亭主手レ時迷惑此事也、又石見守寵愛の女房親、先年爲二商賣一入唐の時、風に舟被レ放、近年琉球に有ける、尋可レ來とて、使を銀子五六十貫目持せ被レ遣、又其船浪に漂、銀子入レ海、使空歸けるか、是も其銀子を右使辨、只今駿府へ運上す、彼使貧成せは、獻上成ましかりけれ共、索貯持たりけれは、無二異儀一上たりけると云々、

此石見守と云は、甲斐國武田に住したる大藏大夫（道入）末子也、家康公甲州を入手レ給し時より、自然の氣相に

て、近く祗候しけるか、知行方又は金山等之儀に付、利方に能立入けれは、仰二大久保相摸守一出二名字一、號二大久保石見守一、扶助座頭成レ官、此事末代の珍事也、親の代に道の方を捨士に成しは、加樣の儀も不レ苦歟、我一世に士に成たりしをは、座頭之法に 盃をだに不レ飲儀也、然處右之通背レ例、石見守座頭に成、官儀曲事之由座中へ依レ仰、惣檢校を始、檢校公當三十人餘、駿府へ七月下、それより八月之比は江戸へ下、彼地に在留す、然共不二相濟一と云々、

六月小戊于日、及レ晩夕立雨太、去月十九日以來、此雨始也、下民悦レ之、

三日之夜夕立大雨、

越前國仕置、本多伊豆守に從二駿府江戸一被二仰付一、是併三河守依レ爲二若年一如レ此、殊去年秋久世但馬誅戮之砌、既彼國爲レ亂、依二加樣之儀一歟、今村掃部近年拜領之地、本多たんげ是は本田作左衛門尉息、古三河守秀康在大坂の時、奉レ付有けるか、天正十三年乙酉年、秀吉公家康公已拵爲成不快之時、父作左衛門尉從二大坂一竊駿河へ呼下、其後太閤家康入魂し給時、太閤强に惡レ之給、頻本多作左衛門尉、五年已後庚寅年、關東へ國替之砌、從二家康公一有二勘當一、下總國に押籠、令二蟄居一たりしか、五六年中令二病死一、たんげはその後家康公へ奉公して有けるか、此度逢二慶賀一令二拜領一、則越前へ相上、今村掃部遺跡居、

四日、入二土用一、此日より翌日迄雨、 五日午剋より快晴、さて是より旱、諸國何も同前、

六日、從二江戸一爲二使者一安藤對馬守駿府へ來、則直令二言上一、其子細人不レ知、翌日本多上野介を相添、江戸へ被レ遣、此儀は播磨國備前古三左衛門尉遺跡爲二仕置一の談合と云々、

播磨國三左嫡男武藏守拜領、但此內三郡廿三萬石被レ付二備前一、備前國左衛門督家康公孫、同三左男、拜領也、 淡路國宮內左衛門督弟拜領、其後七八月之比、有二八分一、池田左近同內記兩人は古三左衛門尉男、武藏守弟也、何も別腹、若原右京、 池田出羽守古三左甥、いぎ長門守濟兵衛男、已下大身なる者は大方被レ付二武藏守一播磨の國に住、內記左近兄弟は、古三左之時者壹人に三萬石宛可レ被レ出之由有しか、今は播磨一國之內さへ三郡除けれは、如レ此の擬也、

三左家老之者、四五年已前に及二三十人一病死、今在レ之者若輩也、

荒尾志摩守 同弟但馬 和田壹岐守 以下、少身の者被レ付二左衛門督一、備前在國、佐々尾四郎左衛門尉加々の九郎左衛門尉、此兩人淡路に在國すへきと也、 丹場山城之助、是は可レ任二御諚一と也、未二相定一、

去比從二駿河一京都に被レ遣板倉內膳、今九日立二京都一下、是は大久保石見金銀京都に預置之由就二風聞一、爲レ可レ被レ改成けるか、慥成無二證據一ありけれは空在京、茶壺七つ八つ改出持レ之下、そのほか石見守下代共預置銀百貫目餘尋出持せ下、

十四日、今丑日成けるか、秋風吹、

今春大夫少進法印、去月末從二駿府一下二江戸一、於二江戸一將軍在江戸の大名共之所に御成あり、能有レ之、十九廿日あつき事甚、去十一日同レ之、近年の夏は、惣而此夏程あつきこと無レ之、

廿一日、於二江戸增長寺一有二喧嘩一、松平清六幷鈴木平兵衛二子名不レ知戰死、是爲二人の迎一打出、待人遲參、其間增長寺立歸、是きかんとする處に、はや門前の者走懸て右之切二清六一、さて平兵衛二の子も被二官共戰死之間立返死、但中間小者は皆逃去と云々、

此年長老幷寺僧可レ及二難儀一歟と自レ他思煩處、公義不レ覃二何沙汰一、徒死せる者無念と云々、

此比諸國旱魃、

去比美作國主森右近を駿河へ被二召寄一間、廿五日六日駿府に下着、則令二出仕一、抹茶入之小壺を拜領、備前國主になさる松平左衛門督大御所孫若輩間、可レ有二入魂一之旨曰、さて右近則相上る、

廿八日九日、從二駿河一三川國迄大雨降、他國不レ降、

七月大丁巳日、 廿三日より八月節、

此比より妙心寺宗派出世之事被レ改、至二自今已後一、五山に相屆、其上傳長老書狀を取、駿河に罷下、大御所御意以可レ致二出世一之旨也、依レ之此後出世成間敷候と、西家之宗風聞、內裡にても此已前より六ヶ敷可レ有レ之と云々、

九日、大久保石見子共、方々に被二預置一けるか、蜷川橫須賀兩所に有レ之藤十郎幷外記、今日殺害、其外之子共今日より被二相觸一何も生害、石見下代共、今日より彦坂九兵衛京所へ被二集寄一、

此頃諸國猶以旱魃、京都は五月廿三日の後夕立雨も不レ降、堺は三月廿六日大夕立の雨降、大坂は七月六日夕立雨降、美濃伊勢は七月十二日十三兩日大雨ふ

る、尾張國はさして不レ降、
八月小玄丁日午刻、伊勢國魂打開ゆ、他國へ不レ聞、此日西風烈、
四日、伊勢國南風甚、昨日三日西國風烈して、長崎より上る糸幷唐物積たりし船十五艘潮入、公方の糸歟、其中代官長谷川左兵衛舟三艘不レ見、
鑓而京坂糸物爲二高直一、
九日、近江北風頻扇、湖磯波烈して、商人舟十艘餘破船、此風他國不レ吹、
十四日、曇、熱さこと甚、亥刻より俄北風烈、
十五日、名月快晴、去慶長六年辛丑已來、近年八月十五夜月不レ晴處珍事、
廿五日、紀伊國主淺野紀伊守左京大夫卒死去、近年唐瘡煩以外爲二養性一、今年夏中在京、去比紀伊へ下國、近年養性無二油斷一しかとも、終以如レ此、去々年加藤肥後守、淺野彈正、今年池田三左衛門尉、大久保石見死したりしこと、偏好色之故、虛の病と云々、右之淺紀も五年已前の酉年、爲城と云遊女買取、當春又無右衛門尉と云傾城を買取りて召置被レ慰けるか、果して早世、遺跡男なし、紀伊國誰人可レ有二拜領一哉と人口あり、
紀州家中に右京と云者、日來しわさ超レ人たり、貯所金銀、又者紀州遺物之金、幷家中の者知行役にも宛課、駿河へ運送し、以二內訴一相調問、紀州弟但馬守に被レ下二紀伊國一、
廿六日、夜亶二亞刻一大風大雨、翌朝辰巳刻まで吹、宵に聊風可レ吹無二模樣一、俄以如レ此、作毛に不レ當と云々、
九月丙辰日、
十七日、大御所從二駿河一爲二鷹野一とて東國御下向、廿一日、大御所至二小田原一御着、翌朝御立、廿七日、大御所江戸へ御着、
此日沼津の大久保次右衛門尉死去、近年病の床に伏、今迄は奇特に保レ命と云々、
廿八日九日大御所鷹野し給、
十月大乙酉日、今日大御所へ在江戸の大名小名遂レ禮、於二江戸一大御所の爲二御意一、里見讃岐守被二改易一、是安房國主安房守伯父也、是は日比無二弓氣一多源七郎久貝忠三郎從二大御所一勘當、是は先年伯耆國中村一學死去之時、爲二上使一被レ遣、彼一學遺跡被二召上一、諸道具を如何可レ仕旨、江戶言上之處、幸大久保石見守石見國

へ下時分成けれは、石見方へ可二相渡一之由、將軍依二下知一儀歟、江戶年寄中より狀を遣候間、任二其儀一石見方へ相わたし、此義を今曲事之由曰如レ此、鵜殿兵庫も就二此義一改易にて、厩橋に被二預置一、種々吟問有けれ共、別なる白狀もなし、さてさし繩にて身をかりけ、そらよりをろしなとしけれとも、申旨もなしと云云、さて死す、又古中村一學年寄共、駿府に三人近年相詰候へるか、是も同改易也、又古金阿彌子も改易し給、是も大御所の御意也、佐々淡路守兄弟、近年在駿府しけるか、兩人なから此度改易也、是は信長秀吉二代の麾の上手也、依レ之大御所も信長の時より被レ加二懇志一し者也、
八日、富田信濃守と坂崎對馬と於二御前一及二對決一、信濃及二難儀一と云々、是は坂崎親類の侍を、信濃守依レ爲二緣者一抱置しを、坂崎達而存分有間扶持放、然共他所に隱居所へ、內々音信を遣、扶持しける事を言上如レ此、
又信州ふかしの石川玄蕃、是も近年大久保石見を語、知行相隱之由にて改易也、則其身を被レ預二九州衆一、松本城領小笠原信濃守に被レ下、六萬石也、さて小笠原
居城の飯田五萬石は上表也、
富田信濃守子レ時伊與國住十一萬石取、改易也、是は妹聟坂崎對馬以二自安一何角令二言上一、當月八日に、於二江戶一遂二對決一、手前引有て如レ此、則其身を被レ預二森伊勢守一、
九州衆高橋右近七萬石取改易、被レ預二橘左近一、元九州衆、去子年敵對之間改易、此五年已前より在二江戶一、於二關東一知行二萬石拜領、
廿日、大御所爲二鷹野一從二江戶一浦半へ御出、彼地より川越へ可レ有二入御一之由也、鶴鴈日々鷹取事、不レ可レ有二際限一と也、
藤堂和泉守依レ召從二伊勢川越一參上、則有二對面一、伊與國富田信濃跡識當レ納、先以可レ致二代官一之由被二仰付一、
十一月小朔乙卯日、
十四日、從レ晚終夜大雪、
十二月大朔甲申日、
三日、大御所立二江戶一、駿河へ可レ有二御上一とて出給、
十三日、此間中原に、大御所令二逗留一給、今日小田原迄可レ有二御越一とて、供之衆もはや出荷物迄出處に、